財団法人 八尾市文化財調査研究会報告75

Ⅰ　跡部遺跡（第33次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第34次調査）
Ⅲ　跡部遺跡（第35次調査）
Ⅳ　老原遺跡（第10次調査）
Ⅴ　太田遺跡（第５次調査）
Ⅵ　恩智遺跡（第11次調査）
Ⅶ　恩智遺跡（第12次調査）
Ⅷ　恩智遺跡（第13次調査）
Ⅸ　亀井遺跡（第13次調査）
Ⅹ　萱振遺跡（第23次調査）
Ⅺ　木の本遺跡（第８次調査）
Ⅻ　久宝寺遺跡（第38次調査）
XIII　久宝寺遺跡（第40次調査）
XIV　久宝寺遺跡（第41次調査）
XV　小阪合遺跡（第37次調査）
XVI　東郷遺跡（第57次調査）
XVII　美園遺跡（第５次調査）
XVIII　弓削遺跡（第４次調査）

２００３年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告75

Ⅰ　跡部遺跡（第33次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第34次調査）
Ⅲ　跡部遺跡（第35次調査）
Ⅳ　老原遺跡（第10次調査）
Ⅴ　太田遺跡（第５次調査）
Ⅵ　恩智遺跡（第11次調査）
Ⅶ　恩智遺跡（第12次調査）
Ⅷ　恩智遺跡（第13次調査）
Ⅸ　亀井遺跡（第13次調査）
Ⅹ　萱振遺跡（第23次調査）
Ⅺ　木の本遺跡（第８次調査）
Ⅻ　久宝寺遺跡（第38次調査）
XIII　久宝寺遺跡（第40次調査）
XIV　久宝寺遺跡（第41次調査）
XV　小阪合遺跡（第37次調査）
XVI　東郷遺跡（第57次調査）
XVII　美園遺跡（第５次調査）
XVIII　弓削遺跡（第４次調査）

２００３年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

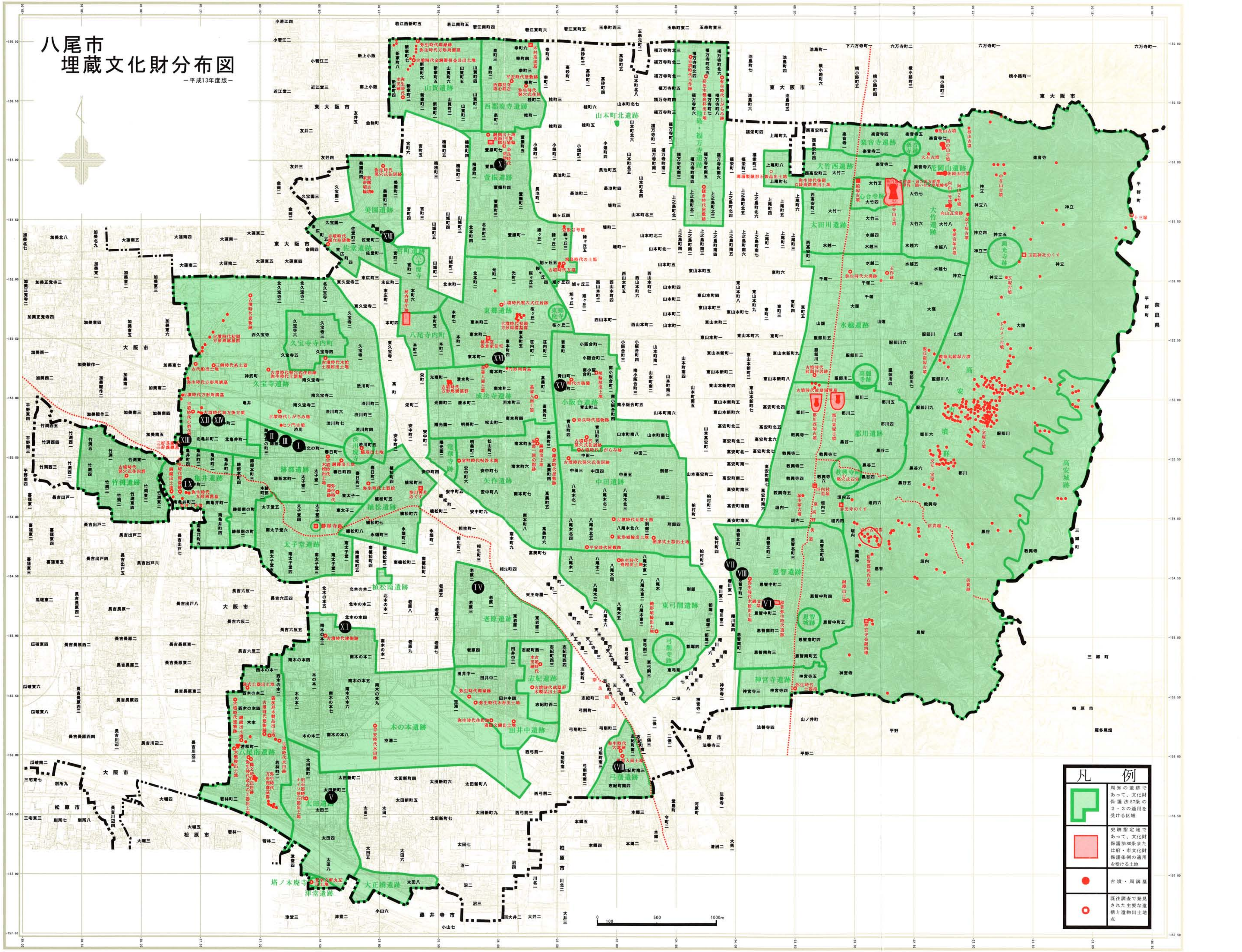
八尾市は、東に緑豊かな自然を残す生駒山地西麓部を従え、その西側には、旧大和川水系が形成した河内平野を有しています。古くは、市域の南端に所在する八尾南遺跡において、旧石器時代の先人の生活痕跡が残されているほか、市域の大部分を占める平野部では、今から2300年前の弥生時代前期から、水田耕作を基盤とした集団の遺構・遺物が散見され、以後各時代を生きた先人たちは、度重なる洪水の危険に怯えながらも、それに起ち向かい、この肥沃な土壌を生活の基盤としてきました。近年においては、旧国鉄竜華操車場跡地において大規模な都市開発が進行しているほか、市民の保健・衛生の向上を図る為、公共下水道の普及にも力を注ぎ、自然と都市型空間との共存を図りながら市民生活の向上をめざし発展し続けています。

この度、平成13・14年度に実施した18件の公共下水道工事に伴う発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ報告書として刊行致します。これらの調査は、いずれも面積が僅少であるため、考古学的な成果は決して大きくはありません。しかしながら、恩智遺跡では、市域で３例目となる縄文時代晩期の土偶が出土し、また跡部遺跡では、市域で７例目となる古墳時代の子持勾玉が出土するなど、八尾市の歴史を解明する上で貴重な成果を得ることができました。このように地中には、私たち現代人が思いもよらぬ自然環境・歴史環境が埋もれています。今も市域のどこかで、市民生活の向上のための開発が進行していますが、それと同時に先人が残してくれたかけがえのない文化財が破壊されていることもこれまた事実です。文化財は一度破壊されると、二度と元には戻りません。破壊されていく埋蔵文化財の発掘調査を行い、歴史を記録・保存し、未来に伝承していくという、私たち(財)八尾市文化財調査研究会の活動、および埋蔵文化財保護により一層のご理解・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対してご協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚くお礼申し上げます。

平成15年２月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　**木　山　丈　司**


八尾市
埋蔵文化財分布図
—平成13年度版—
凡例
周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適用を受ける区域
史跡指定地であって、文化財保護法80条または府・市文化財保護条例の適用を受ける土地
古墳・周溝墓
既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点
0 100 500 1000m
東大阪市
大阪市
松原市
柏原市
奈良県
高安古墳群
高安城跡
久宝寺遺跡
萱振遺跡
東郷遺跡
中田遺跡
恩智遺跡
木の本遺跡
田井中遺跡
八尾南遺跡
跡部遺跡
太子堂遺跡
老原遺跡
東弓削遺跡
水越遺跡
郡川遺跡
西郡廃寺遺跡
山賀遺跡
成法寺遺跡
小阪合遺跡
矢作遺跡
竹渕遺跡
亀井遺跡
志紀遺跡
弓削遺跡
太田遺跡
大正橋遺跡
佐堂遺跡
美園遺跡
八尾寺内町
久宝寺寺内町
植松遺跡
植松南遺跡
神宮寺遺跡
大竹西遺跡
大竹遺跡
太田川遺跡
花岡山遺跡
山本町北遺跡
池島・福万寺遺跡

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成13・14年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成15年２月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，下記の目次のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ荒川和哉、Ⅰ・XV成海佳子、Ⅱ・XIII坪田真一、Ⅲ金親満夫、Ⅳ・Ⅹ・XIV・XVI・XVIII西村公助、Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ樋口　薫、Ⅵ・XIII森本めぐみ、Ⅷ・Ⅹ岡田清一、XI・XII・XVII高萩千秋で、全体の構成・編集は樋口が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成13年度版）をもとに作成した。
1．本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1．本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第Ⅵ系）を示している。
1．遺構は下記の略号で示した。
竪穴住居―ＳＩ　掘立柱建物―ＳＢ　井戸―ＳＥ　土坑―ＳＫ　溝―ＳＤ
柱穴―ＳＰ　落ち込み―ＳＯ　土器集積―ＳＷ　自然河川―ＮＲ
1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪―白、須恵器・陶磁器―黒、木製品・石製品・鉄製品―斜線
1．土色については『新版　標準土色帖』1996　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　跡部遺跡　第33次調査（ＡＴ2002－33）……1
Ⅱ　跡部遺跡　第34次調査（ＡＴ2002－34）……19
Ⅲ　跡部遺跡　第35次調査（ＡＴ2002－35）……25
Ⅳ　老原遺跡　第10次調査（ＯＨ2002－10）……31
Ⅴ　太田遺跡　第５次調査（ＯＯＴ2002－５）……35
Ⅵ　恩智遺跡　第11次調査（ＯＪ2001－11）……41
Ⅶ　恩智遺跡　第12次調査（ＯＪ2001－12）……71

Ⅷ　恩智遺跡　第13次調査（ＯＪ2001－13）……77
Ⅸ　亀井遺跡　第13次調査（ＫＭ2002－13）……81
Ⅹ　萱振遺跡　第23次調査（ＫＦ2002－23）……87
Ⅺ　木の本遺跡　第８次調査（ＳＫ2001－８）……95
Ⅻ　久宝寺遺跡　第38次調査（ＫＨ2001－38）……99
ⅩⅢ　久宝寺遺跡　第40次調査（ＫＨ2001－40）……107
ⅩⅣ　久宝寺遺跡　第41次調査（ＫＨ2002－41）……121
ⅩⅤ　小阪合遺跡　第37次調査（ＫＳ2002－37）……125
ⅩⅥ　東郷遺跡　第57次調査（ＴＧ2002－57）……129
ⅩⅦ　美園遺跡　第５次調査（ＭＳ2001－５）……133
ⅩⅧ　弓削遺跡　第４次調査（ＹＧＥ2002－４）……137
報告書抄録

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成13・14年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成15年２月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，下記の目次のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ荒川和哉、Ⅰ・XV成海佳子、Ⅱ・XIII坪田真一、Ⅲ金親満夫、Ⅳ・Ⅹ・XIV・XVI・XVIII西村公助、Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ樋口　薫、Ⅵ・XIII森本めぐみ、Ⅷ・Ⅹ岡田清一、XI・XII・XVII高萩千秋で、全体の構成・編集は樋口が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成13年度版）をもとに作成した。
1．本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1．本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第Ⅵ系）を示している。
1．遺構は下記の略号で示した。
竪穴住居―ＳＩ　掘立柱建物―ＳＢ　井戸―ＳＥ　土坑―ＳＫ　溝―ＳＤ
柱穴―ＳＰ　落ち込み―ＳＯ　土器集積―ＳＷ　自然河川―ＮＲ
1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪―白、須恵器・陶磁器―黒、木製品・石製品・鉄製品―斜線
1．土色については『新版　標準土色帖』1996　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　跡部遺跡　第33次調査（ＡＴ2002－33）……1
Ⅱ　跡部遺跡　第34次調査（ＡＴ2002－34）……19
Ⅲ　跡部遺跡　第35次調査（ＡＴ2002－35）……25
Ⅳ　老原遺跡　第10次調査（ＯＨ2002－10）……31
Ⅴ　太田遺跡　第５次調査（ＯＯＴ2002－５）……35
Ⅵ　恩智遺跡　第11次調査（ＯＪ2001－11）……41
Ⅶ　恩智遺跡　第12次調査（ＯＪ2001－12）……71

Ⅷ　恩智遺跡　第13次調査（ＯＪ2001－13）……77
Ⅸ　亀井遺跡　第13次調査（ＫＭ2002－13）……81
Ⅹ　萱振遺跡　第23次調査（ＫＦ2002－23）……87
Ⅺ　木の本遺跡　第８次調査（ＳＫ2001－８）……95
Ⅻ　久宝寺遺跡　第38次調査（ＫＨ2001－38）……99
ⅩⅢ　久宝寺遺跡　第40次調査（ＫＨ2001－40）……107
ⅩⅣ　久宝寺遺跡　第41次調査（ＫＨ2002－41）……121
ⅩⅤ　小阪合遺跡　第37次調査（ＫＳ2002－37）……125
ⅩⅥ　東郷遺跡　第57次調査（ＴＧ2002－57）……129
ⅩⅦ　美園遺跡　第５次調査（ＭＳ2001－５）……133
ⅩⅧ　弓削遺跡　第４次調査（ＹＧＥ2002－４）……137
報告書抄録

Ⅰ　跡部遺跡第33次調査（ＡＴ2002－33）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市跡部北の町１・２丁目、春日町１丁目で行った、公共下水道工事(平成13年度－第137工区)に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する跡部遺跡第33次(ＡＴ2002－33)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第42号　平成14年５月２日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年５月16日～９月９日(実働29日間)に、成海佳子を担当者として実施したが、一部を坪田真一が担当した。調査面積は、142㎡を測る。

1．現地調査に参加した調査補助員は、伊藤静江・岩沢玲子・加藤邦枝・竹田貴子・永井律子・中村百合・村井俊子・村田知子・吉川一栄・若林久美子である。

1．内業整理・報告作成に参加した調査補助員は、荒川和哉・市森千恵子・飯塚直世・國津れいこ・實樹婦美子である。

1．本書の執筆は、主に成海が行ったが、２－３）子持勾玉については荒川が担当した。

1．本書作成にあたり、赤澤徳明氏(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、阪田育功氏(大阪府教育委員会文化財保護課)、別所秀高氏((財)東大阪市文化財協会)から多大なご協力・ご助言をいただきました。記して感謝の意に代えさせていただきます。

本　文　目　次

1．はじめに……1
2．調査概要……1
　1）調査の方法と経過……1
　2）検出遺構と出土遺物……3
　3）子持勾玉について……7
3．まとめ……9

Ⅰ　跡部遺跡第33次調査（ＡＴ2002－33）

１．はじめに

跡部遺跡は、八尾市西部に所在し、現在の行政区画では、八尾市跡部北の町１～３丁目・跡部本町１～４丁目、春日町１～４丁目、東太子１丁目、太子堂１・２丁目、跡部南の町１・２丁目、北亀井町３丁目、安中町３丁目に位置する。地理的には、旧大和川の支流であると長瀬川左岸に挟まれた沖積地にあたる。当遺跡の北には久宝寺遺跡が接し、北東には飛鳥時代の創建とされる渋川廃寺の推定地がある。また、南には植松遺跡・太子堂遺跡・西には旧平野川の自然堤防上に立地している。

当遺跡発見の契機は昭和53(1978)年の工事掘削の際、弥生土器や鎌倉時代の屋瓦の出土があったことによるが、昭和56(1981)年以後の八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会の数件の発掘調査によって、弥生時代以降の複合遺跡であることが明らかになってきている。とくに、当調査地から南100ｍの第５次調査地では、埋納された銅鐸が検出されたことから、集落の縁辺部であろうと考えられており(安井他1991)、南東200～300ｍの第12次調査地・第13次調査地が弥生時代を通じての集落の中心部であろうと推定されている(坪田1993)。

一方、当調査地の北隣に位置する久宝寺遺跡では、国鉄竜華操車場跡地の開発に伴い、(財)大阪府文化財調査研究センター・当調査研究会による発掘調査が行われており、それに伴って、跡部遺跡北東部の発掘調査件数も増加している(第１図・第１表参照)。さらに、東に位置する渋川廃寺遺跡では、多量の瓦の出土のほか、基壇等も検出されている(坪田2003)。

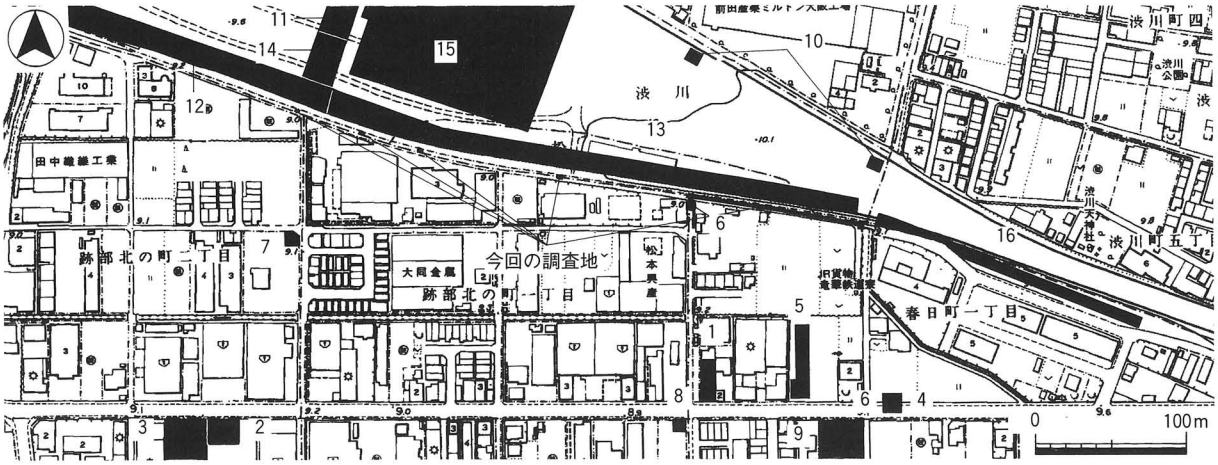
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は跡部遺跡第33次調査(略号ＡＴ2002－33)で、八尾市跡部北の町１・２丁目、春日町１丁目で行った、公共下水道工事(平成13年度－第137工区)に伴うものである。調査地は遺跡範囲の北東部に位置しており、北に接して久宝寺遺跡第29次調査地(原田他2003)、東に接して渋川廃寺第３次調査地がある。

工事範囲は旧操車場跡地の南に沿った道路の東西約300ｍにあたり、17か所のマンホールと、それらをつなぐ開削部分からなる。そのうち、調査範囲は西側の４か所のマンホール部分、東側は４か所のマンホール部分とその間の開削部分である。調査の手順としては、まず、西側の独立したマンホール部分(№３・№５・№６・№10)を随時行った。その後東側の開削部分へ移行したが、№14～15間は東から西へ向かって進み、№16～15間は東から西に進み、最後に№16～17間は東から西へと進んだ。そのために、地層観察用の畦の方向は一定していない。開削部分については、工程に沿って１日３～12ｍ程度の調査を行い、調査終了後は工事が進められた。

開削部分では、現地表下1.0～2.3ｍの間に３枚の遺構面が確認できた。そのため、当初№14と西隣の１区で３面の調査を行ったが、進捗状況が遅く、日程が間に合わないと判断し、市教育委員会と協議を行った。その結果、日程を最優先させるため、第３面(水田遺構)については、平面的な調査を行わず、掘削中に確認することとなった。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）

表１　周辺の調査地一覧

番号	遺跡名	略　号	文献〈発行は10のみ（財）大阪府文化財調査研究センター、他は（財）八尾市文化財調査研究会〉
1	跡　部	AT1981－１	高木真光　1983「第６章　跡部遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告２
2		AT1983－２	西村公助　1984「９　跡部遺跡第１次調査」『昭和58年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告５
3		AT1988－４	西村公助　1989「19　跡部遺跡（第４次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25
4		AT1989－５	安井良三他　1991『跡部遺跡発掘調査報告』－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－（財）八尾市文化財調査研究会報告31
5		AT1992－７	原田昌則　1993「Ⅰ　跡部遺跡（ＡＴ92－７）第７次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39
6		AT1992－９	原田昌則　1993「Ⅲ　跡部遺跡（ＡＴ92－９）第９次調査」『同上』
7		AT1993－14	高萩千秋　1994「Ⅰ　跡部遺跡第14次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』
8		AT1994－17	成海佳子　1997「Ⅴ　跡部遺跡（第17次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
9		AT1996－23	原田昌則　1997「２　跡部遺跡第23次調査（ＡＴ96－23）」『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
10	久宝寺	95-1~7トレンチ	本間元樹他　1997『八尾市亀井所在久宝寺遺跡・竜華地区（その１）発掘調査報告書－JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第６集
11		ＫＨ1997－23	原田昌則・岡田清一・古川晴久・樋口薫・吉田珠己　1998「10　久宝寺遺跡第23次調査（ＫＨ97－23）」『平成９年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
12		ＫＨ1997－24	原田昌則他　2001「久宝寺遺跡第24次調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線３工区の掘削工事に伴う－」『（財）八尾市文化財調査研究会報告68』
13		ＫＨ1999－29	原田昌則他　2003「久宝寺遺跡第29次調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線４工区の掘削工事に伴う－」『（財）八尾市文化財調査研究会報告74』
14		ＫＨ1999－30	原田昌則・西村公助・岡田清一　2000「13.久宝寺遺跡第30次調査（ＫＨ99－30」『平成11年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
15		ＫＨ2000－33	成海佳子・樋口　薫・金親満夫　2001「４.久宝寺遺跡第33次調査（ＫＨ2000－33）」『平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
16	渋川廃寺	SKT2000－３	調査名：市道竜華第16号線道路築造に伴う渋川廃寺発掘調査 調査期間：20021125～20030131　調査機関：（財）八尾市文化財調査研究会

２）検出遺構と出土遺物

マンホール部分

マンホール部分の独立した調査区は、調査範囲の中央から西部の４か所（西から№３・№５・№６・№10）である。東西170mに及ぶ調査範囲であるが、地層はおおむね１～６層に大別できた。１層は旧耕土・２層床以下に３層（第１面対応）、４層（第２面対応）、以下水成層である５層～７層に至る。色調は、１・２層は緑灰色系、３～５層は褐色系、６層以下は青灰色を呈する。３層には鉄分が多く含まれ、４・５層にはマンガン斑が顕著である。６層には植物遺体や炭化物を含む薄い互層が見られ、７層は湧水層である。

・№３

最も西端に位置する調査区である。

層序

現地表面の高さはT.P.＋8.75m、盛土の厚さは0.6～0.7mを測る。以下１層暗緑色粗砂～中礫混粘土質シルト（旧耕土）、２層灰色細砂混粘土（床）、３層黄灰色中砂混粘土（第１面対応層）があり、４層灰黄褐色シルト質粘土（第２面）に至る。ついで５層黄灰色粘土質シルト、以下６層に植物遺体・鉄等を含む数枚の互層があり、７層灰白色極細砂湧水層に至る。

検出遺構と出土遺物

現地表下1.1m（T.P.＋7.7m）の４層上面で土坑１基（ＳＫ201）・溝１条（ＳＤ201）を検出した。４層上部から、須恵器片が出土した。

ＳＫ201

南側の約半分は未検出であるが、径0.3～0.4m程度の楕円形を呈するものと思われる。深さは0.2mの深い半円形を呈する。埋土は暗黄灰色シルト質粘土である。

ＳＤ201

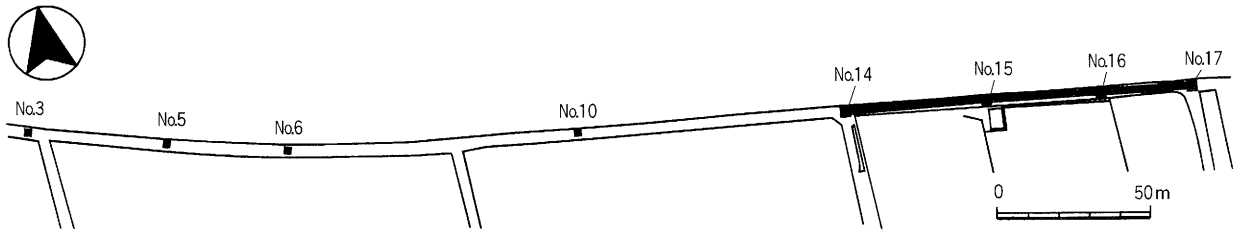
ほぼ南北に伸びる。幅1.2m・深さ0.1mを測る。埋土は灰色極細砂混粘土である。

・№５

№３から約45m東南東の調査区である。

層序

現地表面の高さはT.P.＋8.9m、盛土の厚さは0.7～1.0mを測り、深さ1.7mに及ぶ近・現代の掘り込みも見られた。１層緑灰色粗砂混粘土質シルト（旧耕土）、２層オリーブ灰色粗砂～中礫混粘土質シルト（床）、３層暗緑灰色中礫混粘土質シルト、４層オリーブ褐色粗砂～シルト（第２面対応層）に至る。以下５層オリーブ色極細砂、６層の互層があり、湧水層である７層青灰色粗砂に至る。



第２図　調査区設定図（Ｓ＝1/2500）

検出遺構と出土遺物

第２面対応層である４層上面で遺構は検出されなかったが、３・４層間に遺構内埋土の可能性のある①ブロック層、②粗砂層が確認できた。遺物は出土しなかった。

・№６

№３からさらに約45m東南東に位置する調査区である。

層序

現地表面の高さはT.P.＋8.9m、盛土の厚さは0.6～0.7mを測り、北部で、旧地表面から掘り込まれた近世～近代の井戸掘形が認められた。１層に対応する地層は、近年の耕土まで含めて３枚確認できた(１A～１C)。２層礫混粘土質シルト(床)はグライ化したものか暗緑灰色を呈する。３層灰～灰オリーブ色小礫混粘土質シルト、４層褐灰色極細砂混粘土質シルト(第２面)に至る。５層灰黄褐色極細砂混粘土質シルトがあり、６層互層に至る。調査区北壁際で検出した井戸底はこの層にまで達していた。

検出遺構と出土遺物

現地表下1.2m(T.P.＋7.65m)の４層上面で溝１条(ＳＤ202)を検出した。

ＳＤ202

東から西に伸びる。幅1.6m・深さ0.4mを測る。埋土は①～④のブロック層である。このうち②から須恵器の極小片が出土している。

・№10

№３からさらに約95m東南東に位置する調査区である。

層序

現地表面の高さはT.P.＋9.0m前後、盛土の厚さは0.5～0.6mを測る。ここでも、№６同様、１層に対応する地層は、近年の耕土まで含めて３枚確認できた(１Ａ～１Ｃ)。２層も同様にグライ化したものか暗緑灰色を呈する。３層オリーブ灰色中礫混粘土質シルトと暗オリーブ色粘土質シルトのブロック、４層黄褐色礫混粘土質シルト(第２面対応層)に至る。以下には５層灰色粘土質シルト、６層植物遺体を多く含む互層が認められる。

検出遺構と出土遺物

第２面対応層である４層上面で遺構は検出されなかったが、３層から土師器片が少量出土している。３層はブロック層であり、遺構内埋土の可能性も考えられる。

開削部分

開削部分の調査区は、調査範囲の中央から東部の約120m分で、４か所のマンホール部分(西から№14～17)間をつないだ調査区である。開削部分の西端に位置する№14調査区は、前述の№10調査区から約95m東に位置する。調査区の地区名は、№14調査区から東へ向かって４～６ｍごとに１区・２区…21区と呼んだ。№15調査区は９区に、№16調査区は16区に、№17調査区は21区にあたる。

層序

現地表面の高さはT.P.＋9.2～9.7mで、東が高い。盛土は厚さ1.0m前後である。東端の21区(№17)では、調査区のほとんどが東側の地下道構築時に掘削されていた。ここでもマンホール部分同様地層はおおむね６層に大別でき、さらに下層で５層が認められた。

１層（旧耕土）は粗砂～中礫混砂質シルトで、東部が暗緑色系、西部がオリーブ灰～青灰色系である。１層上面の高さはT.P.＋8.3～8.6mを測り、東が高い。２層（床）はオリーブ色系の中礫混砂質シルトである。３層（第１面）はオリーブ色系の砂質シルトで、西部では極細砂～中礫が混じる。また、一部にブロック層も見られる。４層（第２面）は褐色系の極細砂混粘土質シルトである。５層は東部が褐色系の極細砂～中礫混粘土質シルトで西部は灰色系の灰粘土質シルトである。６層は水成層で互層が形成されている。それ以下には、西部で水田を構成する７層（畦畔）・８層（耕土）があり、以下に再び水成層である９～12層、ついで硬くしまった13層に至り、最下は湧水層である14層に至る。

これらのうち、３層の第１面ベースから土師器甕(17)、４層の第２面ベースから須恵器杯(18)、６層の水成層から土師器高杯(19)、８層の水田耕土から弥生土器(20)などが出土している。

検出遺構と出土遺物

・第１面

現地表下1.0～1.3m（T.P.＋7.9～8.4m）の４層上面で溝４条（ＳＤ101～ＳＤ105）、落ち込み１か所（ＳＯ101）、河川１条（ＮＲ101）を検出した。

ＳＤ101

３～４区で検出した。南東－北西に伸びるが、北側の肩しか検出できなかった。深さは0.35mを測る。埋土は灰黄褐色シルトと青灰色粘土質シルトのブロックである。国産磁器を含む近世の遺物が少量含まれる。

ＳＤ102

12区で検出した。やや北に振る東西方向に伸びるが両端は検出できていない。幅0.6m・深さ0.1m、埋土は明黄褐色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルトのブロックである。内部から土師器高杯・須恵器杯の小片が極少量出土した。

ＳＤ103

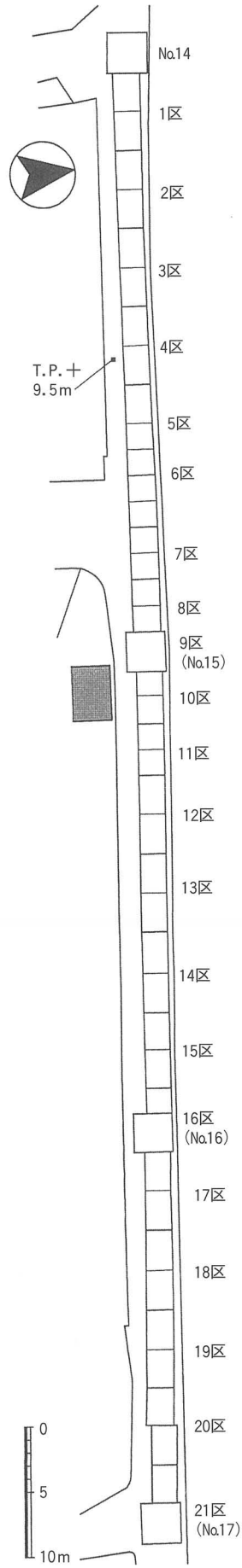
17区で検出した。南東―北西に伸びる。埋土はオリーブ灰色粘土質シルトである。内部からは土師器・須恵器・瓦器・瓦等の小片が少量出土している。

ＳＤ104

18～19区にかけて検出した。南東―北西に伸びるが、ここでも北側の肩しか検出できていない。埋土は暗青灰色中礫混粘土質シルトのブロックである。土師器・須恵器・瓦器等が出土しているが、いずれも極小破片である。

ＳＯ101

１区東端で検出した。北西へ向かって下がっていくものである。検出部からの深さは0.2m程度である。



第３図　開削部分調査区設定図（Ｓ＝1/500）

ＮＲ101

７～10区にかけて検出した。南東－北西に流れるもので、岸には段を有する。幅6.0m・深さは1.1mを測り、第３面対応層にまで至る。内部には、①灰オリーブ色極細砂と灰色極細砂混粘土質シルトの細かいブロック、②灰白色粗砂に灰オリーブ色極細砂のブロック、③暗緑灰色中礫混粘土質シルトに灰白色粗砂の互層、④灰白色極細砂と灰色砂質シルトの互層、⑤灰白色粗砂～中礫の互層が堆積している。最下の⑤層から、弥生土器･古式土師器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器等が少量出土しているが、いずれも磨耗を受けた小片である。

・第２面

現地表下1.3～1.6m(T.P.＋7.5～8.1m)の４層上面で、土坑２基(ＳＫ202・ＳＫ203)溝４条(ＳＤ203～ＳＤ206)、落ち込み２か所(ＳＯ200・ＳＯ201)、河川１条(ＮＲ201)、畦畔状遺構を検出した。

ＳＫ202

１区西部で検出した。径0.8mの円形を呈し、深さ0.2mの逆台形を呈する。埋土はオリーブ褐色礫混シルト質粘土で少量の炭化物を含んでいる。内部から、土師器甕(１)・須恵器杯(２・３)が出土した。

ＳＫ203

５～６区にかけて検出した。３m四方の円形～隅丸方形に復元できる。深さは0.4mを測り、北東部に0.2mの段がある。埋土は①灰オリーブ色砂質シルトに暗オリーブ褐色粘土質シルトのブロック、②灰オリーブ色砂質シルトにオリーブ褐色中礫混粘土質シルトのブロックである。①から土師器小皿・高杯の小片が出土した。

ＳＤ203

３区で検出した。南北に伸びるものと考えられ、深さは0.15mが遺存していた。埋土は灰色粗砂である。第１面の溝ＳＤ102にほとんどを切られているため詳細は不明である。

ＳＤ204

４～５区で検出した。東南東－西北西に伸びる。幅0.55m・深さ0.15mを測る。埋土は①緑灰色粗砂である。土師器・須恵器・黒色土器の小片が少量出土した。

ＳＤ205

15～17区にかけて検出した。ゆるやかに蛇行し、やや北に振る東西に流路をもつ。北側の肩のみ検出した。南側は河川ＮＲ201に切られているのかもしれない。幅は不明であるが、検出部での最深は0.8mを測る。内部には①黄灰～灰色粘土質シルト混細～粗砂、②灰黄色細～中砂混シルト質粘土、③黄灰色シルト～中砂の互層、④青灰色シルト～細砂の互層があり、底は鉄分を含む黄褐色粘土質シルトが堆積している。堆積状況からは、東から西へのゆるやかな流れが想定できる。④層の底近くからは、古墳時代中期の須恵器杯(４)・高杯(５・６)などとともに後述の子持勾玉が出土している。

ＳＤ206

20区東部で検出した。やや東に振る南北に伸びる。幅約１m・深さ0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトに極細砂のブロックが含まれる。内部から、土師器・須恵器の小片が極少量出土した。

ＳＯ200

№14では、５層上面が南西へゆるやかに下がっていくのが確認できた。深さは0.3m程度である。南西部では５層上面に①～③層があり、土師器甕（７）・小型壷などが出土した。

ＳＯ201

１区で検出した。北西へ下がるもので深さは0.2m程度である。内部堆積土から、№14で検出した落ち込みＳＯ200と同一の可能性があるが、明確にはできなかった。

畦畔状遺構

５区で検出した。南東－北西に伸びるが、南東は土坑ＳＫ203に切られ、北西は調査区外へ至る。高まりには盛土の痕跡は認められなかった。

ＮＲ201

12～14区にかけて検出した。流路方向・幅ともに第１面河川ＮＲ101と同様であるが、深さは1.3mを測る。内部には、①にぶい黄褐色シルトとオリーブ灰色粗砂のブロック、②にぶい黄褐色シルトとオリーブ灰色粗砂のブロック、③にぶい黄褐色シルトとオリーブ灰色極細～粗砂の互層、④黄褐色粗砂と青灰色中砂の互層、⑤暗オリーブ灰色粘土質シルトと灰白色極細～中砂の互層、⑥灰白色中砂～中礫と暗オリーブ灰色粘土質シルトの互層である。⑤・⑥層から平安時代前半の土師器・須恵器（８～16）が出土している。また、西側の肩の斜面から馬の骨（右肩甲骨の一部）が出土した。

・第３面

現地表下1.5m前後（T.P.＋6.7～7.0m）の８層上面で畦畔１条ほか、水田耕土を確認した。平面的に調査を行ったのは№14・１区のみで、他の調査区では、断面での確認にとどまった。畦畔は南東－北西に伸びるもので、上面幅0.8m・基底幅1.2m・高さ0.15mを測り、８層上面に７層を盛って構築されている。

断面の観察からは、調査地西部の５区までは７層畦畔盛土および８層水田耕土が確認できたが、東部では認められなかった。

３）子持勾玉について

・法量・調整など

子持勾玉は、オリーブ灰色（10Y4/2～5/2）を帯びた滑石製で、全長10.25cm、胴部中央の幅6.2cm、胴部中央の厚み2.7cmを測り、重量は235ｇを量る。腹部・背部・胴部両面には、それぞれ抉り出された突起（いわゆる子勾玉）を有し、腹部に１個、背部に４個、胴部右側面に２個、胴部左側面に３個有する。孔は１個穿たれており、孔の径は、左側面が0.6cm、右側面が0.5cmであり、左側面から穿たれている。腹部の突起・背部の上から２個目と３個目の突起の間・右側面の上部の突起には欠損している部分があるが、ほぼ完形に近く残存している。なお、背部の欠損は、工具によって刻まれた傷を伴っており、製作時に生じた欠損である可能性が高い。

表面の調整は、胴部右側面の下部と胴部左側面の上部には仕上げの研磨が施されているが、その他の部分は整形時の粗削りによる稜や粗磨きの際の粗い筋目が残っている。このことから未製品の可能性が考えられる。

この子持勾玉は、ＳＤ205の埋土の下層から共に出土した須恵器の杯身・高杯がⅠ型式第５段

階に属するものであることから、５世紀後半のものと考えられる。

・八尾市域での出土例

子持勾玉は、大阪府下では50余点出土しているが、八尾市域では、萱振遺跡で１点、恩智遺跡で１点、池島・福万寺遺跡で４点が出土しており、跡部遺跡で出土した子持勾玉は、４遺跡７点目の出土となる。

萱振遺跡で出土した子持勾玉は、昭和18(1943)年の防空壕の工事中、地表下１m余りの灰黄色を帯びた土層中から若干の土器片を伴って出土したらしいこと以外には、出土状況が明確ではなく(金谷1962)、恩智遺跡で出土した子持勾玉も出土状況が明確ではない(森1949)。出土状況が明確な子持勾玉は、池島・福万寺遺跡から発掘調査によって出土した４点である。以下にその出土状況について簡単に述べることにする。

その中の２点は、古墳時代の集落区画内から出土したものである。１点は、遺構に伴って出土したものではく、遺構面検出中に出土したものである。この集落内では滑石製の臼玉・管玉・有孔板・剣形模造品・紡錘車などが出土しているが、これらの滑石製の玉類は、臼玉に未製品が含まれていることから、この集落で作られた可能性が高い。もう１点は、集落内の井戸から出土したものである。この井戸の埋土は多量の植物遺体・炭化物を含む層を挟んで上下２層に大きく分けられ、上層は粘土ブロックを含むシルト層が見られることから、人為的に埋められたものと考えられ、子持勾玉は、井戸が埋められた後に置かれたと推察される状態で出土している。井戸がある程度埋没した段階で人為的に置かれた状況を示す須恵器の杯身がⅡ型式第２段階(ＴＫ10型式)に属するものであることから、６世紀中葉以降のものと考えられる(森本ほか1991・1992・1995)。

他の２点は、遺構に伴ったものではなく、古墳時代後期の遺構面のベースとなるシルト層および下層の粗砂層の上部約0.1mから、板状滑石製品132点・滑石製臼玉約4,000点・鉄製品７点と共に出土した。シルト層からは土師器の小片と須恵器の甕が出土しているが、この須恵器の甕はⅡ型式第２段階に属するものである。この須恵器の甕を以って、直ちにこれらの子持勾玉の時期を比定することは確実ではないが、６世紀前半以降のものと考えて大過ない(阪田1986)。

・小結

子持勾玉の型式分類については、大場磐雄氏などによって試みられているが、佐野大和氏は、「大場博士が突起物(子)の形状や数のみをより所として形式分類をせられた方法にはなお考慮の余地があろう」として、森浩一氏が子持勾玉の断面が円形に近いものと楕円形のものとを分類の要件として加えていることに注目して、子持勾玉を

a　勾玉本体の断面円形に近く、バナナ状を呈するもの

b　断面楕円形を呈するもの

c　断面長方形に近く、全体として扁平な板状を呈するもの

の３つの型式に大別し、「勾玉本体の断面円形に近く、頭尾両端を裁断した型式のものを原初的とし、断面形しだいに楕円から扁平に移り、頭尾にも丸味や細身を加えてくるものを後出のものと考えて」いる(佐野1981)。

跡部遺跡から出土した子持勾玉は、断面形が楕円形に近く、ｂの型式に属する。池島・福万寺遺跡から出土した子持勾玉の中で、子持勾玉の時期を比定し得る遺物を伴って出土しているもの

は、井戸から出土した１点であるが、井戸から出土したものは、跡部遺跡から出土した子持勾玉に比べると扁平であり、ｂとｃの型式の中間に位置付けることができる。そして、古墳時代後期の遺構面のベースとなるシルト層から出土した２点の断面形は、１点は長方形で、もう１点は丸みを持った台形であり、ｃの型式に属する。

上述のように、跡部遺跡から出土した子持勾玉が５世紀後半のもので、池島・福万寺遺跡から出土した子持勾玉が６世紀前半以降のものであると考えられるが、ｃの型式がｂの型式に後出するという佐野氏の編年と齟齬しないことが確認できた。（荒川和哉）

３．まとめ

今回の調査では、不完全ながらも３面の遺構面が確認できた。第１面は、旧耕土・床土直下の３層上面、第２面は４層上面、第３面は７層・８層上面である。出土遺物などから、第１面は平安時代後期以降、第２面は古墳時代中期～平安時代前半、第３面は古墳時代前期ころにあたるものと考えられる。また、第３面水田畦畔盛土中には、弥生第Ⅴ様式の甕片が極少量含まれていることから、さらに下層には弥生時代の遺構面の存在が想定できる。このことは、北に接する久宝寺遺跡第29次調査地の調査結果からも明らかである。

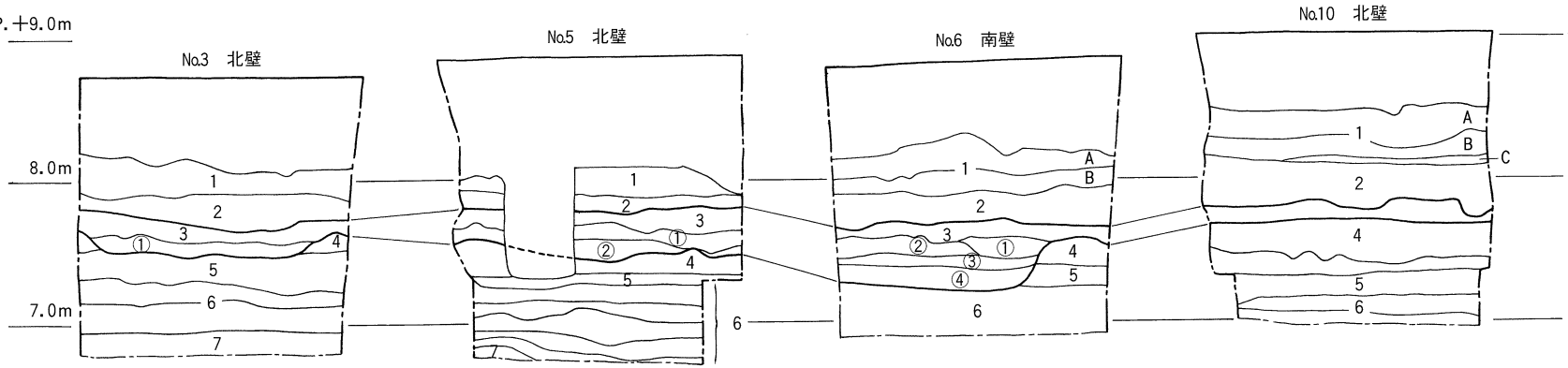
また、前項の子持勾玉は第２面の溝ＳＤ205からの出土であるが、比較的遺存状態がよく、近隣からの投棄または転落したものと考えられる。観察の結果、製作時の破損や欠損が認められ、最終的な研磨が部分的にしか施されていないことなどから、未成品と考えられる。これらのことから、調査地のごく近隣に、古墳時代中期（５世紀代）の玉の生産地がある可能性を示唆する資料といえる。

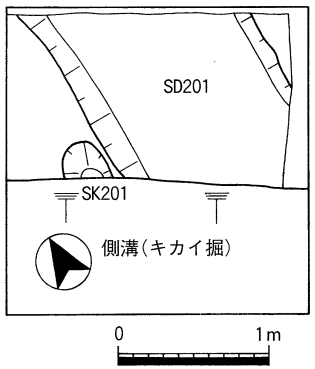
参考文献

・安井良三他　1991『跡部遺跡発掘調査報告書―大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸―』（財）八尾市文化財調査研究会報告31　（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1993「２．跡部遺跡第12次調査（ＡＴ93－12）」『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1993「３．跡部遺跡第13次調査（ＡＴ93－13）」『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・金親満夫　2003「16．渋川廃寺遺跡２次調査（ＳＫＴ2001－２）」『平成13年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・大場磐雄　1937「子持勾玉私考」『上代文化15』
・森　浩一　1949「子持勾玉の研究」『古代学研究一号』
・金谷克己　1962「河内八尾発見の子持勾玉」『若木考古第62号』国学院大学考古学会会報
・阪田育功　1986『池島遺跡発掘調査概要・Ⅰ―八尾市福万寺地区―』大阪府教育委員会
・森本　徹他　1991『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅳ―90－１調査区　1990年度の調査略報―』（財）大阪文化財センター
・森本　徹他　1992『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅷ―90－１調査区　1991年度の調査略報―』（財）大阪文化財センター
・森本　徹　1995『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸⅡ―90－１・90－４調査区（1990～1992年度）の調査概要―』（財）大阪文化財センター
・佐野大和　1981「子持勾玉」『神道考古学講座第３巻　原始神道期二』雄山閣出版

出土遺物観察表

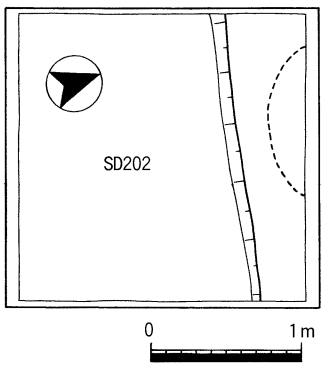
番号	器種	法量(cm)		色調	特徴	残存	出土地点
1	土師器 甕	口径 現存高	18.4 8.0	・5YR6/3にぶい橙	・口縁端部は丸く巻き込む ・内面のハケナデは屈曲部以下に及ぶ。	1/6	SK202
2	須恵器 杯蓋	口径 器高	12.4 4.7	・N7/0～8/0灰白	・外面回転ケズリ後回転ナデ、内面回転ナデ	2/3	SK202
3	須恵器 杯蓋	口径 器高	12.2 3.9	・N5/0灰	・外面回転ケズリ後回転ナデ、内面回転ナデ	1/4	SK202
4	須恵器 杯身	口径 器高	10.0 4.6	・N6/0灰	・外面回転ケズリ後回転ナデ、内面回転ナデ ・外面灰かぶり、受部直下と底部に須恵器片溶着	1/2	SD205 ④層
5	須恵器 高杯	現存高	3.2	・N4/0灰（外） ・5YR6/1褐灰（内～器肉）	・カキ目、3方に方形のすかし、内面灰かぶり	2/3	SD205 ④層
6	須恵器 高杯	裾径 現存高	8.3 4.3	・7.5YR7/2明褐灰 ・焼成不良	・外面カキ目、裾部～内面回転ナデ	1/8	SD205 ④層
7	土師器 甕	口径 現存高	22.6 10.4	・5YR6/3にぶい橙	・口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向のハケ、体部内面横方向のハケ、縦方向の指ナデ	1/6	SO200 ①層
8	土師器 杯	口径 現存高	13.8 4.3	・10YR7/2にぶい黄橙	・半円形の器形。 ・指押さえ後外面口縁部～内面体部ヨコナデ、内面底部ナデ	1/8	NR201
9	土師器 杯	口径 器高	13.0 4.0	・7.5YR7/3にぶい橙	・逆台形の器形 ・外面口縁部ヨコナデ、体部には指頭圧痕残す。内面口縁部～体部ヨコナデ、底面ナデ	1/5	NR201
10	土師器 杯	口径 現存高	14.8 4.1	・10YR7/2にぶい黄橙	・逆台形の器形。 ・外面口縁部ヨコナデ、体部には指頭圧痕残す。内面口縁部ヨコナデ、体部以下ナデ	1/8	NR201
11	土師器 杯	口径 現存高	14.4 3.7	・7.5YR7/3にぶい橙	・逆台形の器形、口縁端部は水平な面を持つ。 ・外面口縁部ヨコナデ、体部には指頭圧痕残す。内面口縁部ヨコナデ、体部以下ナデ	1/8	NR201
12	土師器 杯	口径 器高	13.0 2.8	・7.5YR7/3にぶい橙	・浅目の器形 ・外面口縁部ヨコナデ、体部には指頭圧痕残す。内面口縁部ヨコナデ、体部以下ナデ	1/8	NR201
13	土師器 杯	口径 現存高	15.6 3.2	・10YR5/3にぶい黄褐～2/1黒	・浅目の器形、口縁端部は内傾する面を持つ。 ・外面口縁部ヨコナデ、体部には指頭圧痕残す。内面口縁部ヨコナデ、体部以下ナデ	1/8	NR201
14	土師器 杯	口径 現存高	15.2 2.2	・2.5Y5/1黄灰（外） ・2.5Y7/3浅黄	・浅目の器形 ・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	1/8	NR201
15	須恵器 杯蓋	口径 器高	19.5 2.3	・N7/0灰白	・外面回転ケズリ後回転ナデ、内面静止ナデ後回転ナデ ・内面に炭化物付着、外面灰かぶり	2/3	NR201
16	須恵器 杯身	高台径 現存高	7.8 1.7	・5B6/1青灰	・杯の高台か ・底部静止ナデ、体部回転ナデ	1/8	NR201
17	土師器 甕	口径 現存高	17.6 5.8	・5YR7/4にぶい橙	・外面左上がりのハケ、内面タタキ	1/4	3層
18	須恵器 杯身	口径 現存高	11.4 4.6	・5B6/1青灰・中礫多量に含む	・回転ケズリ後回転ナデ	1/4	4層
19	土師器 高杯	口径 現存高	16.6 4.8	・5YR7/4にぶい橙	・脚柱状部の接合部からの欠損 ・口縁部付近のヨコナデのほか不明瞭	3/4	6層
20	弥生土器 底部	底径 現存高	5.3 3.4	・7.5YR7/3にぶい橙	・底部裏面欠損、壷の底底部か ・縦方向ヘラミガキ、底部側面指ナデ	完存	8層





No.3 SK201
① 2.5Y5/2暗黄灰色シルト質粘土
SD201
① 5Y4/1灰色極細粒砂混粘土のブロック

No.5　遺構埋土？
① 5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂に粘土のブロック
② 5Y4/3暗オリーブ色粗粒砂



No.6　SD202
① 7.5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルトに7.5Y5/1灰色極細粒砂のブロック
② 7.5Y5/1灰色極細粒砂混2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
③ 7.5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂に粘土質シルトのブロック
④ 7.5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂に粘土質シルトのブロック

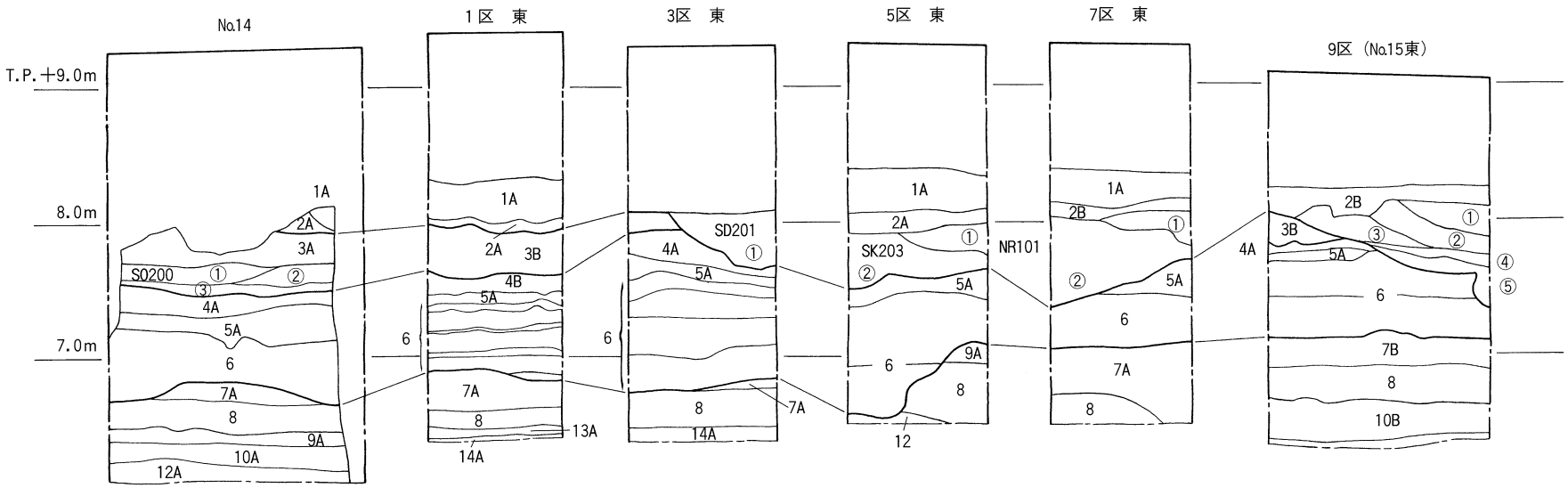
No.3
1　5GY3/1暗オリーブ灰色細～粗粒砂混粘土質シルト
2　10Y6/1灰色細粒砂混粘土
3　2.5Y6/1黄灰色細～中粒砂混粘土
4　10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土
5　2.5Y6/1黄灰色シルト～粘土質シルト
6　2.5Y6/2灰黄色シルト～粘土質シルト・2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土・植物遺体の互層
7　5Y7/2灰白色極細粒砂

No.5
1　10GY5/1緑灰色粗粒砂に2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロック
2　10GY5/1緑灰色粗粒砂～中礫2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロック
3　7.5GY4/1暗緑灰色中礫混粘土質シルト
4　2.5Y4/3オリーブ褐色粗粒砂～シルト
5　5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂
6　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト・10G4/1暗緑灰色極細～粗粒砂・植物遺体の互層
7　10G5/1青灰色粗粒砂

No.6
1Ａ　10GY4/1～10GY3/1暗緑灰色礫混粘土質シルト・10Y4/2オリーブ灰色砂質シルトのブロック
1Ｂ　10GY4/1～10GY3/1暗緑灰色礫混粘土質シルト
2　10GY4/1暗緑灰色礫混粘土質シルト
3　7.5Y5/1灰色シルト質粘土混7.5Y4/2灰オリーブ色小礫混粘土質シルト
4　10YR4/1褐灰色極細粒砂極少量混粘土質シルト
5　10YR4/2灰黄色褐極細粒砂少量混粘土質シルト
6　2.5Y8/6黄色極細～中粒砂・7.5Y4/1灰色シルト質粘土～極細粒砂の互層

No.10
1Ａ　10GY暗緑灰色中礫混砂質シルトに10GY3/1暗緑灰色砂質シルトのブロック
1Ｂ　7.5GY2/1緑黒色粘土質シルト
1Ｃ　5G3/1暗緑灰色中礫混砂質シルト
2　5G4/1暗緑灰色中礫（多）混粘土質シルト
3　10Y5/2オリーブ灰色中礫混砂質シルトと7.5Y4/3暗オリーブ色粘土質シルトのブロック
4　10YR5/6黄褐色礫混粘土質シルト
5　5Y5/1灰色粘土質シルト
6　10Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルト・10Y3/2オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト・植物遺体の互層

第４図　マンホール部分平断面図（Ｓ＝1/50）



1 A　10GY4/1暗緑灰色粗砂～中礫混砂質シルト
2 A　7.5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂～中礫混砂質シルト
2 B　5G4/1暗緑灰色中礫混粘土質シルト
3 A　5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト
3 B　5Y4/4暗オリーブ色極細粒砂に10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック
4 A　2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂混砂質シルト
5 A　2.5Y5/4黄褐色砂質シルト
6　水成層
7 A　5BG2/1青黒色極細粒砂混粘土質シルト
7 B　5BG4/1暗青灰色粗粒砂混粘土質シルト
8　5BG2/1青黒色シルト質粘土
9 A　7.5GY4/1暗緑灰色中礫混粘土質シルト
10 A　10GY2/1緑黒色粘土質シルト
10 B　5BG3/1暗青灰色粘土質シルト
11　5BG2/1青黒色極細粒砂～中礫（多）混青黒粘土
12　5BG2/1青黒色極細粒砂～中礫（多）混粘土
13 A　5BG2/1青黒色粘土混極細砂～中礫
14 A　10BG7/1明青灰色中粒砂

S0200　①　2.5Y3/2黒褐色極細粒砂～中礫混粘土質シルト
　　②　5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂混粘土質シルト
　　③　7.5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂混2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土質シルト

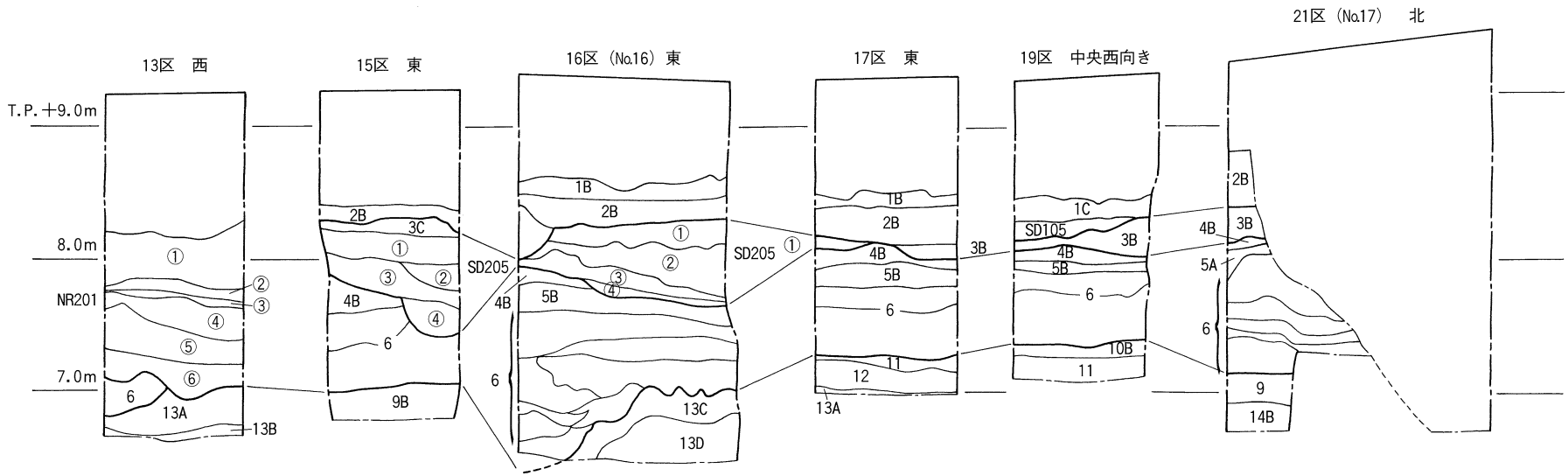
No.14
S0202　①　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト

3区
SD101　①　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトと10BG5/1青灰色粘土質シルトのブロック

5区
SK203　①　5Y5/3灰オリーブ色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土質シルトのブロック
　　②　5Y5/3灰オリーブ色砂質シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色中礫混粘土質シルトのブロック

7区・9区
NR101　①　5Y5/3灰オリーブ色～5Y6/1灰色極細粒砂のブロック2～3cm
　　②　5Y7/1灰白色粗粒砂に5Y5/3灰オリーブ色～5Y6/1灰色極細粒砂のブロック
　　③　5G4/1暗緑灰色中礫（多）混粘土質シルトに5Y7/1灰白色粗粒砂混
　　④　N 7　灰白色極細粒砂とN 5 灰色砂質シルトの互層
　　⑤　N 7　灰白色中礫

第５図　開削部分東部断面図（Ｓ＝1/50）



１Ｂ　5GY3/1暗オリーブ灰色中礫混砂質シルト
１Ｃ　5BG5/1青灰色中礫混粘土質シルト
２Ｂ　5G4/1暗緑灰色中礫混粘土質シルト
３Ａ　5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト
３Ｂ　5Y4/4暗オリーブ色極細粒砂に10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック
３Ｃ　7.5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂～中礫混粘土質シルト
３Ｄ　10YR3/3暗褐色シルト
４Ｂ　10YR4/4褐色極細粒砂～砂質シルト
５Ａ　2.5Y5/4黄褐色砂質シルト
５Ｂ　2.5Y5/4黄褐色砂質シルト
６　水成層
９Ｂ　Ｎ３　暗灰色中粒砂～細礫混粘土
10Ｂ　5BG3/1暗青灰色粘土質シルト
11　5BG2/1青黒色粘土
12　5BG2/1青黒色極細粒砂～中礫（多）混青黒色粘土
13Ａ　5BG2/1青黒色粘土混極細砂～中礫
13Ｂ　7.5GY4/1暗緑灰色粘土質シルト混極細～極粗粒砂
13Ｃ　5GY4/1オリーブ黒色中礫（多）混粘土質シルト
13Ｄ　5GY2/1オリーブ黒色粘土質シルト混中礫
14Ｂ　N7粗粒砂

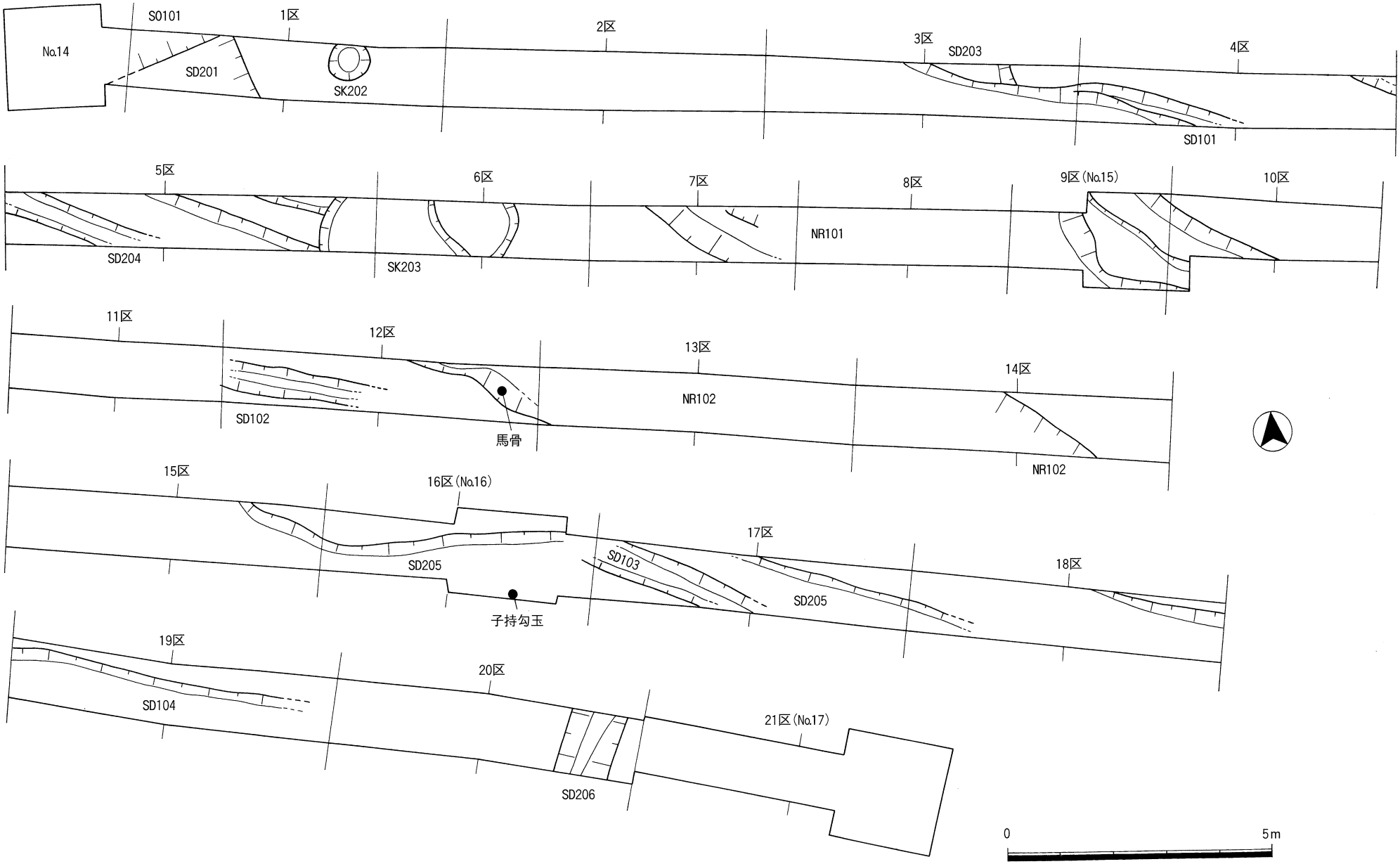
13区
ＮＲ201　①　10YR5/4にぶい黄褐色シルトと2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂のブロック
②　10YR5/4にぶい黄褐色シルトと2.5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂のブロック
③　10YR5/4にぶい黄褐色シルト
④　10YR6/4にぶい黄褐色シルトと2.5GY6/1オリーブ灰色極細～粗粒砂の互層
⑤　10YR5/8黄褐色粗粒砂と5BG5/1青灰色中粒砂の互層
⑥　5BG5/1青灰色粗粒砂～礫と10YR6/6明黄褐色粗粒砂の互層
⑦　5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトとＮ７　灰白色極細～中粒砂の互層
⑧　Ｎ７　灰白色極細～中粒砂と5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトの互層
⑨　Ｎ７　灰白色中粒砂～粗粒砂～中礫と5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトの互層

15区・16区・17区
ＳＤ205　①2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト混細～粗粒砂
②2.5Y6/2灰黄色細～中粒砂混シルト質粘土
③2.5Y6/1黄灰色シルト～中粒砂の互層
④5BG6/1青灰色シルト～細粒砂の互層

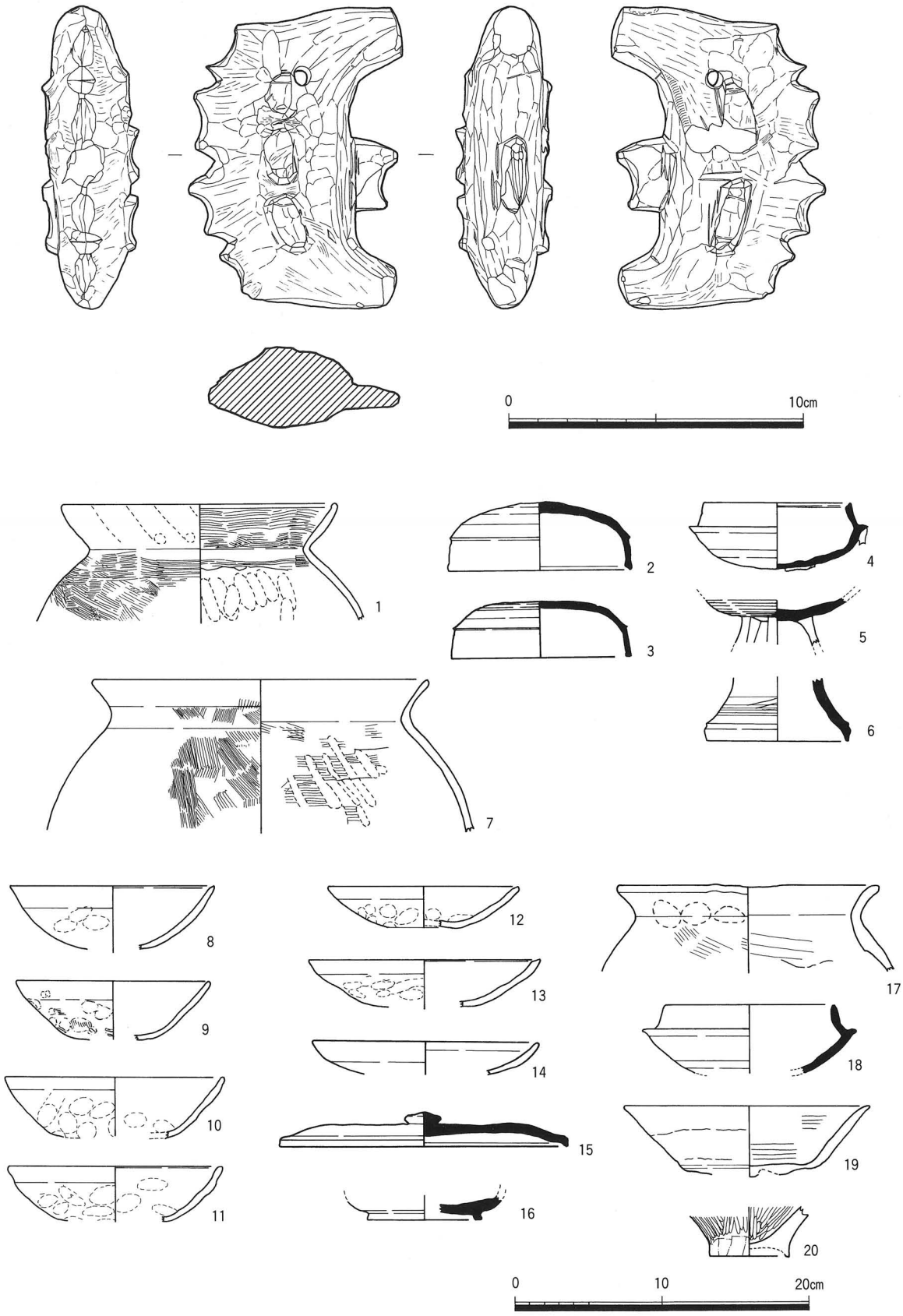
16区
１面遺構？①　7.5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂に３層のブロック

19区
ＳＤ105　①　5BG6/1青灰色中礫混粘土質シルトブロック

第６図　開削部分西部断面図（Ｓ＝1/50）

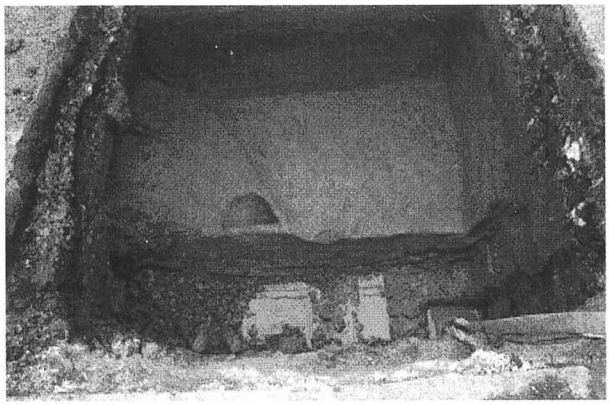


第７図　開削部分平断面図（Ｓ＝1/100）

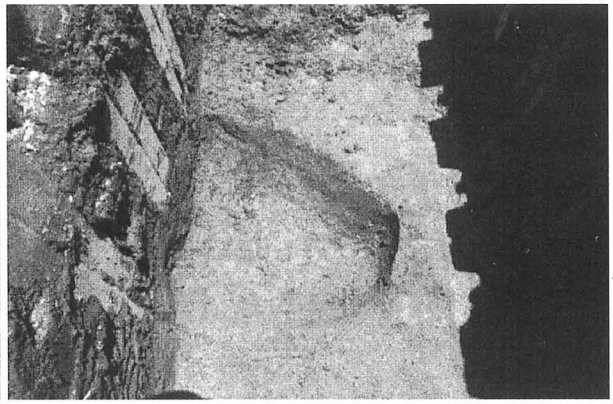


第８図　出土遺物実測図（子持勾玉のみＳ＝1/2、他はＳ＝1/4）

図版一

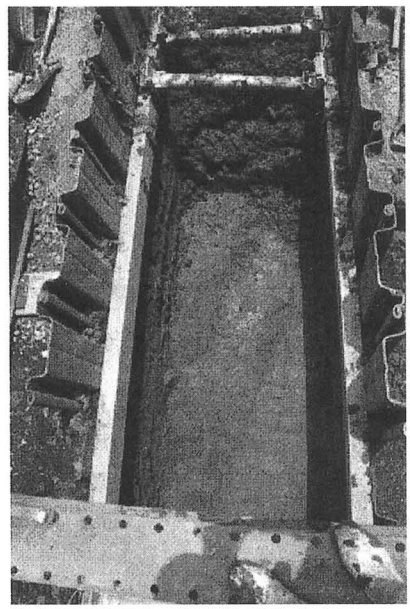


No.3　ＳＫ201・ＳＤ201検出状況（南から）

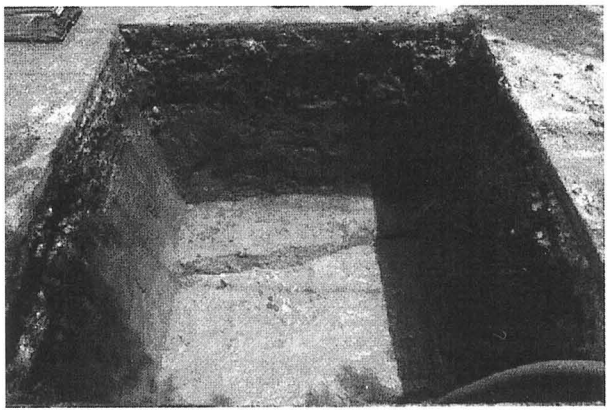


1区　ＳＫ202検出状況（西から）

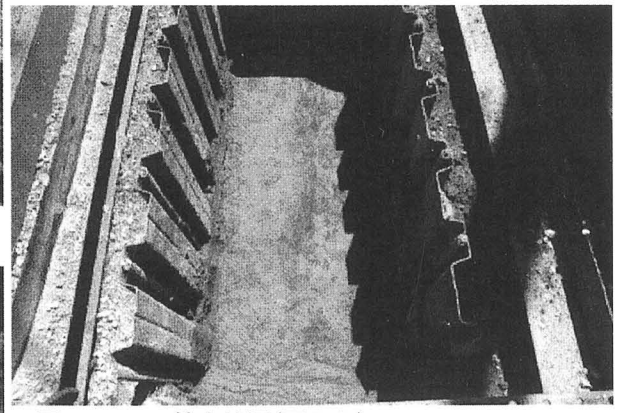
No.5　人力掘削状況（南東から）



4区　ＳＤ101検出状況（西から）

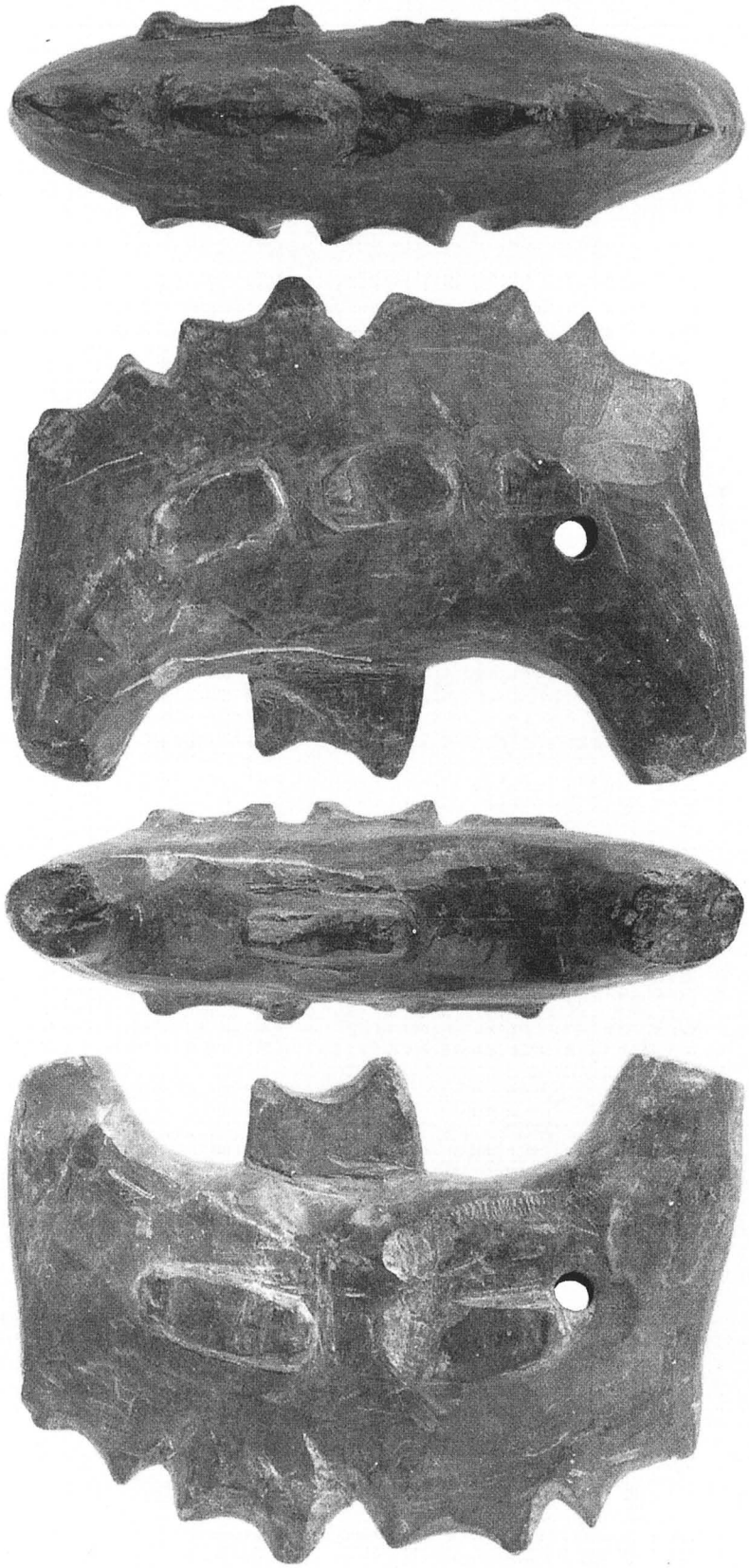


No.6　ＳＤ202検出状況（南から）



16区　ＳＤ205検出状況（西から）

16区　東壁



ＳＤ205出土子持勾玉

II　跡部遺跡第34次調査（ＡＴ2002－34）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市跡部北の町３丁目地内で実施した公共下水道工事(14－９工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第34次調査（ＡＴ2002－34）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第150号　平成14年７月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年９月２日～９月11日(実働７日)の期間で、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約23㎡である。

1．現地調査に参加した補助員は伊藤静江・田島宣子・山内千恵子である。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成14年11月12日に終了した。

本　文　目　次

1．はじめに……19

2．調査概要……20

　1）調査の方法と経過……20

　2）基本層序……21

　3）検出遺構と出土遺物……21

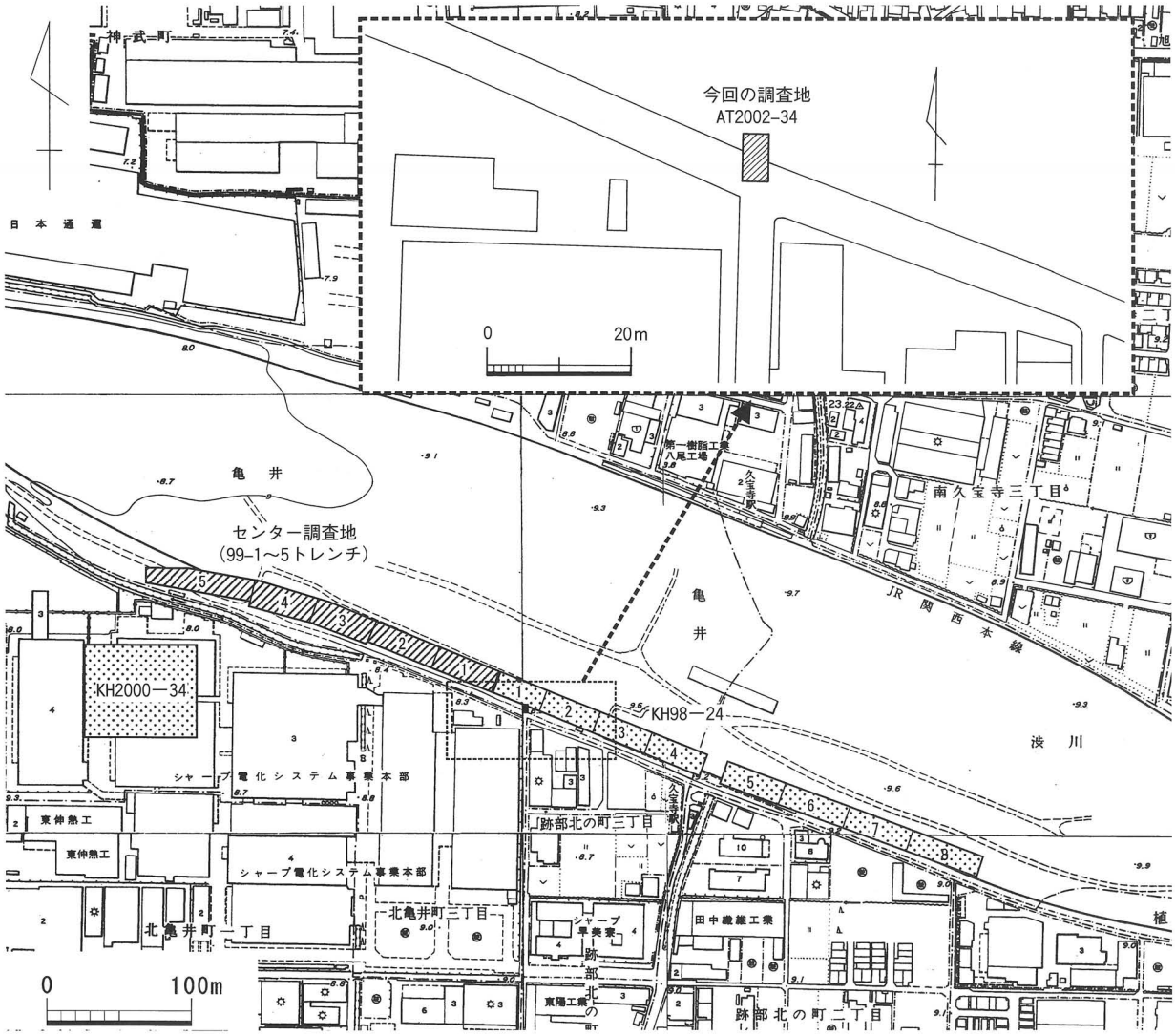
3．まとめ……22

Ⅱ　跡部遺跡第34次調査（ＡＴ2002－34）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に所在し、現在の行政区画では、跡部北の町１～３、北亀井町３、春日町１～４、太子堂１・２、東太子１、跡部本町１～４、跡部南の町１・２、安中町３丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上の北で久宝寺遺跡、南で太子堂遺跡、東で植松遺跡、西で亀井遺跡が隣接する。

今回の調査地は遺跡範囲の北西角にあたり、久宝寺遺跡との境に位置している。調査地北側の久宝寺遺跡域では平成９年度以降、竜華操車場跡地の再開発に伴う発掘調査が、(財)大阪府文化財センター（以下、センター）・当調査研究会により継続して実施されており、縄文時代後期～近世に至る多大な成果が得られている。当調査地は竜華東西線に伴う当調査研究会による久宝寺遺跡第24次調査地（ＫＨ98－24－1～８）、センターによる99－１～５トレンチに近接しており、調査区北部は第24次調査１調査区と重複する位置関係にある。



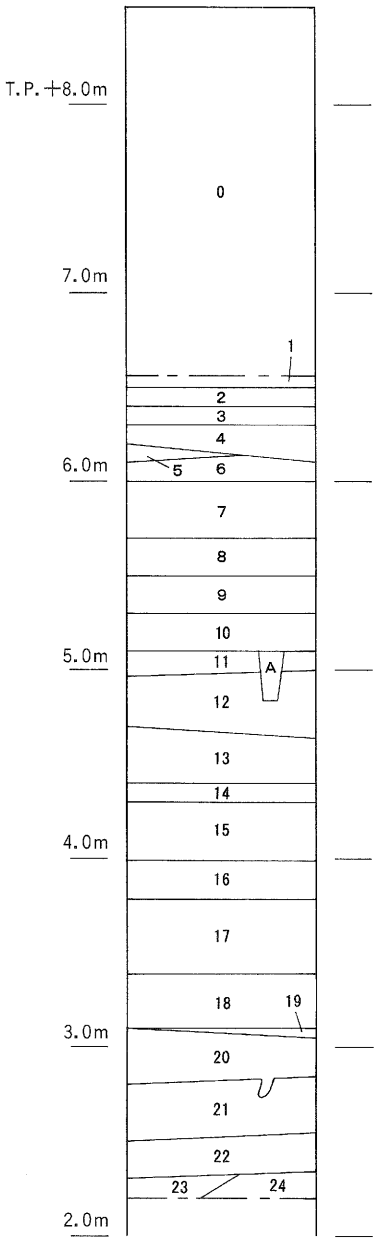
第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/5000）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（平成14年度　第９工区）に伴うもので、当研究会が跡部遺跡内で実施した34回目の発掘調査である。調査の対象となったのは立坑部分１箇所（東西3.6m×南北6.4m－約23m²）である。

調査開始時点で現地表（約T.P＋8.5m）下約1.9mまでの掘削は終了していた。調査では以下の約1.3m（約T.P＋5.3mまで）について人力・機械掘削を併用して調査を実施した。さらに工事掘削範囲である現地表下約6.3m（約T.P＋2.2m）までについては、機械による掘削に並行して随時断面の観察を実施した。



0　工事掘削部分
1　5Y5/1灰色シルト～極細粒砂互層
2　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土互層
　細かい植物遺体　下部炭酸鉄
3　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土
　植物遺体をラミナ状に多量に含む
4　2.5GY5/1オリーブ灰色粘土～粘土質シルト互層
　植物遺体　下部シルトブロック・炭酸鉄
5　7.5GY4/1暗緑灰色シルトブロック混じり粘土　撹拌層　植物遺体
6　10GY4/1暗緑灰色粘土
　シルトブロック少量　植物遺体　南部に炭酸鉄多量
7　7.5Y4/1灰色粘土～シルト質粘土互層
　植物遺体をラミナ状に多量に含む
8　5G4/1暗緑灰色シルト～極細粒砂混粘土（南部が砂）植物遺体少量　土器少量
9　2.5GY5/1オリーブ灰色粘土～極細粒砂互層（上方粒砂化）
　植物遺体少量（上部炭化植物をラミナ状に含む）
10　5Y3/1オリーブ黒色粘土
　植物遺体をラミナ状に多量に含む　上面足跡
11　2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土（南部が砂多い）
　土壌化層で一部ブロック状
12　10G5/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土　炭酸鉄少量
13　5Y4/1灰色中粒砂～粘土質シルト互層　植物遺体少量
14　2.5Y5/2暗灰黄色粘土～シルト互層
15　5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土　細かい植物遺体含む
16　5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粘土質シルトの複雑な層
17　7.5Y5/1灰色シルト～細粒砂互層
18　2.5Y4/2暗灰黄色粘土～粘土質シルト互層
19　7.5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～中礫（～1cm）
20　5GY2/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土　土壌化層
21　7.5GY5/1緑灰色粘土～極細粒砂互層　黒灰色粘土ブロック含む
22　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中細粒少混粘土
　ブロック状で上部土壌化して黒い
23　5Y4/2灰オリーブ色粘土　ブロック状　腐植粘土含む
24　5Y4/2灰オリーブ色シルト～細粒砂の複雑な層
　黒灰色粘土ブロック・腐植粘土含む
A　5GY2/1オリーブ黒色極細粒砂少量混粘土(16層をブロック状に含む)

第２図　基本層序（S＝1/40）

２）基本層序

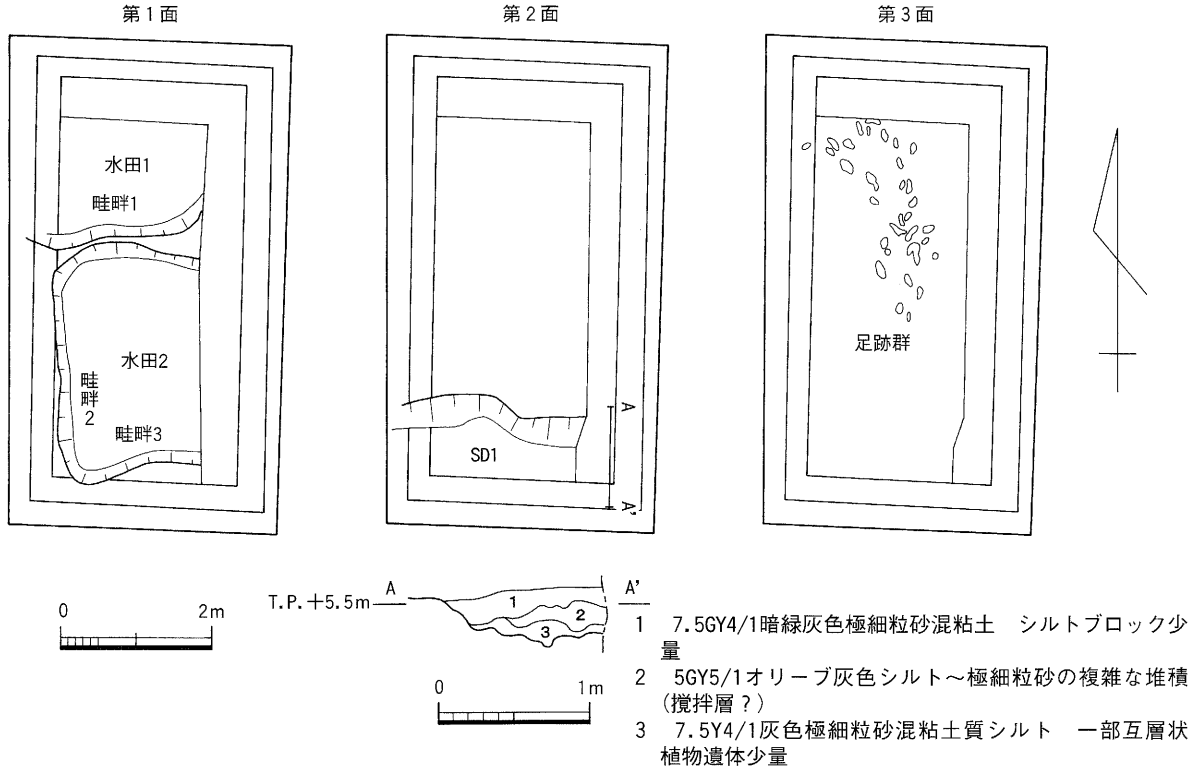
全体的におおむね水平な堆積であり、顕著な砂層は認められない。沼沢地や静水域における堆積状況である。

５層は撹拌された層相を呈し、作土層の可能性がある。北西部のセンター調査地における古墳時代初頭Ⅰ面の畑遺構に相当する。９層の水成層については、センター調査地で弥生時代中期～後期の洪水砂が確認されており、レベル的にみてこの影響により形成されたと考えられる。11層の土壌化層は第24次調査第４・５面の水田面（古墳時代前期初頭～前半）か、あるいはセンター調査地で弥生時代中期以前の耕作面の可能性が指摘されている層位にあたる可能性がある。北壁では11層上面で遺構（Ａ）が認められるが、耕作に伴う溝と考えられる。19層は細砂～中礫からなる薄い洪水砂層で、北壁においては西端で消滅する。18～12層までの約1.9ｍにわたっては、静水域における堆積状況が続いており、人為的な土地の改変や土壌化層は認められない。20・22層は西部の調査地（久宝寺南）で確認されている「黒色粘土１～３」のいずれかに該当すると捉えられ、縄文時代後期～弥生時代前期に形成された地層と考えられる。21層上面では、土壌化層である上層の20層が落ち込む部分が認められた。23・24層は腐植粘土や黒灰色粘土を含むブロック状の特異な層相で、遺構埋土の可能性もある。

３）検出遺構と出土遺物

第１面

４層上面（約T.P.＋6.3～6.4ｍ）で水田遺構を検出した。水田２筆（**水田１・２**）、畦畔３条（**畦畔１～３**）を検出したが全容を知れるものはない。検出状況から方形区画を基調とする水田と考えられる。**水田２**は**畦畔１～３**に区画され、南北長約3.0ｍを測る。畦畔はいずれも高さ数



第３図　遺構平面・断面図（Ｓ＝1/100・1/50）

cmの遺存である。作土層については撹拌層が認められず明確ではない。遺物の出土は無く時期は不明であるが、レベル的にみてセンターの99－１トレンチで検出された古代水田面に相当するものと考えられる。

第２面

調査区南端の９層上面（約T.P.＋5.5m）で東西方向の溝１条（ＳＤ１）を検出した。北肩のみの検出で南は調査区外に至る。検出長約2.5m・幅1.7m以上・深さ約0.3mを測り、断面ほぼ逆台形を呈するが底部は起伏がある。埋土は３層からなり、当初は流水状況であったと思われる。遺物は出土していない。

第３面

北半部の10層上面（約T.P.＋5.3m）でヒトの足跡を検出した。歩行の状況はおそらく、北から進入して北へ戻るというものであろう。

出土遺物

遺物は８層から土器片数点が出土したのみである。古墳時代前期頃までに比定されるもので、図化しえたものは無い。

３．まとめ

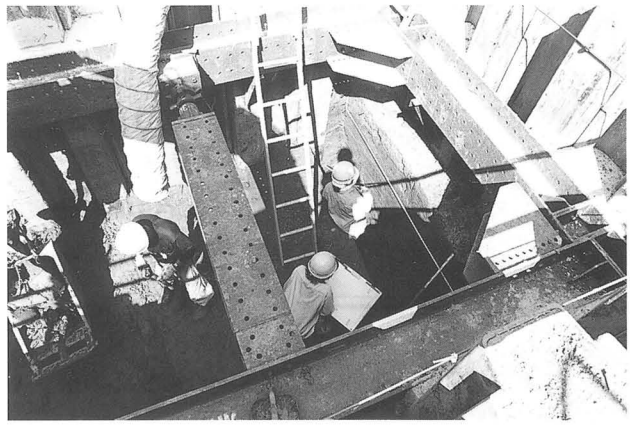
今回の調査は小面積ではあったが、周辺の調査では未確認である標高約T.P.＋2.2mという深部までの地層を確認することができた。上層部は不明であるが、顕著な砂の堆積は見られず全体的に洪水の影響はあまり受けていないといえる。沼沢地といった静水域における堆積が続いており、平面や断面で捉えた遺構は水田・溝といった生産関連のもののみであった。当地は西部のセンター調査地や第34次調査地で確認されている弥生時代後期～古墳時代前期の居住域に対する生産域という様相である。

註

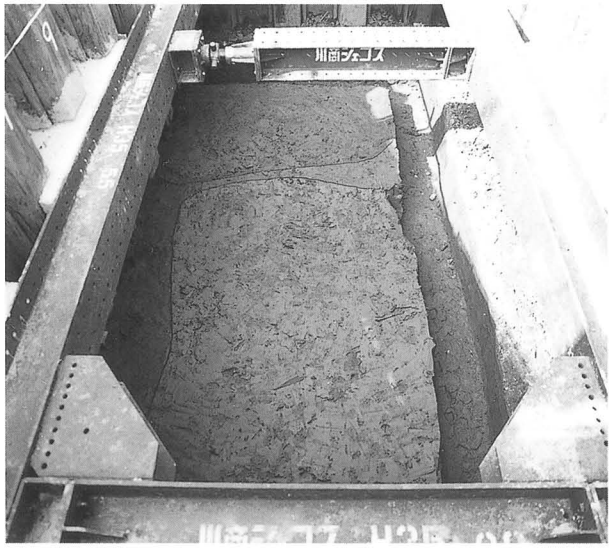
註１　原田昌則　2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告69』財団法人八尾市文化財調査研究会

註２　西村　歩・酒井泰子　2000『平成10・11年度　久宝寺遺跡（竜華東西線）発掘調査終了報告』財団法人大阪府文化財調査研究センター（内部資料）　西村　歩氏のご好意により資料の提供を受けた。正報告と内容が異なる場合は筆者に責がある。

註３　渕　斎　2001「5.久宝寺遺跡第34次調査（ＫＨ2000－34）」『平成12年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会



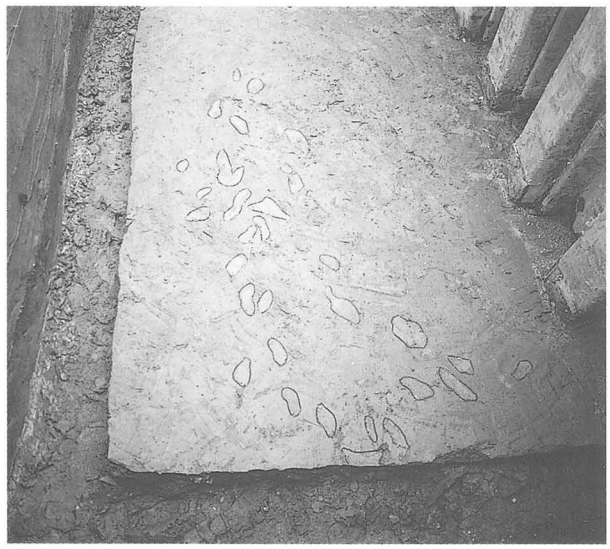
調査状況



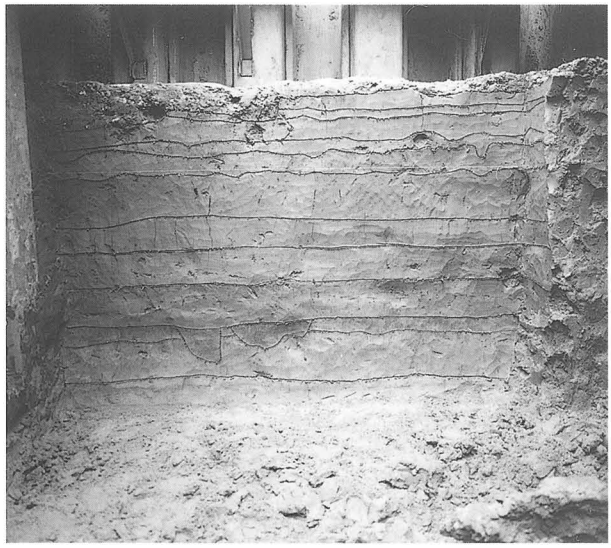
第１面（南から）

第２面ＳＤ１（北から）

ＳＤ１東壁



第３面足跡群（北から）



北壁（T.P.＋6.6～4.5m）

北壁（T.P.＋3.7～2.2m）

Ⅲ　跡部遺跡第35次調査（ＡＴ2002－35）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市跡部北の町３丁目地内で実施した公共下水道工事(14－117工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第35次調査(ＡＴ2002－35)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第290号　平成14年11月21日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年12月９日～平成15年１月14日(実働６日)の期間で、金親満夫を担当者として実施した。調査面積は約24㎡である。

1．現地調査に参加した補助員は伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・竹田貴子・永井律子である。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成15年２月20日に終了した。

本　文　目　次

1．はじめに……25
2．調査概要……27
　1）調査の方法と経過……27
　2）調査成果……27
3．まとめ……28

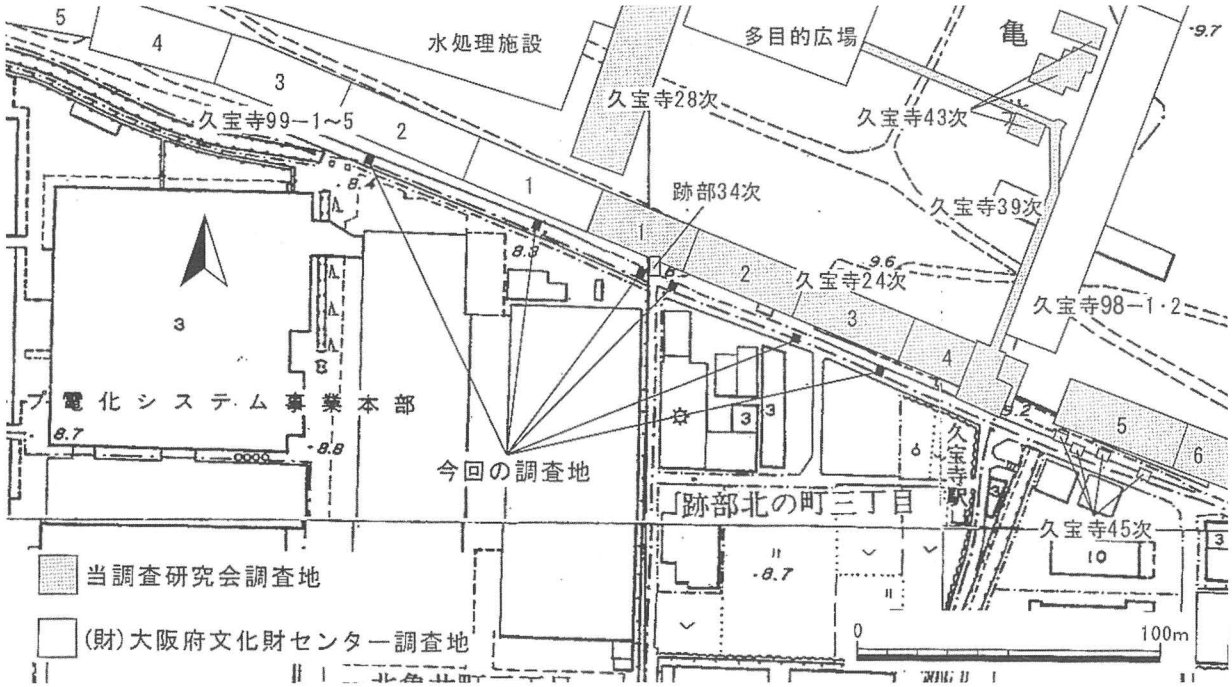
Ⅲ　跡部遺跡第35次調査（ＡＴ2002－35）

１．はじめに

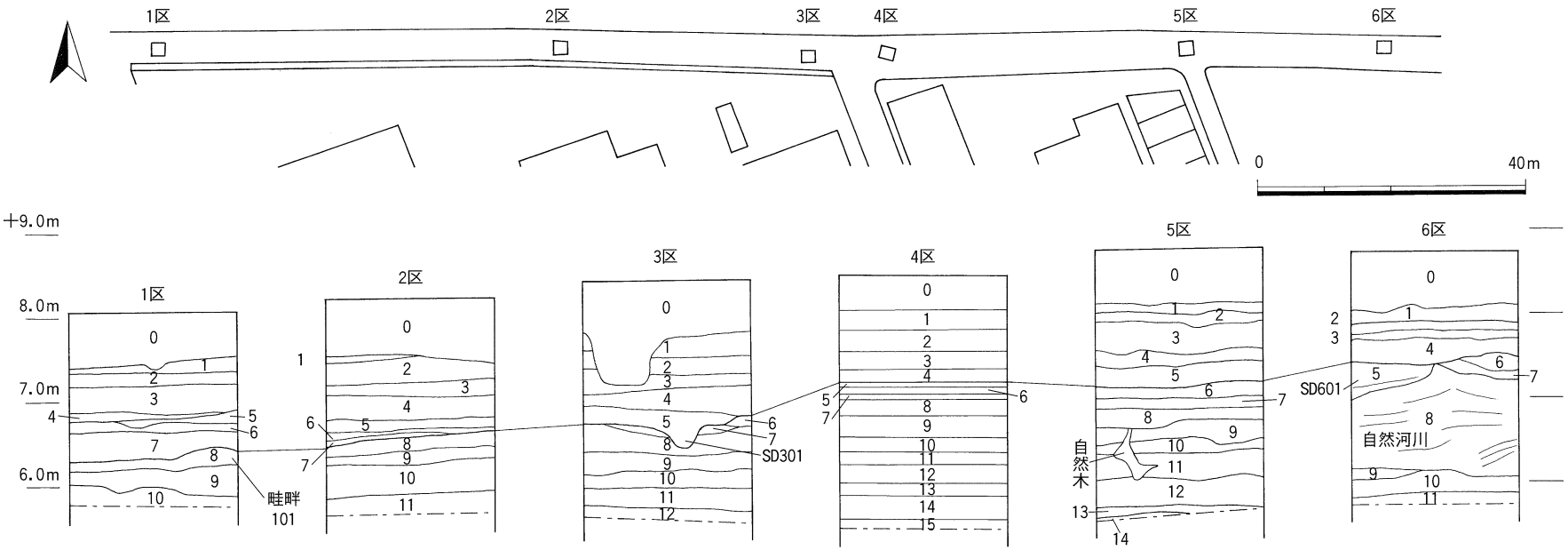
跡部遺跡は八尾市西部に所在し、現在の行政区画では、跡部北の町１～３、北亀井町３、春日町１～４、太子堂１・２、東太子１、跡部本町１～４、跡部南の町１・２、安中町３丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である北の長瀬川と南の平野川に挟まれた自然堤防と氾濫原に立地し、同地形上の北で久宝寺遺跡、南で太子堂遺跡、東で植松遺跡、西で亀井遺跡が隣接する。

当遺跡は弥生時代から続く複合遺跡であり、遺跡の中心である東部地区では弥生時代～中世までの遺構の検出が顕著に見られる。また跡部の地は古代において物部氏の本拠地と推定され、地の利の有用性において周辺地域より際立っていたと考えられる。

今回の調査地は跡部遺跡の北西隅にあたり、北の久宝寺遺跡との境に位置する。調査地北側の久宝寺遺跡域では平成９年度以降、竜華操車場跡地の再開発に伴う発掘調査が(財)大阪府文化財センター(以下、府センター)・当調査研究会により継続して実施されており、縄文時代後期～近世に至る多大な成果が得られ、なかでも弥生時代後期～古墳時代前期までの当該地の歴史は大きく塗り替えられている。当調査地は竜華東西線に伴う府センターによる99－１～５トレンチ[註1]、当調査研究会による久宝寺遺跡第24次調査地[註2]の南側に位置している。99－１～５トレンチでは古墳時代初頭の居住域や墓域等、また古代では水田面や水路が検出され、第24次調査地では古墳時代初頭の水田および中期まで機能していた河川、さらに平安時代前期の居住域等が検出されており、当該地の人為的活動は古墳時代以降活発に行われていたことが窺い知れる。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/2500）



1区
0　盛土
1　暗緑灰色細礫混細粒砂質シルト
2　暗オリーブ灰色
細礫混細粒砂質粘土質シルト
3　暗オリーブ灰色
細～中粒砂質粘土質シルト
4　暗オリーブ灰色シルト質細粒砂
5　オリーブ灰色極粗粒砂～細礫
6　灰色極細粒砂混シルト（やや粘質）
マンガン斑含む
（灰色極細粒砂を細かくラミナ状に含む）
7　灰色中～粗粒砂少量混粘土質シルト
マンガン斑含む
8　オリーブ黒色シルト質粘土
斑状炭化物含む
9　黒色シルト質細粒砂
植物遺体含む
10　暗オリーブ灰色細～中粒砂

2区
0　盛土
1　暗オリーブ灰色シルト混細粒砂
2　暗緑灰色細粒砂質粘土質シルト
3　暗緑灰色シルト～細粒砂
4　暗緑灰色粘土質シルト混細粒砂
マンガン斑含む（ラミナ有り）
5　灰色シルト質極細粒砂（ラミナ有り）
6　灰色細粒砂
7　オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト
（細かいラミナ有り）
8　灰色極細粒砂混粘土質シルト
9　灰色極細粒砂質粘土質シルト
10　オリーブ黒色シルト質粘土
植物遺体含む（炭化物ラミナ有り）
11　オリーブ黒色極細粒砂混シルト質粘土
植物遺体含む

3区
0　盛土及び撹乱
1　青灰色細礫混シルト
2　暗青灰色細礫混粘土質シルト
3　暗緑灰色粗粒砂少量混シルト質粘土
4　緑灰色細～中粒砂
5　暗緑灰色細礫
6　暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂
マンガン斑含む
7　暗青灰色粘土質シルト混シルト
8　灰色粘土質シルト～シルト
（炭化物ラミナ有り）
（灰色極細粒砂を細かくラミナ状に含む）
9　灰色粘土質シルト混シルト　植物遺体含む
10　オリーブ黒色
中粒砂少量混粘土質シルト　炭酸鉄含む
11　オリーブ黒色粘土質シルト～シルト
植物遺体少量含む
12　オリーブ黒色粘土質シルト～細粒砂

4区（4区のみ模式図）
0　盛土及び撹乱
1　黄褐色シルト～細粒砂
2　暗灰黄色シルト～極細粒砂
マンガン斑含む
3　黄灰黄色シルト質細粒砂
4　暗灰黄色細粒砂質シルト（やや粘質）
マンガン斑含む
5　黄灰色中粒砂混細粒砂質粘土質シルト
マンガン斑含む
6　黄灰色細粒砂質シルト質粘土
炭化物の帯含む
7　オリーブ黒色粘土質シルト
斑状炭化物含む
8　暗緑灰色細粒砂と粘土質シルトの互層
9　オリーブ黒色シルト混細粒砂
炭化植物含む
10　オリーブ黒色シルト質細粒砂
11　オリーブ黒色極細粒砂質粘土質シルト
12　灰色細粒砂質シルト（やや粘質）
13　灰色極細粒砂粘土質シルト
炭酸鉄含む
14　オリーブ黒色粘土質シルト
植物遺体含む
15　灰色細粒砂混粘土質シルト
植物遺体含む

5区
0　盛土
1　暗オリーブ灰色
細礫少量混シルト質細粒砂
2　暗青灰色極細粒砂質シルト
3　黄灰色粗粒砂混細粒砂質粘土質シルト
マンガン斑・酸化鉄含む
4　暗灰黄色細粒砂質シルト（やや粘質）
炭化物少量含む
5　暗灰黄色粘土質シルト混細粒砂
マンガン斑含む
6　灰黄色シルト質細粒砂
管状酸化鉄含む
7　黄灰色極細粒砂少量混粘土質シルト
8　黄灰色細粒砂～細礫（ラミナ有り）
9　灰色シルト～極細粒砂
（暗緑灰色細粒砂を細かくラミナ状に含む）
10　灰色極細粒砂少量混粘土質シルト
植物遺体含む
11　灰色粘土質シルト　植物遺体含む
12　灰色極細粒砂と
極細粒砂混粘土質シルトの互層
13　オリーブ黒色粘土質シルト～極細粒砂
14　灰色シルト質極細粒砂

6区
0　盛土
1　暗緑灰色
粗粒砂～細礫混中粒砂質シルト
2　暗オリーブ灰色
極粗粒砂混細粒砂質粘土質シルト
3　オリーブ黒色細礫混中粒砂質シルト
4　暗灰黄色粗粒砂混極細粒砂質シルト
管状酸化鉄含む
5　黄灰色細粒砂混シルト
（下部は8層のブロックを含む）
6　灰色細粒砂少量混粘土質シルト
7　灰黄色中粒砂　シルトのブロック含む
8　にぶい黄色中粒砂～
明褐色細礫混中～粗粒砂
（ラミナ有り・下部では粗粒化する）
9　灰黄色中粒砂～細礫
10　オリーブ黒色粘土質シルト　炭酸鉄含む
11　オリーブ黒色シルト質細粒砂
（灰色極細粒砂を細かくラミナ状に含む）

第2図　調査位置図（S＝1/1000）および北壁断面図（S＝1/80）

２．調査概要

１）調査の方法と経過

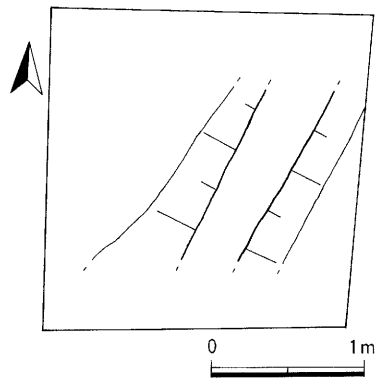
今回の調査は、公共下水道工事（平成14年度第117工区）に伴う人孔部分６箇所の調査で、当研究会が跡部遺跡で実施した第35次調査にあたる。調査面積は各約２ｍ四方で計約24㎡である。調査地区名は西より１～６区とする。

調査は現地表（T.P.＋8.1～9.9m）下0.5～1.0mまでを機械掘削とし、工事掘削範囲に応じて以下1.5～2.5mについて人力・機械掘削を併用して調査を実施した。

２）調査成果

１区

現地表（T.P.＋8.1m）下約0.6mで近世～現代の耕作土（１～４層）が見られる。５・６層は洪水砂である。８層上面（T.P.＋6.3～6.5m）で畦畔１条（畦畔101）を断面で確認した。シルト質粘土の層を削り出して作られており、高さは約0.15mを測る。撹拌を受けた７層が作土層にあたる。この水田面は先述の洪水砂によって覆われることで機能を停止させる。遺物が出土していないため、明確な時期は不明であるが調査区北側で実施された府センター99－２トレンチで検出された古代水田面に相当するものである（第３図は南北断面による推定図である）。８・９層は植物遺体を含む静水堆積となっているが10層では洪水砂の堆積が見られる。この洪水砂は府センター99－３トレンチでの古墳時代初頭の溝４または４トレンチの河道５に由来するものと考えられる。



第３図　１区畦畔101平面図（Ｓ＝1/50）

２区

現地表（T.P.＋8.2m）下0.7～0.8mで近世～現代の耕作土（１～３層）が見られる。６層は１区で確認したものと同じ古代水田面を覆う洪水砂である。７・８層上面（T.P.＋6.5m）が古代水田面に相当するが、作土層及び畦畔は当調査区では確認できなかった。８層以下は植物遺体を含む静水堆積である。

３区

現地表（T.P.＋8.4m）下約0.6mで近世～現代の耕作土（１～４層）が見られる。既存の管が調査区西側で南北に通り、その設置による撹乱が１層上面から0.6m下まで及んでいる。４・５層は古代水田面を覆う洪水砂層である。層厚は0.4～0.5mと１・２区と比べ厚い。６・７層上面（T.P.＋6.7～6.8m）で溝１条（ＳＤ301）を断面で確認した。遺物の出土はないが、時期は一連の古代の面に相当する。８・９層は植物遺体を含む静水堆積である。10層は撹拌を受けた堆積状況であるが、11層以下は静水堆積を示す。

４区

調査区南半分は埋没管設置により現地表下1.4mまで撹乱を受けていた。現地表（T.P.＋8.5m）下約0.4mで島畑の盛土（１・２層）が見られる。５・６層（T.P.＋7.1～7.2m）は細粒砂質粘土質シルト主体の土壌化層で、５層上面が一連の古代の面に対応すると考えられるが、西に約10m離れた３区とは約0.5mの比高差がある。７～10層は静水堆積である。11～13層は撹拌を受けてい

るが、14層以下は静水堆積を示す。

5区

現地表(T.P.＋8.8m)下約0.65mで旧耕土(1・2層)が見られる。3層は島畑の盛土である。5・6層は古代以降の作土層であるが遺物の出土がなく、時期は限定できない。8層は後述の6区自然河川に由来する洪水砂である。9層以下は静水域の堆積状況を示す。また自然木が9～12層中に確認できるが、8層の洪水砂によって上部が切り取られている。

6区

現地表(T.P.＋8.7m)下約0.6mで近世～現代の耕作土(1～3層)が見られる。4層は5区の古代以降の作土層と対応するものである。4層下面(T.P.＋7.4～7.5m)で溝1条(SD601)を断面で確認した。西肩は調査区外に至る。幅1.1m以上、深さ約0.5mで埋土は2層からなる。北側の当研究会実施の久宝寺遺跡第24次調査地SD31035(古墳時代中期中葉)と同じ溝である。遺物は土師器の小片が出土している。8層は第24次調査地のNR31001と同一の自然河川内埋土であり、層厚は約1.4mである。この河川は古墳時代中期中葉までに埋没したと推定されている。10層以下は静水堆積である。

3．まとめ

調査の結果、古墳時代中期および古代の遺構を確認し、また当該地での地形環境に関する知見を得ることができた。全ての調査区において沼沢地を想像させる静水堆積が見られる。この静水堆積は府センターの調査事例から弥生時代中期～後期に形成されたことが知られている。しかし1区では古墳時代初頭の洪水砂、さらに6区では中期に埋没する自然河川が存在し、古墳時代になると河川の影響を受けた堆積となる。また3・4区ではT.P.＋5.8～6.4mの間で攪拌を受けた地層を確認したが、これは第24次調査地で検出された古墳時代初頭～前期の水田面に相当し、この水田に対する作土層の可能性をもつ。古代では水田面の広がりを確認することができた。古代の地表面は4区ではT.P.＋7.1～7.2mの高さをもつが、西に約10m離れた3区ではT.P.＋6.7m、さらに西へ約40m離れた2区ではT.P.＋6.3～6.5mと、西へ行くにつれ急激な高低差となる。これは6区の古墳時代中期の自然河川によって形成された自然堤防とその後背湿地という様相を示すものであろう。そして、後背湿地である1・2区周辺において水田を営んでいたと考えられる。

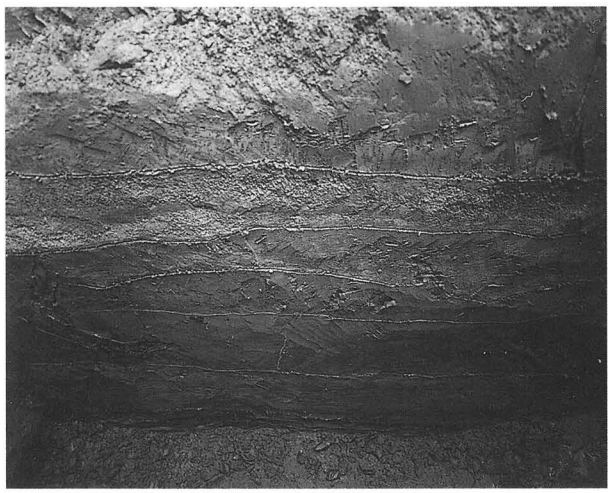
註

註1　西村　歩・酒井泰子　2000『平成10・11年度　久宝寺遺跡(竜華東西線)発掘調査終了報告』財団法人大阪府文化財調査研究センター(内部資料)　西村　歩氏のご好意により資料の提供を受けた。正報告と内容が異なる場合は筆者に責がある。

註2　原田昌則他　2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告69』財団法人八尾市文化財調査研究会

1区　畦畔101（北壁断面）

3区　ＳＤ301（北壁断面）



5区　北壁断面（T.P.＋7.0m以下）

6区　ＳＤ601（北壁断面）

6区　自然河川堆積状況（北壁断面）

調査風景

Ⅳ　老原遺跡第10次調査（ＯＨ2002－10）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市老原２・３丁目地内で実施した公共下水道工事（14－28工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する老原遺跡第10次調査（ＯＨ2002－10）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書（八教生文第124号　平成14年７月４日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年９月24日～10月７日（実働５日）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約58㎡を測る。

1．現地調査に参加した補助員は市森千恵子・沢村妙子・曹　龍・多田一美・實樹婦美子である。

1．内業調査は現地調査終了後随時行い、平成14年12月11日に終了した。

1．本書に関わる業務は以下の通りである

【遺物実測】　沢村

【トレース】　市森

【執筆・編集】西村

本　文　目　次

1．はじめに……31

2．調査概要……31

　1）調査方法と経過……31

　2）検出遺構と出土遺物……32

3．まとめ……32

Ⅳ　老原遺跡第10次調査（ＯＨ2002－10）

１．はじめに

老原遺跡は、八尾市の中央に位置し、現在の行政区画では老原１～４丁目･東老原１･２丁目一帯がその範囲となっている。当遺跡は、地形的には長瀬川の左岸の自然堤防上から西側に広がる沖積地上に立地している。

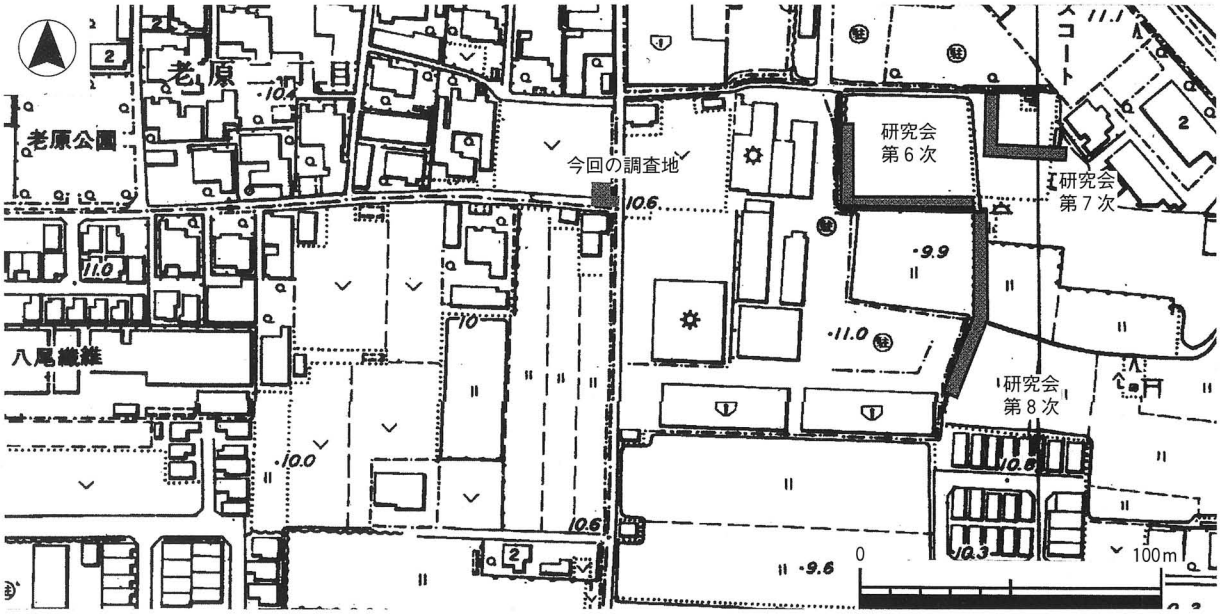
当遺跡内では八尾市教育委員会（以下市教委）および、財団法人八尾市文化財調査研究会（以下研究会）が発掘調査を実施しており、古墳時代後期から近代に至る遺構・遺物の検出があり、同時期の集落が存在していたことが明らかになっている。特に今回の調査地付近では、東側約80ｍの地点で、研究会第６次調査（原田1996）が行われており、平安時代末期～鎌倉時代初頭・室町時代中期・江戸時代後期・明治時代前期の遺構が検出されている。

当遺跡と同一の沖積地上には、田井中遺跡や志紀遺跡がある。これらの遺跡は当遺跡の南側に近接している。田井中遺跡では弥生時代から古墳時代中期の遺構および遺物を検出しており、集落が存在していたことが明らかになっている。また、志紀遺跡では弥生時代～鎌倉時代頃の生産遺構などが検出されている。

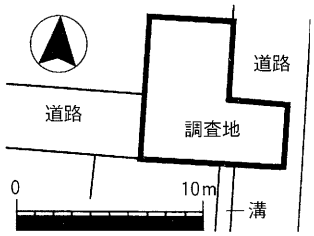
２．調査概要

１）調査の方法と経過

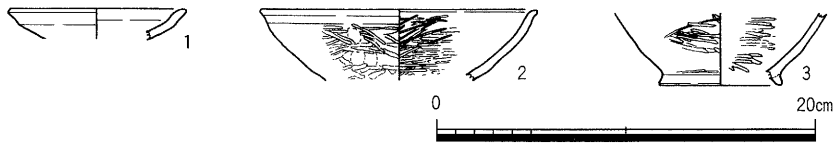
今回の発掘調査は公共下水道（平成14年度第28工区）に伴う調査で、研究会が老原遺跡内で行った第10次調査にあたる。調査は立坑部分について実施した。調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.0ｍまでを機械と人力で掘削し、以下1.5ｍの厚みの地層について調査を行ない、以下工事掘削深度の約6.1ｍの深さまでの地層については、堆積状況の



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）



第２図　調査位置図（Ｓ＝1/400）



第３図　出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

確認を行った。今回の調査では、八尾市下水道部作成の地図に記載している標高値（ＫＢＭ１＝T.P.＋10.747m）を使用した。

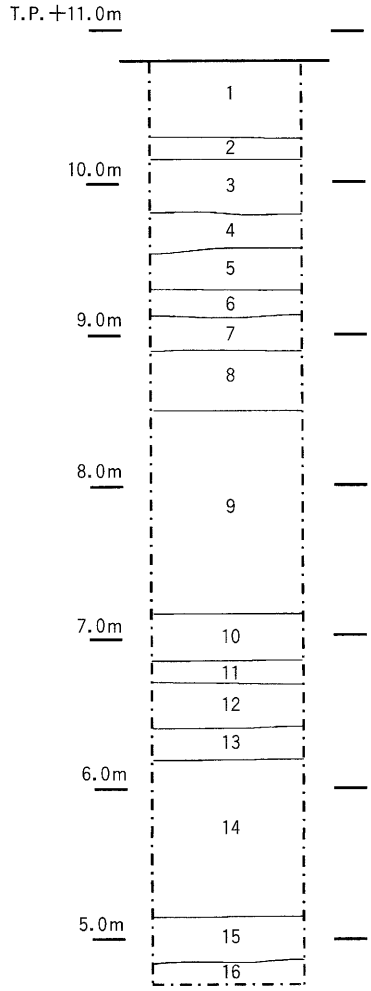
２）検出遺構と出土遺物

現地表面はT.P.＋10.8m前後で、現況は道路である。以下深さ6.1mまでに16層の堆積土を確認した。１層の盛土は厚さ0.5mを測る。２層は近世～近代の耕作土である。３層は粗粒砂の流水堆積である。４層は粗粒シルト混粘土で、撹拌をうけている。６層の上面も撹拌をうけ、この層からは土師器や瓦器の破片が出土した。７層は細粒砂混シルト、９層は細粒砂混粗粒砂、13層は細粒砂混微粒砂で、何れの地層も流水堆積と思われる。16層の粘土層には、植物遺体が互層に堆積していた。

６層からは少量ではあるが土師器や瓦器の破片が出土した。このうち図化し掲載したものは土師器（１）瓦器（２・３）である。１は皿である。屈曲し外反気味に終わる口縁部で、端部は尖り気味に丸く終わる。２は椀である。内湾気味に立ち上がる体部から、口縁部は外側にややつまみだす。端部は尖り気味ではあるが丸く終わる。内面には密なミガキを施し、外面には指ナデのちミガキを施している。３は椀である。高台部はハの字にひらき、端部は尖り気味に丸く終わる。内外面には密なミガキを施している。

３．まとめ

今回の調査では遺構の検出はなかった。しかし、６層上面は撹拌を受け、平安時代後期頃に比定できる遺物が出土していることから、今回の調査地付近では、平安時代後期以降に集落が存在していた可能性が高いと考えられる。

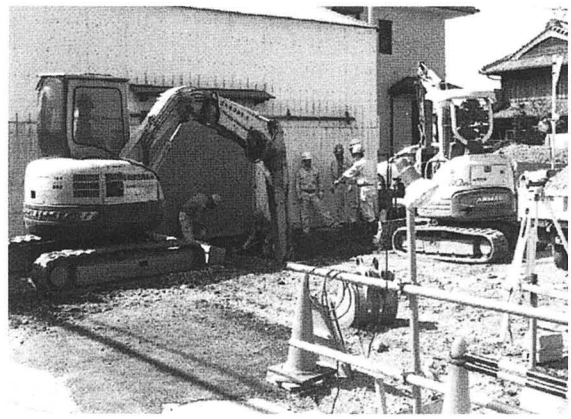


1　盛土
2　10YR2/1黒色細粒砂混粘土
3　5B5/1青灰色細粒砂混粗粒砂
4　5B4/1暗青灰色粗粒シルト混粘土
5　7.5Y7/1灰白色粘土質シルト
6　5P2/1紫黒色細粒砂混粘土
7　5P5/1青灰色細粒砂混シルト
8　N4/0灰色粘土
9　7.5Y7/1灰白色細粒砂混粗粒砂
10　10BG5/1青灰色粘土
11　10BG3/1暗青灰色粘土
12　5B4/1暗青灰色細粒シルト混粘土
13　5Y6/1灰色細粒砂混微粒砂
14　5RP2/1紫黒色細粒シルト混粘土
15　5PR2/1紫黒色粘土
16　5B4/1暗青灰色粘土

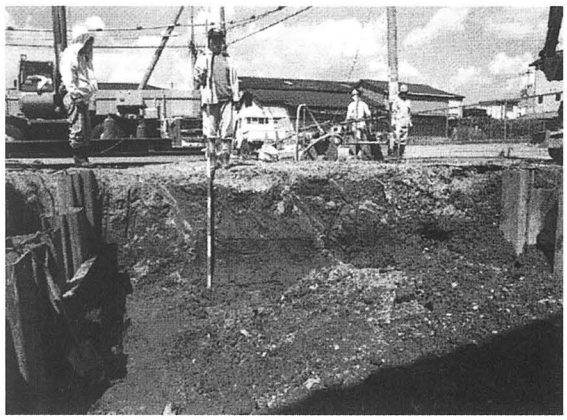
第４図　断面図（Ｓ＝1/50）

参考文献
・原田昌則　1996「老原遺跡第６次調査」『平成７年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1997「老原遺跡第７次調査」『平成８年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1998「老原遺跡第８次調査」『平成９年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

調査地周辺（北から）



掘削状況（北東から）



北壁面（南から）

南壁面（北から）

Ⅴ　太田遺跡第５次調査（ＯＯＴ2002－５）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市太田３丁目地内で実施した公共下水道工事（平成13年度飛行場南排水区第62工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する太田遺跡第５次（ＯＯＴ2002－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第122号　平成14年７月４日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成14年８月７日～８月９日（実働２日間）にかけて、西村公助、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約36㎡である。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成14年９月20日に完了した。

1．本書に関わる業務は、以下の通りである。

【遺物実測】　市森千恵子

【トレース】　荒川和哉・市森・國津れいこ・樋口

【執筆・編集】樋口

本　文　目　次

1．はじめに……35

2．調査概要……36

　1）調査の方法と経過……36

　2）基本層序……36

　3）検出遺構と出土遺物……37

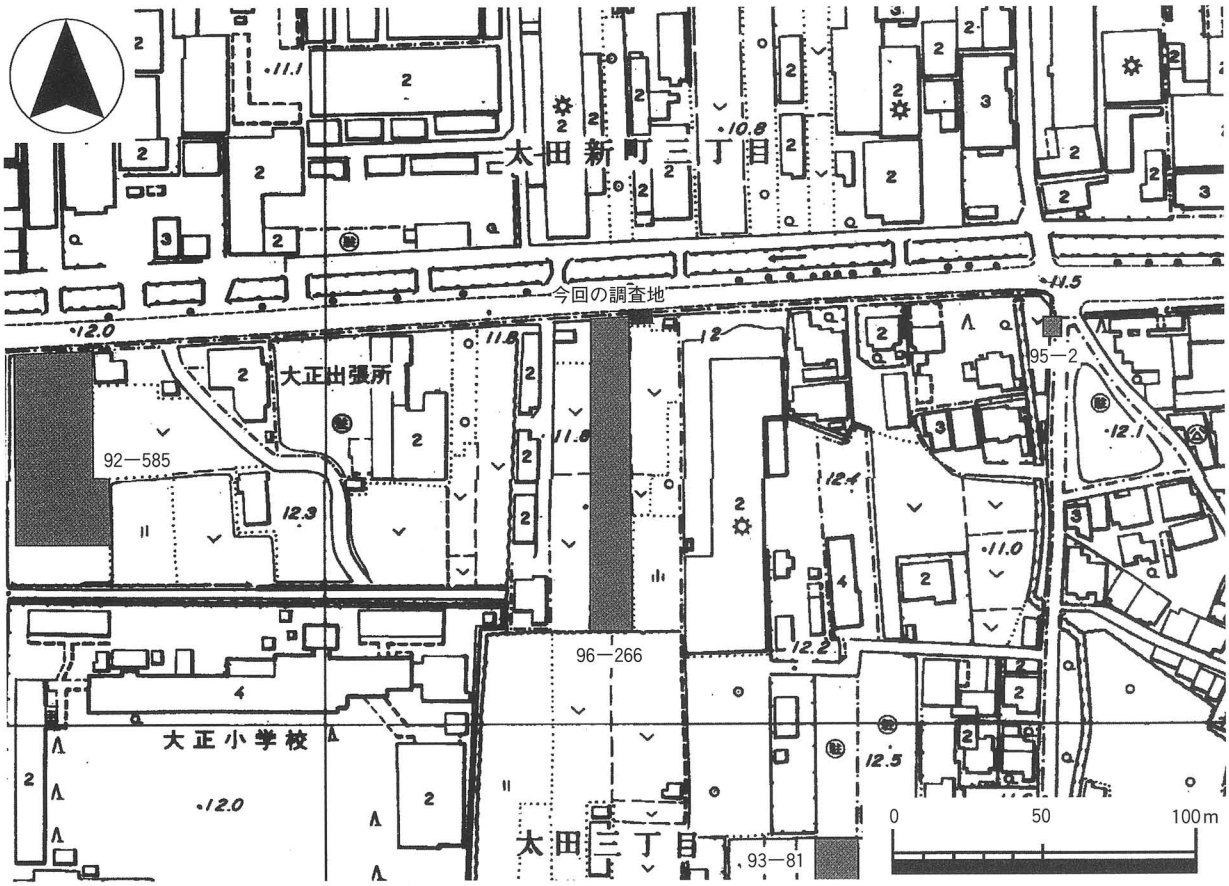
3．まとめ……38

Ⅴ　太田遺跡第５次調査（ＯＯＴ2002－５）

１．はじめに

太田遺跡は八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では、太田３・４・９丁目、太田新町１・３丁目がその範囲と推定されている。当遺跡は、地形的には、南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と、その北側に広がる沖積平野との変化点付近に位置する。当遺跡の周辺には、南に大正橋遺跡、津堂遺跡（藤井寺市）、西に八尾南遺跡、北に木の本遺跡が存在する。

当遺跡は、近年の発掘調査の成果により、旧石器時代～中世に至る複合遺跡であることが明らかになりつつある。今回の調査地周辺を見ると、昭和62年度に実施された大阪府教育委員会による公共下水道工事に伴う発掘調査では、旧石器時代の石器が多量に出土している。平成５年度に行われた八尾市教育委員会による発掘調査（太田遺跡92－585）では、平安時代～鎌倉時代の井戸、小穴、溝などを検出し、居住域の存在を確認した。同じく太田遺跡93－81調査では、古墳時代後期に比定される土坑を検出している。この土坑からは、口縁部を意図的に打ち欠いた須恵器甕とともに、草食動物の歯も出土していることから、水に関わる祭祀が催された可能性が指摘されており、興味深い。また、太田96－266では、古墳時代後期に比定される製塩炉の可能性が考えられる焼土坑を検出したほか、弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期）の竪穴住居の可能性をもつ遺構を検出している。この住居は、２次焼成を受けた建築部材が遺存していた点が特筆される。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

表１　調査地一覧表(地図番号は第１図に対応)

地図番号	調　査　地	調査原因	調査面積(㎡)	調　査　期　間	調　査　機　関
92－585	八尾市太田３丁目179番地他	共同住宅建設	27	平成5年5月10日～5月21日	八尾市教育委員会
93－81	八尾市太田３丁目139番地	共同住宅建設	27	平成5年5月24日･25日	八尾市教育委員会
95－2	八尾市太田2･3･5丁目	公共下水道工事	77.81	平成7年6月12日～8月28日	(財)八尾市文化財調査研究会
96－266	八尾市太田3丁目156番地	浄化槽建設	23.24	平成8年9月27日～10月24日	八尾市教育委員会

２．調査概要

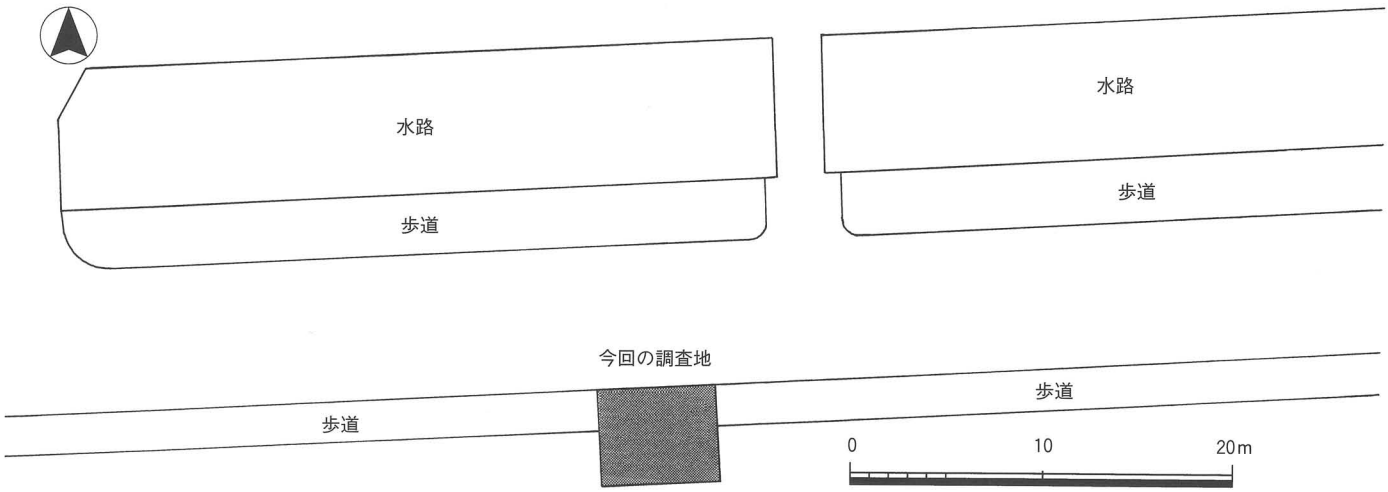
１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市太田３丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が太田遺跡内で実施した第５次調査（ＯＯＴ2002－５）にあたる。調査区は１箇所である。調査区の平面形状は東西約6.4m・南北約5.6mの長方形で、面積は約36㎡を測る。

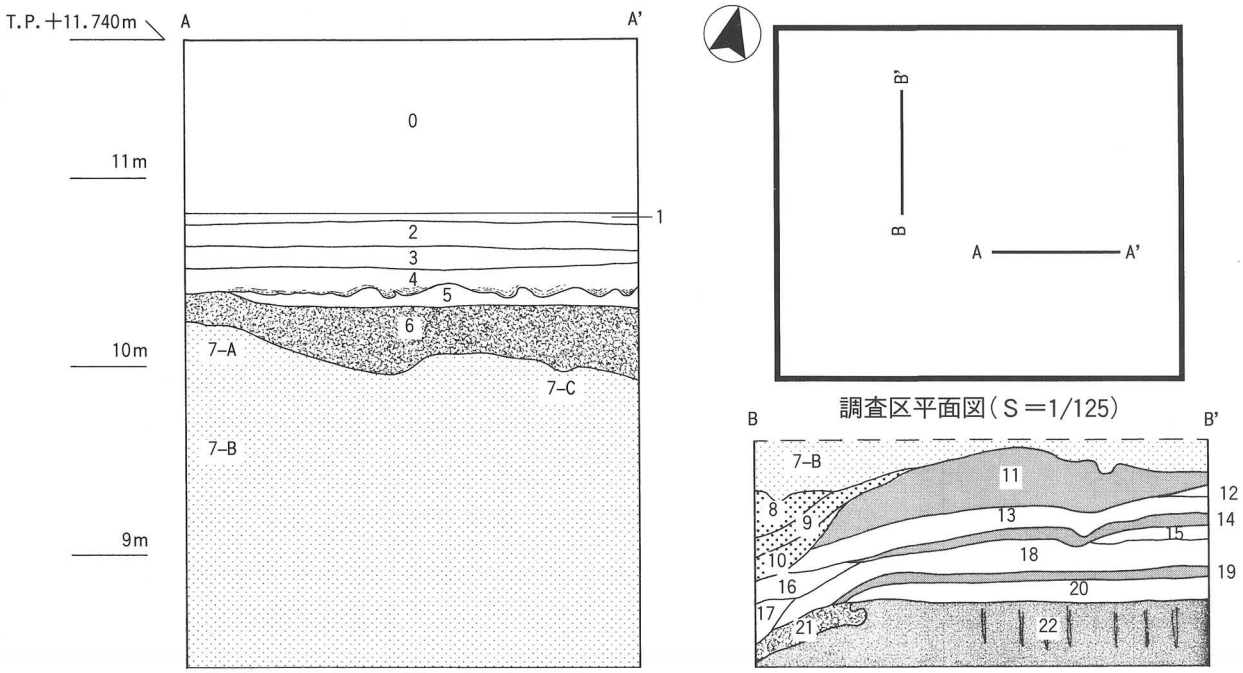
調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財指示書に基づき、現地表（T.P.＋11.740m）下3.3m前後までを機械と人力を併用して掘削を行った。なお今回の調査は、諸事情により夜間に実施された。

２）基本層序

現地表下0.9m前後までは客土・盛土(第０層)。以下現地表下3.3m前後までの2.4m間で、22層もの地層を確認した。第１層は褐灰色を呈した細礫混粘土質シルト。一部客土が含まれるが、概ね耕作土と考えてよい。第２層・第３層は、砂礫が混在したシルト質粘土～粘土質シルト。砂粒の淘汰は不良である。土壌化層である。第４層は細礫混中粒砂～極粗粒砂。流水堆積層である。本層下面では、踏み込み痕と思われる変形構造が認められる。第５層は静水域に形成された粘性に富む地層である。第６層は第７層上面から緩やかに傾斜する落ち込みの埋土に相当する。埋土は、基本的には流水堆積により形成されているが、一部、ブロック土が認められることから、人為的に土砂を投げ入れている可能性も考えられる。第７層は調査区全域に存在する砂礫層である。



第２図　調査地位置図(Ｓ＝1/400)



第０層　2.5Y4/1黄灰色～2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～極粗粒砂
第１層　10YR4/1褐灰色～2.5Y4/1黄灰色細礫混粘土質シルト
第２層　2.5Y4/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
第３層　2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混粘土質シルト
第４層　10YR5/2灰黄褐色細礫混中粒砂～極粗粒砂
第５層　5Y4/1灰色粘土質シルト
第６層　10YR5/1褐灰色～2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト～中粒砂
第７層　7-A：5Y4/1灰色極粗粒砂～細礫
　　7-B：10YR6/3にぶい黄橙色粗粒砂～細粒砂
　　7-C：10Y4/1灰色粘土質シルト
第８層　7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～中粒砂
第９層　10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂
第10層　10Y4/1灰色シルト～極細粒砂
第11層　10Y4/1灰色粗粒砂混粘土質シルト
第12層　10Y5/1灰色粘土質シルト
第13層　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土
第14層　10Y4/1灰色細礫混シルト
第15層　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土
第16層　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土
第17層　10Y4/1灰色粘土質シルト
第18層　10Y5/1灰色粘土質シルト
第19層　10Y4/1灰色極粗粒砂混シルト
第20層　2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト
第21層　5GY5/1オリーブ灰色シルト
第22層　5Y2/2オリーブ黒色粘土質シルト

第３図　地層断面図（S＝1/40）

一部水平方向に発達したラミナ構造も認められる。第８～10層は流木を多く含む流水堆積層である。第11層は粗粒砂混粘土質シルト。第12・13層は挟雑物を含まないシルト質粘土～粘土質シルト。第14層はシート状に堆積した細礫混シルトである。洪水時にもたらされた溢流堆積物の可能性が高い。第15層はシルト質粘土である。第16～18層は粘土質シルト～シルト優勢層。第19層は第14層と同様の地層である。第20層は、粘性に富む湿地性の粘土質シルトである。第21層は第20層上面に構築された遺構の埋土の可能性が考えられる。ブロック土で形成されている。第22層は黒色を呈する粘土質シルトである。上面は極めて水平で、唯一第21層の部分のみ、層相が乱れる。縦根の痕跡が無数に認められる点が特徴的である。土壌化層であろう。

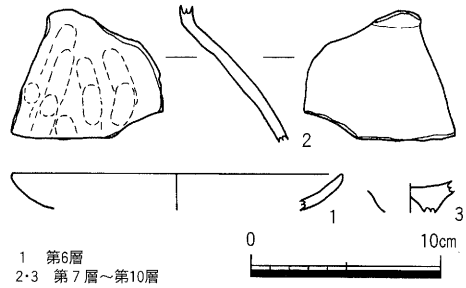
３）検出遺構と出土遺物

地層断面観察により遺構や遺構らしきものを検出している。

遺構１　第５層上面に存在する踏み込み痕跡が上げられる。この痕跡は第４層が形成される段階になされたものであるから、本来は第４層下面検出遺構と表現すべきものである。時期は不明。

遺構２　第７層上面から落ち込む第６層が相当する。この落ち込みは調査区のほぼ中央付近で、ほぼ南－北方向に伸びる西肩を検出している。東側については調査区外に至るため不明。埋土には、土師器の細片が１点混在しいていた。時期は不明。

遺構３　第11層上面から切り込む第８～10層が相当。調査区を南西－北東方向に横切る流路の西肩である。東肩は調査区外に至るため不明。時期も不明。



第４図　出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

遺構４　第22層上面に存在する第21層が、その可能性が高い。

出土遺物については、第６層内から土師器細片が１点（１）、第７～10層の砂礫層内から、土師器細片が２点（２・３）出土した。１は、土師器皿の口縁部と推測される。口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。調整は、内・外面ともに横ナデを施しているものと思われる。色調は褐色を呈する。11世紀後半～12世紀前半に属するものであろう。２は、土師器の壺又は甕の頸部～体部上半である。頸部の内面および外面の屈曲は、いずれも緩やかである。調整は内面に指頭圧痕が認められる以外は、摩滅のため不明瞭である。所属時期は不明。３は、土師器高杯の杯部である。調整は摩滅のため不明である。杯部と脚部の接合方法については、それぞれを別々に成形した後、脚部を杯部に挿入することにより接合しているようである。挿入の際には、棒状の道具を用いている可能性も考えられる。

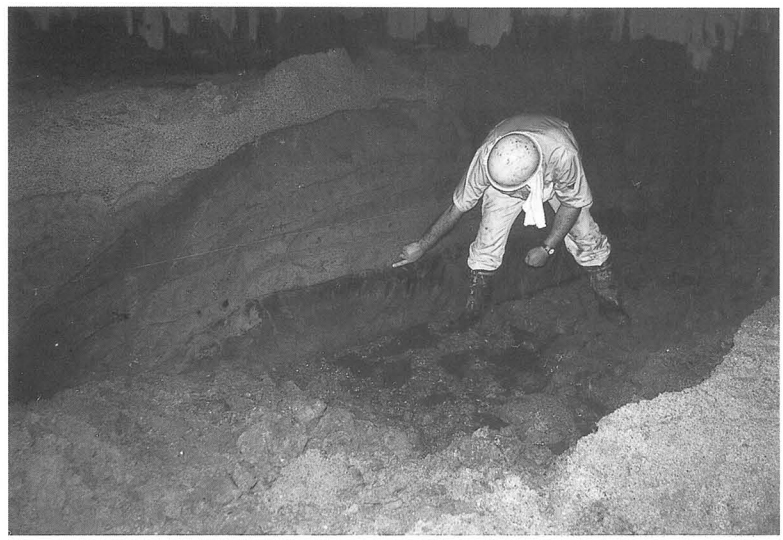
３．まとめ

特筆すべき成果として、黒色を呈した第22層と、その上面に構築された遺構の可能性が高い第21層の存在が上げられる。本調査区に西隣する地点で実施された八尾市教育委員会による調査（太田96－266）では、T.P.＋8.7m前後で弥生時代後期後半に比定される焼失住居らしき遺構を検出している。また最近では、東隣する地点でも試掘が行われ、同レベルにおいてほぼ同時期の遺物包含層を検出している。したがって、本調査で検出した第22層は、弥生時代後期後半の地層に相違ない。ところで、この第22層についてさらに詳細に述べると、（Ａ）遺物がまったく包含されていない。（Ｂ）地層上面が極めて水平である。（Ｃ）無数に縦根の痕跡が認められる。の３点が挙げられる。上記の調査における地層の比較を行っていないため推測の域を出ないが、（Ａ）に注目するならば、本調査区では居住域を形成していたとは積極的には言えそうにない。

参考文献・引用文献
・福田英人　1989『八尾南遺跡－旧石器出土第３地点－　大阪府文化財調査報告書第36輯』大阪府教育委員会
・渟　斎　1994「３．太田遺跡（92－585）の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
・吉田野々　1994「４．太田遺跡（93－81）の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
・西村公助　1996「Ⅳ　太田遺跡第２次調査（ＯＯＴ95－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』（財）八尾市文化財調査研究会
・渟　斎　1997「３．太田遺跡（96－266）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会

北壁地層（T.P.＋10～11ｍ付近）

第７層　掘削状況（南西から）



西壁地層（T.P.＋8.5～9.5ｍ：第22層上面を指す）

Ⅵ　恩智遺跡第11次調査（ＯＪ2001－11）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智中町２・３丁目地内で実施した公共下水道工事（13－16工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する恩智遺跡第11次調査（ＯＪ2001－11）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第254号　平成13年10月10日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成13年11月12日～12月18日（実働22日間）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約243㎡である。

1．現地調査には下記の補助員の参加を得た。

　飯塚直世・加藤邦枝・川村一吉・國津れいこ・澤村妙子・多田一美・都築聡子・宮崎寛子・横山妙子（五十音順）

1．内業整理は現地調査終了後、随時行い、平成14年３月29日に終了した。内業整理には上記の他、荒川和哉・市森千恵子・伊藤静江・岩沢玲子・岩本順子・岡田佳之（現(財)大阪府文化財センター専門調査員）・北潟良江・北原清子・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・村井俊子・村田知子・吉川一栄・若林久美子が参加した。(五十音順)

1．本書の執筆・編集は森本が行った。しかし、出土遺物のうち石製品の実測・トレースは金親満夫（当調査研究会嘱託）が、遺物の写真撮影に関しては樋口　薫（当調査研究会技師）が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……41

2．調査概要……43

　1）調査の方法と経過……43

　2）基本層序……43

　3）検出遺構と出土遺物……47

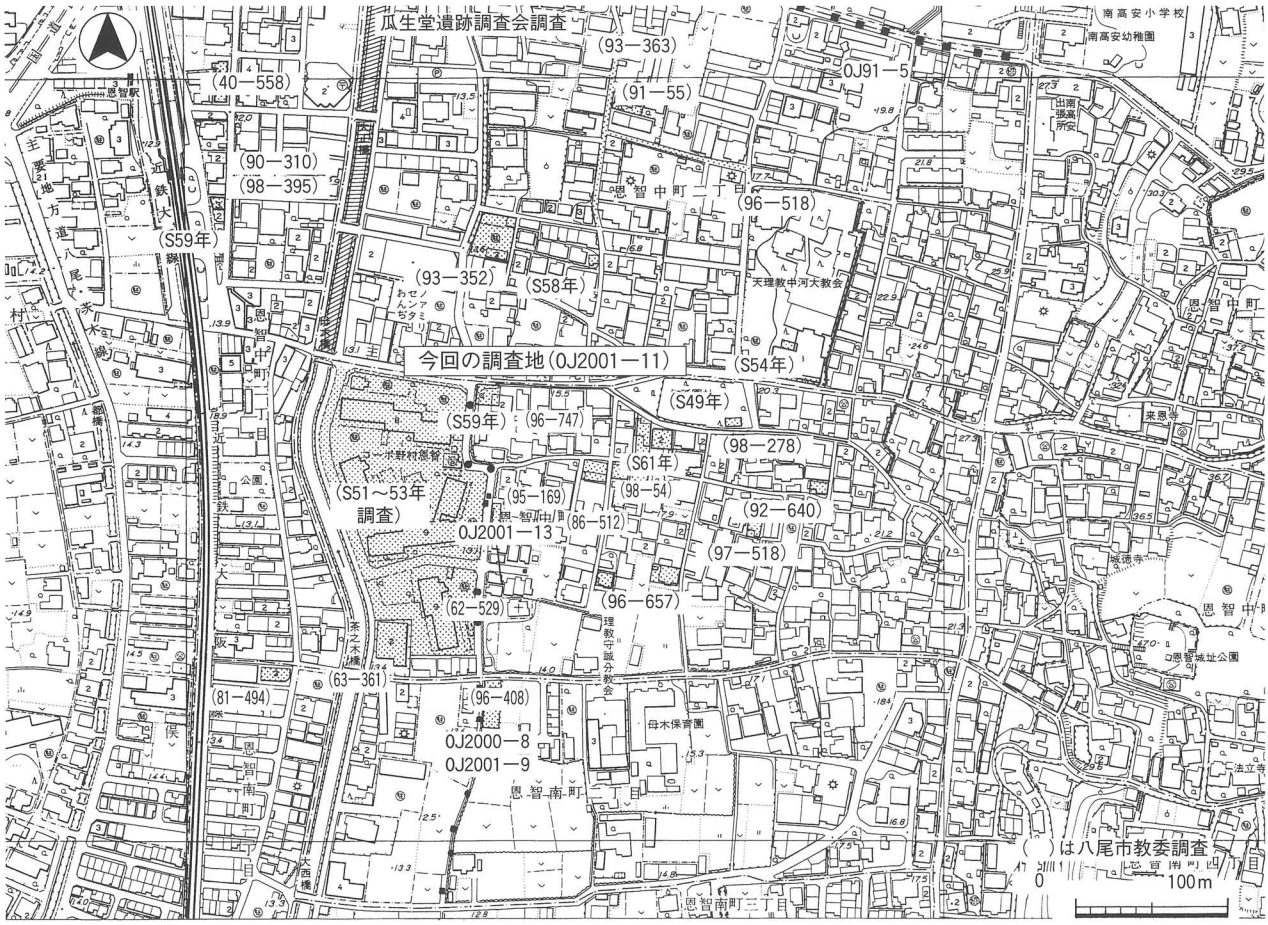
3．まとめ……65

Ⅵ　恩智遺跡第11次調査（ＯＪ2001－11）

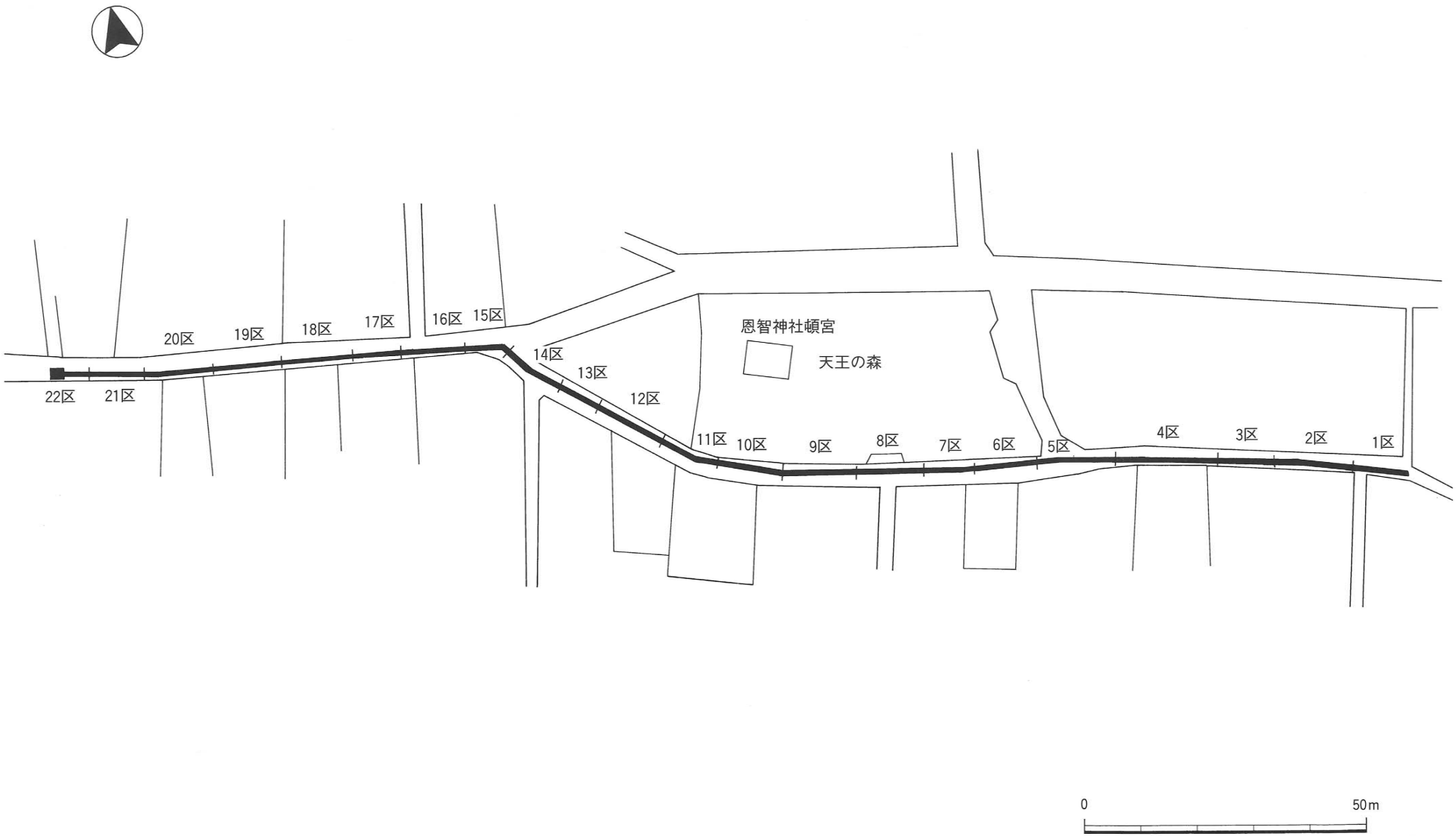
１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市の南東部に位置する。地形的には、生駒山地西麓の扇状地と旧大和川により形成された沖積平野上に広がっており、現在の行政区画では恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町２・３丁目一帯の南北約1.2km、東西約1.0kmがその範囲と推定されている。

今回報告する第11次調査の近辺には、「天王の森」と呼ばれる広場が存在する。ここには、元々河内二の宮である式内社恩智神社が鎮座していた。この神社は、14世紀頃恩智の豪族恩智左近満一が恩智城を築城した際に現在の位置に移されたといわれており、現在は、恩智神社の御旅所として小さな祠が祭られている。この周辺は古くから遺物の散布地として知られていた。1917年には、梅原末治・島田貞彦両氏によって踏査され、弥生時代各時期の土器や石器の出土をみた。また、鳥居龍蔵・岩井武俊両氏による試掘調査（1917）、藤岡謙二郎氏による踏査（1939）でも弥生時代各時期の遺物が検出された。その後、今里幾次氏による踏査において縄文土器が出土したことが報告され、当遺跡の起源が縄文時代に遡ることが判明した。また、1975年には、瓜生堂遺跡調査会によって恩智川改修に伴う大規模な調査が行われ、縄文時代～弥生時代の遺構・遺物が数多く検出された。その後、当遺跡では、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/1000）

会等により、多次にわたる調査が実施され、これまでの調査と同様に縄文時代・弥生時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

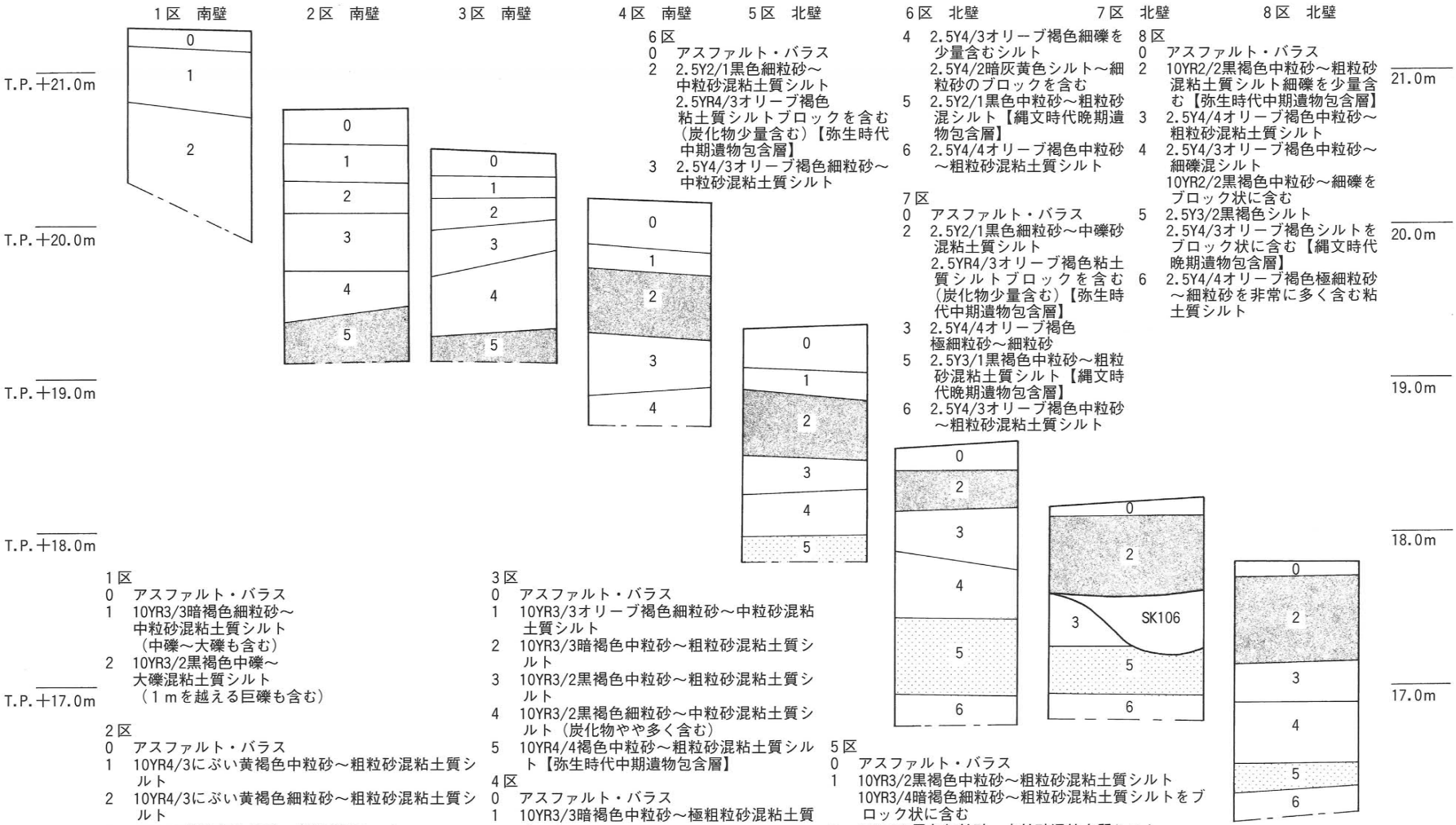
今回の調査は、公共下水道工事（13－16工区）に伴うもので、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第11次調査にあたる。調査区は、幅約1.0m、長さ約237mを測る東西方向に長大な開削部分と１辺2.5mの人孔１ヵ所で、総面積は243m²となる。調査方法としては八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地表下約0.3mを機械で掘削し、以下、1.3m前後を機械・人力を併用して調査を行った。下水道工事の掘削深度は現地表下2.5m前後であったが、調査中は簡易矢板等の打設を行えなかったため、安全を考慮して現地表下約1.6mまでの調査とした。次に調査日程であるが、当初の市教委文化財課の指示書では、現地調査の実働日数が14日間となっており、この日数では、１日で開削部分を約20m調査しなくてはならなかった。しかしながら、今回の調査地は弥生時代中期と縄文時代の遺構面が存在することが周知の地域であることと、また、当日中に埋め戻し、道路を復旧すると言う作業行程からも１日に開削部分を20mも調査することは不可能であった。このことは濃密な包含層や多数の遺構の検出によって確実となった。そして、当初の調査日程での調査終了は不可能であると再度文化財課に伝え、文化財課と協議を行った結果、８日間の実働日数が追加された。以上のことから、開削部分は１日に平均して、約12mを調査範囲とした（第２図参照）。調査区名は、１日の調査区ごとに１～22区と呼称した。その内訳は、開削部分が１～21区、人坑１ヶ所が22区である。１日の調査区を一度に掘削することができなかったため、４～５ｍごとの小地区に分け、掘削→調査→埋め戻しを繰り返して調査を進めた。調査は平成13年11月12日から開始した。全ての調査が終了したのは12月18日である。出土した遺物は、コンテナ箱に32箱を数える。

調査は開削部分の東側から開始した。調査区の最東端である１区の現地表面はT.P.＋21.3m、最西端である22区の現地表面はT.P.＋13.8m、実に高低差は7.5mを測る。

２）基本層序

基本層序は第３～５図の通りである。調査区の北側には既設の水道管等が存在したため、南壁を中心に堆積状況を観察した。断面観察も調査区の全域で行うのは時間的に不可能であったため、特徴を示す部分を0.5～1.0mの範囲で抽出し、基本層序とした。各調査区ともほぼ対応する層序となったが若干の相違が認められた。なかでも１区、２・３区、４～16区、17～22区が同じ様相を呈するグループに分かれた。それぞれのなかで対応する層は同一の番号を付けている。対応する層を確認できなかった場合は欠番とした。以下、概要を述べる。

１区では現地表下約1.0m前後で地山と思われる礫層にあたったため、以下の調査を断念した。弥生時代中期の包含層は２～22区の間で検出した。２・３区では現地表下約1.2～1.4mで（５層）、４・５区では現地表下約0.4mで弥生時代中期の包含層（２層）を確認している。６～15区まではほぼアスファルト直下の現地表下約0.1m前後で同一の層（２層）を検出している。17区以降でも現地表下約0.7～0.9mで弥生時代中期の遺物包含層（３層）を検出している。これらは遺物を多く含む濃密な包含層で、層厚は0.2～0.5m、出土した遺物のうちの約６割がこの包含層から



6区
0　アスファルト・バラス
2　2.5Y2/1黒色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
2.5YR4/3オリーブ褐色粘土質シルトブロックを含む（炭化物少量含む）【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト

4　2.5Y4/3オリーブ褐色細礫を少量含むシルト
2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細粒砂のブロックを含む
5　2.5Y2/1黒色中粒砂～粗粒砂混シルト【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y4/4オリーブ褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト

7区
0　アスファルト・バラス
2　2.5Y2/1黒色細粒砂～中礫砂混粘土質シルト
2.5YR4/3オリーブ褐色粘土質シルトブロックを含む（炭化物少量含む）【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂～細粒砂
5　2.5Y3/1黒褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト

8区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト細礫を少量含む【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/4オリーブ褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
4　2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂～細礫混シルト
10YR2/2黒褐色中粒砂～細礫をブロック状に含む
5　2.5Y3/2黒褐色シルト
2.5Y4/3オリーブ褐色シルトをブロック状に含む【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂～細粒砂を非常に多く含む粘土質シルト

1区
0　アスファルト・バラス
1　10YR3/3暗褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（中礫～大礫も含む）
2　10YR3/2黒褐色中礫～大礫混粘土質シルト（1ｍを越える巨礫も含む）

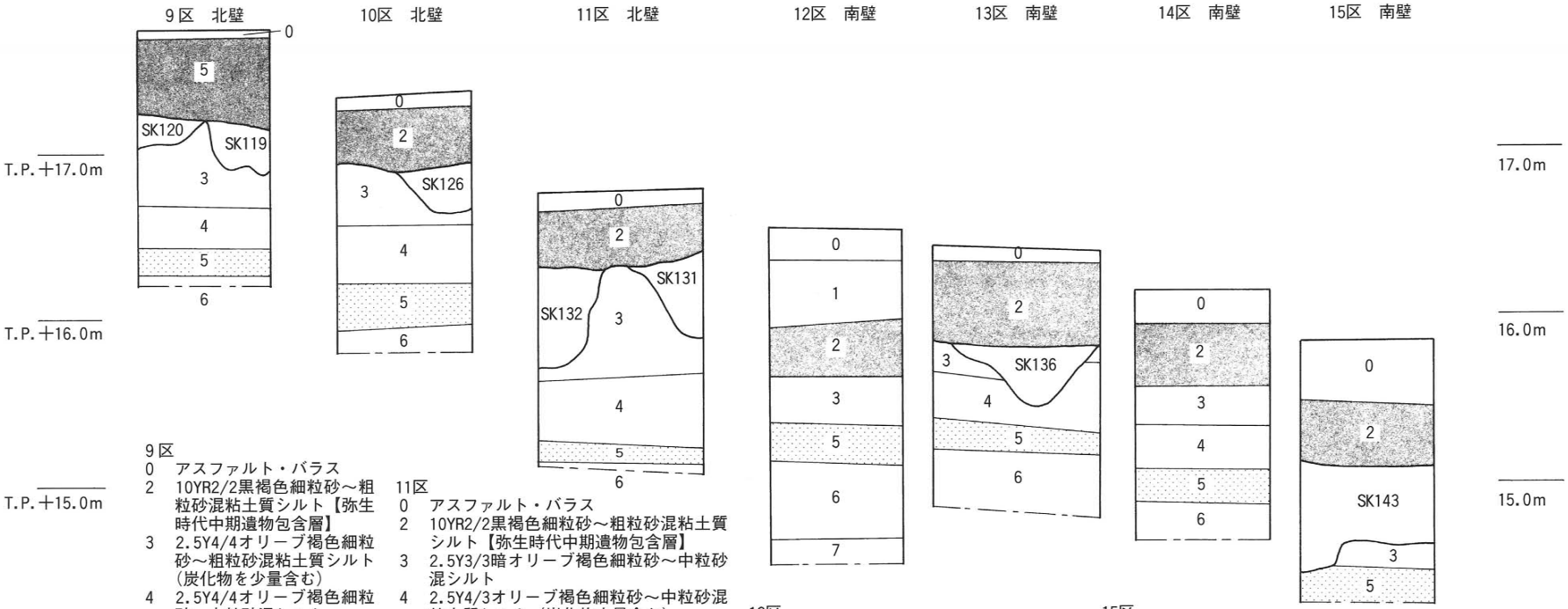
2区
0　アスファルト・バラス
1　10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
2　10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
3　10YR4/4褐色極細粒砂～中粒砂混シルト
4　10YR4/4褐色極中粒砂～細礫混粘土質シルト（炭化物を多く含む）
5　2.5Y3/3暗オリーブ褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
6　2.5Y4/3褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト

3区
0　アスファルト・バラス
1　10YR3/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
2　10YR3/3暗褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
3　10YR3/2黒褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
4　10YR3/2黒褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物やや多く含む）
5　10YR4/4褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】

4区
0　アスファルト・バラス
1　10YR3/3暗褐色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト
2　10YR4/2にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　10YR2/3黒褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
4　10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～細礫混粘土質シルト

5区
0　アスファルト・バラス
1　10YR3/2黒褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
10YR3/4暗褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトをブロック状に含む
2　10YR2/2黒色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　10YR3/3褐色中礫～大礫混粘土質シルト
4　10YR4/4褐色シルト～粗粒砂
10YR2/2黒褐色シルトブロック含む
5　10YR2/1黒色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【縄文時代晩期遺物包含層】

第３図　１～８区地層断面図（Ｓ＝1/40）



9区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト（炭化物を少量含む）
4　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混シルト
5　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～粗粒砂混シルト【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混シルト

10区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混シルト
4　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少量含む）
5　2.5Y3/2黒褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂を非常に多く含む粘土質シルト

11区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混シルト
4　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少量含む）
5　2.5Y3/2黒褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少量含む）【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト

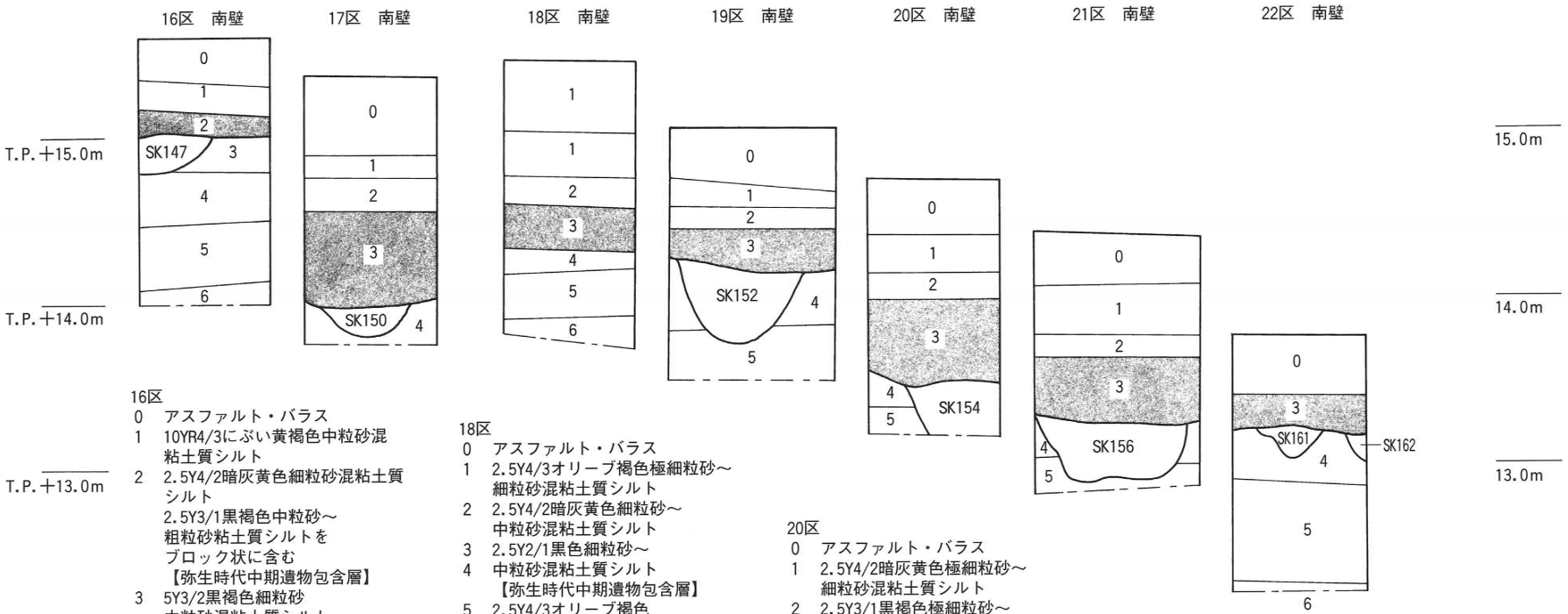
12区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
2.5Y4/1灰色シルトブロックを含む
4　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少量含む）
5　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混シルト（炭化物少量含む）【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
7　2.5Y4/2暗灰黄色シルト（炭化物少量含む）

13区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～粗粒砂混シルト
5　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少量含む）【縄文時代晩期遺物包含層】
6　2.5Y3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂

14区
0　アスファルト・バラス
2　10YR2/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y4/4オリーブ褐色粗粒砂～細礫混シルト
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂～細礫混粘土質シルト
5　2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
6　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト

15区
0　アスファルト・バラス
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト【弥生時代中期遺物包含層】
3　2.5Y3/2黒褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
5　2.5Y2/1黒色細粒砂混粘土質シルト
6　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト

第４図　９～15区地層断面図（Ｓ＝1/40）



16区
0　アスファルト・バラス
1　10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂混粘土質シルト
2　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト
2.5Y3/1黒褐色中粒砂～粗粒砂粘土質シルトをブロック状に含む
【弥生時代中期遺物包含層】
3　5Y3/2黒褐色細粒砂中粒砂混粘土質シルト
4　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
5　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混粘土質シルト
6　7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト

17区
0　アスファルト・バラス
1　2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂混粘土質シルト
2　2.5Y3/2黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
3　2.5Y3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
2.5Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルトをブロック状に含む
【弥生時代中期遺物包含層】
4　2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂混シルト

18区
0　アスファルト・バラス
1　2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
2　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
3　2.5Y2/1黒色細粒砂～
4　中粒砂混粘土質シルト
【弥生時代中期遺物包含層】
5　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中粒砂
5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂混粘土質シルト
6　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト

19区
0　アスファルト・バラス
1　2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
2　2.5Y4/1黄灰色中粒砂混シルト
2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルトブロックを含む
3　2.5Y3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
【弥生時代中期遺物包含層】
4　2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
5　5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂混粘土質シルト
2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土ブロックを含む
6　2.5Y4/3オリーブ褐色細礫混シルト

20区
0　アスファルト・バラス
1　2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
2　2.5Y3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
3　2.5Y2/1黒色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
2.5Y4/1黄灰色粘土ブロックを含む
【弥生時代中期遺物包含層】
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂～中粒砂
5　2.5Y3/2黒褐色中粒砂～極粗粒砂

21区
0　アスファルト・バラス
1　2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
2　2.5Y3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
3　2.5Y2/1黒色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
2.5Y4/1黄灰色粘土ブロックを含む
【弥生時代中期遺物包含層】
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂～中粒砂
5　7.5Y4/2灰色シルト

22区
0　アスファルト・バラス
3　2.5Y3/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
【弥生時代中期遺物包含層】
4　2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト～粗粒砂の互層
5　2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細礫の互層
6　7.5Y2/1黒色極細粒砂混シルト質粘土
（植物遺体を含む）

第５図　16～22区地層断面図（Ｓ＝1/40）

出土している。そして、この包含層の下面では、弥生時代中期の遺構を多く確認した。加えて、「天王の森」の南にあたる調査区（５～15区）では、弥生時代中期の遺物包含層から約0.5～0.7ｍ下で縄文時代晩期の遺物包含層（５層）を検出した。この包含層は、どの調査区でも濃密であった弥生時代中期の包含層とは違い、６～11区が特に濃密な状況を示し、西に行くにつれ、希薄になる。６～８区、12区、15区では包含層下面である６層上面で縄文時代晩期の遺構を検出した。弥生時代中期の遺物包含層の下面を第１面、縄文時代晩期の遺物包含層下面を第２面として調査を行った。

３）検出遺構と出土遺物

第１面

第１面では土坑を62基（ＳＫ101～162）、土器集積２ヶ所（ＳＷ101・102）、落込み２ヶ所（落込み101・102）、を検出した。しかし、今回の調査区は南北幅約1.0ｍという限られた範囲であったため、全容を明確にできた遺構はほとんどない。平面では検出できずに掘り下げてしまい、断面で観察できただけの遺構もある。また、同一の調査区でも前述した通り、小地区に分けて調査を行ったため、東肩、もしくは西肩のみの検出となった遺構も多い。平面図において点線で表現している遺構は、壁面でのみ確認できた遺構である。壁面で確認した規模等から復元したもので、遺構の形状を正確に表したものではない。また、ＳＷ101・102は土器が出土した範囲を示している。これらの遺構の詳細を表１にまとめた。遺構に関しては表１を参照にしていただきたい。ここでは図化できる遺物が出土した遺構について記述する。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ102

５区の現地表（T.P.＋19.3m）下約0.8mのT.P.＋18.5m前後で検出した遺構である。甕の破片が２点出土した。その内の１点（１）を図化した。１は平底の底部である。ほぼまっすぐに立ち上がることから甕になると思われる。底部外面には暗文状のヘラミガキを施す。

ＳＫ106

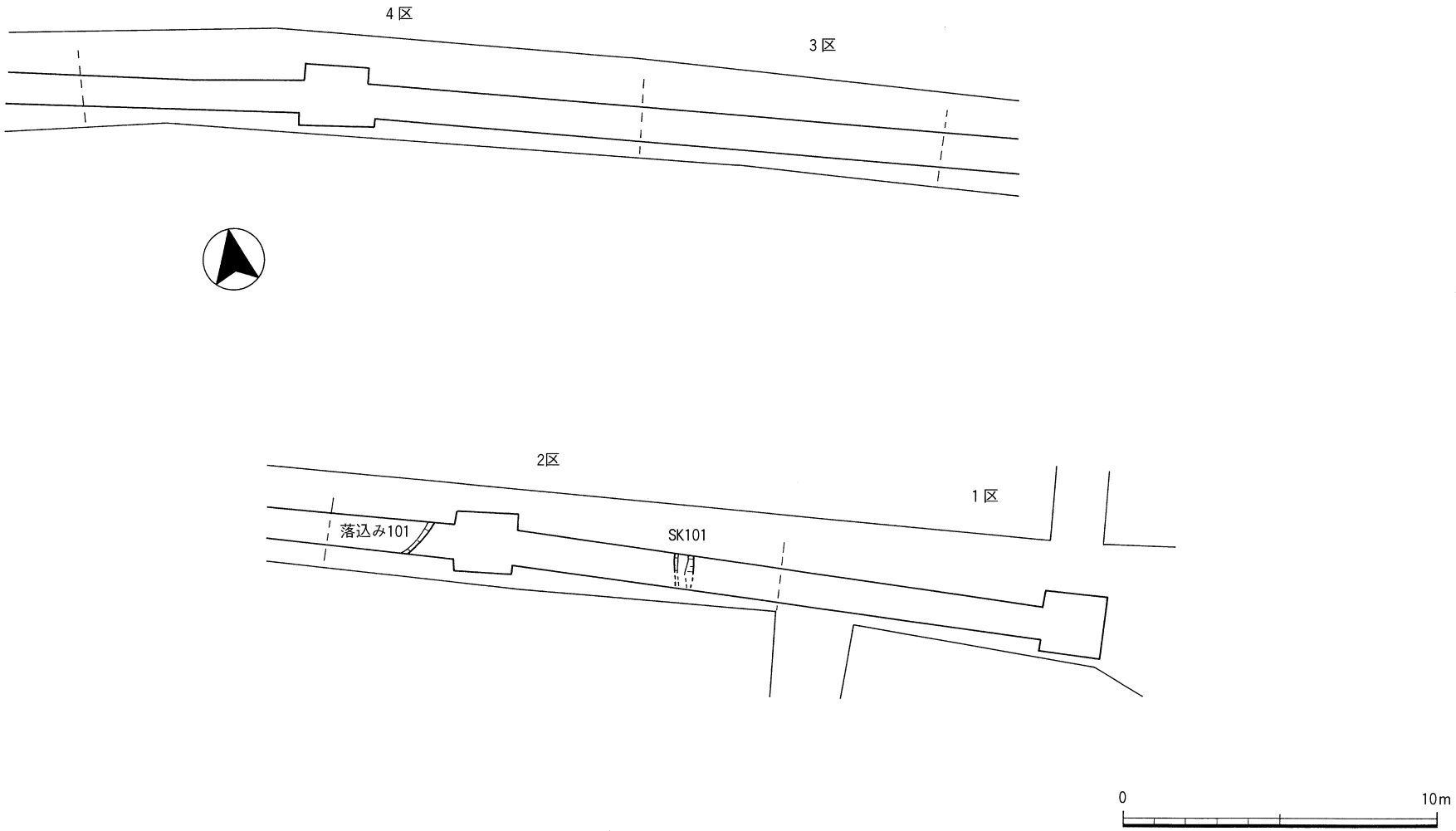
７区の現地表（T.P.＋18.2m）下約0.6mのT.P.＋17.6m前後で検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土した。その内の２点（２・３）を図化した。２は口縁端部が下方に拡張する壷の口縁部である。口縁端面には簾状文と刻み目を施す。３はやや広がり気味に立ち上がる底部である。壺、もしくは甕になると思われる。

ＳＫ107

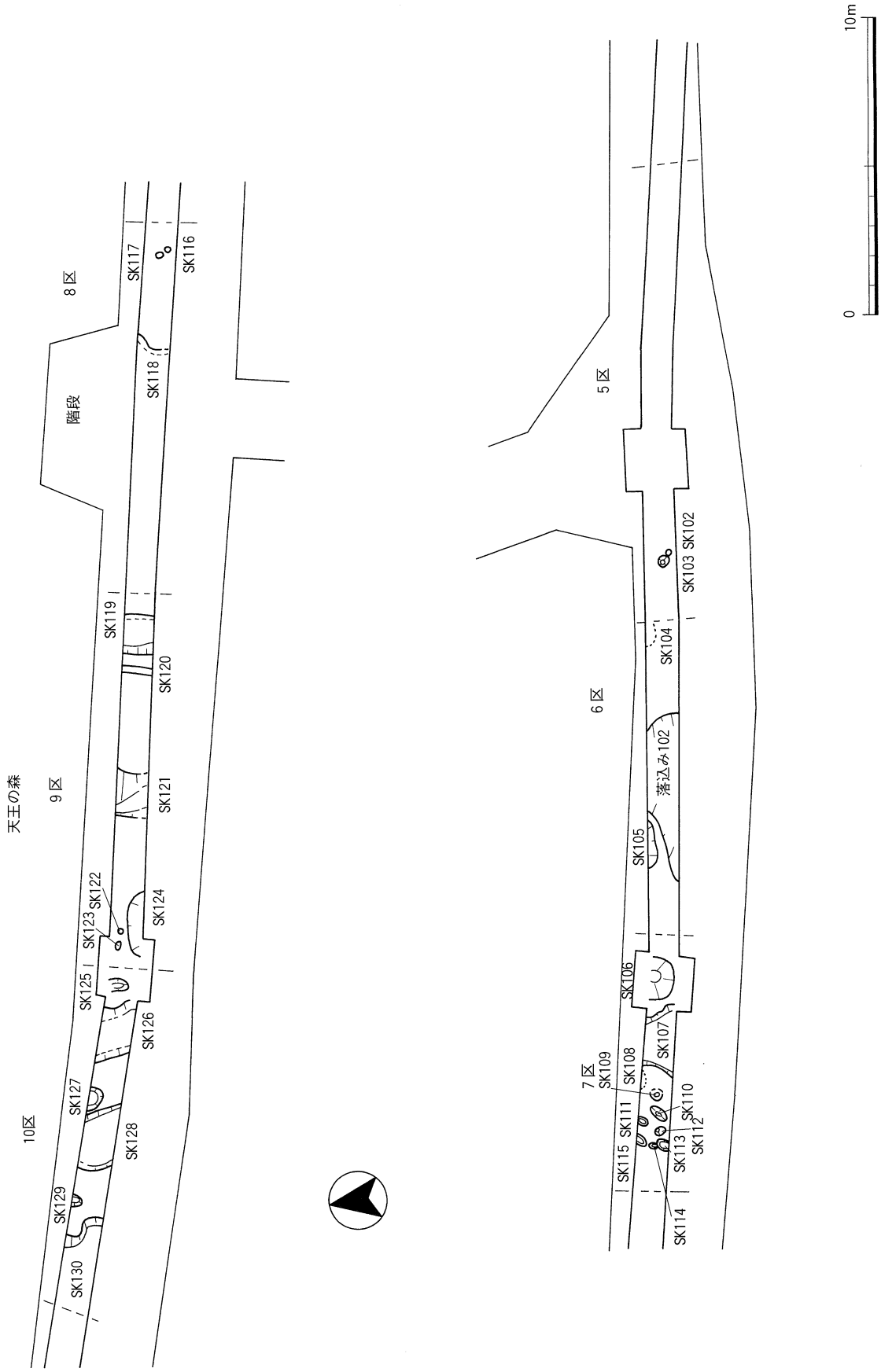
ＳＫ106と同じく７区で検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土した。その内の２点（４・５）を図化した。４は２と同じく口縁端部が下方に拡張する壷の口縁部である。口縁端面には波状文と刻み目を施す。５は大きく上外方に広がる底部である。壺になると思われる。外面には丁寧なヘラミガキを、内面にはハケナデを施す。

ＳＫ113

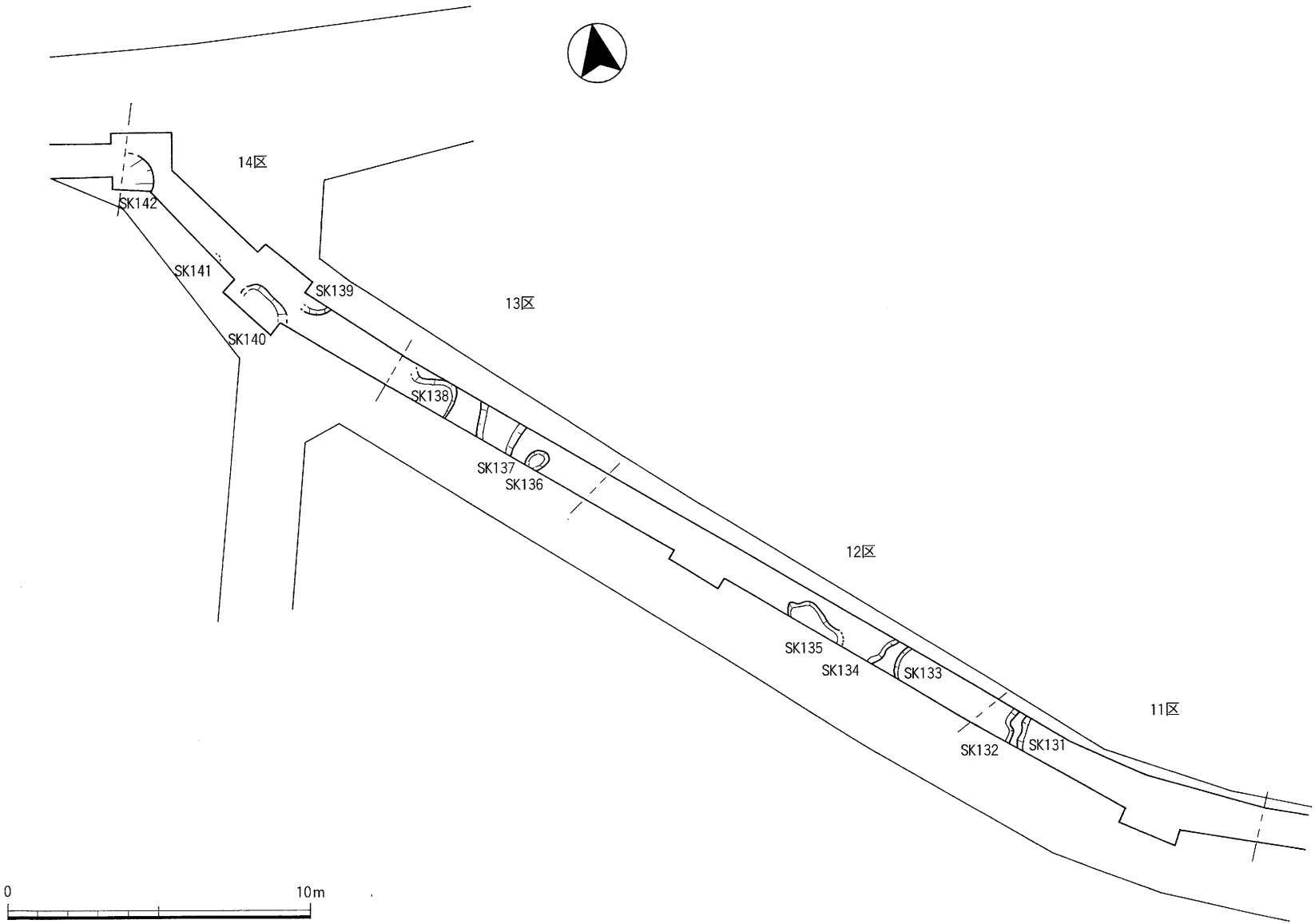
７区で検出した遺構である。壷・甕・鉢などが出土した。その内の１点（６）を図化した。６は復元口径48.0cmを測る大型の鉢である。体部の中位にゆるやかな稜を持ち、上半はほぼ直に立ち上がる。口縁端部は粘土帯貼り付けによるもので、口縁端面には幅広の簾状文を施した後、刺突文を施す。体部上半には幅広の簾状文を２条、体部下半には丁寧なヘラミガキを施している。



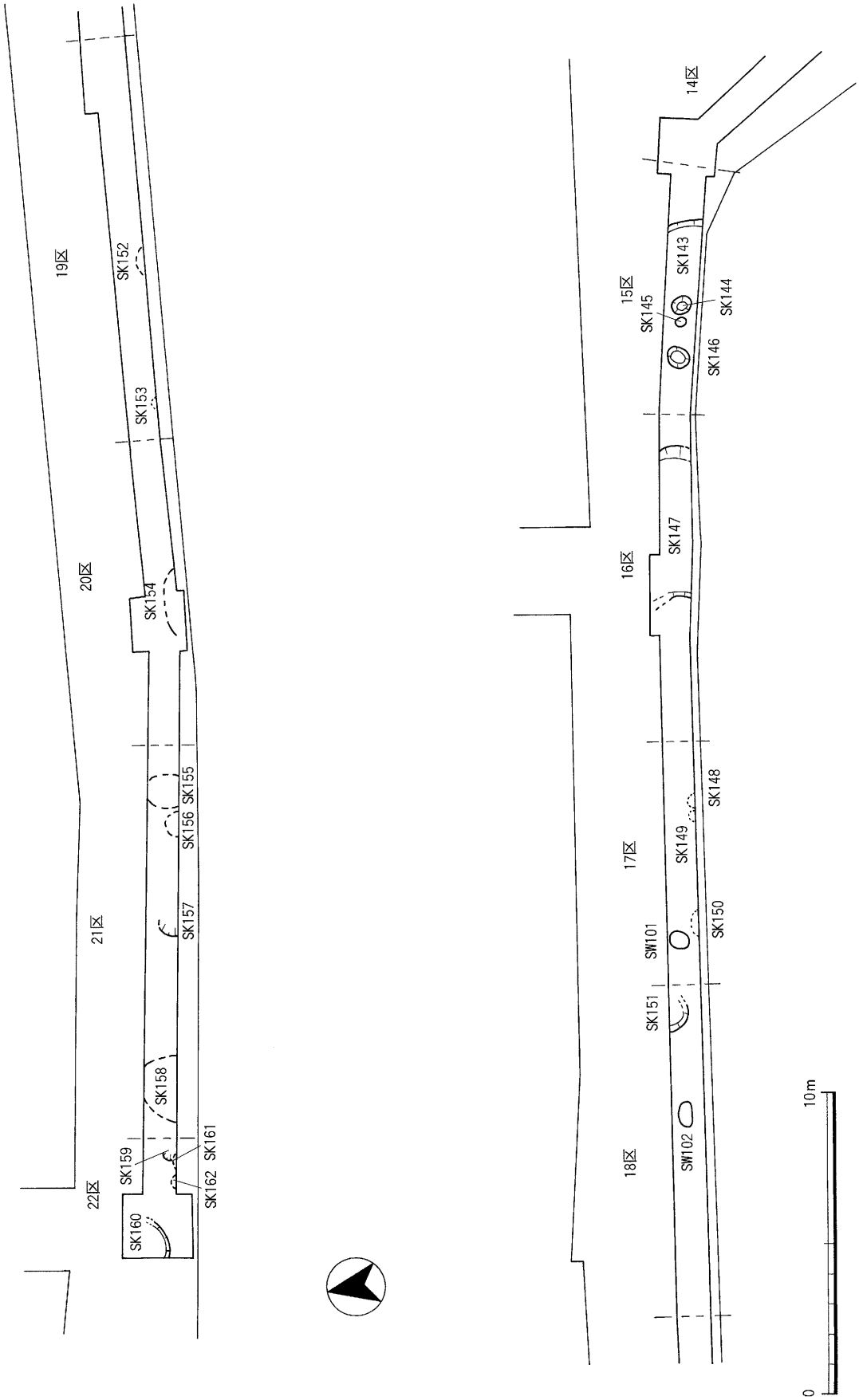
第6図　1～4区第1面検出遺構平面図（S＝1/200）



第７図　５～10区第１面検出遺構平面図（Ｓ＝1/200）



第８図　11～14区第１面検出遺構平面図（Ｓ＝1/200）



第９図　15～22区第１面検出遺構平面図（Ｓ＝1/200）

表１　ＯＪ2001－11　第１面(弥生時代中期)遺構一覧表

遺構番号	地　区	規　　模(m)	埋　　土	平面形状	断面形状	備　　考
ＳＫ101	２区	東西幅　約0.75 深さ　　約0.4	10YR4/4褐色中粒砂～中礫痕粘土質シルト(中粒砂～粗砂のブロック含む)	南・北とも調査区外に至るため不明	レンズ形	
落込み101	２区	深さ　　約0.25	2.5Y3/3暗オリーブ褐色中粒砂～粗砂混粘土質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～粗砂混粘土質シルトブロック含む)	不明	不明	東肩のみ確認
ＳＫ102	５区	径　　約0.2 深さ　　約0.1	10YR1.7/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(10YR3/3黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ103	５区	径　　約0.4 深さ　　約0.25	10YR1.7/1黒色細砂～中粒砂粘土質シルト	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ104	６区	東西幅　0.6以上 深さ　　約0.3	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y5/4黄褐色シルトブロック含む)	不明	浅い逆台形	北壁でのみ確認
ＳＫ105	６区	東西幅　約1.7 深さ　　約0.65	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5YR4/3オリーブ褐色粘土質シルトをブロック状に含む　炭化物少)	北側が調査区外に至るため不明	浅い逆台形	
落込み102	６区	東西幅　約5.7 深さ　　約0.2	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5YR4/3オリーブ褐色粘土質シルトをブロック状に含む　炭化物少)	不定形	不定形	
ＳＫ106	７区	東西幅　約1.5 深さ　　約0.4	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	北側が調査区外に至るため不明	浅い不定形	
ＳＫ107	７区	東西幅　約2.4 深さ　　約0.1	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	不定形	浅い不定形	
ＳＫ108	７区	東西幅　約0.75 深さ　　約0.25	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	不明	レンズ形	壁面で確認
ＳＫ109	７区	南北幅　約0.45 深さ　　約0.3	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	ほぼ円形	U字形	
ＳＫ110	７区	南北幅　約0.65 深さ　　約0.15	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	南北に長軸をもつ楕円形	レンズ形	
ＳＫ111	７区	東西幅　約0.3 深さ　　約0.2	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ112	７区	東西幅　約0.3 深さ　　約0.3	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	ほぼ円形	半円形	
ＳＫ113	７区	東西幅　約0.3 深さ　　約0.15	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ114	７区	径　　約0.25 深さ　　約0.1	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ115	７区	東西幅　約0.4 深さ　　約0.2	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ黒色極細砂～細砂ブロックを含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ116	８区	径　　約0.2 深さ　　約0.15	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂を多く含む粘土質シルト	ほぼ円形	半円形	
ＳＫ117	８区	南北幅　約0.25 東西幅　約0.15 深さ　　約0.15	2.5Y2/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト	南北に長軸をもつ楕円形	レンズ形	
ＳＫ118	８区	南北幅　1.0以上 深さ　　約0.3	10YR2/2黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色細砂～中粒砂混粘土質シルトブロック含む)	不明	不明	東肩のみ検出
ＳＫ119	９区	南北幅　1.0以上 深さ　　約0.3	10YR2/2黒色細砂～粗砂混粘土質シルト(細砂～中礫含む　下部に2.5Y4/4オリーブ褐色細砂～粗砂混シルトをブロック状に含む)	不明	不明	西肩のみ検出
ＳＫ120	９区	東西幅　約0.2 深さ　　約0.2	10YR2/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(細砂～中礫含む　下部に2.5Y4/4オリーブ褐色細砂～粗砂混シルトをブロック状に含む)	南北に伸びる溝状	半円形	

遺構番号	地　区	規　　模(m)	埋　　土	平面形状	断面形状	備　　考
ＳＫ121	9区	東西幅　約1.5 深さ　　約0.15	10YR2/3黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色中粒砂～粗砂混シルトをブロック状に含む)	南北にのびる溝状	不定形	
ＳＫ122	9区	径　　約0.3 深さ　　約0.1	10YR2/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(細砂～中礫含む　下部に2.5Y4/4オリーブ褐色細砂～粗砂混シルトをブロック状に含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ123	9区	東西幅　約0.3 南北幅　約0.15 深さ　　約0.15	10YR2/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(細砂～中礫含む　下部に2.5Y4/4オリーブ褐色細砂～粗砂混シルトをブロック状に含む)	東西に長軸を持つ楕円形	レンズ形	
ＳＫ124	9区	東西幅　2.2以上 深さ　　約0.4	10YR2/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(細砂～中礫含む　下部に2.5Y4/4オリーブ褐色細砂～粗砂混シルトをブロック状に含む)	南側に調査区外に至るため不明	浅い逆台形か	北肩のみ検出
ＳＫ125	10区	東西幅　約0.5 南北幅　0.7以上 深さ　　約0.3	10YR1.7/1黒色細砂～粗砂混粘土質シルト(下部に2.5Y4/3オリーブ褐色シルトをブロック状に含む)	不定形	不定形	
ＳＫ126	10区	東西幅　約1.5 深さ　　約0.3	10YR1.7/1黒色細砂～粗砂混粘土質シルト(下部に2.5Y4/3オリーブ褐色シルトをブロック状に含む)	南北に伸びる溝状	浅い逆台形	
ＳＫ127	10区	東西幅　約0.7 深さ　　約0.06	10YR2/2黒褐色細砂～粗砂	北側が調査区外に至るため不明	レンズ形	
ＳＫ128	10区	東西幅　約2.0 深さ　　約0.15	10YR2/2黒褐色細砂～粗砂	南・北とも調査区外に至るため不明	浅い逆台形	
ＳＫ129	10区	東西幅　約0.5 深さ　　約0.15	10YR1.7/1黒色細砂～粗砂混粘土質シルト(下部に2.5Y4/3オリーブ褐色シルトをブロック状に含む)	北側が調査区外に至るため不明	レンズ形	
ＳＫ130	10区	深さ　　約0.2	10YR1.7/1黒色細砂～粗砂混粘土質シルト(下部に2.5Y4/3オリーブ褐色シルトをブロック状に含む)	不明	不明	東肩のみ検出
ＳＫ131	11区	東西幅　0.5以上 深さ　　約0.2	2.5Y3/2黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y5/4黄褐色シルトを層状に含む)	不明	不明	西肩のみ検出
ＳＫ132	11区	東西幅　0.8以上 深さ　　約0.15	10YR1.7/1黒色細砂～粗砂混粘土質シルト(細礫を少量含む)	不明	不明	東肩のみ検出
ＳＫ133	12区	東西幅　1.0以上 深さ　　約0.2	10YR3/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(10YR2/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルトブロックを含む)	不明	不明	西肩のみ検出
ＳＫ134	12区	東西幅　0.7以上 深さ　　約0.25	10YR3/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルト(10YR2/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルトブロックを含む)	不明	不明	東肩のみ検出
ＳＫ135	12区	南北幅　約0.75 深さ　　約0.1	10YR1.7/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック含む　細礫～中礫もやや多く含む)	不定形	不明	西部は撹乱
ＳＫ136	13区	径　　約0.55 深さ　　約0.15	10YR1.7/1黒色細砂混粘土質シルト(10YR4/4褐色シルトブロックを含む)	ほぼ円形	レンズ形	東部は撹乱
ＳＫ137	13区	東西幅　約1.5 深さ　　約0.2	10YR1.7/1黒色細砂混粘土質シルト(10YR4/4褐色シルトブロックを含む　細礫少　炭化物少)	南・北とも調査区外に至るため不明	レンズ形	
ＳＫ138	13区	東西幅　1.2以上 深さ　　約0.15	10YR3/2黒褐色細砂混粘土質シルト(10YR4/4褐色シルトブロック含む　細礫少　炭化物含む)	南側が調査区外に至るため不明	不明	
ＳＫ139	14区	南北幅　1.1以上 深さ　　0.5以上	2.5Y2/1黒色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロック含む)	北側が調査区外に至るため不明	不明	
ＳＫ140	14区	東西幅　1.6以上 深さ　　約0.15	2.5Y2/1黒色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックを含む)	南側が調査区外に至るため不明	不明	西側は水道管により撹乱
ＳＫ141	14区	南北幅　0.2以上 深さ　　0.3以上	2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト(2.5Y2/1黒色粘土質シルトブロックを含む)	不明	レンズ形か	東側は水道管により撹乱
ＳＫ142	14区	南北幅　1.1以上 深さ　　0.4以上	10YR1.7/1黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(炭化物含む)	不明	レンズ形か	断面でのみ確認
ＳＫ143	15区	南北幅　0.9以上 深さ　　約0.3	2.5Y3/1黒褐色極細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック含む　粗砂も少量含む)	不明	不明	東肩のみ検出
ＳＫ144	15区	径　　約0.65 深さ　　約0.25	2.5Y3/1黒褐色極細砂～中粒砂粘土質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック含む　粗砂も少量含む)	ほぼ円形	レンズ形	

遺構番号	地　区	規　　模(m)	埋　　土	平面形状	断面形状	備　　考
ＳＫ145	15区	径　約0.35 深さ　約0.15	2.5Y3/1黒褐色極細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック含む　粗砂も少量含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ146	15区	径　約0.75 深さ　約0.2	2.5Y3/1黒褐色極細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック含む　粗砂も少量含む)	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ147	16区	東西幅　約5.0 深さ　約0.35	5Y3/1オリーブ黒色細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y4/2暗灰黄色細砂混粘土質シルトブロックを含む　炭化物少)	南・北とも調査区外に至るため不明	浅い逆台形	
ＳＫ148	17区	東西幅　0.3以上 深さ　0.2以上	2.5Y3/1黒色極細～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂混シルトのブロックを含む　細礫～中礫極少量　炭化物少)	不明	レンズ形か	南壁でのみ確認
ＳＫ149	17区	東西幅　0.35以上 深さ　0.15以上	2.5Y3/1黒色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂混シルトのブロックを含む　細礫～中礫極少量　炭化物少)	不明	浅い長方形か	南壁でのみ確認
ＳＫ150	17区	東西幅　約0.5 深さ　約0.3	2.5Y3/1黒色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂混シルトのブロックを含む　細礫～中礫極少量　炭化物少)	不明	レンズ形	南壁でのみ確認
ＳＷ101	17区	東西幅　約0.6	2.5Y3/1黒褐色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/1灰色5個細粒砂混粘土質シルトブロックを含む)			
ＳＫ151	18区	東西幅　0.7以上 深さ　約0.6	2.5Y3/1黒褐色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混粘土質シルトブロックを含む)	不明	Ｕ字形か	中央部は撹乱されている
ＳＷ102	18区	東西幅　約0.8 南北幅　約0.45	2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト(中礫少量含む)			
ＳＫ152	19区	東西幅　約0.75 深さ　約0.45	2.5Y2/1黒色極細砂～中粒砂混粘土質シルト(2.5Y3/2黒褐色市さ混粘土質シルトブロックを含む　得に下部には2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂～細砂混粘土質シルトブロックを含む)	不明	レンズ形	南壁でのみ確認
ＳＫ153	19区	東西幅　約0.3 深さ　約0.55	5Y2/1黒色極細砂～中粒砂混粘土質シルト(5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土ブロックを含む　下部ほど砂質)	不明	Ｕ字形	南壁でのみ確認
ＳＫ154	20区	東西幅　0.85以上 深さ　0.35以上	7.5Y3/1オリーブ黒色極細砂～中粒砂混粘土質シルト(全体的に7.5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロックを含む　下部に細礫～中礫も少量含む　やや粘性高い)	南側が調査区外に至るため不明	不明	規模は壁面で確認
ＳＫ155	21区	東西幅　約1.15 深さ　約0.3	2.5Y2/1黒色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂混粘土質シルトブロックを含む　上部に細礫を少量)	不明	浅い逆台形	南壁でのみ確認
ＳＫ156	21区	東西幅　約0.95 深さ　約0.35	2.5Y2/1黒色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂混粘土質シルトブロックを含む　上部に細礫を少量)	不明	不定形	南壁でのみ確認
ＳＫ157	21区	東西幅　0.6以上 深さ　約0.1	2.5Y2/1黒色極細砂～細砂混粘土質シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色極細混粘土質シルトブロックを含む　上部に細礫を少量)	東側は撹乱・南側は調査区外に至るため不明	不明	
ＳＫ158	21区	東西幅　1.7以上 深さ　約0.75	5Y2/1黒色極細砂～粗砂混粘土質シルト(2.5Y4/1灰色極細砂混粘土ブロックを含む　粘性に富む　細礫～中礫も少量含む)	不明	不定形	南壁でのみ確認
ＳＫ159	22区	東西幅　0.3以上 深さ　0.1以上	2.5Y2/1黒色細砂～極粗砂混粘土質シルト(上部に2.5Y3/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルトのブロックを含む)	東側は撹乱・南側は調査区外に至るため不明	不明	
ＳＫ160	22区	東西幅　1.0以上 深さ　約0.15	5Y3/2オリーブ黒色細砂～極粗砂粘土質シルト(10Y3/2オリーブ黒色細砂混粘土質シルトブロックを含む)	北側は撹乱・西側は調査区外に至るため不明	不明	
ＳＫ161	22区	東西幅　約0.4 深さ　約0.2	2.5Y2/1黒色細砂～極粗混粘土質シルト(上部に2.5Y3/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルトのブロックを含む)	不明	不定形	南壁でのみ確認
ＳＫ162	22区	東西幅　0.3以上 深さ　約0.2	2.5Y2/1黒色細砂～極粗砂混粘土質シルト(上部に2.5Y3/2黒褐色細砂～粗砂混粘土質シルトのブロックを含む)	不明	浅い逆台形	南壁でのみ確認

ＳＫ118

８区の現地表（T.P.＋17.8m）下約0.7mのT.P.＋17.1mで検出した遺構である。壷・甕・サヌカイト片等が出土した。その内の３点（７～９）を図化した。７はほぼ水平に外反する甕の口縁部である。調整は外面がハケナデ後ヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。８・９は突出し、ほぼまっすぐに立ちあがる底部である。器種はおそらく甕であろう。

ＳＫ122

９区の現地表（T.P.＋17.7m）下約0.5mのT.P.＋17.2m前後で検出した遺構である。壷・甕等が出土した。その内の１点（10）を図化した。10も８・９と同じく突出し、ほぼまっすぐに立ちあがる底部である。外面にはやや粗いヘラミガキを施す。甕になると思われる。

ＳＫ125

10区の現地表（T.P.＋17.3m）下約0.4mのT.P.＋16.9m前後で検出した遺構である。壷・甕・鉢・高杯・サヌカイト片等が出土した。その内の１点（11）を図化した。11はなだらかにひろがる高杯の裾部である。裾部端面は上下に若干肥厚する。

ＳＫ126

ＳＫ125と同じく10区で検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土した。その内の１点（12）を図化した。12は平底でやや外反気味に立ち上がる底部である。内面の屈曲部には強いユビオサエ痕が残存している。壷の底部になると思われる。

ＳＫ130

10区の最西端で検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土した。その内の３点（13～14）を図化した。13は段状口縁を持つ無頸壷である。口縁端部は貼り付けによるもので、端面には櫛描列点文を施す。体部は上段に細かい簾状文、下段にやや粗い簾状文を施す。14は若干突出してから上外方に立ち上がる底部である。器種は壷もしくは甕になると思われる。

ＳＫ131

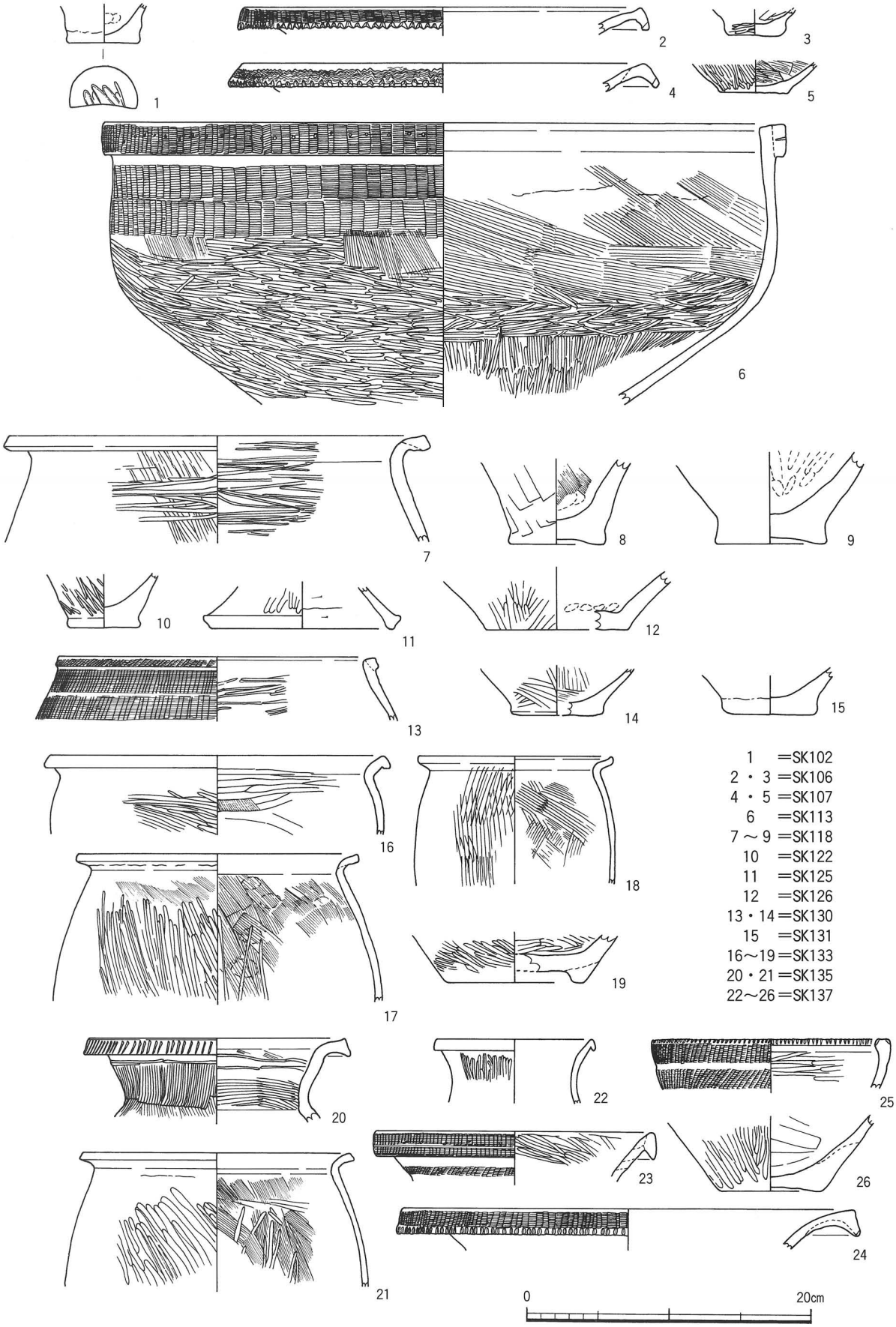
11区の現地表（T.P.＋16.8m）下約0.6mのT.P.＋16.2mで検出した遺構である。甕・鉢等が出土した内の１点（15）を図化した。15は14と同様若干突出する底部である。壷もしくは甕か。

ＳＫ133

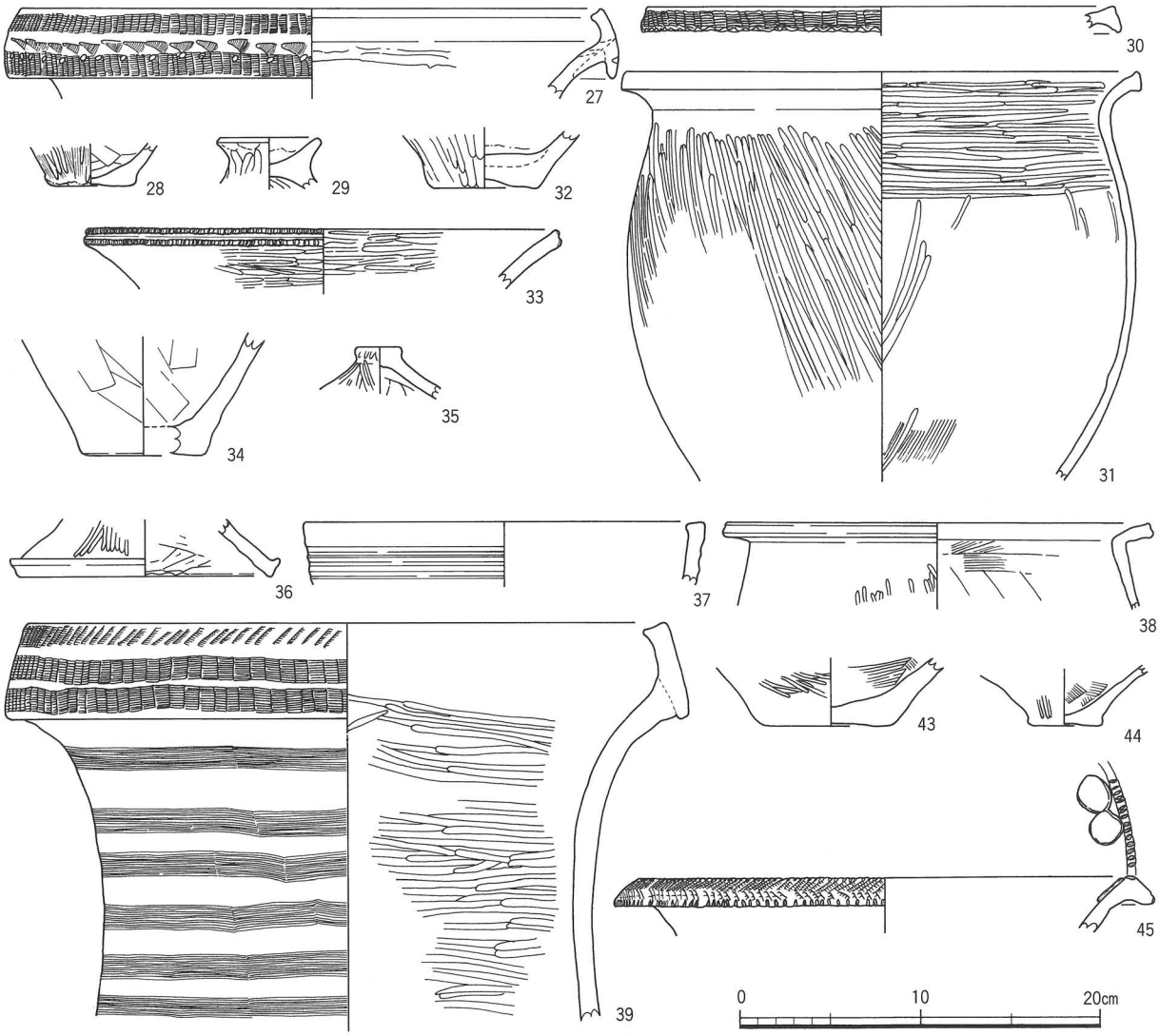
12区の現地表（T.P.＋16.5m）下約0.9mのT.P.＋15.6mで検出した遺構である。壷・甕・サヌカイト片等が出土した内の４点（16～19）を図化した。16～18は甕の口縁部～体部である。16は頸部からゆるやかに外反した後、口縁端部が下方に拡張する。17は上方に外反する口縁部で、端部には面をもつ。18の口縁部は短く外反した後、つまみあげたように上方に向かって立ちあがる。調整は外面に粗いハケナデを施す。色調も赤褐色を呈し、調整、口縁部の形態等から他地域で製作された可能性が高い。19はドーナツ底状を呈する底部である。器種は不明である。

ＳＫ135

ＳＫ133と同じく12区で検出した遺構である。壷・甕・石製品等が出土した内の４点（20・21、46・47）を図化した。20は壷である。体部と頸部の間には明瞭な稜がみられ、頸部が上外方に若干開いた後、口縁部が外反する。口縁端部は上下に少し拡張し、口縁端部外面には櫛描列点文を施す。21は短く外反する口縁部を持つ甕である。46は尖基無茎式の石鏃である。基端が一部欠損している。残存長は2.55cm、幅は1.2cm、厚さは0.3cmを測る。47は石錐である。先端部分が細ま



第10図　第１面検出遺構内出土遺物実測図（S＝1/4）



第11図　第１面検出遺構内出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）　〈27～29：ＳＫ138　30～32：ＳＫ140　33～35：ＳＫ142　36：ＳＫ143　37：ＳＫ144　38：ＳＫ147　39～42：ＳＷ101　43：ＳＷ102　44：ＳＫ152　45：ＳＫ160〉

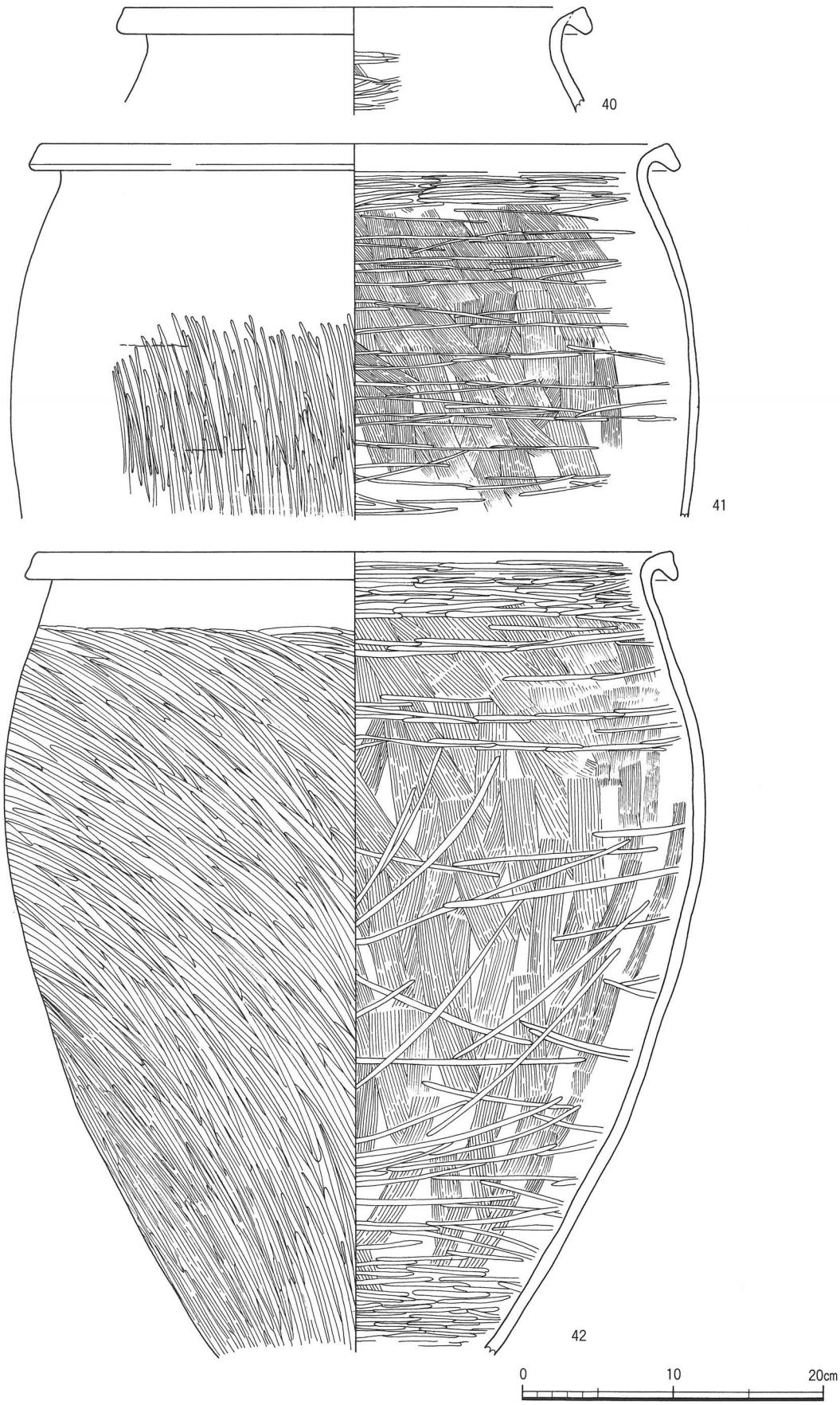
って錐部となる。長さは5.4cm、幅は1.5cm、厚さ0.7cmを測る。46・47ともサヌカイト製である。

ＳＫ137

13区の現地表（T.P.＋16.4m）下約0.6mのT.P.＋15.8mで検出した遺構である。壷・甕・鉢等が出土した。その内の５点（22～26）を図化した。22～24は壷の口縁部である。22はゆるやかに外反する頸部を持ち、口縁端部は下方に屈曲する。23は大きく上外方に開く口縁部を持ち、端部は下方に屈曲する。口縁端面には簾状文の後、刺突文を施す。24は頸部が大きく上外方にのびた後、下方に拡張する口縁部を持つ。口縁端部外面には簾状文と刻み目を施す。25は鉢の口縁部である。外面には２段の櫛描列点文が施され、口縁端部には内外面とも刻み目を施す。高杯になる可能性もある。26は底部中央が若干くぼむ底部である。壷か甕になると思われる。

ＳＫ138

ＳＫ137と同じく13区で検出した遺構である。壷・甕・鉢等が出土した。その内の３点（27～29）を図化した。27は口縁端部が上下方向に拡張する壷の口縁部である。口縁部外面には２条の簾状文が施され、間には扇形文が、加えて下段の簾状文には刺突文が施されている。28は突出し



第12図　第１面検出遺構内出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）〈ＳＷ101出土〉

て広がる底部である。壷もしくは甕の底である。29は天井部が大きくくぼむ蓋である。内面には煤が付着しており、甕の蓋になると思われる。外面には縦方向のヘラミガキが施される。

ＳＫ140

14区の現地表（T.P.＋16.2m）下約0.6mのT.P.＋15.6mで検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土した。その内の３点（30～32）を図化した。30は口縁端部が下方に拡張する壷の口縁部である。端面には簾状文と刻み目を施す。31は体部中位に最大径をもつ甕である。口縁部は上外方に伸び、端部は極短く上・下方に拡張する。32は外面中央が若干くぼみ、上外方にやや開き気味の底部である。器種は壷であろうか。

ＳＫ142

14区の最西端で検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土している。その内の３点（33～35）を図化した。33は大きく開く壷の口縁部である。口縁端面の中央に１条の沈線を引き、さらに上端と下端にそれぞれ刻み目を施す。他の遺物よりも古い様相を持つ。34は平底で外方に向かってほぼまっすぐに立ち上がる底部である。壺もしくは甕になると思われる。35は平らな天井部を持つ蓋である。内面に煤の付着は見られない。

ＳＫ143

15区の現地表（T.P.＋15.8m）下約0.7mのT.P.＋15.1m前後で検出した遺構である。壷・甕・鉢・高杯・サヌカイト片等が出土した。その内の１点（36）を図化した。36は高杯の裾部である。裾部端面は上方に拡張する。外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはヘラケズリを施す。

ＳＫ144

15区の中央付近で検出した遺構である。壷・甕・鉢・サヌカイト片等が出土した。その内の１点（37）を図化した。37は凹線文を持つ口縁部である。端部は内傾する平坦な面をもつ。壺、もしくは鉢の口縁部になると思われる。

ＳＫ146

14区の西部で検出した遺構である。壷・甕・サヌカイト片等が出土した。その内、図化できたのは石鏃１点（48）のみである。48は凸基有茎式の石鏃である。茎の部分が一部欠けている。残存長は3.25cm、幅2.05cm、厚さ0.45cmを測る。石材はサヌカイトである。

ＳＫ147

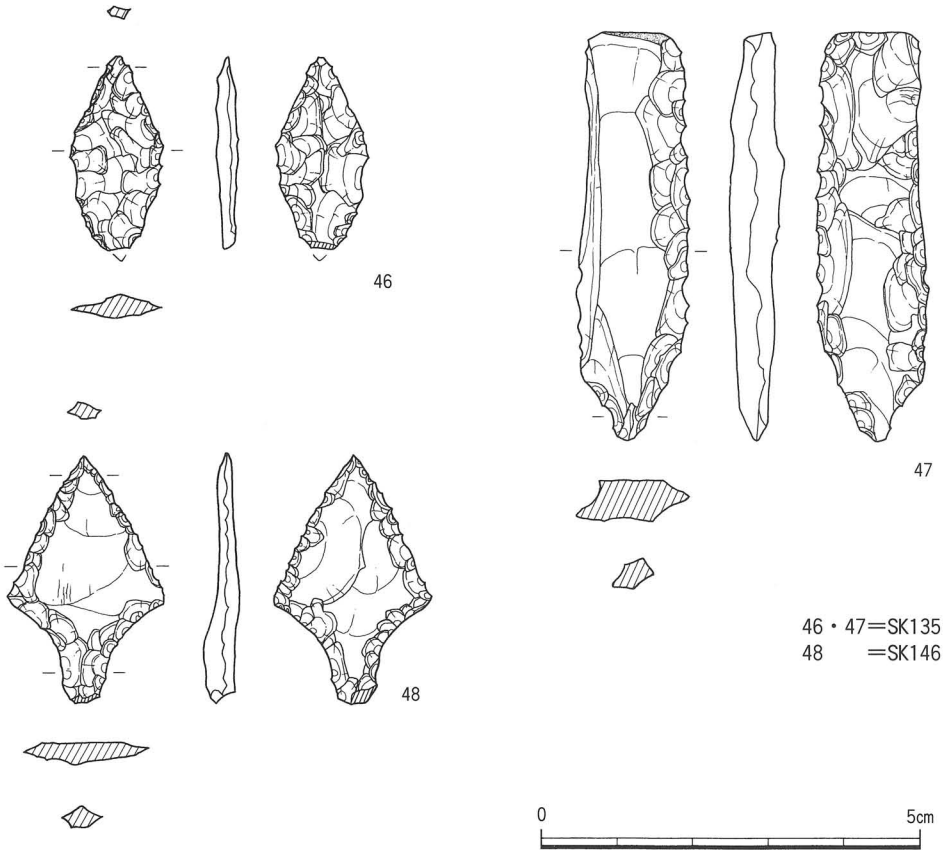
16区の現地表（T.P.＋15.6m）下約0.6mのT.P.＋15.0m前後で検出した遺構である。壷・甕・鉢・高杯・サヌカイト片等が出土した。その内の１点（38）を図化した。38はほぼ水平方向に屈曲する口縁部を持つ甕である。口縁端面は外傾する。体部外面には縦方向のヘラミガキを、内面にはハケナデを施す。

ＳＫ152

19区の現地表（T.P.＋15.0m）下約0.8mのT.P.＋14.2m前後で検出した遺構である。底部とサヌカイト片が２点のみ出土した。その内、底部１点（44）を図化した。44は突出し、外方に向かって開く底部である。壺、もしくは甕になると思われる。

ＳＫ160

22区の現地表（T.P.＋13.8m）下約0.6mのT.P.＋13.2m前後で検出した遺構である。壷・甕・サヌカイト片等が出土した。その内の１点（45）を図化した。45は口縁端部が下方に拡張す



第13図　第１面検出遺構内出土石製品実測図（Ｓ＝1/1）

る壷の口縁部である。口縁端面には方向の違う２段の櫛描列点文が、上下端には刻み目が施されている。内面には径約2.0cmを測る円形浮文が２個残存していた。

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ101

17区で検出した遺構である。現地表下約1.3m（T.P.＋14.0m）で検出した。掘形を検出できなかったため、土器集積とした。出土遺物がどのような状況で埋まっていたのかは確認できなかった。しかし、南壁断面のT.P.＋14.3m付近で同一個体になる甕の一部を検出することができた。このことからT.P.＋14.0～14.3mの間に土器が数個体分埋まっていたことが判明した。したがって厳密には包含層（３層）内出土遺物となる。出土した遺物のなかで４点（39～42）を図化した。39は広口壷である。口縁部は受け口状に上方に拡張する。口縁部の外面には櫛描列点文を１条と２条の簾状文を施し、頸部には櫛描直線文を施す。全体的にやや丁寧さが欠けた調整である。40～42は甕である。３点とも口縁部が下方に屈曲するタイプの甕である。40は他よりも小型であるが、42は口径41.8cm、残存高53.2cmを測る大型品である。底部は出土していない。41は体部の上半分しか出土しなかったが、口径と体部の張り具合から42とほぼ同じ法量をもつと思われる。調整については、41は体部最大径の部分まで縦方向のヘラミガキが行われており、42は肩部まで斜め方向のヘラミガキを施している。内面はハケナデの後横方向のヘラミガキを行う。41・42とも頸部付近は特に密にヘラミガキを施す。

ＳＷ102

18区で検出した。現地表下約1.3m（T.P.＋14.1m）で底部を上にした状態の甕を検出した。ＳＷ101と同様、掘形は検出できなかった。同じく、包含層（３層）内出土遺物である。図化できたのは（43）のみである。43は平底で外上方に立ち上がる甕の底部である。外面は斜め方向のヘラミガキ、内面はハケナデを施す。おそらく同一個体となる甕の体部の破片も多く出土したが、復元することができなかった。

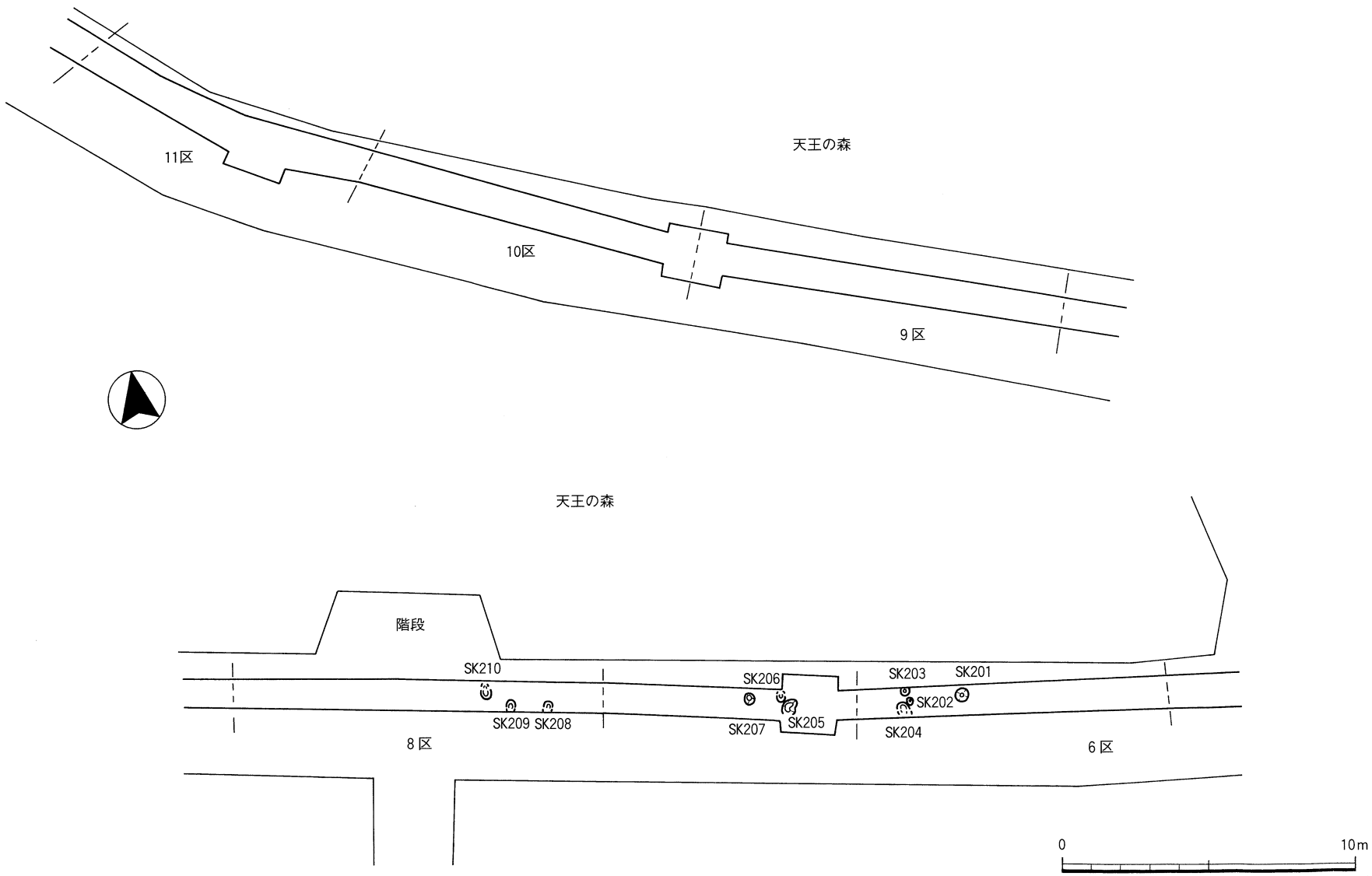
以上、第１面検出遺構の中で比較的残存が良好な遺物について記述した。出土した土器の胎土を見ると、ほとんどが角閃石と雲母を多く含み、黒褐色を呈するいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ。角閃石がみられなかったのは７・11・18・20・26・29・32・36でこれらのなかでも色調が褐色を呈するもの（７・18・20・29）、とにぶい黄橙色を呈するもの（11・26・32・36）に分けることができた。低地産の土器も存在するようである。しかし、図化できなかった遺物も含めて、明らかに恩智遺跡内で製作されたと見られる土器が大半を占める。

第２面

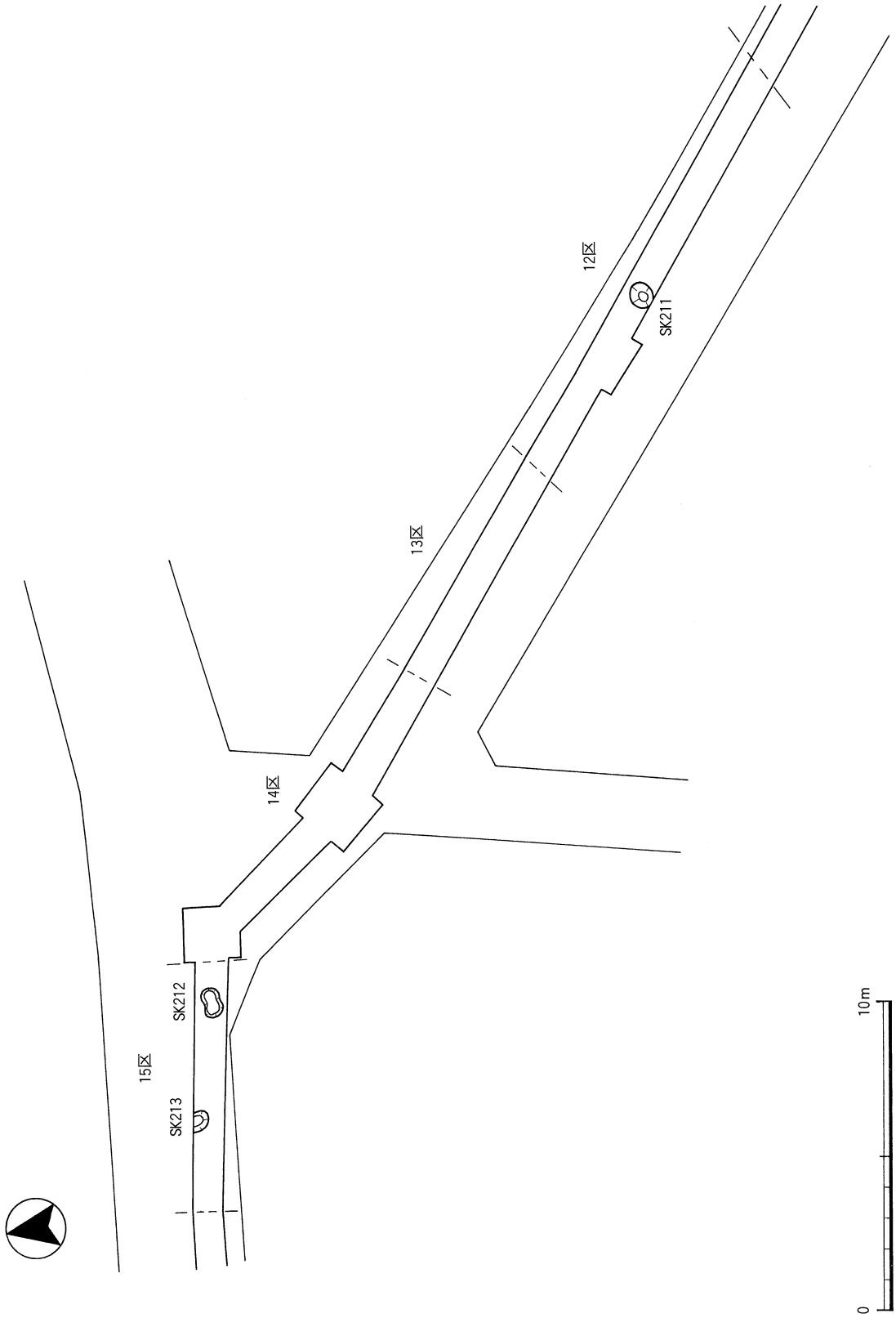
第２面では土坑を13基（ＳＫ201～213）検出した。これらも第１面検出遺構と同様、詳細は表２にまとめた。第２面検出遺構は第１面とは違い、平面的にも規模等を明らかにできた遺構が多い。そのうち、遺物が出土したのはＳＫ201・203～206・208・210・212である。そのなかでも図化できる遺物が出土した遺構について報告する。

表２　ＯＪ2001－11　第２面（縄文時代）遺構一覧表

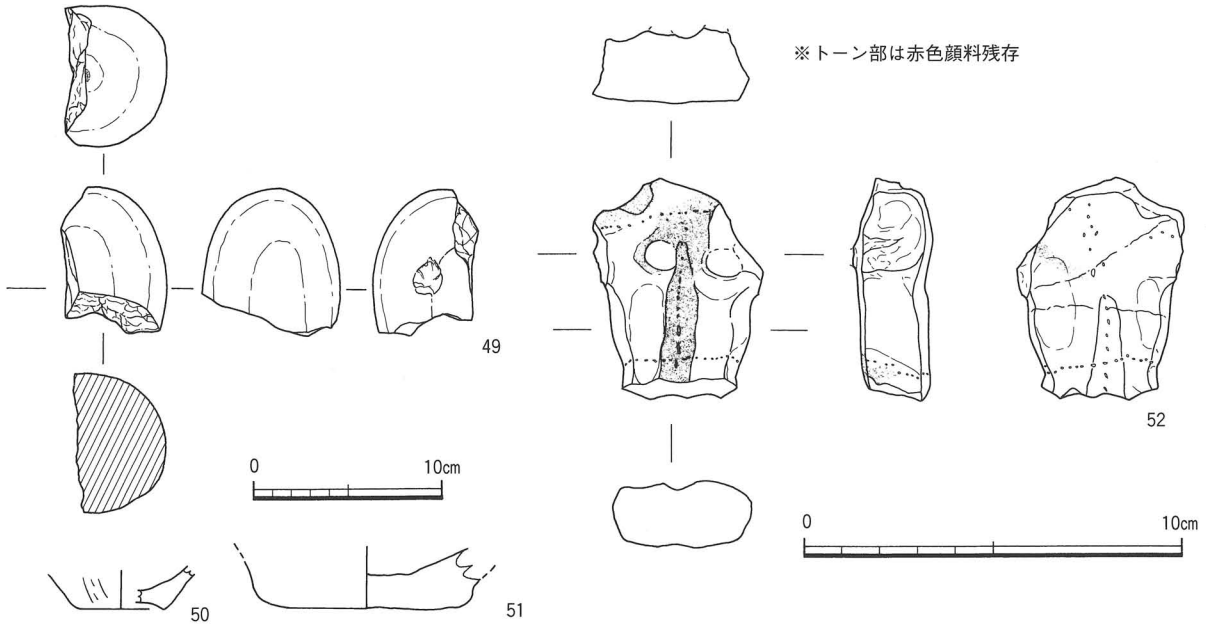
遺構番号	地　区	規　模（m）	埋　土	平面形状	断面形状	備　考
ＳＫ201	６区	径　約0.45 深さ　約0.15	2.5Y3/2黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト（10YR4/4褐色シルトブロック含む　炭化物少）	ほぼ円形	レンズ形	遺物出土
ＳＫ202	６区	径　約0.25 深さ　約0.06	2.5Y3/2黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少）	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ203	６区	東西幅　約0.3 深さ　約0.07	2.5Y3/2黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト（炭化物少）	ほぼ円形	レンズ形	遺物出土
ＳＫ204	６区	東西幅　約0.5 深さ　約0.25	2.5Y3/2黒褐色細砂～中粒砂混粘土質シルト（2.5Y2/1黒色細砂混粘土質シルトをブロック状に含む）	不定形	レンズ形	遺物出土
ＳＫ205	７区	東西幅　約0.5 深さ　約0.1	2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂混粘土質シルト（2.5Y4/3オリーブ褐色細砂混粘土質シルト　炭化物少）	不定形	レンズ形	遺物出土
ＳＫ206	７区	東西幅　約0.3 深さ　約0.25	2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂混粘土質シルト（2.5Y4/3オリーブ褐色細砂混粘土質シルト　炭化物少）	北側が調査区外に至るため不明	レンズ形	遺物出土
ＳＫ207	７区	東西幅　約0.35 深さ　約0.05	2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂～中粒砂	南北方向に長軸を持つ楕円形か	レンズ形	
ＳＫ208	８区	東西幅　約0.3 深さ　約0.05	2.5Y3/3暗いオリーブ褐色細礫混粘土質シルト（炭化物少）	南側が調査区外に至るため不明	レンズ形	遺物出土
ＳＫ209	８区	東西幅　約0.3 深さ　約0.1	2.5Y3/3暗いオリーブ褐色細礫混粘土質シルト（炭化物少）	南側が調査区外に至るため不明	レンズ形	
ＳＫ210	８区	東西幅　約0.3 深さ　約0.1	2.5Y3/3暗いオリーブ褐色細礫混粘土質シルト（炭化物少）	北側が調査区外に至るため不明	レンズ形	遺物出土
ＳＫ211	12区	径　約0.3 深さ　約0.1	2.5Y3/2黒褐色細砂～中粒砂多く含む粘土質シルト	ほぼ円形	レンズ形	
ＳＫ212	15区	東西幅　約0.95 南北幅　約0.55 深さ　約0.15	2.5Y3/2黒褐色極細砂～細砂混粘土質シルト（細礫～中礫含む　炭化物少）	不定形	レンズ形	遺物出土
ＳＫ213	15区	東西幅　約0.65 深さ　約0.1	2.5Y3/2黒褐色極細砂～細砂混粘土質シルト（細礫～中礫含む　炭化物少）	北側が調査区外に至るため不明	レンズ形	



第14図　6～11区第2面検出遺構平面図（S＝1/200）



第15図　12～15区第２面検出遺構平面図（Ｓ＝1/200）



第16図　第２面検出遺構内出土遺物（Ｓ＝1/4）・５層内出土遺物実測図（Ｓ＝1/2）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ201

６区の現地表（T.P.＋18.5m）下約1.6mのT.P.＋16.9m前後で検出した遺構である。遺物は、縄文土器の破片と石製品が出土したが、その内の１点（49）図化した。49は叩き石である。全体の約2/3が残存している。表面は全体的に光沢をもち、２ヶ所に潰痕をもつ。磨石であった可能性もある。石質は砂岩である。

ＳＫ205

７区の現地表（T.P.＋18.2m）下約1.3mのT.P.＋16.9m前後で検出した遺構である。縄文土器の破片が極少量出土した。その内の１点（50）を図化した。50は凹底の底部である。底径は4.5cmを測る。外面はケズリを施す。器形は深鉢と思われる。角閃石を含み、色調は黒褐色を呈する生駒西麓産の土器である。

ＳＫ212

15区の現地表（T.P.＋16.0m前後）下約1.4mのT.P.＋14.6mで検出した遺構である。底部を１点（51）図化した。51は底径10.4cmを測る平底の底部である。内外面ともナデ調整を施す。器形は深鉢であろう。50と同様、角閃石を含み、色調は黒褐色を呈する在地の土器である。

特筆すべき遺物について

弥生時代中期、縄文時代晩期の包含層出土遺物については、現在整理途中である。しかし、今回の調査では、縄文時代包含層（５層）内から土偶が１点出土したため、これを先に報告する。

52は土偶である。10区の５層内から出土した。掘削した残土のなかから出土したため、出土状況は不明である。最大長5.8cm、最大幅4.5cm、最大厚2.0cmを測る。体部上半のみの出土であるが、乳房の痕跡が見られ、腰のくびれも表現していることから女性体とみられる。前面は胸元から腰にかけて、背面は背中の中央から腰にかけてくぼみを持ち、そしてそのくぼみの中央（体の

中央線）と腰周り、鎖骨のラインを刺突文（串状のもので施した穴）で表現している。体の中央線と腰周りのラインが交わったところが臍になるのだろうか。背面には粘土紐接合痕がみられる。前面・背面とも赤色顔料が部分的に薄く残存している。左腕と下半身、左乳房は古くに割れたようであるが、首、右腕、右乳房は割れ口が新しく、出土段階で欠損した可能性がある。しかし、同じ５層内出土遺物からはその他の部位を確認できなかった。胎土には角閃石・雲母が多く含まれており、色調も暗褐色を呈する。当遺跡内の土で作成されたものである。

３．まとめ

今回は、恩智遺跡内でも縄文時代～弥生時代中期にかけての濃密な遺物包含層が存在することが周知である「天王の森」周辺の調査を行った。南北幅が１ｍ弱という矮小な調査区であったが、周辺調査の成果と同様、弥生時代中期と縄文時代晩期の遺物包含層および各時期の遺構面を検出することができた。弥生時代中期の遺構は断面で確認したものも含めると土坑62基、落込み２ヶ所、土器集積２ヶ所を検出した。また、縄文時代晩期の遺構も土坑を13基検出することができた。特に縄文時代については、現在までの調査では遺物包含層が検出されていても、遺構を検出できた例は少ない。今回の調査によって、「天王の森」周辺には縄文時代晩期の遺構面が存在することを明らかにできた。

最後に、出土遺物についてであるが、弥生時代中期・縄文時代晩期の包含層出土遺物について充分に整理を行えていないため、遺構内出土遺物のみの報告となってしまった。現在観察できている限りでは、弥生時代中期の包含層からはⅢ様式～Ⅳ様式を中心とした遺物が（Ⅱ様式も若干含む）、縄文時代晩期の包含層からは、滋賀里Ⅲｂ式～Ⅳ式を中心として長原式までの遺物が出土している。出土した遺物には土器のみでなく、石鏃・叩き石・石斧等の石製品や土製品なども含まれている。特に10区の５層内からは八尾市内での出土例としては、山賀遺跡（1984）、田井中遺跡（1994）についで３例目となる土偶（52）が出土している。10区の５層は他の調査区に比べても濃密な遺物包含層であり、他に滋賀里Ⅲｂ式～Ⅳ式を中心とした深鉢、浅鉢といった土器の他、凹基無茎式石鏃等の石製品も出土している。これらは恩智遺跡の性格を考える上で非常に重要な資料となる。これらの出土遺物について充分な検討を行わないままに調査成果を述べることはできない。今後、遺物の整理がつき次第、改めて報告を行いたい。

参考文献

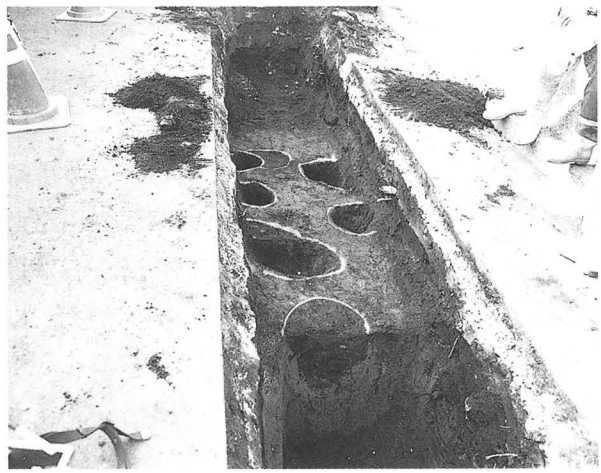
・石神幸子他　1979『池上遺跡（石器編）』（財）大阪文化財センター
・田代克己他　1980『恩智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会
・家根祥多　1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』（株）雄山閣
・松尾信裕　1983「第Ⅳ章　考察　第１節　縄文時代から弥生時代の遺構と遺物の検討　第ｉ項　長原式土器深鉢Ａ類にみる器形の変化」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』（財）大阪市文化財協会
・西口陽一他　1984『山賀（その３）』（財）大阪文化財センター
・嶋村友子　1987『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』八尾市教育委員会
・寺沢　薫・森岡秀人編　1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
・藤城　泰・三輪若葉・若松博恵　1999「東大阪市内出土の土偶・土製品」『光陰如矢-荻田昭次先生古希記念論集-』「光陰如矢」刊行会
・亀島重則　1994『田井中遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会
・秋山浩三　2002「弥生開始期における土偶の意味-近畿縄文「終末期」土偶を中心素材として-」『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター

図版一

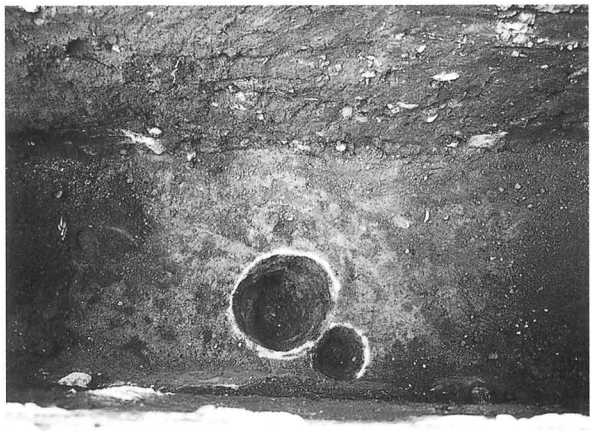
2区　ＳＫ101検出状況(南東から)

6区　第２面遺構検出状況(東から)

5区　ＳＫ102半割状況(南東から)



7区　第１面遺構検出状況(東から)

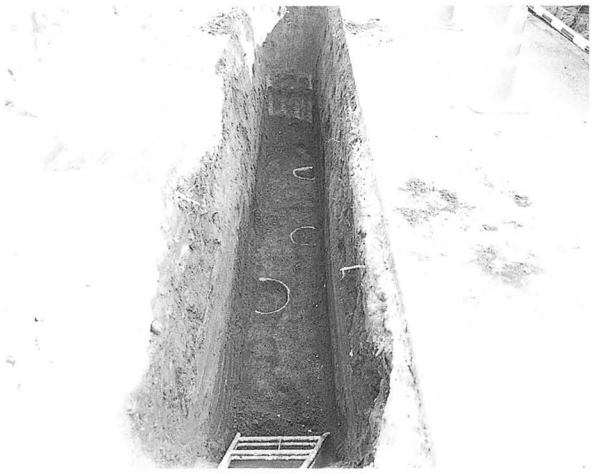


5区　第１面(ＳＫ102・103)(南から)

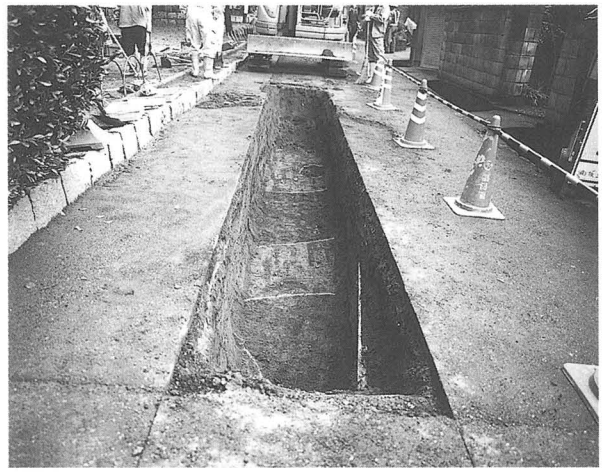
7区　第２面遺構検出状況(南から)

8区　第１面遺構検出状況（西から）

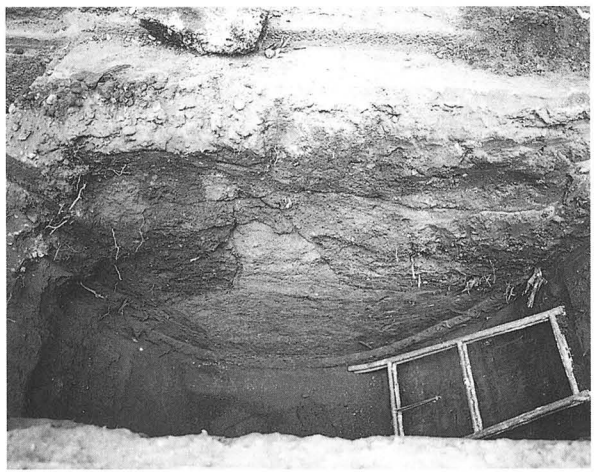
12区　第２面（ＳＫ211）検出状況（東から）



8区　第２面遺構検出状況（西から）



13区　第１面遺構検出状況（西から）

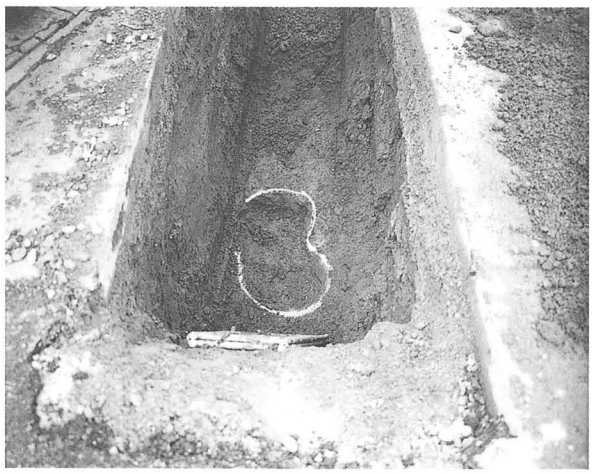


11区　北壁（ＳＫ132・131断面）

13区　南壁（ＳＫ136・137・138断面）

15区　第１面遺構検出状況（西から）

19区　南壁（ＳＫ153断面）



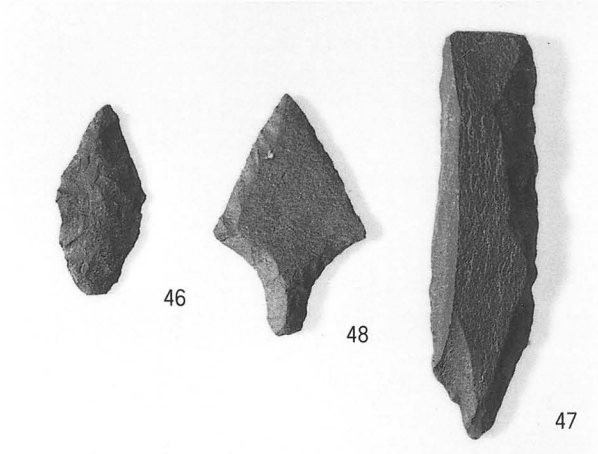
15区　第２面遺構検出状況（西から）

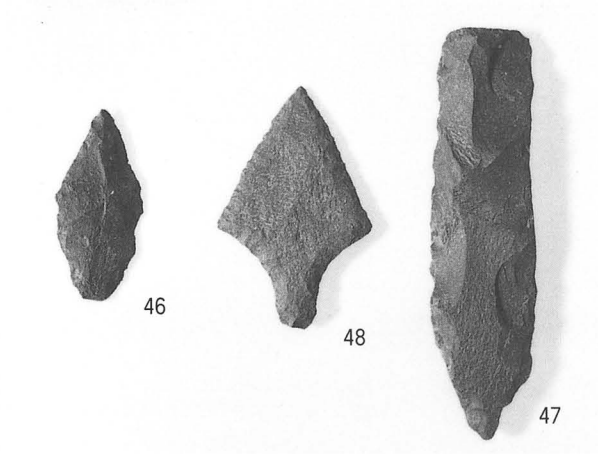
21区　南壁（ＳＫ158断面）

17区　ＳＷ101北壁での検出状況

調査終了　22区から西を望む

42＝ＳＷ01出土
46・47＝ＳＫ135出土
48＝ＳＫ146出土
52＝10区５層内出土





Ⅶ　恩智遺跡第12次調査（ＯＪ2001－12）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智北町１丁目地内で実施した公共下水道工事（平成13年度小阪合排水区第15工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する恩智遺跡第12次（ＯＪ2001－12）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第341号　平成13年12月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1・現地調査は平成14年２月14日～２月26日（実働７日）にかけて、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約47.04㎡である。

1．　地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た(敬称略、五十音順)。

　飯塚直世・岩本順子・沢村妙子・鈴木裕治・北潟良江・實樹婦美子

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成14年３月29日に完了した。

1．　本書に関わる業務は、以下の通りである。

【遺物実測】　荒川和哉・市森千恵子

【トレース】　荒川・市森・國津れいこ

【執筆・編集】樋口

本　文　目　次

1．はじめに……71

2．調査概要……71

　1）調査の方法と経過……71

　2）基本層序……71

　3）検出遺構と出土遺物……73

3．まとめ……74

Ⅶ　恩智遺跡第12次調査（ＯＪ2001－12）

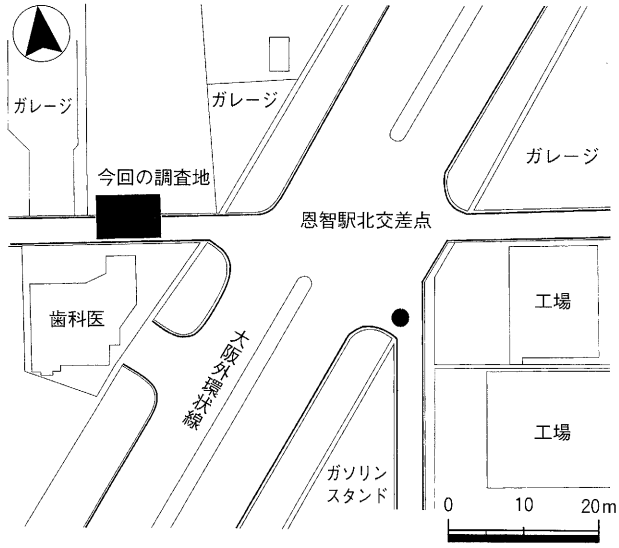
１．はじめに

本書の「Ⅵ　恩智遺跡第11次調査（ＯＪ2001－11）」を参照されたい。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市恩智北町１丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した第12次調査（ＯＪ2001－12）にあたる。調査区は１箇所である。調査区の平面形状は東西約8.4ｍ・南北約5.6ｍの長方形で、面積は約47.04㎡を測る。調査では、現地表（T.P.＋11.452ｍ）下8.0ｍ前後までを機械と人力を併用して掘削し、遺構の検出に努めた。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/1000）

２）基本層序

現地表下4.7ｍ前後までの第１～12層は、旧大和川水系がもたらしたと推測される砂礫層で、弥生時代中期～古墳時代の遺物を包含する。以下現地表下6.0ｍ前後までの1.3ｍは、第13～18層などの粘性に富む地層がほぼ水平に堆積し、一時期閉塞した湿地帯のような環境下にあったようだ。これより下層では再びラミナ構造が顕著に残る第19～24層のような砂礫が堆積していた。この内、第19層内には、保存状態の良好な自然木が包含されていた。自然木は長さ3.5ｍ以上、径は約0.4ｍを測る。風倒木と推測される。

第１層　5Y5/1灰色極粗粒砂～2.5Y5/6黄褐色粗粒砂～細礫。水平ラミナが発達している。

第２層　2.5Y5/1黄灰色シルト～中粒砂～5Y5/1灰色粗粒砂～極粗粒砂。水平ラミナが発達。

第３層　2.5Y6/4にぶい黄色中礫混極粗粒砂～細礫。酸化Feがラミナ状に入る。水平ラミナあり。

第４層　2.5Y7/3浅黄色中粒砂～粗粒砂や2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細粒砂。南から北へ落ちる斜行ラミナ構造を有する。粒度組成は南が粗く北に向かうにつれて細粒化する傾向にある。5Y5/1灰色粘土のブロック（2～3㎝大）や炭化物もラミナ状に入る地層である。

第５層　5Y5/1灰色粘土～シルト質粘土。湿地性の堆積物である。一時期淀んだのであろう。

第６層　10YR5/3にぶい黄褐色極粗粒砂～中礫。

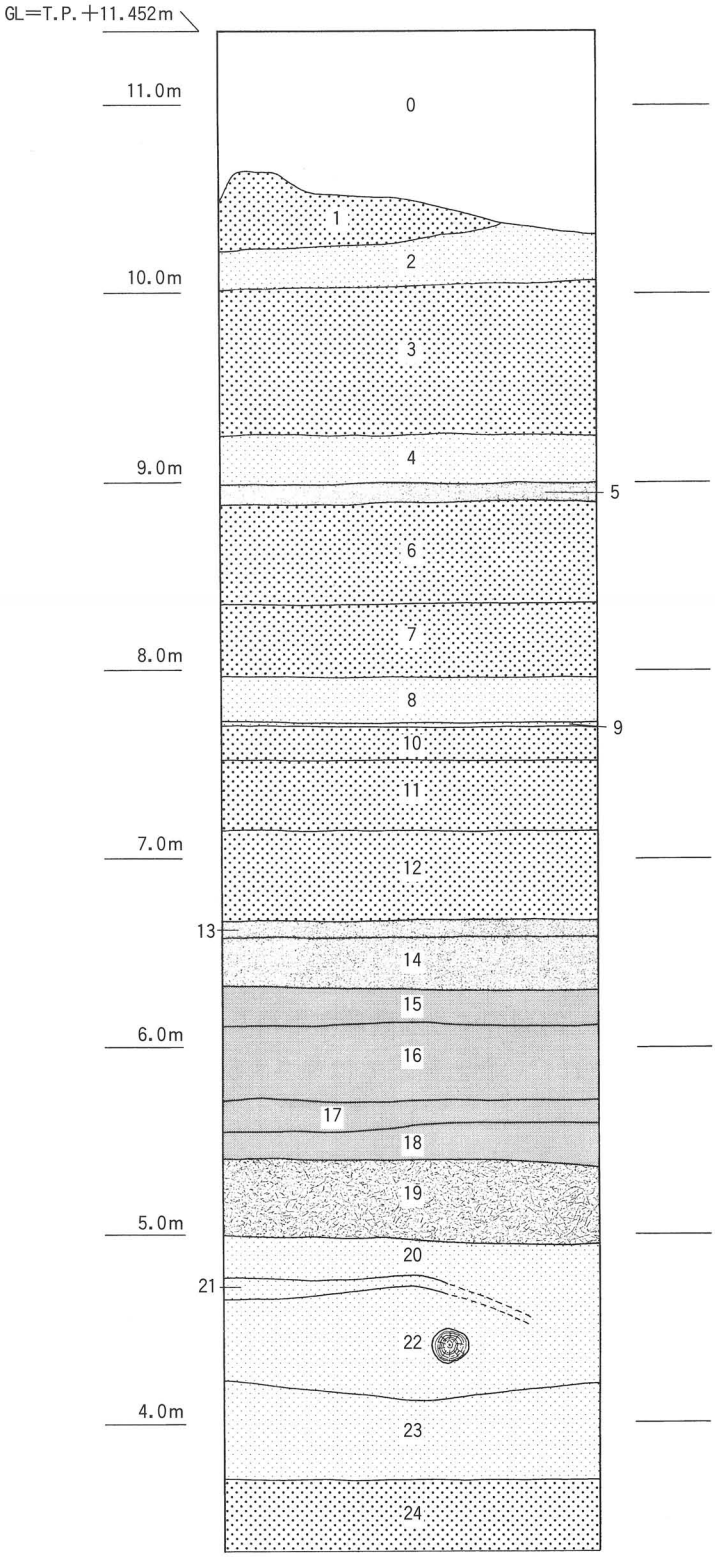
第７層　2.5Y6/2灰黄色極粗粒砂～中礫。

第８層　2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂～極粗粒砂。北壁において西から東へ落ちる斜行ラミナあり。

第９層　5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂。

第10層　2.5Y5/3黄褐色粗粒砂～細礫。ほぼ水平に発達したラミナ構造が認められる。

第11層　2.5Y6/2灰黄色極粗粒砂～中礫。北壁において西から東へ落ちる斜行ラミナあり。



第0層　客土・盛土
第1層　5Y5/1灰色極粗粒砂～2.5Y5/6黄褐色粗粒砂～細礫
第2層　2.5Y5/1黄灰色シルト～中粒砂～5Y5/1灰色粗粒砂～極粗粒砂
第3層　2.5Y6/4にぶい黄色中礫混極粗粒砂～細礫
第4層　2.5Y7/3浅黄色～2.5Y4/2暗灰黄色2.5Y7/3浅黄色中粒砂～粗粒砂や2.5Y4/2暗灰黄色
第5層　5Y5/1灰色粘土～シルト質粘土
第6層　10YR5/3にぶい黄褐色極粗粒砂～中礫
第7層　2.5Y6/2灰黄色中礫混極粗粒砂～中礫
第8層　2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂～極粗粒砂
第9層　5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂
第10層　2.5Y5/3黄褐色粗粒砂～細礫
第11層　2.5Y6/2灰黄色極粗粒砂～中礫
第12層　2.5Y6/2灰黄色細礫～中礫
第13層　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土～シルト質粘土
第14層　5Y4/1灰色～7.5Y5/2灰オリーブ色5Y4/1灰色粘土(極めて細かい炭化物を含む)～
第15層　2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト
第16層　5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト～シルト
第17層　5GY5/1オリーブ灰色シルト～10Y4/1灰色粘土質シルト
第18層　上方：2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土
下方：10Y5/1灰色シルト～極細粒砂
第19層　10Y5/1灰色～10Y4/1灰色粘土質シルト～5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂
第20層　2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂
第21層　10Y4/1灰色粘土質シルト～10Y5/1灰色シルト～細粒砂
第22層　10Y6/1灰色細粒砂～中粒砂
第23層　2.5GY5/1オリーブ灰色～5G5/1緑灰色細粒砂～中礫
第24層　5G5/1緑灰色中礫

第2図　地層断面図(S＝1/40)

第12層　2.5Y6/2灰黄色細礫～中礫。北から南に若干落ちるラミナ構造を有する。下方ほど粗粒化の傾向にある。

第13層　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土～シルト質粘土。水平ラミナあり（炭化物がラミナ状に入る）。

第14層　5Y4/1灰色粘土（極めて細かい炭化物を含む）～7.5Y5/2灰オリーブ色粘土～シルト質粘土。

第15層　2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト。擾乱を受けているのであろうか、上面ラインは不明瞭である。生物擾乱の可能性が高い。

第16層　5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト～シルト。縦根痕（5Y4/1灰粘土質シルト）も見える。

第17層　5GY5/1オリーブ灰色シルト～10Y4/1灰色粘土質シルト。水平ラミナ構造が認められる。

第18層　上方：2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土。未分解の植物遺体を含む。
下方：10Y5/1灰色シルト～極細粒砂。水平ラミナ構造を有する。

第19層　10Y5/1灰色～10Y4/1灰色粘土質シルト～5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂。水平ラミナ構造あり。長さ２ｍ以上の自然木を含む砂礫層である。

第20層　2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂。未分解の植物遺体がラミナ状に含まれる。

第21層　10Y4/1灰色粘土質シルト～10Y5/1灰色シルト～細粒砂。層相はかなり乱れている。変形構造（上からの重みが加わったことにより堆積構造が乱れている箇所）も認められる。

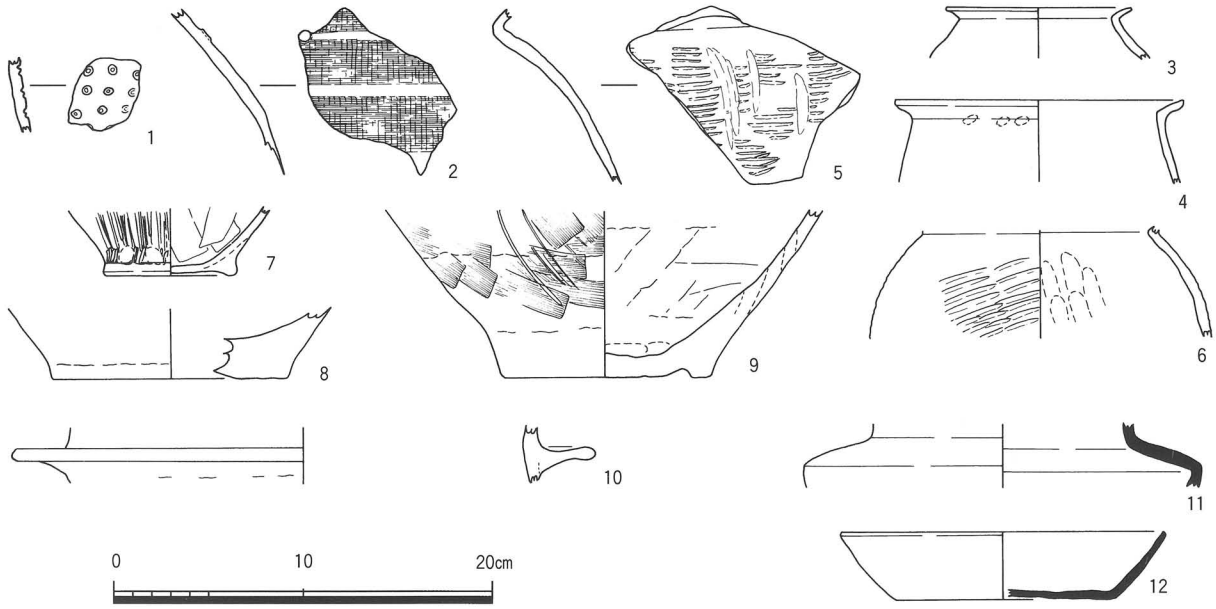
第22層　10Y6/1灰色細粒砂～中粒砂。流木を含む砂礫層で、一部、木の細片や未分解の植物遺体が乱れて入っている箇所が認められる。

第23層　2.5GY5/1オリーブ灰色～5G5/1緑灰色細粒砂～中礫。水平ラミナ構造をもつ地層である。

第24層　5G5/1緑灰色中礫。

３）検出遺構と出土遺物

遺構の存在は皆無であった。出土遺物については、第６～12層砂礫層内において、弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物（１～12）を採集した。１は、高杯柱状部の細片である。外面には竹管文が施される。内面には指頭圧痕が残る。色調は、7.5YR6/3にぶい褐色を呈する。２は、壷の体部の一部と推測される。外面には原体幅の広い簾状文が３帯以上施され、最終的には円形浮文を貼り付けている。内面はナデ調整。１・２は弥生時代中期に属するものと推測される。３は、



第４図　第６層～第12層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

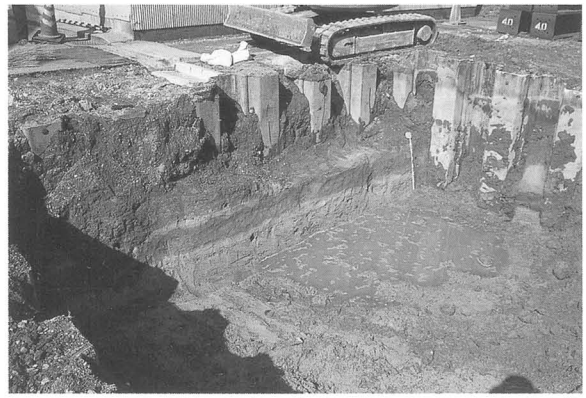
甕の口縁部～体部上半である。口縁部は短く外反し、端部は丸く終息する。頸部内面の屈曲は鋭利さに欠ける。調整は、外面については磨滅のため不明であるが、内面はナデを行うようだ。4は、甕の口縁部～体部上半である。短く外反気味に開く口縁部を有し、端部は若干つまみ上げている。調整は、内・外面ともに磨滅のため不明瞭であるが、わずかに頸部外面に指頭圧痕が認められる。5は、甕の頸部～体部上半である。外面は、ほぼ平行に近いタタキが施された後、板状の工具を用いて、縦方向にナデを行うようだ。このナデは、密には行わない。内面にはユビ押えが認められる。6は、甕の頸部～体部上半である。外面は粗いタタキが行われる。内面は縦方向にユビナデが施される。胎土には角閃石が認められることから、生駒西麓部で製作されたものの可能性が高い。7は、壺又は甕の底部である。底部外面はやや上げ底を呈する。外面調整は、縦方向に密なミガキを施した後、一部ユビ押えを行うようだ。一方内面は板ナデが行われる。8は、大型の壺の底部である。底部外面は上げ底を呈していたものと推測される。調整については、磨滅が激しく不明である。9は、大型の甕の底部である。底部はドーナツ状を呈する。外面はハケナデ後ミガキを行う。10は、土師器羽釜の鍔部分である。11は、須恵器壺の肩部付近である。肩部が明瞭に屈曲する点が特徴的である。調整は、内・外面ともに回転ナデである。12は、須恵器椀である。ほぼ水平な底部とそこから上外方に明確に屈曲する口縁部をもつ。口縁部は直線的で、端部には、外傾する平坦面を形成する。調整は、内・外面ともに回転ナデである。

3．まとめ

今回の調査では、現地表下8.0m前後までの地層を確認することができた。その結果、本調査区では、この間の地層については遺構を形成できる環境になかったことが明らかになった。各地層の所属年代については、不明な点が多いが、概ね、第１～12層が弥生時代中期以降の水成層と考えられ、それ以下の地層については、弥生時代前期以前としかいいようがないほど決定打に乏しい。ところで、第19層砂礫層内に包含されていた自然木は、長さ２m以上を測り、また表皮まで遺存していた。したがって、この自然木を、年輪年代測定法などの科学分析に委ねれば、倒木時期が判明する可能性が考えられ、さらには、倒木を包含していた地層の年代を確定することができるかも知れない。

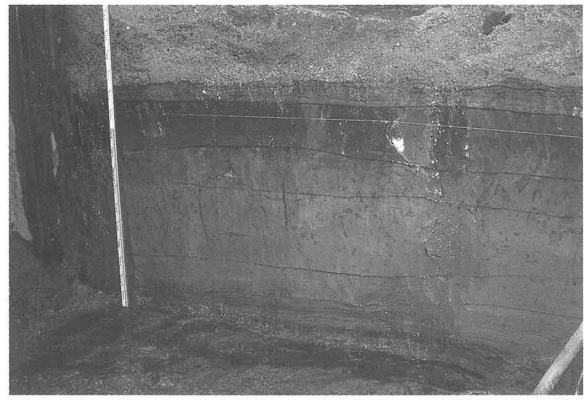
参考文献・引用文献
・岡田清一　2002「Ⅰ　恩智遺跡第10次調査（ＯＪ2001－10）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』（財）八尾市文化財調査研究会

調査地周辺状況（北東から）

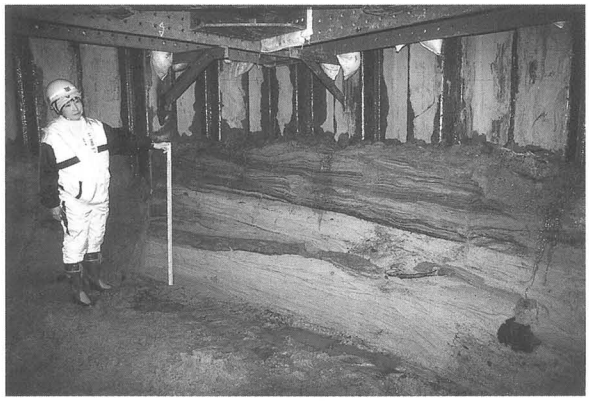


西壁地層（T.P.＋10.0～10.5m付近）

西壁地層（T.P.＋9.0～9.5m付近）



西壁地層（T.P.＋5.5～6.5m付近）



西壁地層（T.P.＋4.0～5.0m付近）

第19層内　自然木出土状況（北西から）

Ⅷ　恩智遺跡第13次調査（ＯＪ2001－13）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市恩智中町３丁目地内で実施した公共下水道工事（13－120工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する恩智遺跡第13次調査（ＯＪ2001－13）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教生文第354号　平成14年１月11日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年２月20日～３月11日（実働４日）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約24㎡を測る。なお、調査においては北潟良江・鈴木裕治・多田一美・都築聡子が参加した。

1．　内業整理は現地調査終了後随時行い、平成14年３月29日に終了した。

1．本書の執筆・編集は、岡田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……77

2．調査概要……77

　1）調査の方法と経過……77

　2）基本層序……77

　3）検出遺構と出土遺物……79

3．まとめ……79

Ⅷ　恩智遺跡第13次調査（ＯＪ2001－13）

１．はじめに

今回の発掘調査は、公共下水道（13－120工区）に伴うもので、当研究会が恩智遺跡内で実施する第13次調査にあたる。なお、調査地点における地理的および歴史的環境や現在までの調査成果については、本書の「Ⅵ　恩智遺跡第11次調査（ＯＪ2001－11）」を参照されたい。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

調査対象は人孔設置に伴い破壊される部分６箇所で、北から第１～６区と呼称した。調査の方法は、現地盤から0.4～1.2mまでの盛土および撹乱部分を重機によって排除した後、以下0.8～２mの深さまでの地層を人力と重機を併用して掘削を進め、遺構・遺物の検出に努めた。出土遺物量は全体でコンテナパット（40×60×20cm）約１箱分である。

２）基本層序

第１～６区の全調査区で、盛土および撹乱部分を含め９層を確認した。現地盤はT.P.＋12～13mを測る。以下、各層について列記する。

第０層：盛土および撹乱。層厚0.4～1.2m。道路築造あるいはガス・水道管埋設時の埋め戻し土である。

第１層：5B2/1青黒色シルト。層厚0.1～0.2m。近・現代における開発造成以前の耕作土層である。第２・６区にはガス・水道管埋設時に削平を受けたものか存在しない。

第２層：7.5YR4/4褐色砂質シルト。層厚0.2～0.3m。国産陶磁器片が少量含まれる近世相当層である。

第３層：7.5YR6/2灰褐色砂礫混じりシルト。層厚0.1～0.3m。酸化鉄分が含まれる。

第４層：7.5YR7/6橙色粘土質シルト。層厚0.1～0.2m。第２・６区に見られる。酸化鉄分が多量に含まれる。

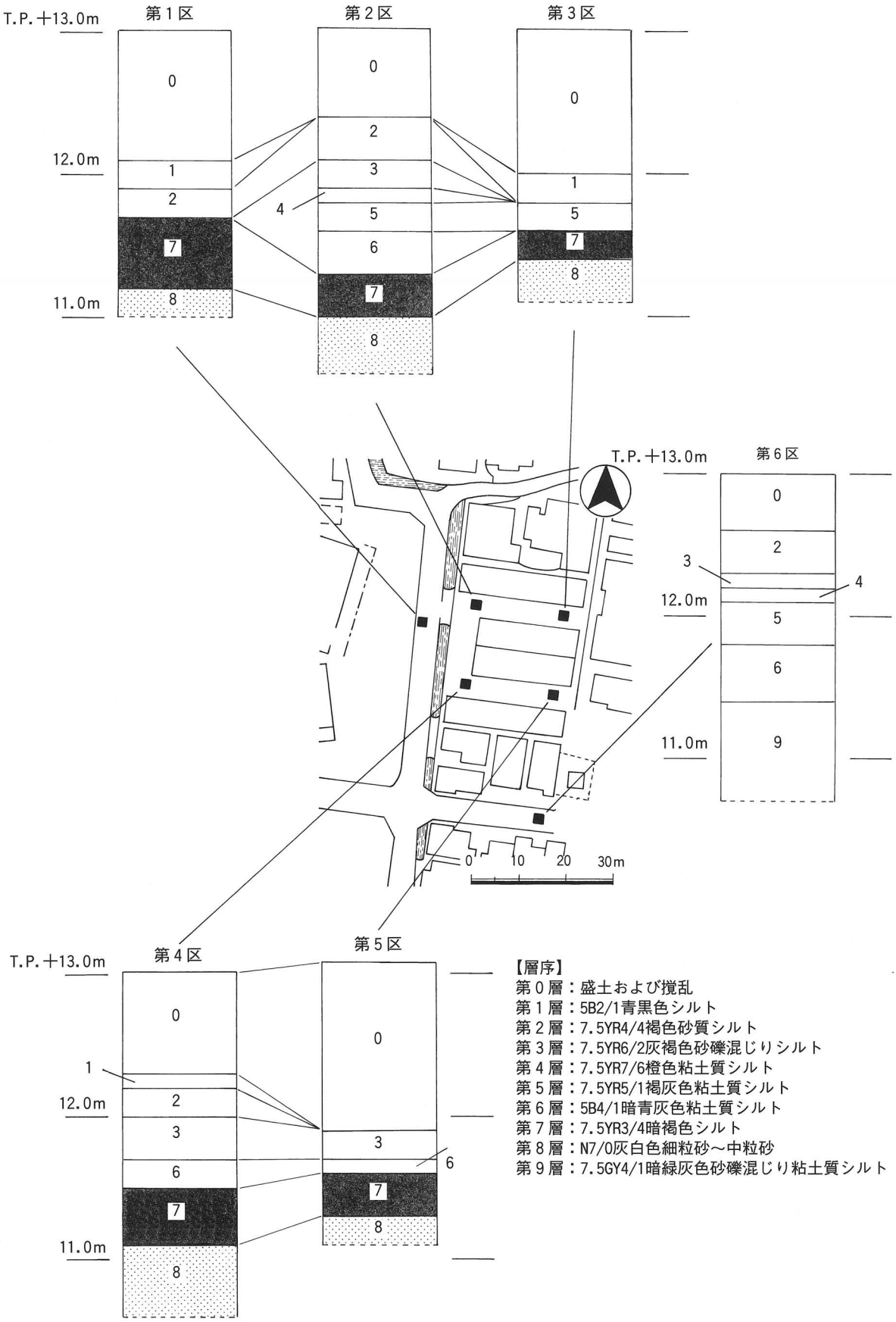
第５層：7.5YR5/1褐灰色粘土質シルト。層厚0.2m前後。第２区にのみ見られる。部分的に暗色を呈する。

第６層：5B4/1暗青灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.3m。第２・４区に見られる。植物ラミナが見られる。

第７層：7.5YR3/4暗褐色シルト。層厚0.1～0.3m。第３区を除くすべての調査区に見られる。黒色粘土の偽礫が混入する。弥生時代中期末～後期（河内Ⅳ～Ⅴ様式）に比定される土器片が含まれる。

第８層：N7/0灰白色細粒砂～中粒砂。層厚0.5m以上。第６区を除くすべての調査区に見られる河成堆積層で、下部には炭化物・木片などの集積したラミナが含まれる。

第９層：7.5GY4/1暗緑灰色砂礫混じり粘土質シルト。第６区にのみ見られる。層厚0.7m以上。非常によくしまっており、未分解の植物遺体が含まれる。



第１図　調査区位置図（Ｓ＝1/1200）および各調査区基本層序模式図（Ｓ＝1/40）

３）検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構を確認することはできなかった。
遺物については第３区を除く各調査区の第２層から、弥生時代中期末～後期（河内Ⅳ～Ⅴ様式）に比定される土器片が少量出土したが、すべて細片であり、図化するまでには至らなかった。

３．まとめ

今回の調査地の近隣では、平成12～13年度にかけて実施された公共下水工事に伴う第８・９次調査（ＯＪ2000－８、ＯＪ2001－９）がある。両調査の各地層を見比べると、当然のことながらほぼ同じ様相を呈している。そして、前者の調査では第５層にあたる弥生時代中期末～後期（河内Ⅳ～Ⅴ様式）を含む堆積層についても、層位・レベルともに大きな差異はない。今回の調査においても前回同様、当該期の遺構を確認することはできなかったが、生駒山地西麓の扇状地から低地部にかかる当地が、集落を形成する上で安定した土地条件であったことが確認できた。

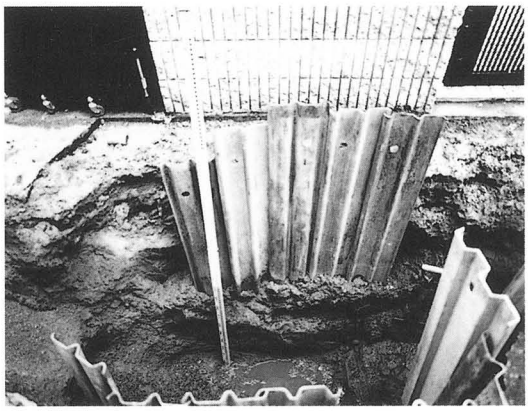
参考文献
・岡田清一　2001「Ⅰ　恩智遺跡第８次調査（ＯＪ2000－８）　Ⅱ　恩智遺跡第９次調査（ＯＪ2001－９）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告71』財団法人　八尾市文化財調査研究会
・寺沢　薫・森井貞雄　1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』株式会社　木耳社

第１区　西壁面

第２区　南壁面

第３区　南壁面

第４区　南壁面



第５区　北壁面

第６区　北壁面

重機による盛土掘削（第３区／北西から）

人力による掘削（第３区／北西から）

IX　亀井遺跡第13次調査（ＫＭ2002－13）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南亀井町１・３丁目地内で実施した公共下水道工事（平成13年度飛行場北排水区第22工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する亀井遺跡第13次（ＫＭ2002－13）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第315号　平成13年12月６日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成14年５月20日～７月６日（実働３日間）にかけて、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約56.03㎡である。

1．現地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た(敬称略、五十音順)。
岡田佳之(現(財)大阪府文化財センター専門調査員)・北潟良江・實樹婦美子

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成14年９月20日に完了した。

1．　本書に関わる業務は、以下の通りである。
【遺物実測】　市森千恵子
【トレース】　荒川和哉・國津れいこ・市森
【執筆・編集】樋口

本　文　目　次

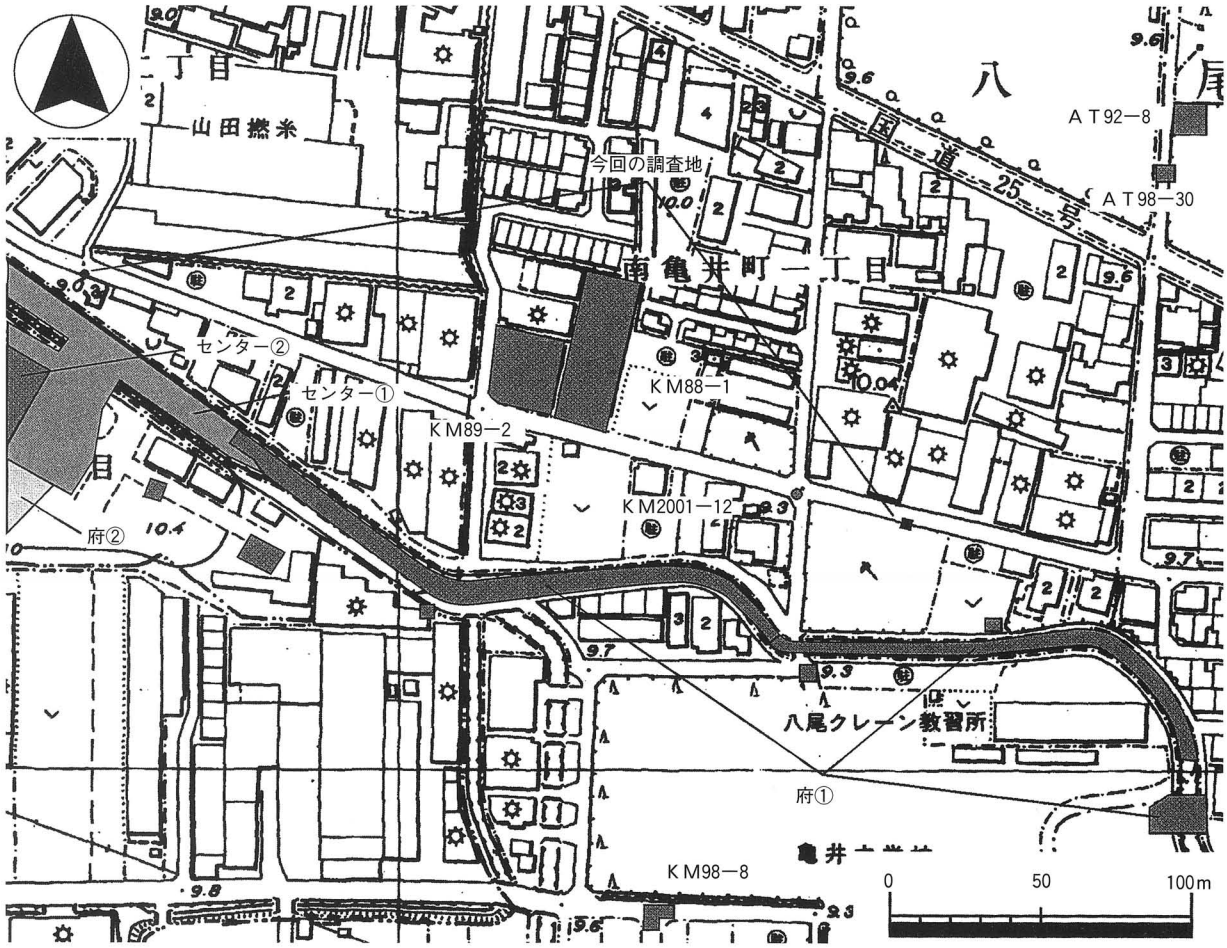
1．はじめに……81
2．調査概要……82
　1）調査の方法と経過……82
　2）基本層序……83
　3）検出遺構と出土遺物……83
3．まとめ……84

Ⅸ　亀井遺跡第13次調査（ＫＭ2002－13）

１．はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されてきた。今回報告する亀井遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の西部に位置する。現在の行政区画では、亀井町１～４丁目及び南亀井町１～５丁目の東西約0.6km、南北約0.8kmがその範囲と推定されている。

当遺跡は、昭和43(1968)年の大阪中央環状線建設に先立つ平野川改修工事が行われた際、多量の弥生土器が出土したことによりその存在が確認された。以後、昭和44(1969)年の近畿自動車道建設予定地内における試掘調査と本調査が、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センターにより行われたのをはじめ、昭和53(1978)～55(1980)年には長吉ポンプ場建設に伴う発掘調査が、昭和63(1988)年には平野川改修工事に伴う発掘調査といった大規模な調査が、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センターのもと実施されてきた。また八尾市教育委員会や当調査研究会による小規模な調査も行われており、その結果、当遺跡の規模が東西、南北ともに500m以上の範囲を有



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

表１　調査地一覧表(地図番号は第１図に対応)

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	文献
府①	1988年度 大阪府教育委員会 調査地	大阪府 教育委員会	八尾市南亀井町１丁目 ～跡部南の町１丁目	森井貞夫　1989『1988年度　亀井遺跡発掘調査概要－八尾市南亀井町・跡部南の町所在－』
府②	1992年度・1993年度 大阪府教育委員会 調査地	大阪府 教育委員会	八尾市南亀井町３丁目	森井貞夫　1994『1992・1993年度　亀井遺跡発掘調査概要－ 八尾市南亀井町所在－』大阪府教育委員会
センター ①	1978年度・1979年度 (財)大阪文化財 センター調査地	(財)大阪文化財 センター	八尾市南亀井町	中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭　1984『亀井遺跡Ⅱ』(財)大阪文化財センター
センター ②	1980年度 (財)大阪文化財 センター調査地	(財)大阪文化財 センター	八尾市南亀井町	中西靖人・宮崎泰史・西村尋文・広瀬雅信・原　秀偵　1982『亀井遺跡』(財)大阪文化財センター
KM88-１	KM88－１	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南亀井町４丁目 41－１	近江俊秀・岡田清一・並河聡也　1989『亀井遺跡　－南亀井町４丁目　41－１の調査－』(財)八尾市文化財調査研究会
KM89-２	KM89－２	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南亀井町１丁目 39－２・６・40－２	成海佳子　1990「10. 亀井遺跡(ＫＭ89－2)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
KM98-８	KM98－８	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南亀井町４丁目	岡田清一・樋口　薫　2000「Ⅶ　亀井遺跡第８次調査(ＫＭ98－８)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
KM2001-12	KM01－12	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南亀井町１・４ 丁目	樋口　薫・金親満夫　2000「Ⅱ　亀井遺跡第12次調査(ＫＭ2001－12)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告73』(財)八尾市文化財調査研究会
AT92-８	AT92－８	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市跡部本町４丁目 ４－20	岡田清一　1993「Ⅱ　跡部遺跡第８次調査（ＡＴ92－８)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
AT98-30	AT98－30	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市跡部本町４丁目	森本めぐみ　2000「Ⅲ　跡部遺跡第30次調査(ＡＴ98-30)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会

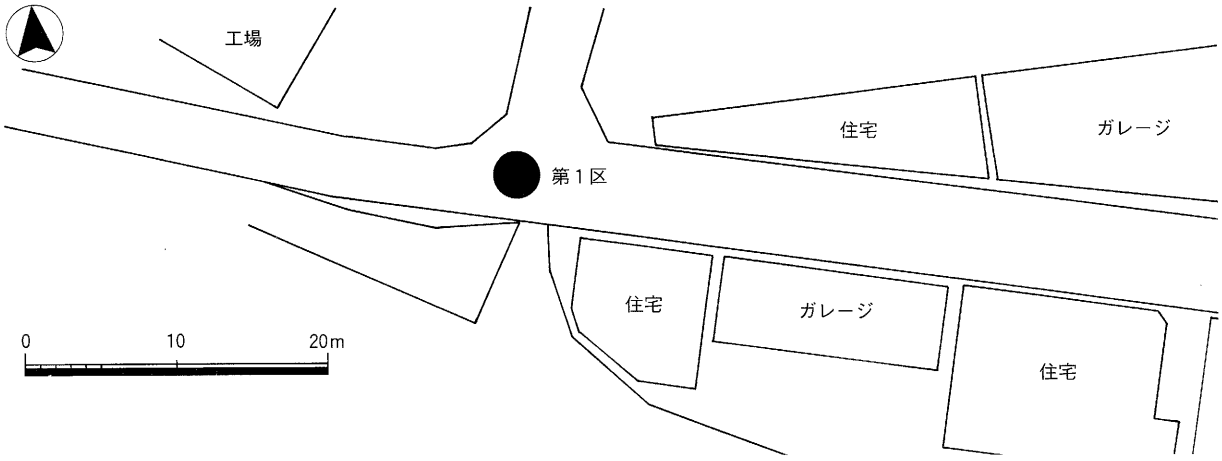
することや、弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡で、特に弥生時代中期～後期に濃密な遺跡を包含していることなどが明らかになりつつある。

当遺跡周辺には、東に跡部遺跡、西に竹渕遺跡、北に久宝寺遺跡・加美遺跡(大阪市)、南に長原遺跡(大阪市)・城山遺跡(大阪市)など弥生～古墳時代にかけての遺構・遺物を多量に含む遺跡が存在する。

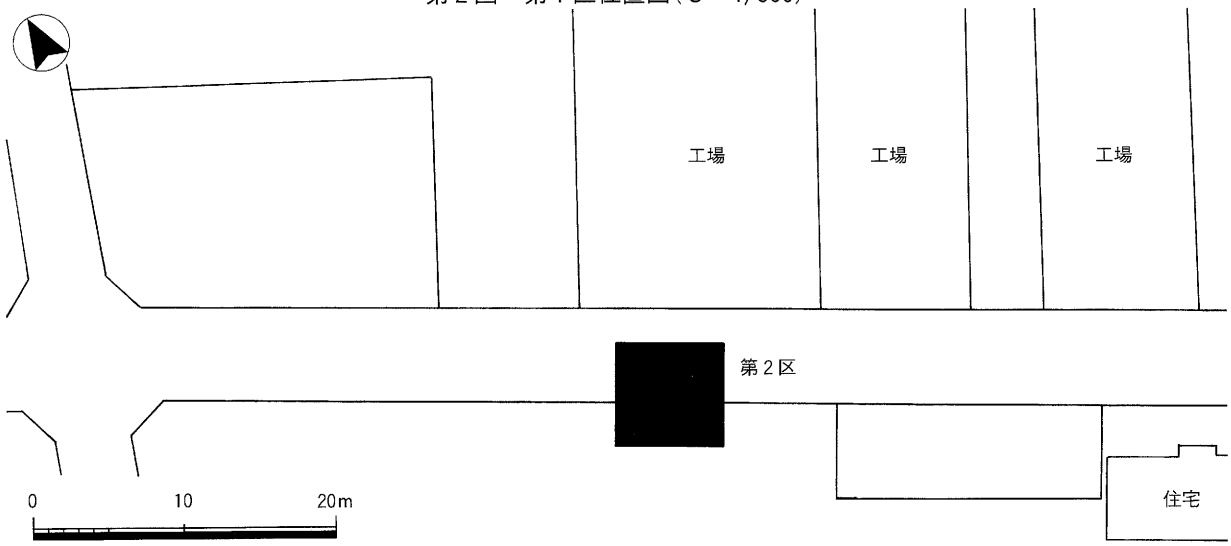
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市南亀井町１・３丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した第13次調査（ＫＭ2002－13）にあたる。調査区は２箇所である。調査では、西側の立孔(径３ｍ　面積7.07㎡)を第１区、東側の立坑(6.8×7.2ｍ　面積48.96㎡)を第２区と呼称した。掘削の方法は、第１区では、掘削にＰＩＴ工法が用いられたため調査区内に立入ることができず、現地表(T.P.＋8.66ｍ)下3.5ｍ前後までの地層観察と、上げ土内に遺物が包含されているかどうかの確認に留まった。一方第２区では現地表(T.P.＋9.66ｍ)下2.5ｍ前後までを機械掘削とし、以下現地表下5.45ｍまでの2.95ｍを機械と人力を併用して行った。



第２図　第１区位置図（Ｓ＝1/500）



第３図　第２区位置図（Ｓ＝1/500）

２）基本層序

【第１区】現地表下2.0～2.5m前後までは、現代の暗渠に伴う攪乱や、ゴミが混在した客土・盛土層である（第100層）。以下現地表下3.5m前後までの1.0m間を、主に上げ土から地層を復元した結果、概ね３層もの地層を確認した。第101層は現地表下2.5m付近に存在する地層で、青灰色シルト～細粒砂。第102層は現地表下3.0m付近に見られる水平ラミナが発達した青灰色粗粒砂～細礫である。第103層は現地表下3.5m付近で認められた暗灰色～青灰色粘土質シルトである。

【第２区】現地表下1.1m前後までは客土・盛土（第200層）である。以下現地表下5.45m前後までの4.35m間で、12層もの地層を確認した。第201層・第202層は黄橙色～黄褐色の粘土質シルト。第203層は土壌化層である。第204層・第205層は、静水域に形成された湿地性の地層である。第206層～第209層は粘土質シルト～細粒砂で形成された流水堆積層。上方に向かうにつれて粗粒化の傾向が強まる。水平ラミナ構造が発達している地層である。第210層は、炭化物や未分解の植物遺体がラミナ状に入る湿地性の堆積層。第211層・第212層は中粒砂～細礫が優勢な流水堆積層で、水平ラミナ構造が顕著である。扇状地性の堆積物を彷彿させる。

３）検出遺構と出土遺物

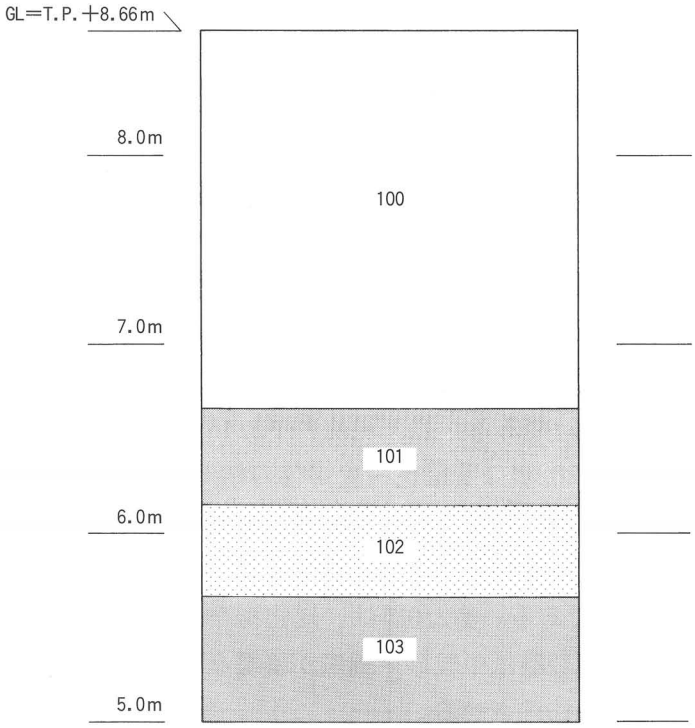
【第１区】遺構の有無は不明である。出土遺物については、GL－2.0～2.5m（T.P.＋6.1～6.6m）

付近の第101層内において数点確認できた。その内、図化できたものは２点（１・２）である。１は、弥生土器の鉢又は高杯の口縁部と推測される。口縁端部は外方に肥厚する点が特徴的である。口縁端部上面には平坦面も認められる。調整はナデ。外面の装飾が認められないことに注目すれば、弥生中期末～後期初頭に属するものの可能性が考えられる。２は、甕の底部であろう。底面はやや上げ底を呈する。調整は、外面が右上がりのタタキを行った後ナデを施す。一方内面は板ナデを行う。胎土には角閃石や金雲母が認められることから、生駒西麓部で生産されたものの可能性が高い。弥生後期に属するものである。

【第２区】検出遺構、出土遺物ともになし。

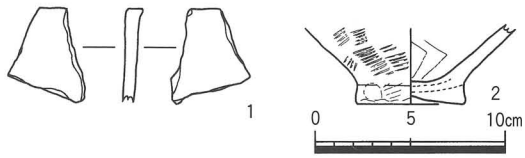
３．まとめ

第１区については、平野川を挟んでその南側において（財）大阪文化財センターが調査をしており、弥生時代中期の方形周溝墓をはじめ、弥生時代後期や古墳時代初頭の遺構を検出している。したがって当調査区では、当然それらの北への広がりが予想されたが、今回の調査方法では、物理的に遺構を検出することは無理であった。残念である。一方第２区については、第203層上面が土壌化の影響を受けていると考えられ、当地層上面を平面的に追いかければ遺構が検出される可能性が高い。亀井遺跡では、過去の調査によって弥生時代中期～後期にそのピークを迎えることが明らかになりつつある。本調査区では、当該期に相当する地層がラミナ構造の顕著な流水堆積層である第212層に対応すると思われる。本調査区の西約30ｍに位置する第12次調査地においても、同様の水成層が確認されている。いずれも点的な調査のため不確定要素を多分に含むが、当該期における亀井遺跡の東域の生活環境を知る上で貴重な成果と言えるのではないか。

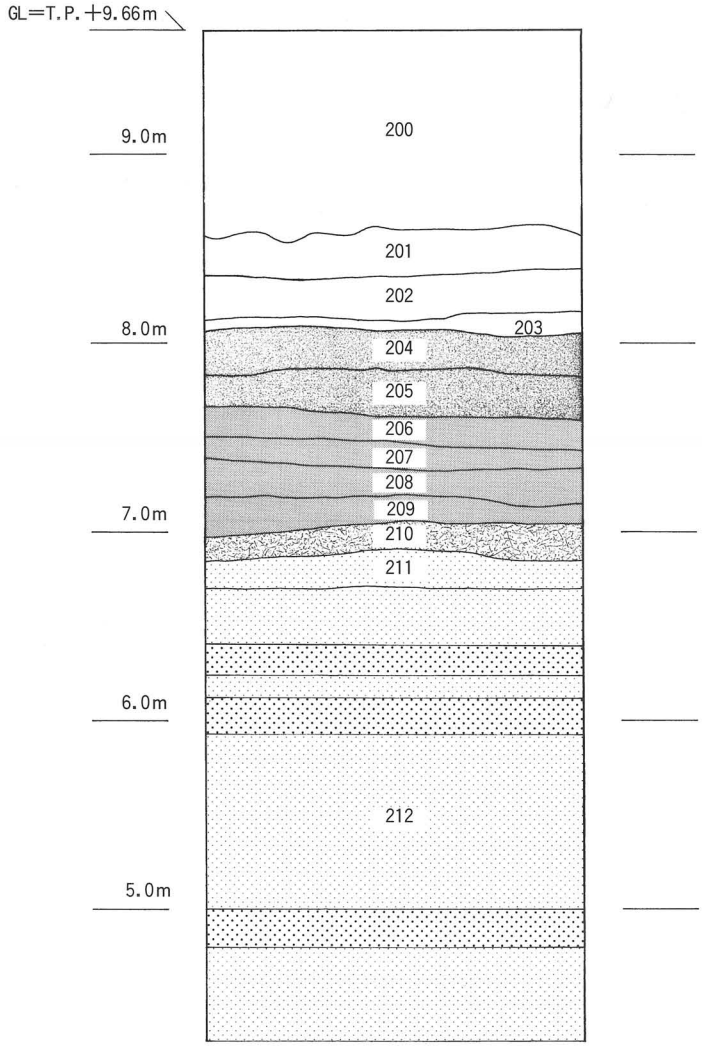


第100層　黒色～暗青灰色細粒砂～中礫（産業廃棄物などを含む）
第101層　青灰色シルト～細粒砂
第102層　青灰色粗粒砂～細礫
第103層　暗灰色～青灰色粘土質シルト

第４図　第１区地層断面図（Ｓ＝1/40）



第５図　第１区出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



第200層　客土・盛土
第201層　10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
第202層　10YR6/2灰黄褐色粘土質シルト
第203層　10YR6/2灰黄褐色粘土質シルト
第204層　10YR6/1褐色粘土質シルト
第205層　10YR5/1褐色粘土質シルト～シルト
第206層　10YR5/1褐色シルト～極細粒砂
第207層　2.5Y5/1黄灰色シルト～細粒砂
第208層　7.5Y4/1灰色粘土質シルト～極細粒砂
第209層　7.5Y4/1灰色粘土質シルト～シルト
第210層　2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土～粘土質シルト
第211層　2.5GY4/1暗オリーブ灰色細礫混中粒砂～極粗粒砂
第212層　10GY6/1緑灰色細礫混粗粒砂～極粗粒砂

第６図　第２区地層断面実測図（Ｓ＝1/40）

参考文献・引用文献

・森井貞雄　1989『1988年度　亀井遺跡発掘調査概要―八尾市南亀井町・跡部南の町所在―』大阪府教育委員会
・大野　薫・森井貞雄　1994『1992・93年度亀井遺跡発掘調査概要―八尾市南亀井町所在―』大阪府教育委員会
・寺川史郎・尾谷雅彦編　1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター
・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編　1982『亀井遺跡』(財)大阪文化財センター
・宮崎泰史編　1984『亀井遺跡Ⅱ』(財)大阪文化財センター
・赤木克視他　1983『亀井』(財)大阪文化財センター
・赤木克視他　1986『亀井　その２』(財)大阪文化財センター
・赤木克視他　1987『亀井　その３』(財)大阪文化財センター
・陣内暢子　1987「亀井遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・近江俊秀・岡田清一・並河聡也　1989『亀井遺跡　―南亀井町４丁目41－１の調査―』(財)八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1990「10. 亀井遺跡（ＫＭ89－２）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
・岡田清一・樋口　薫　2000「Ⅶ　亀井遺跡第８次調査（ＫＭ98－8)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫・金親満夫　2002「Ⅱ　亀井遺跡第12次調査（ＫＭ2001－12）『(財)八尾市文化財調査研究会報告73』(財)八尾市文化財調査研究会

第１区　周辺状況（南西から）

第２区　周辺状況（南西から）

第２区　北壁地層（T.P.＋7.0～9.0m付近）

第２区　北壁地層（T.P.＋7.0～8.0m付近）

第２区　第212層　堆積状況（南から）

第２区　調査風景（南東から）

X　萱振遺跡第23次調査（ＫＦ2002－23）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市萱振町６丁目地内で実施した公共下水道工事（13－139工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する萱振遺跡第23次調査（ＫＦ2002－23）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教生文第30号　平成14年４月23日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年６月３日～７月５日（実働５日）にかけて、西村公助、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約16.2㎡を測る。なお、調査においては飯塚直世・市森千恵子・北潟良江・實樹婦美子が参加した。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成14年10月31日に終了した。

1．本書に関わる業務は西村と岡田が行った。なお、本文の文責は文末に記した。

本　文　目　次

1．はじめに……87

2．調査概要……87

　1）調査の方法と経過……87

　2）検出遺構と出土遺物……88

3．まとめ……92

X　萱振遺跡第23次調査（ＫＦ2002－23）

１．はじめに

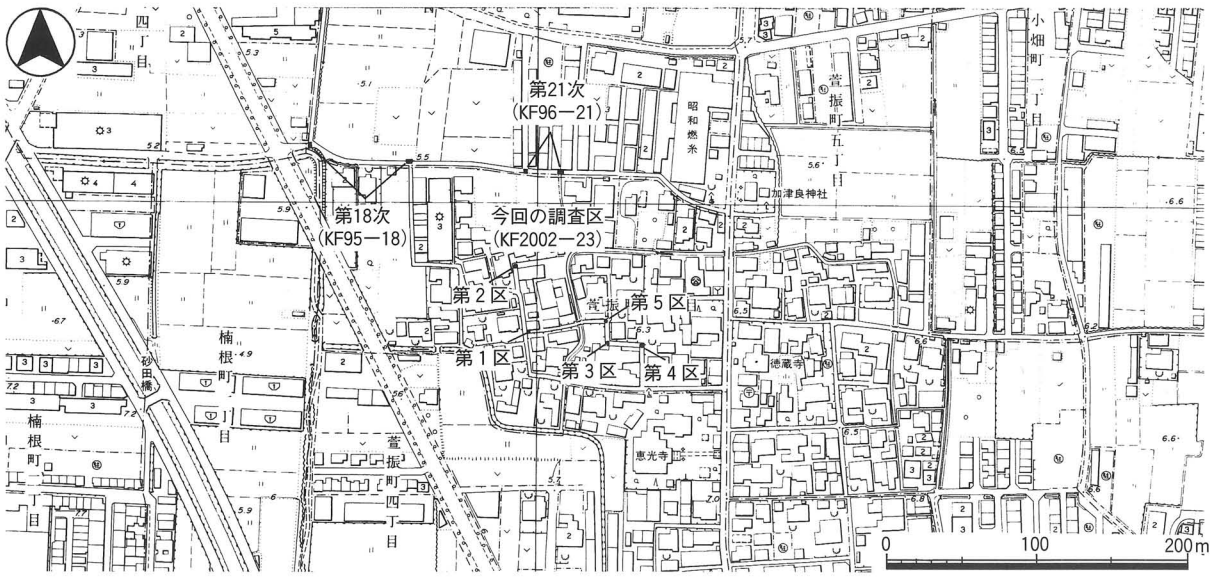
萱振遺跡は、八尾市北部に位置する弥生時代中期～室町時代に至る複合遺跡である。地理的には、古大和川水系の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれたデルタ上にあって、海抜７～５ｍに立地している。当遺跡の推定範囲は、楠根川右岸の萱振町を中心に約１km四方に広がる。現在の行政区画では、萱振町１～７丁目、楠根町１丁目・北本町３・４丁目、緑ヶ丘１～３丁目に所在する。当遺跡の周辺には、北に山賀遺跡、西郡廃寺遺跡、南に東郷遺跡が隣接している。

当遺跡内で昭和58年度に大阪府教育委員会によって実施された府立八尾北高校建設に伴う調査では、古墳時代前期に比定される一辺約27ｍを測る方墳「萱振１号墳」が検出された。その方墳からは日本最大の靫型埴輪をはじめ盾形・草摺形・家形の形象埴輪が見つかっている。また、当研究会が昭和60年度に行なった第１～３次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の居住域、鎌倉時代の居住域および生産域が検出されている。そのなかの特筆すべき成果には、第３次調査で見つかった古墳時代後期に比定される古墳があり、これは平野部での古墳造営を解明する上で貴重な資料と言える。（岡田）

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道（13－139工区）に伴うもので、当研究会が萱振遺跡内で実施する第23次調査にあたる。調査対象は人孔設置に伴い破壊される部分５箇所で、第１～５区と呼称した。各調査区の規模は、概ね1.5×2.0ｍを測る。調査の方法は、現地盤から0.5ｍ前後までの盛土および撹乱部分を重機によって排除した後、以下1.3～2.0ｍ程の深さまでの地層を人力と重機を併用して掘削を進め、遺構・遺物の検出に努めた。出土遺物量は全体でコンテナパット（40×60×20cm）１箱分である。なお、調査は第１・２区を岡田、第３～５区を西村が担当した。以下、調査区毎にその成果を記述する。（岡田）



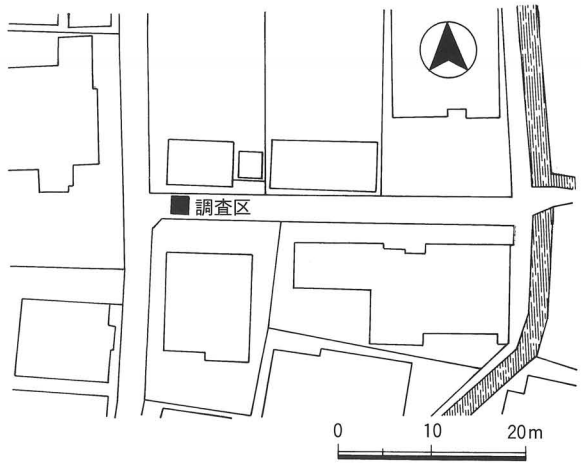
第１図　調査位置および周辺図（Ｓ＝1/5000）

2）検出遺構と出土遺物

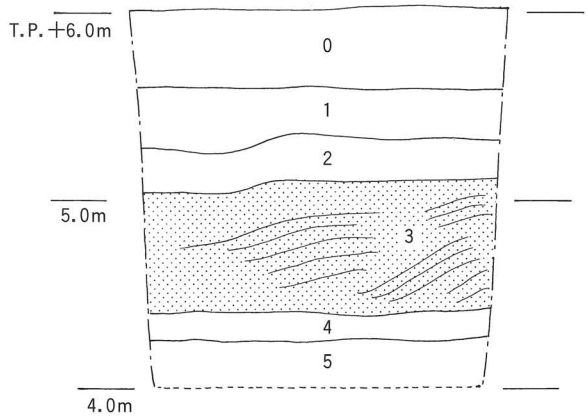
第１区

重機と人力を併用して慎重に掘削を実施したところ、現地表(T.P.＋6.0m前後)下約1.5mのところで湧水の著しい砂層となり、壁面崩壊の可能性が考えられた為、一旦掘削を中断し、南壁面において地層の調査(分層・記録・写真)を行った。以下、予定の0.5m前後は重機により掘削を行い、調査区内での調査は危険と察せられたため、地表からの記録・写真に留めた。

現地表から0.4m前後は道路築造時の盛土およびガス管の埋設土からなる(第０層)。以下0.3m前後は近現代の宅地造成に伴う整地層と考えられる(第１層)。それより以下0.9m前後は河川内堆積土とみられる灰白色～褐色系(酸化鉄によるものか？)のシルト～細粒砂が見られ、下部には数条のラミナが認められる(第２・３層)。本層については、遺物の出土は認められないが、周辺における調査から平安時代～中世の期間の埋没河川であることが推測される。それ以下0.1m前後も水成層である灰白色～青灰色系のシルトと細粒砂の互層(第４層)、その下層は0.3m以上を測る青灰色粘土質シルトとなる。本調査区から遺物は出土しなかった。　(岡田)



第２図　第１区位置図(Ｓ＝1/800)



【層序】
0：盛土および撹乱
1：5YR4/1褐灰色砂礫混じりシルト
2：10YR6/1褐灰色シルト～細粒砂
3：2.5Y7/1灰白色中粒砂
4：N7/0灰白色極細粒砂と10BG7/1明青灰色シルトの互層
5：10BG6/1青灰色粘土質シルト

第３図　第１区南壁断面図(Ｓ＝1/40)

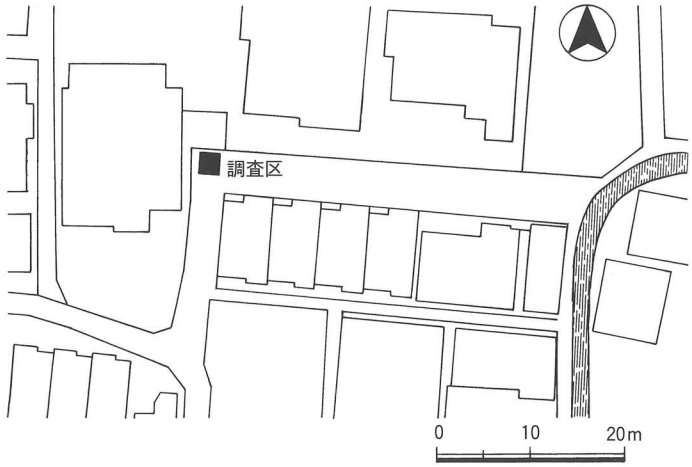
写真１　第１区南壁断面

写真２　第１区発掘風景(東から)

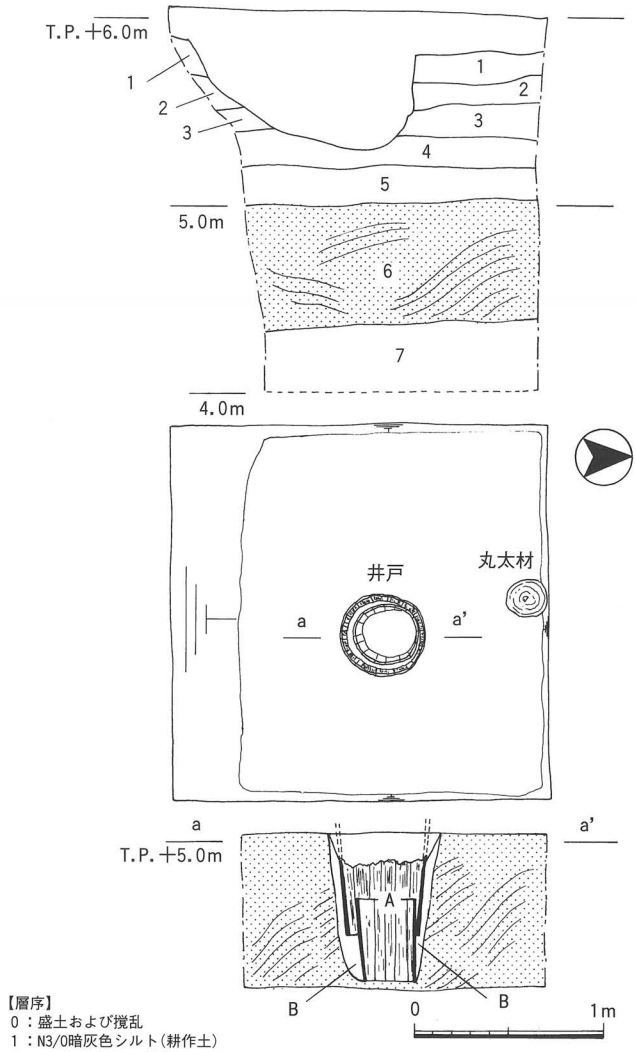
第２区

重機と人力を併用して慎重に掘削を実施したところ、現地表(T.P.＋6.0m前後)下0.2m前後は近・現代の住宅建設に伴う整地層(第０層)で、その下には近代頃の耕作土層が層厚0.2mで堆積する(第１層)。以下0.3m前後はオリーブ色系のシルトで19世紀後半代の染付磁器片が若干含まれる(第２・３層)。以下、0.3m前後はシルト～細粒砂で構成される水成層(第４・５層)、さらに下層0.7m前後は第１区と同様、細粒砂を主とした河成堆積層(第６層)となる。本層から遺物は出土しなかった為、明確な時期については不明であるが、周辺における調査から平安時代～中世の期間に埋没した河川に相当するものと推測される。

遺構については、現地表下約1.0m(T.P.＋5.0m前後)の第６層上面のところで、井戸１基と打ち込まれた丸太材１本が見つかった。井戸側となる桶は２段積みで、径の大きい方が上段、その内側に径の小さい方を「入れ子」状に約0.2m下方へずらして組み合わせたものである。各井戸側の法量は、上段(外側)が径約0.4m・残存高約0.5m、下段(内側)は径0.3m・高さ0.4m(完存)を測る。一方の丸太材は、井戸から北西約0.5mの地点で見つかった。法量は径約0.2m、残存高約1.0mを測り、根先は打ち込みやすいように三角錐状に鋭く削られている。井戸も丸太材も上部は後世に削平されたものか遺存しておらず、全容は不明であるが、用途としては検出状況から灌漑



第４図　第２区位置図(Ｓ＝1/800)



【層序】
0：盛土および撹乱
1：N3/0暗灰色シルト(耕作土)
2：5Y4/4暗オリーブ灰色シルト
3：7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
4：10Y6/1褐灰色シルト～細粒砂
5：N3/0暗灰色シルト
6：2.5Y7/1灰白色中粒砂
7：10BG6/1青灰色粘土質シルト

【井戸埋土】
＜井戸側内＞
A：N5/0灰色砂質シルト
＜掘方内＞
B：2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト

第５図　第２区西壁面および井戸平・断面図(Ｓ＝1/40)

用として構築されたものと思われる。また、丸太材については「跳ね釣瓶」又は「覆屋の柱」といった井戸に関連する施設の一部と推測されるが、詳細は不明である。井戸側内は灰色の粘土質シルトの単一層である。遺物は井戸側内埋土から炮烙が１点のみ出土した。口縁部は外反気味に短く立ち上がり、端部は丸みを呈する。口径は36.6cm(復原値)を測る。色調は暗赤褐色で、底部外面には煤が付着する。形態から難波分類(難波1992)のＤ類に属するもので、19世紀前半～幕末にかけての所産と考えられる。 (岡田)

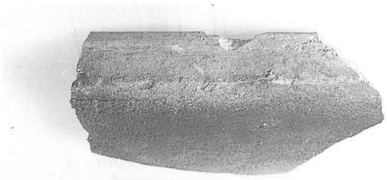
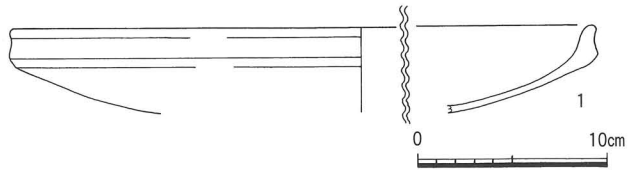


写真３　第２区井戸側埋土内出土遺物



第６図　第２区井戸側埋土内出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

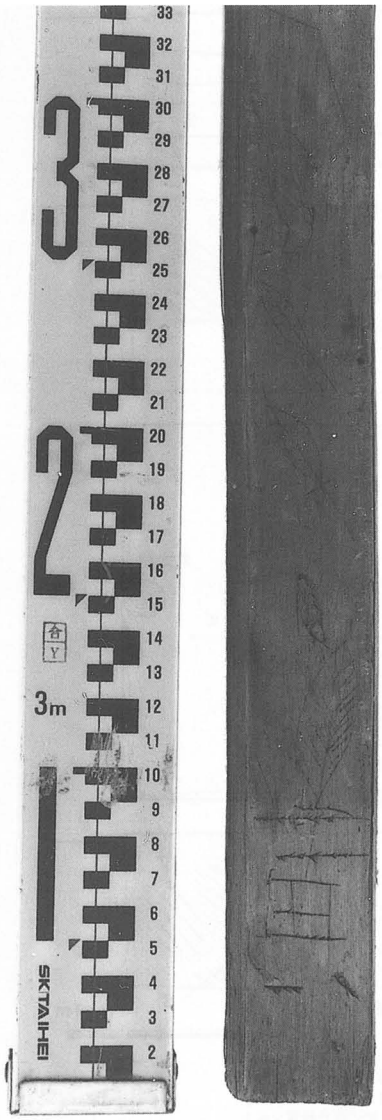
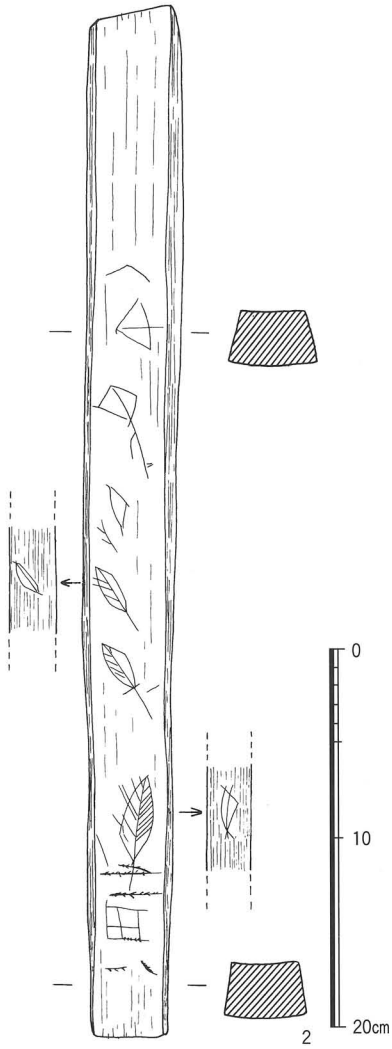


写真４　第２区井戸側下段板材



第７図　第２区井戸側下段板材実測図(Ｓ＝1/4)

第３区

№２人孔［規模2.0×2.0m　面積4.0m²］を対象に実施した。現地表面から1.6mまでを機械と人力により掘削し調査を行った。

現地表面の標高はT.P.＋6.1mで、現況は道路である。以下の６層の堆積を確認した。

第１層は盛土で水道管工事の際の埋土である。第２層は細粒砂混粘土。上面は土壌化していたが、遺構の検出はなかった。この層内からは土師器の破片が出土した。第３層は細粒砂混粘土、第４層は細粒砂混粘土、第５層は粘土。遺物の出土はなし。第６層は細粒砂で、流水堆積である。（西村）

第４区

№１人孔[規模2.0×2.0m　面積4.0m²]を対象に実施した。現地表面から1.6mまでを機械と人力により掘削し調査を行った。

現地表面の標高はT.P.＋6.2mで、現況は道路である。以下の５層の堆積を確認した。

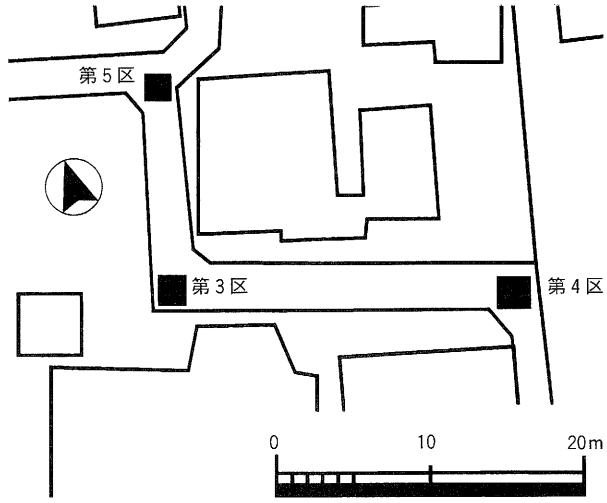
第１層は盛土で水道管および雨水排水管工事の時の埋土である。第２層は粗粒砂混粘土、第３層は細粒シルト混粘土である。第４層は粗粒砂混粘土で、上面は土壌化していたが、遺構の検出はなかった。この層内からは瓦器椀の破片が出土した。第５層は細粒砂で流水堆積である。（西村）

第５区

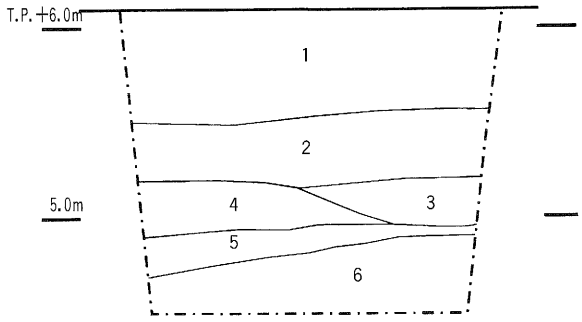
№３人孔[規模1.5×2.0m　面積3.0m²]を対象に実施した。現地表面から1.35mまでを機械と人力により掘削し調査を行った。

現地表面の標高はT.P.＋6.0mで、現況は道路である。以下５層の堆積を確認した。

第１層は盛土で、調査区の西側と東側には、旧の水道管が埋設されていた。第２層は細粒砂混粘土。第３層は粗粒砂混粘土。第４層は粗粒砂混粘土で、上面は土壌化していたが、遺構の検出はなかった。この層内からは土師器の羽釜の破片が出土した。第５層は細粒砂混粗粒砂で流水堆積である。（西村）

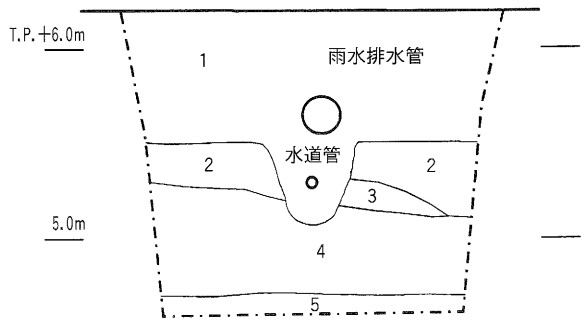


第８図　第３～５区調査位置図（Ｓ＝1/500）



１層　盛土
２層　2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂混粘土
３層　10YR4/4褐色細粒砂混粘土
４層　10BG4/1明青灰色細粒砂混粘土
５層　10BG3/1暗青灰色粘土
６層　5Y5/1灰色細粒砂

第９図　第３区西壁面図（Ｓ＝1/40）



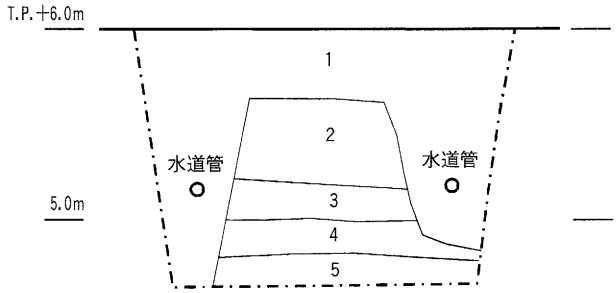
１層　盛土
２層　2.5Y5/6黄褐色粗粒砂混粘土
３層　10YR3/1黒褐色細粒シルト混粘土
４層　5B2/1青黒色粗粒砂混粘土
５層　5Y5/1灰色細粒砂

第10図　第４区西壁面図（Ｓ＝1/40）

3．まとめ

全調査区のT.P.＋4.7～5.3m以下では砂層を確認した。この砂層に相当する堆積層は北西約100mの調査地（当研究会第18次調査の３区）で確認しており、平安時代末の河川の可能性があると指摘されている（岡田清一1996）。この調査成果から、今回確認した砂層は、南東から北西方向に流れ、平安時代～中世に埋没した河川の堆積であると思われる。中世以降は流水堆積を示す砂層の存在がないことから、洪水による浸水の災害は少なく、安定した土地になると思われ、中世以降の遺物が少量ではあるが出土していることや、近世に比定できる井戸を検出していることから、鎌倉時代以降の集落が存在していたと推測される。

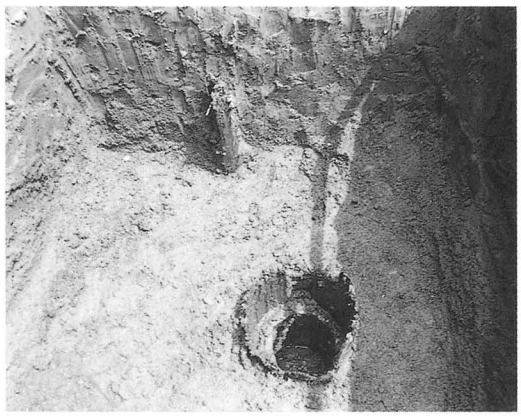
（西村）



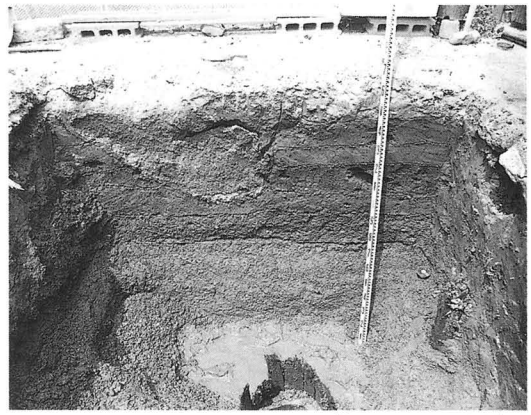
1層　盛土
2層　7.5YR4/3褐色細粒砂混粘土
3層　10YR4/4褐色粗粒砂混粘土
4層　10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土
5層　5Y5/1灰色細粒砂混粗粒砂

第11図　第５区南壁面図（Ｓ＝1/40）

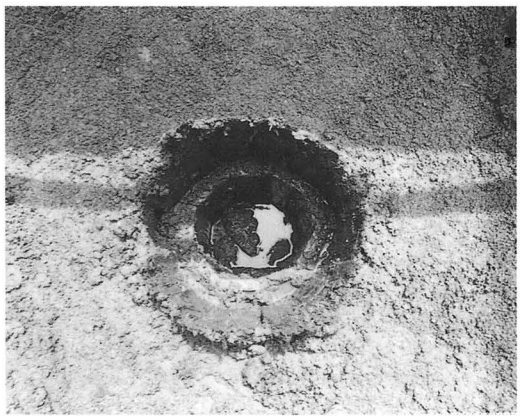
参考文献
・広瀬雅信　1992「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書　第39輯』大阪府教育委員会
・原田昌則・成海佳子　1987「Ⅰ　萱振遺跡Ａ遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』財団法人　八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1990『萱振遺跡発掘調査概要報告　市立八尾中学校体育館建設工事に伴う調査（第２次調査）　府営八尾萱振第３期中層住宅新営工事に伴う調査（第３次調査）』財団法人　八尾市文化財調査研究会
・難波洋三　1992.6「第Ⅴ章　第６節　徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』財団法人　大阪市文化財協会
・岡田清一　1996「Ⅴ　萱振遺跡（第18次調査）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告53』（財）八尾市文化財調査研究会



第２区　井戸検出状況（南から）

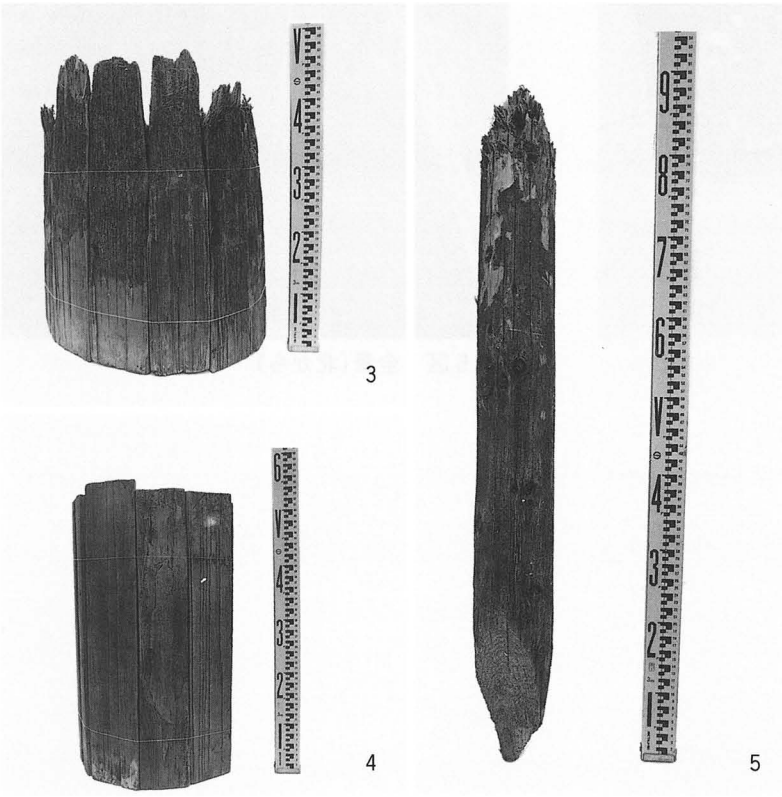


第２区　西壁断面



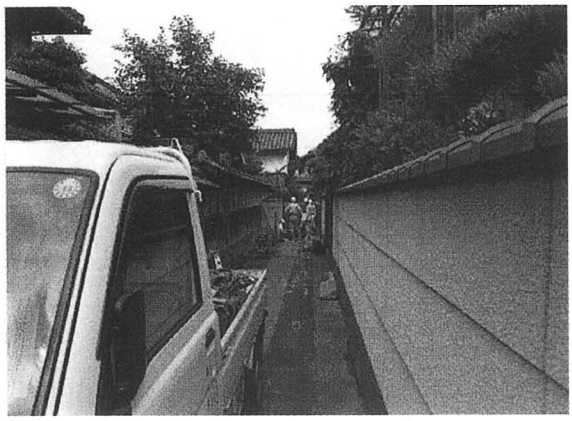
第２区　井戸側内（西から）

第２区　発掘風景（南東から）



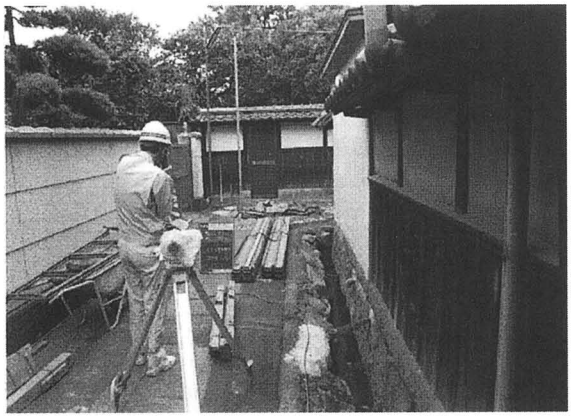
３－第２区　井戸側上段
４－第２区　井戸側下段
５－第２区　丸太材

図版 二

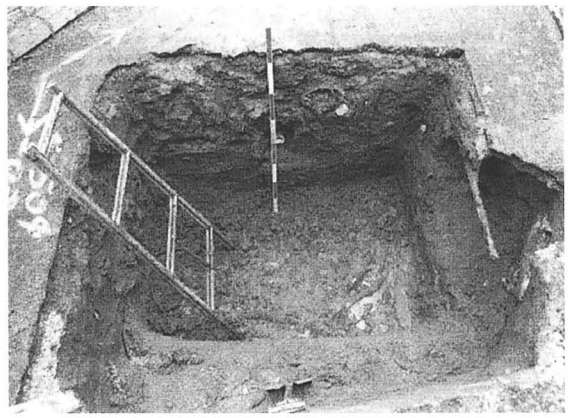


第３区　調査状況（東から）

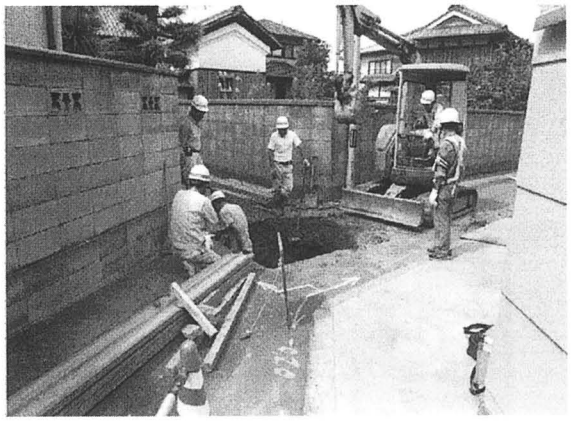
第３区　全景（東から）



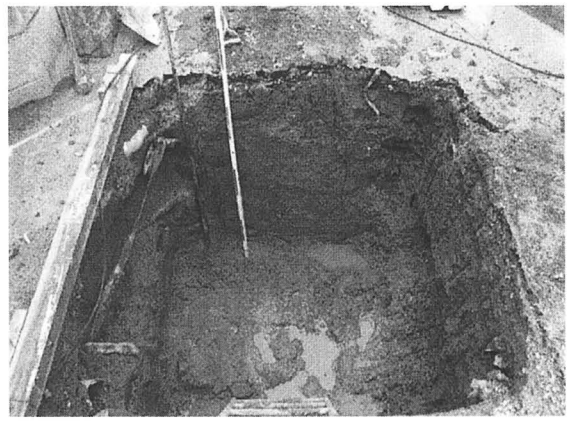
第４区　調査状況（西から）



第４区　全景（東から）



第５区　調査状況（北東から）



第５区　全景（北から）

XI　木の本遺跡第８次調査（ＳＫ2001－８）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市南木の本２丁目・北木の本４丁目地内で実施した公共下水道工事（13－29工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する木の本遺跡第８次調査（ＳＫ2001－８）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第埋第353号　平成14年１月11日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成14年２月１日～７月10日（実働４日、うち夜間３日）にかけて、高萩千秋・岡田清一・樋口　薫を担当者として実施した。調査面積は約46.37㎡である。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成14年９月24日に終了した。

1．本書の執筆・編集は、高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……95

2．調査概要……95

　1）調査の方法と経過……95

　2）検出遺構と出土遺物……96

3．まとめ……97

XI　木の本遺跡第８次調査（ＳＫ2001－８）

１．はじめに

木の本遺跡は八尾市南部にあたる木の本１丁目、南木の本２～７丁目付近一帯をその範囲としている。地理的には旧大和川の支流であった平野川の左岸に広がる沖積地に位置する。

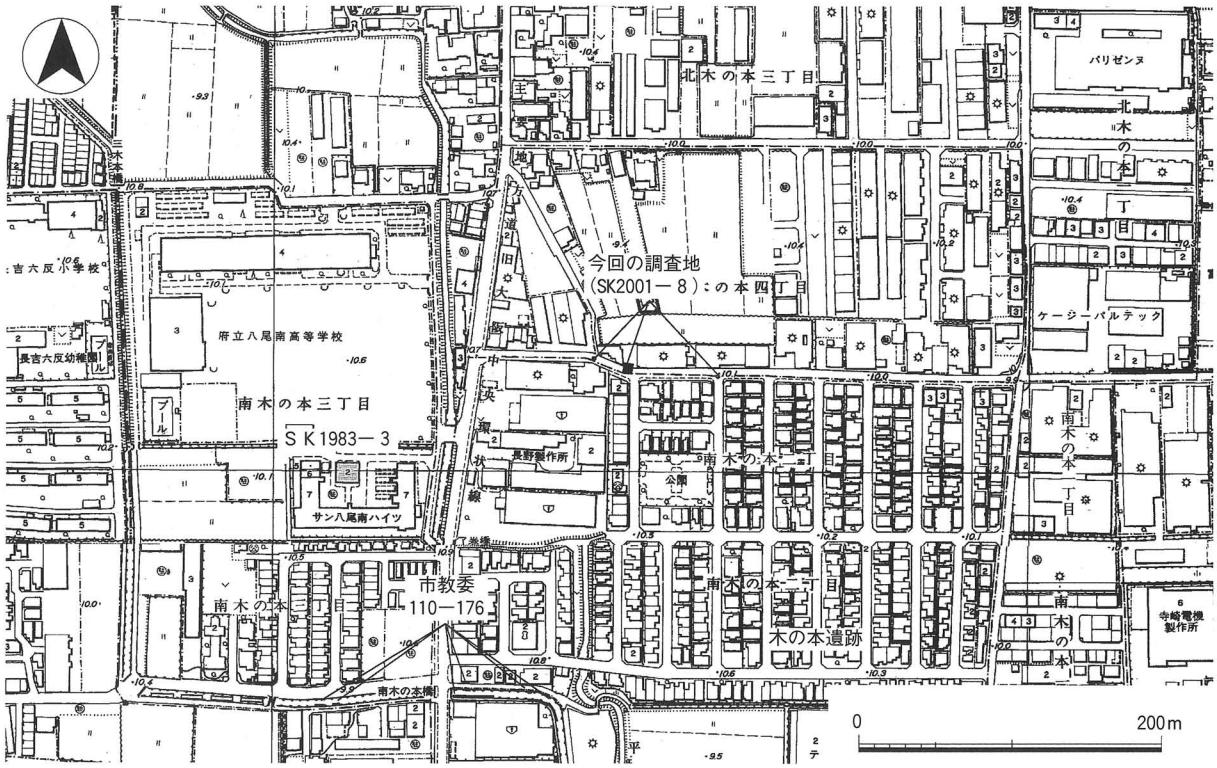
当遺跡内では大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会による調査が数件行われている。これらの成果から、古くは弥生時代～平安時代の遺構・遺物が確認されている。

当遺跡内での調査成果で特筆できるものとしては、当調査研究会が実施した第３次調査で検出した古墳時代前期の掘立柱建物である。その建物跡には柱根が良好な状態で遺存していた。また、大阪府教育委員会が実施している平野川の河川改修に伴う発掘調査で弥生～古墳時代の遺構・遺物が広範囲に存在することが確認されている。

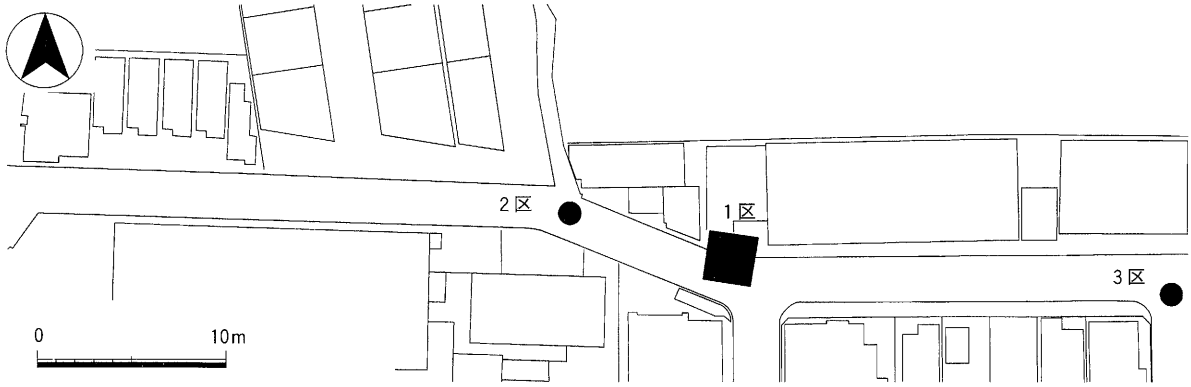
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(13－29工区)に伴う発掘調査である。八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、当調査研究会が事業者と協議を重ね、調査を行った。当調査は当木の本遺跡第８次調査（ＳＫ2001－８）にあたる。調査区は立坑１、ライナー２の３ヶ所で、総調査面積は約46.37㎡を測る。調査期間は、平成14年２月１日～７月10日(実働４日、うち夜間３



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/400）

日）までであった。

調査の方法は、周辺の調査データの結果を参考に作成された指示書に基づいて、現地表（約T.P.＋10.0m）下約1.5～4.0mまでを重機および人力による掘削を実施し、遺構・遺物の検出および記録保存の作成に努めた。なお、第１区（立坑）は平成13年度、２・３区（ライナー）は平成14年度の調査である。

２）検出遺構と出土遺物

基本層序

調査地の現地表面の標高はT.P.＋10.3m前後を測る。当調査地は道路敷きで、埋設工事などによって部分的に削平されている。大半は、そのままの状態で遺存されていた。以下、調査区で得られた地層を精査し、下記を摘出して基本層序とした。

１区

第１層　盛土・攪乱（層厚1.4～2.0m）。盛り土および埋設工事により部分的に現地表下２ｍまで攪乱・削平している。

第２層　淡灰色粗砂～極細砂（層厚0.9m前後）。細～中礫が混じる。

第３層　灰色粘土（層厚0.2～0.3m）。炭酸カルシウムをごく少量含む。

第４層　灰黒褐色粘土（層厚0.1m前後）。植物遺体を極めて多く含む。

第５層　青灰色粘土（層厚0.4m前後）。植物遺体をごく少量含む。

第６層　灰褐色粘土（層厚0.2m前後）。炭化物をごく少量含む。

第７層　灰青色粘土（層厚0.1m以上）。

２区

第１層　盛土・攪乱（層厚0.6～2.2m）。盛り土および埋設工事により部分的に現地表下２ｍまで攪乱、削平している。

第２層　茶灰色粘質シルト（層厚0.4m前後）。

第３層　青灰色粘質シルト（層厚0.2m前後）。

第４層　淡青灰色細砂（層厚0.4m以上）。

３区

第１層　盛土・攪乱（層厚0.6～2.2m）。盛り土および埋設工事により部分的に現地表下２ｍまで攪乱・削平している。

第２層　青灰色粘土（層厚0.2m前後）。

第３層　灰青色粘土（層厚0.6m）。

第４層　淡灰青色粘質シルト（層厚0.35m）。

第５層　暗灰色粘質土（層厚0.1m前後）。多量の植物遺体含む。

第６層　灰色粘土Ⅰ（層厚0.2～0.3m）。

第７層　灰青色粘質シルト。

第８層　灰色粘土Ⅱ。

検出遺構・出土遺物

調査の結果、現地表下約1.5～3.8m（標高6.0～8.3m）の層でほぼ水平に堆積する地層を検出した。１・２区ではT.P.＋８～９ｍで河川跡と思われる約１ｍの砂層の堆積がみられた。東側の３区にはなかった。また、１・３区ではT.P.＋7.3～7.5mで層厚0.1mの地層に多量の植物遺体を含む層を確認した。

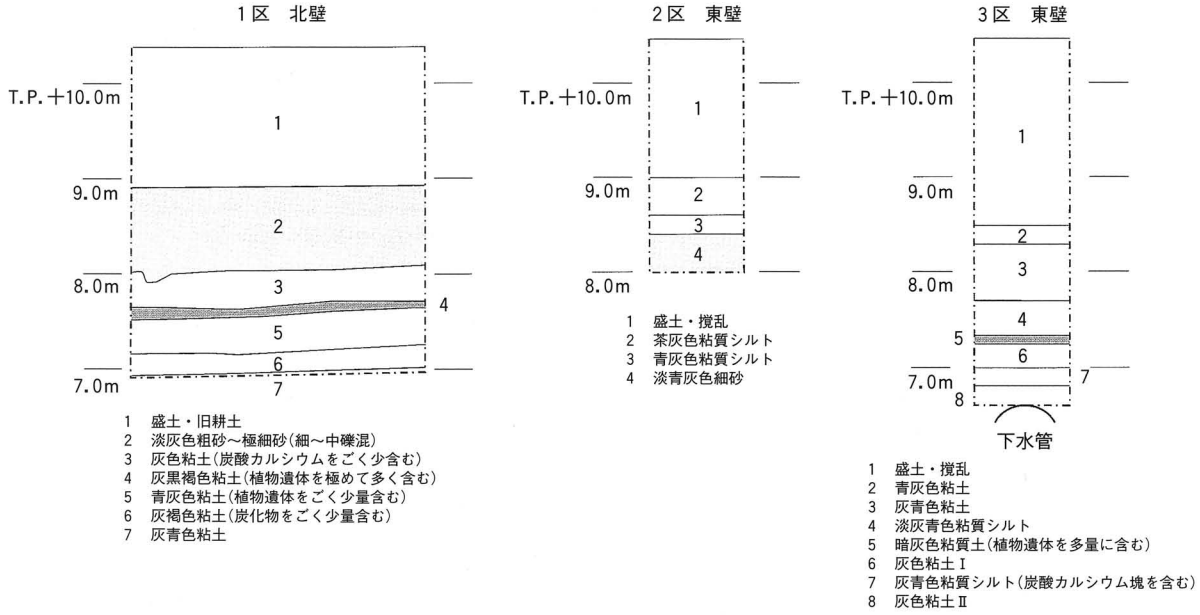
遺物については各調査区ともに確認できなかった。

３．まとめ

今回の調査は立坑１・ライナー２の３ヶ所である。調査区は大阪府教育委員会が実施した平野川河川改修工事に伴う発掘調査で弥生～古墳時代の遺構・遺物が検出されている所から東側約100m付近に位置する調査区であったが、時期を決定づける地層はなかった。

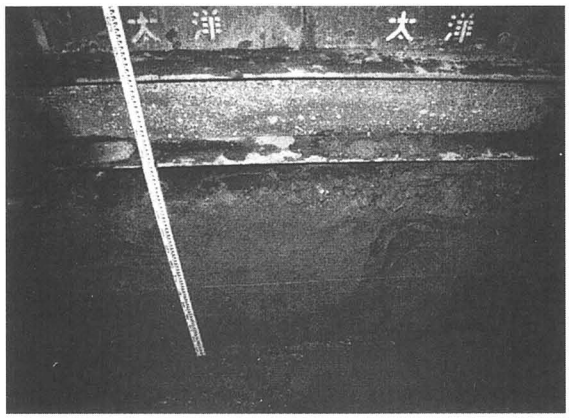
参考文献

・岡田清一　1998「Ⅶ　木の本遺跡（第７次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』　（財）八尾市文化財調査研究会

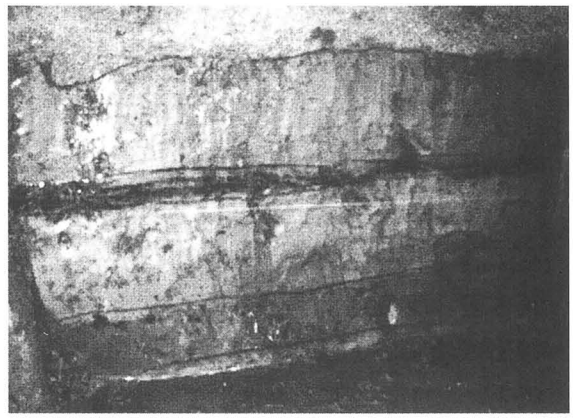


第３図　基本層序柱状図（Ｓ＝1/100）

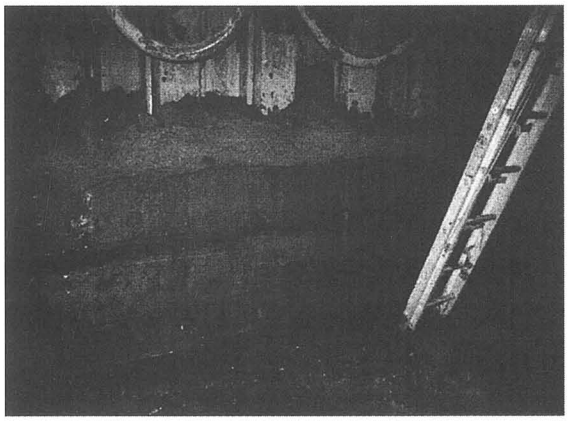
図版一



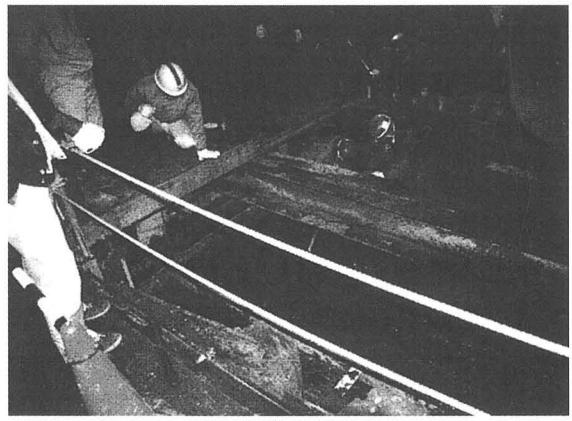
1区　北壁T.P.＋8.5～9.5m



1区　北壁T.P.＋6.9～8.5m



1区　北壁T.P.＋6.9～8.5m



1区　掘削状況(南から)

2区　掘削状況(東から)

3区　T.P.＋7.0m前後(西から)

2区　掘削状況(東から)

3区　掘削作業状況(東から)

XII　久宝寺遺跡第38次調査（ＫＨ2001－38）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市北亀井町２・３丁目地内で実施した公共下水道工事（13－20工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第38次調査（ＫＨ2001－38）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第埋第291号　平成13年11月19日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成14年１月９日～10月10日（実働８日、うち夜間５日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。なお、夜間調査については、成海佳子、西村公助、岡田清一、樋口薫の協力を得た。調査面積は約53㎡である。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成14年12月20日に終了した。

1．本書の執筆・編集は、高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……99
2．調査概要……99
　1）調査の方法と経過……99
　2）検出遺構と出土遺物……100
　　1区……100
　　2区……100
　　3区……101
　　4区……101
　　5区……101
　　6区……101
　　7区……101
3．まとめ……101

XII　久宝寺遺跡第38次調査（ＫＨ2001－38）

１．はじめに

久宝寺遺跡は八尾市西部にあたり、行政区画では北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井・渋川町・跡部北の町がその範囲としている。地理的には旧大和川の主流であった長瀬川左岸に広がる沖積地上に位置する。

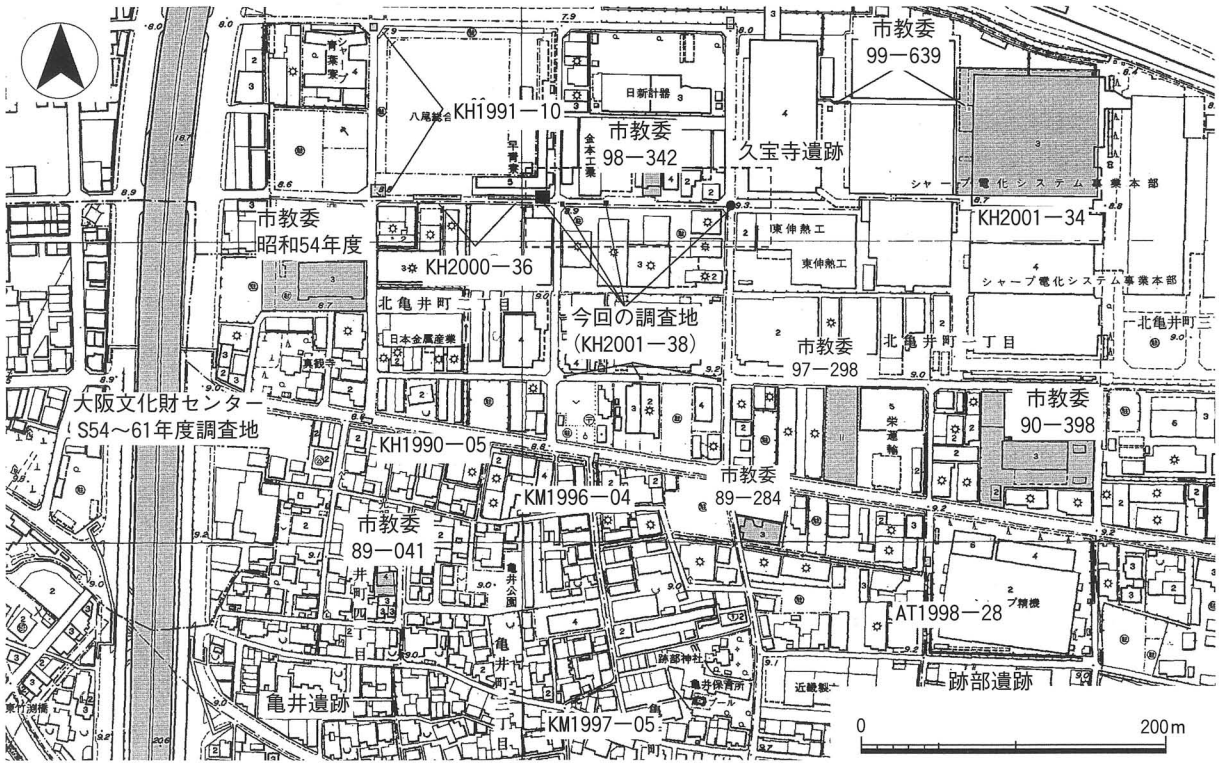
当遺跡内では大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター(旧大阪府文化財研究調査センター)・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会による調査が数十件行われている。これらの成果から、古くは縄文時代後期から確認されているが、明確な遺構の痕跡が見られるのは弥生時代前期以降である。その後広く展開するのは弥生時代後期～古墳時代前期にかけての時期であることが現在までの調査で確認されている。

今回の調査地近接で特筆できる成果としては、当調査研究会が実施した第９次調査で検出した古墳時代前期の前方後方墳、第37次調査で検出した小さな木棺を埋葬した古墳時代前期の方墳、第25次調査で検出した古墳時代後期の水田遺構などである。

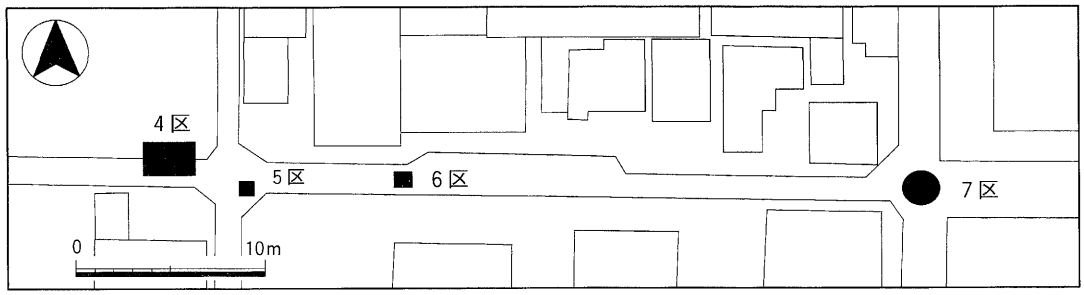
２．調査概要

１）調査の方法と経過

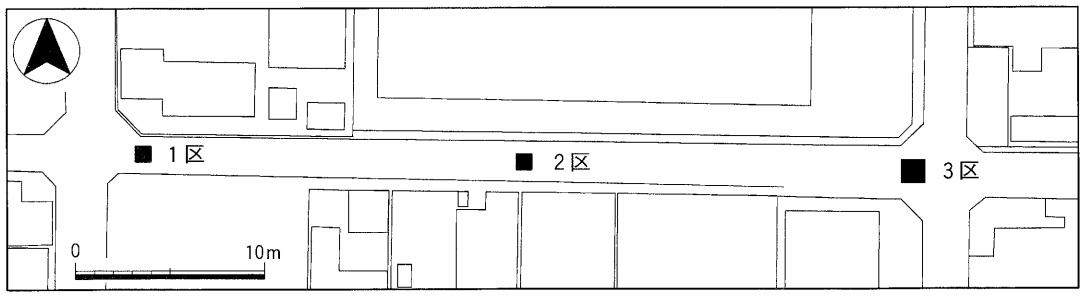
今回の調査は公共下水道工事(13－20工区)に伴う発掘調査である。八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、当調査研究会が事業者と協議を重ね、調査を行った。当調査は当遺跡第38次調査(ＫＨ2001－38)にあたる。調査区は立坑１、ライナー１、人孔５の７ヶ所で、総



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）



平成14年度調査区



平成13年度調査区

第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/400）

調査面積は約53㎡を測る。調査期間は、平成14年１月９日～10月10日（うち実働８日間）までであった。

調査の方法は、周辺の調査データの結果を参考に作成された指示書に基づいて、現地表（約T.P.＋8.4～8.5m）下約1.7～3.9mまでを機械および人力による掘削を実施し、遺構・遺物の検出および記録保存の作成に努めた。

２）検出遺構と出土遺物

調査地の現地表面の標高は１区－T.P.＋9.0m前後、２～３区－T.P.＋8.4m前後、４～７区－T.P.＋8.3～8.4mを測る。当調査地は道路敷きで、埋設工事などによって部分的に削平されており、上層部分の大半は、削平を受けていた。以下、各調査区で得られた主な地層および検出遺構・出土遺物について記す。個々の地層については各調査区の地層断面図を参照されたい。

１区

調査地南東部に位置する人孔の調査。東・西・北壁は埋設工事による埋め土で削平を受けており、地層が残存している南壁の観察を行った。現地表面高はT.P.＋9.0m前後を測り、約１m前後までは盛り土である。T.P.＋6.8～7.3mの地層（６灰茶色粗砂混じり細砂・７淡灰色粗砂混じり細砂）は砂層が堆積、T.P.＋6.2m前後の地層（９暗灰色粘土）には植物遺体を含む層が10cm前後の層厚で水平に堆積している。以下、交互に粘土とシルト又は微砂が堆積している。

２区

調査地南中央に位置する人孔の調査。現地表面高はT.P.＋8.5m前後を測り、約0.3～0.4mまでは盛り土である。T.P.＋7.6～8.2mの地層（２暗灰色シルト・３青灰色礫混じりシルト・４暗灰青色微砂混じりシルト）は乱れた地層で、南に隣接する中近世の寺院関連する整地層ではないかと思われる。ごく微量に土師器の細片が混入している。T.P.＋6.5～7.6mの地層（６淡灰茶色

粗砂混じり細砂・７淡青灰色細砂）は砂層の堆積で、東に深くなっている。

３区

調査地南東部に位置する人孔の調査。現地表面高はT.P.＋8.3m前後を測り、約0.6～1.0mまで盛り土、T.P.＋6.7～7.2mの地層（３淡青灰色シルト混じり細砂・４灰青色粗砂混じり細砂）は砂層の堆積で、西側に深くなっている。

４区

調査地北西部に位置する立坑の調査。現地表面高はT.P.＋8.3m前後を測り、約0.6～0.8mまでは盛り土、T.P.＋7.0～7.4mの地層（２灰色微砂・３青灰色シルト質土）にはごく微量の土師器の細片が含んでいる。T.P.＋6.6m前後の地層（６灰白色粗砂～中礫）は砂層、T.P.＋6.0～6.2mの地層（10暗灰色微砂混じり粘質シルト）は多量に植物遺体を含んでいる。

５区

調査地北中央の西よりに位置する人孔の調査。現地表面高はT.P.＋8.3m前後を測り、約0.8m前後まで盛り土、T.P.＋7.0～7.3m（３青灰色シルト質土）の地層内に土師器の小片がごく微量に含まれている。T.P.＋6.0～6.2m（９暗灰褐色微砂混じり粘質シルト）の地層に植物遺体が多量に含まれている。

６区

調査地の中央北の西よりに位置する人孔の調査。現地表面高はT.P.＋8.3m前後を測り、0.8mまで盛り土、以下、水平堆積で、T.P.＋6.2～6.3mの地層（７暗灰褐色粘土）には植物遺体を含む層がみられた。

７区

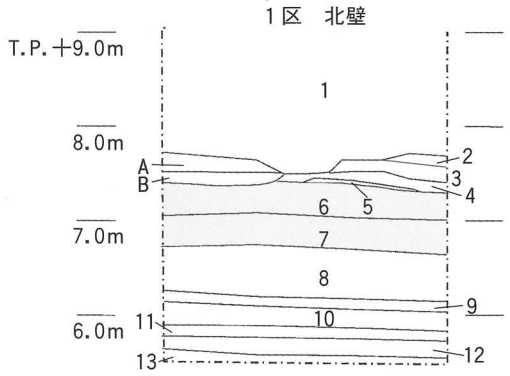
調査地北東部に位置するライナーの調査。現地表面高はT.P.＋8.5m前後を測り、1.8mまで盛り土・客土で、T.P.＋6.6～7.0mの地層（２青灰色中～極粗砂粒砂）とT.P.＋5.6～6.3mの地層（４暗灰色～灰色極粗砂～細礫）は砂層の堆積である。遺物などは確認できなかった。

３．まとめ

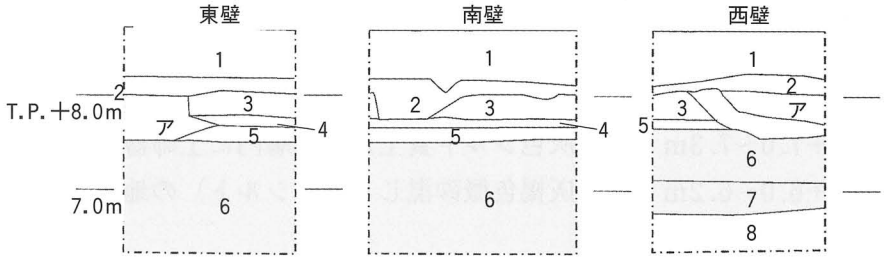
今回の調査は公共下水道工事に伴う立坑１、ライナー１、人孔５の計７ケ所で、広範囲に位置する調査区、さらに夜間調査という条件下であり、各調査区の地層の整合がしにくい状況であった。調査で確認できたものとしては第25次調査（註１）で検出している古墳時代中期の水田の広がりが４～６区で確認できた。水田面上層には多量の植物遺体が含む層が約10～15cmの厚みで水平に堆積していた。１～３区では河川の堆積と思われる砂層が確認できた。

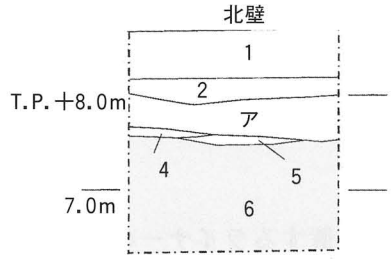
参考文献

・原田昌則・坪田真一・森本めぐみ・古川晴久　2000　「8.久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98－25）」『平成11年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』　財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　2001.6　「7.久宝寺遺跡第36次調査（ＫＨ2000－36）」『平成12年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』　財団法人八尾市文化財調査研究会

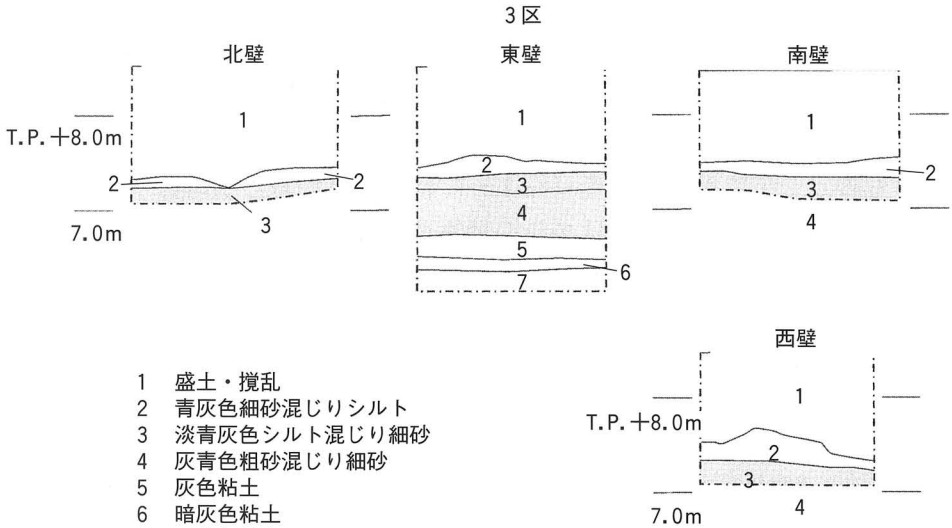


1　盛土
2　乳灰茶色微砂
3　淡灰茶色微砂混じりシルト
4　淡茶色微砂
5　茶灰色シルト
6　灰茶色粗砂混じり細砂
7　淡灰色粗砂混じり細砂
8　灰色粘土(植物遺体を含む)
9　暗灰色粘土(植物遺体を含む)
10　灰色粘土(炭酸カルシウム魂を含む)
11　淡青灰色粗砂
12　灰色粘質シルト(植物遺体を少量含む)
13　青灰色微砂
A　灰褐色シルト
B　灰色粗砂混じりシルト





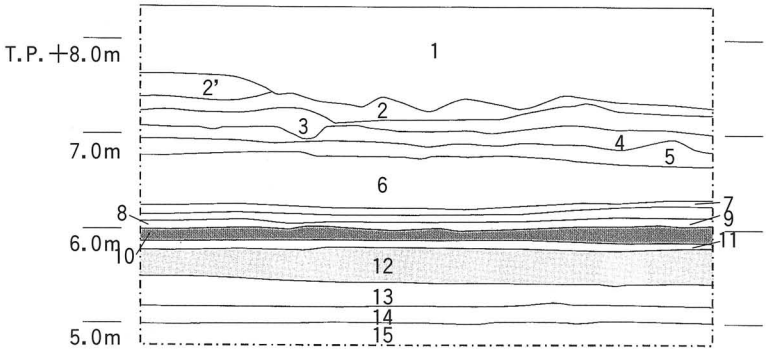
1　盛土
2　暗灰色シルト
3　青灰色礫混じりシルト
4　暗灰青色微砂混じりシルト
5　青灰色シルト混じり細砂
6　淡灰茶色粗砂混じり細砂
7　淡青灰色細砂
8　灰色粘土(植物遺体を少量含む)
ア　暗青灰色細砂混じりシルト
(礫・土師器小片を含む)
イ　暗灰青色頬砂混じりシルト(礫を含む)



1　盛土・撹乱
2　青灰色細砂混じりシルト
3　淡青灰色シルト混じり細砂
4　灰青色粗砂混じり細砂
5　灰色粘土
6　暗灰色粘土
7　灰青色粘土

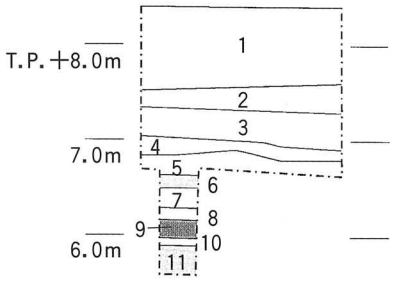
第3図　1～3区断面図(S＝1/80)

4区　南壁



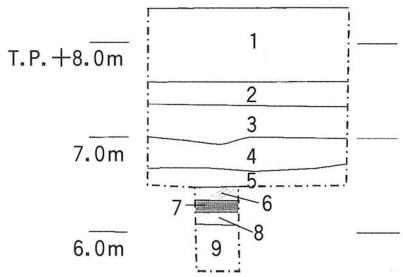
1　盛土
2　旧耕土
3　灰青色シルト質粘土
4　灰褐色シルト（瓦器・土師器含む）
5　茶灰色粘土質シルト
6　乳灰褐色シルト混じり粘土
7　淡灰青色微砂混じり粘土質土
8　灰色粘土Ⅰ
9　暗灰色粘土（植物遺体を多量に含む）
10　灰黄色粘土（炭酸カルシウム含む）
11　淡灰色粘土
12　乳灰色～灰白色細砂（西下がりのラミナ）
13　灰色粘土Ⅱ
14　青灰色粘土（炭酸カルシウム含む）
15　灰青色粘土（炭化物少量含む）

5区　南壁



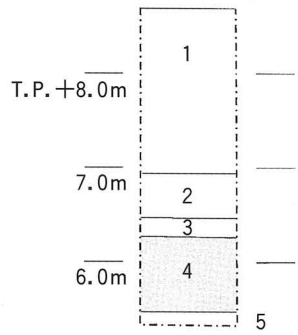
1　アスファルト・バラス等・客土
2　灰色微砂
3　青灰色シルト質土
（土師器片が微量に含む）
4　灰褐色粘土
5　灰青色粘質シルト
6　灰白色粗砂～中礫（上下に細砂）
7　淡青灰色微砂と灰褐色粘土質シルト
（植物遺体を少量含む）
8　灰褐色微砂混じり粘質シルト
9　暗灰褐色微砂混じり粘質シルト
10　暗灰色微砂混じり粘質シルト
11　灰色粗砂～礫

6区　南壁



1　盛土・客土
2　青灰色シルト
3　青灰色粘質シルト
（褐色のマンガンブロックを含む）
4　明茶灰色粘土
5　灰色微砂とシルトのラミナ
（流水堆積）
6　灰色粘土
7　暗灰褐色粘土（植物遺体を含む）
8　灰青色粘土

7区　東壁



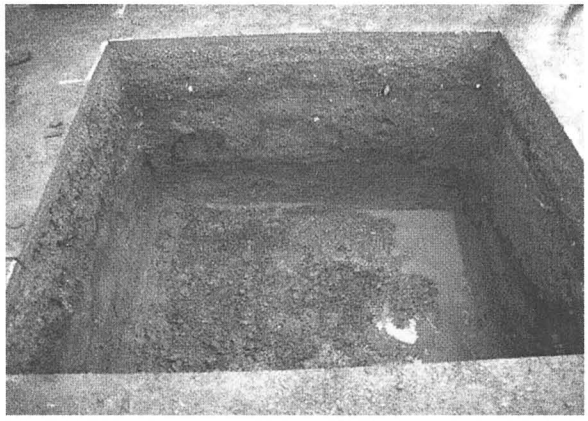
1　盛土・客土
2　青灰色中～極粗粒砂
3　暗灰色粘土質シルト
4　暗灰色～灰色極粗砂～細礫
5　暗灰色粘土～シルト質粘土

第４図　４～７区断面図（Ｓ＝1/80）

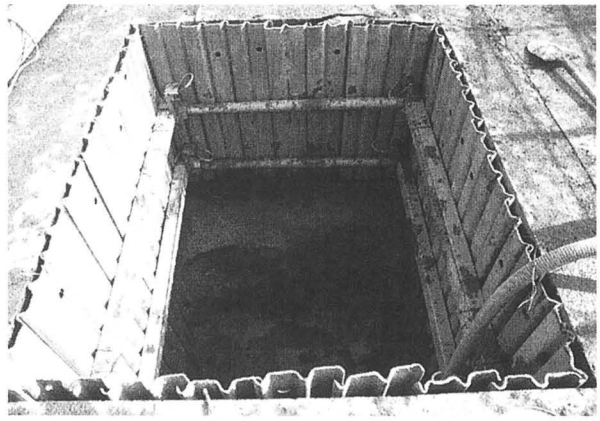
図版一

1区　全景(西から)

1区　下層状況(西から)

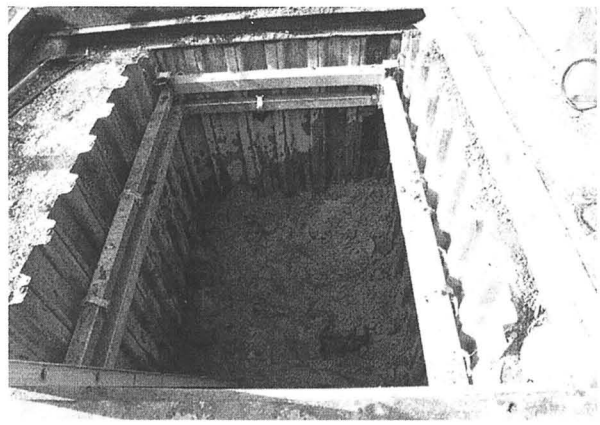


2区　全景(西から)



2区　下層状況(西から)

3区　掘削状況(北西から)

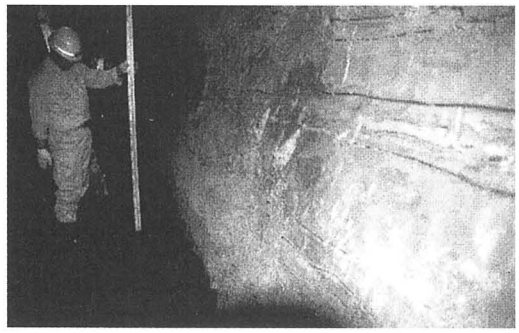


3区　下層状況(北から)

3区　T.P.＋6.3～7.0m(北から)

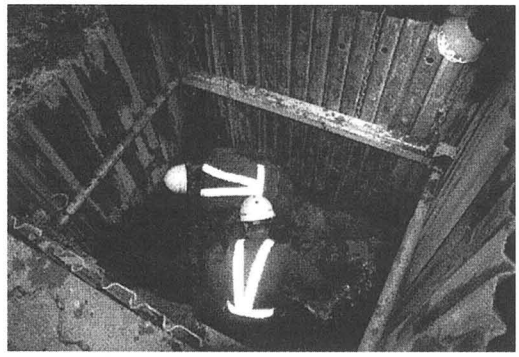
2区　調査状況(南から)

図版　二

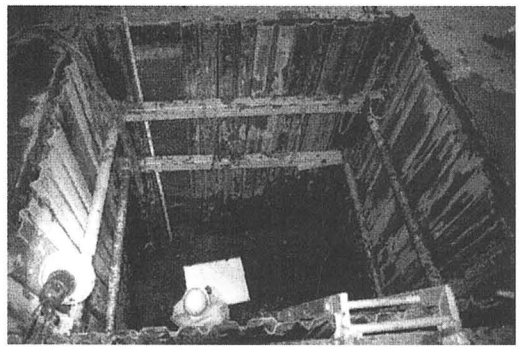


4区北壁　ＧＬ約2～3ｍ

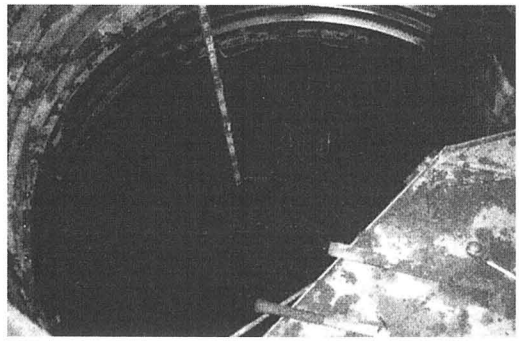
5区南壁　ＧＬ1～2ｍ



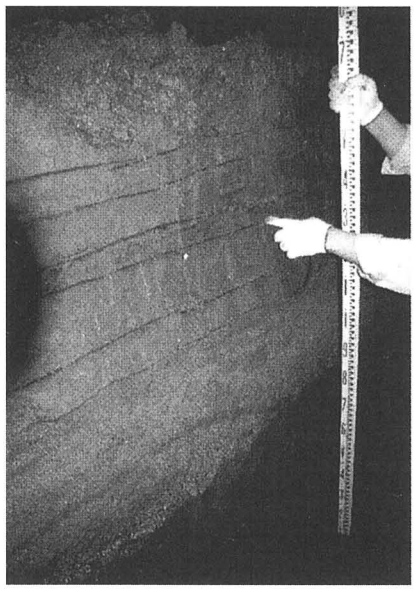
5区　掘削状況（北から）



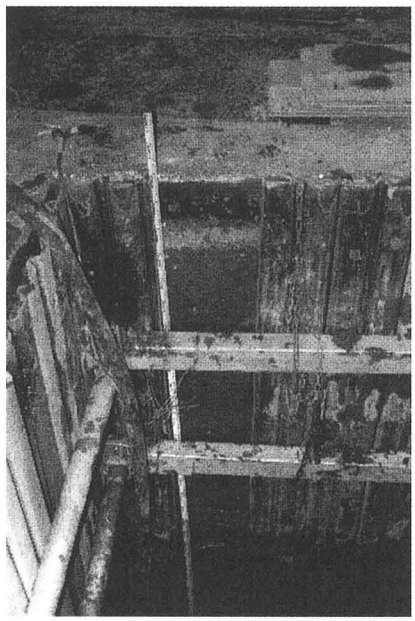
6区南壁　実測風景（北から）



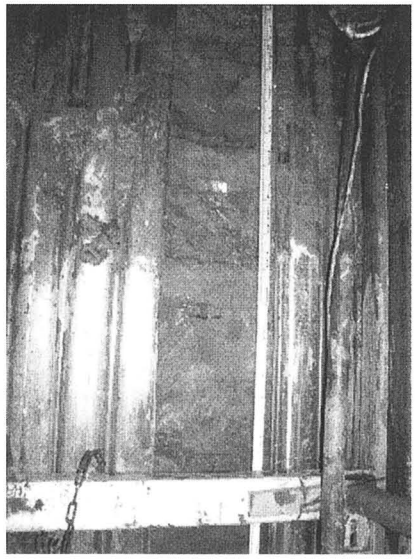
7区　ＧＬ～3ｍ前後の地層状況（西から）



4区北壁　ＧＬ2～3ｍ前後の地層状況



5区南壁　ＧＬ0～2.7ｍ



6区南壁　ＧＬ1～2.5ｍ

XIII　久宝寺遺跡第40次調査（ＫＨ2001－40）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市北亀井町２丁目地内で実施した公共下水道工事（13-19工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第40次調査（ＫＨ2001－40）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第316号　平成13年12月6日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。総調査面積は約53.6㎡である。当調査は下水道工事の都合上、2001年度と2002年度に分けて調査を行ったため、前者を久宝寺遺跡第40次調査（その１）、後者を久宝寺遺跡第40次調査（その２）として報告する。

久宝寺遺跡第40次調査（その１）

1．現地調査は、平成14年2月19日～3月2日（実働６日間）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は25.6㎡を測る。現地調査においては以下の補助員が参加した。

飯塚直世・市森千恵子・岡田佳之・北潟良江・國津れいこ・鈴木祐治（五十音順）

1．内業整理では上記の他、岩沢玲子・岩本順子・加藤邦枝・北原清子・竹田貴子・都築聡子・永井律子・中村百合・横山妙子・吉川一栄の参加を得た。

久宝寺遺跡第40次調査（その２）

1．現地調査は、平成14年7月15日～7月29日（実働７日間）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は28.0㎡を測る。調査においては以下の補助員が参加した。

岩沢玲子･川村一吉･田島宣子･永井律子･村田知子･山内千恵子･吉川一栄･若林久美子

1．本書の執筆及び写真撮影は、（その１）を森本が、（その２）を坪田が行った。

1．内業整理は現地調査終了後、随時行い、すべての内業整理が終了したのは平成14年９月26日である。

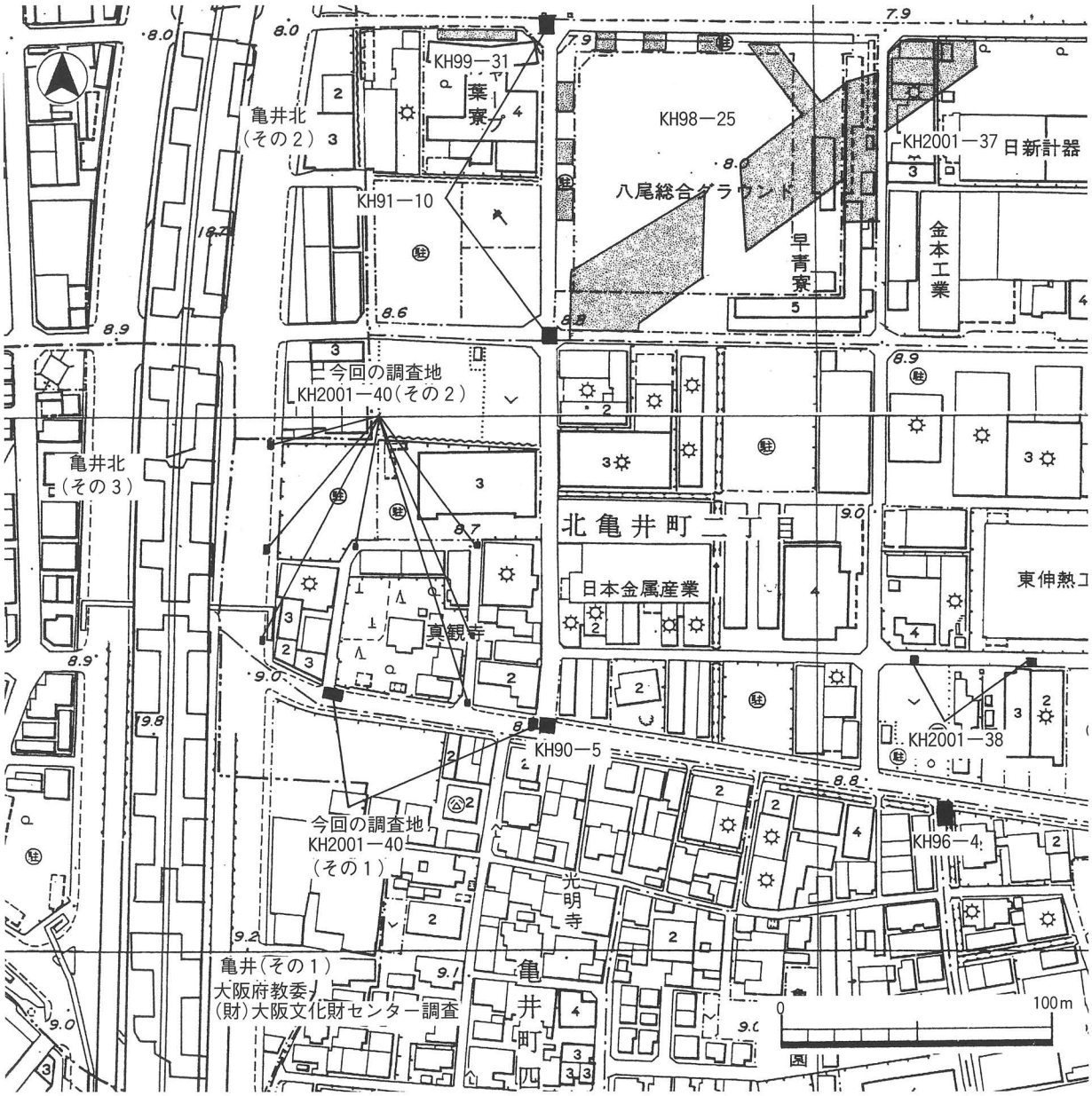
本　文　目　次

1．はじめに ……107
2．調査概要 ……109
＜久宝寺遺跡第40次調査(その１)＞ ……109
　1）調査の方法と経過 ……109
　2）基本層序 ……109
　3）検出遺構と出土遺物 ……111
＜久宝寺遺跡第40次調査(その２)＞ ……114
　1）調査の方法と経過 ……114
　2）検出遺構と出土遺物 ……114
3．まとめ ……117

XIII　久宝寺遺跡第40次調査（ＫＨ2001－40）

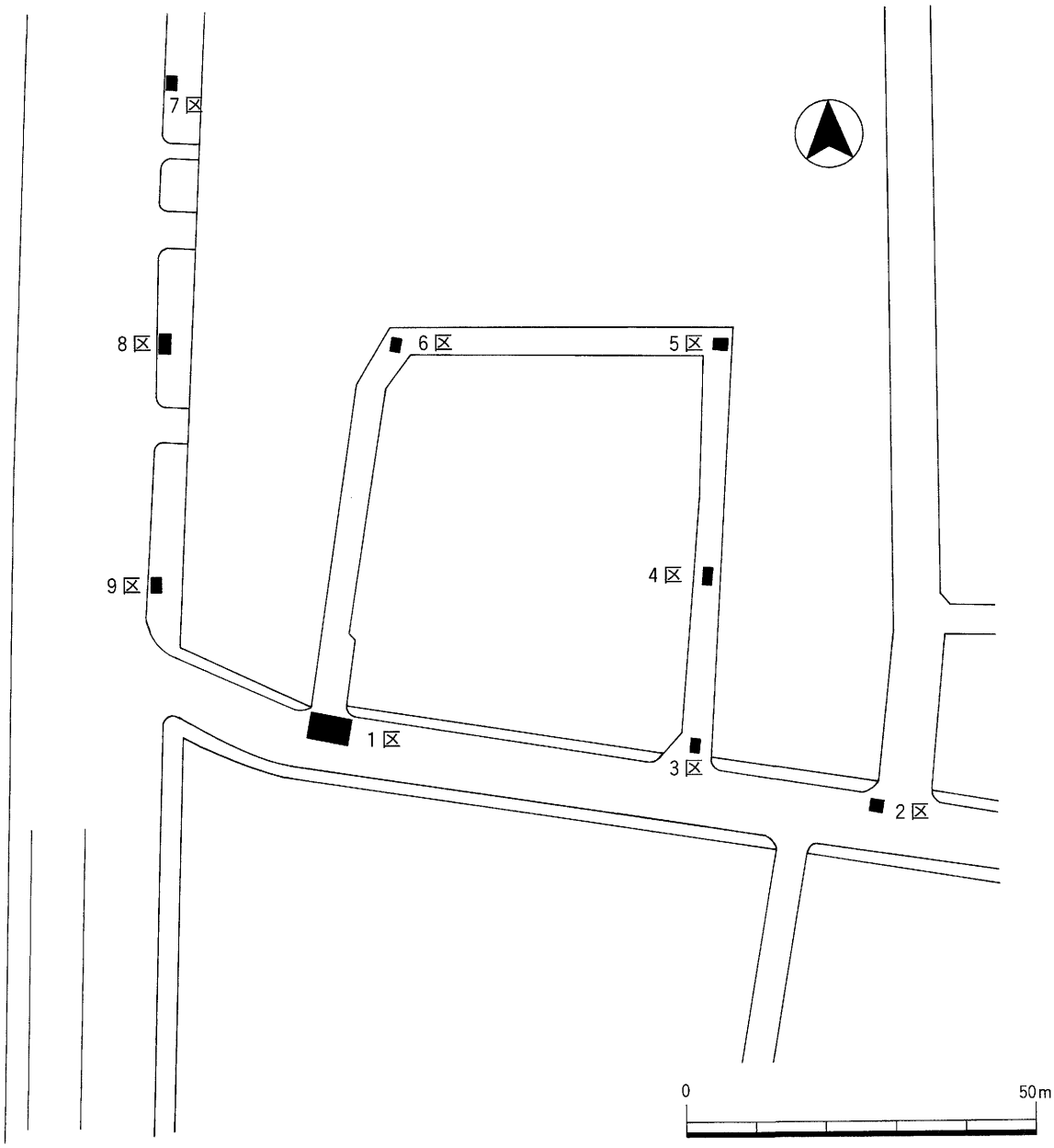
１．はじめに

久宝寺遺跡が所在する八尾市は、大阪府の東部に位置し、地理的には東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画される河内平野の南東部に位置する。この八尾市の中西部に広がる久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に立地している。当遺跡は北西部と西部がそれぞれ東大阪市と大阪市にまたがっている。そのなかでも八尾市域における遺跡範囲は、北久宝寺１～３丁目、西久宝寺、渋川町１～７丁目、大字渋川、北亀井町１～３丁目、大字亀井、神武町の南北約1.5km、東西1.8kmと推定されている。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

当遺跡では、大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センターによって、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う大規模な調査（『久宝寺南（その１）』～『久宝寺南（その３）』・『久宝寺北（その１～３）』）が行われ（1980～1986）、縄文時代～現代に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも古墳時代前期の溝から出土した準構造船は当時の船の構造を知る上で貴重な資料となっている。これら以外でも、当調査研究会によって40次にわたる調査が行われているなど多くの調査が実施されてきた。特に当調査地の北西約600mに位置する旧国鉄竜華操車場内では、（財）大阪府文化財センター、八尾市教育委員会（以下市教委）、当調査研究会によって広範囲にわたって調査が行われており、弥生時代前期～近代にかけての遺構・遺物が多数検出されている。これらの調査により、久宝寺遺跡南東部の歴史が考古学的に解明される日も近い。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/100）

２．調査概要

＜久宝寺遺跡第40次調査（その１）＞

１）調査の方法と経過

今回の調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第40次調査にあたる。調査は市教委の指示書に基づき、現地表（T.P.＋8.1～8.4m）下約1.2～1.5mを機械掘削範囲とし、以下、工事掘削深度であるT.P.＋3.6～3.8m前後まで機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。当調査は例言で述べた通り、年度をまたいでの調査となったため、（その１）と（その２）の２回に分けて調査を行った。（その１）では、立孔部分２ヶ所を調査対象とした。調査区名は調査を行った順に、真観寺の南西に位置する立坑を１区、１区より東約75mに位置する立坑を２区と呼称した。

２）基本層序

１区

100　盛土。

101　10YR4/1灰色極細粒砂～極粗粒砂混粘土。

102　7.5Y3/2オリーブ黒色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。

103　5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～粗粒砂混粘土。

104　7.5GY3/1オリーブ黒色粘土。東にいくにつれ、極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトとなる。

105　10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混シルト質粘土。

106　10Y4/1灰色シルト～粗粒砂。

107　10GY3/1暗緑灰色シルト質粘土～シルト。

108　5GY2/1オリーブ黒色シルト混粘土。

109　5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土。下部に5GY5/1オリーブ灰色の粘土ブロックを含む。

110　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土。上部に5GY5/1オリーブ灰色の粘土ブロックを含む。

111　10GY2/1緑黒色シルトを少量含む粘土。

112　10GY/1暗緑灰色シルト～極細粒砂を極少量含む粘土。10GY3/1暗緑灰色粘土ブロック含む。

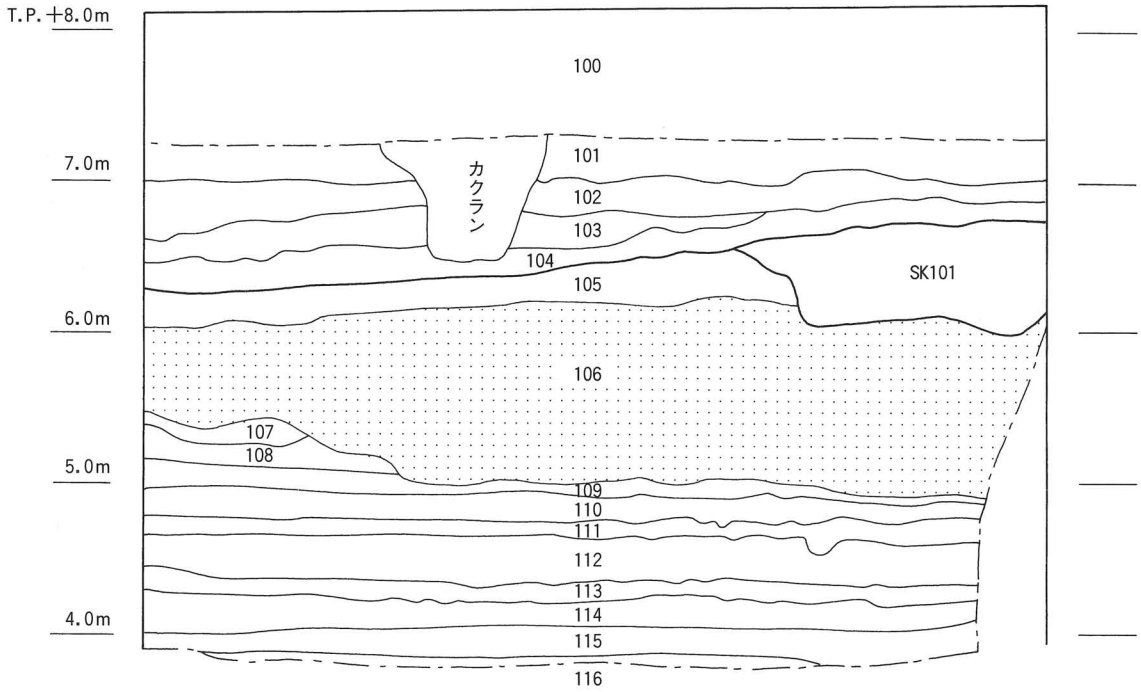
113　10GY2/1緑黒色シルト～極細粒砂を極少量含む粘土。

114　7.5GY4/1暗緑灰色粘土。下部にシルトを層状に含む。

115　7.5GY2/1緑黒色粘土。下部にシルト～極細粒砂を含む。

116　10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト。下部ほど砂質となる。

101層・102層は中世～近世の土師器・瓦器・陶磁器・瓦などを含む層である。最も多いのは瓦で、丸瓦・平瓦・軒丸瓦などの破片が出土した。103・104層は植物遺体を多く含む層で、湿地状の堆積を示している。105層上面では、北壁で確認できただけであるが、東に向かって落ち込む遺構を検出した（ＳＫ101）。また、T.P.＋6.4m前後まで掘削した段階で検出したＳＫ102も105層上面を構築層としている可能性が高い。106層はラミナが観察できる流水堆積層で上部から庄内式土器の破片が１点出土した。106層上面では、ＳＫ103とＳＷ101を検出した。そして、T.P.＋4.8m以下で確認した111・113・115層は、周辺の調査でも広く確認されている黒色粘土層に相当すると思われる。107層以下では遺物は出土しなかった。



1区
100　盛土
101　10YR4/1灰色極細粒砂～極粗粒砂混粘土
102　7.5Y3/2オリーブ黒色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
103　5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～粗粒砂混粘土
104　7.5GY3/1オリーブ黒色粘土　東にいくにつれ、
　　極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトとなる
105　10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混シルト質粘土
106　10Y4/1灰色シルト～粗粒砂
107　10GY3/1暗緑灰色シルト質粘土
108　5GY2/1オリーブ黒色シルト混粘土
109　5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土
　　下部に5GY5/1オリーブ灰色の粘土ブロックを含む
110　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土
　　上部に5GY5/1オリーブ灰色の粘土ブロックを含む
111　10GY2/1緑黒色シルトを少量含む粘土
112　10GY/1暗緑灰色シルト～極細粒砂を極少量含む粘土
　　10GY3/1暗緑灰色粘土ブロックを含む
113　10GY2/1緑黒色シルト～極細粒砂を極少量含む粘土
114　7.5GY4/1暗緑灰色粘土　下部にシルトを層状に含む
115　7.5GY2/1緑黒色粘土　下部にシルト～極細粒砂を含む
116　10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト

第３図　１区北壁断面図（Ｓ＝1/50）

２区

200　盛土。

201　2.5Y2/1黒色粘土質シルト。

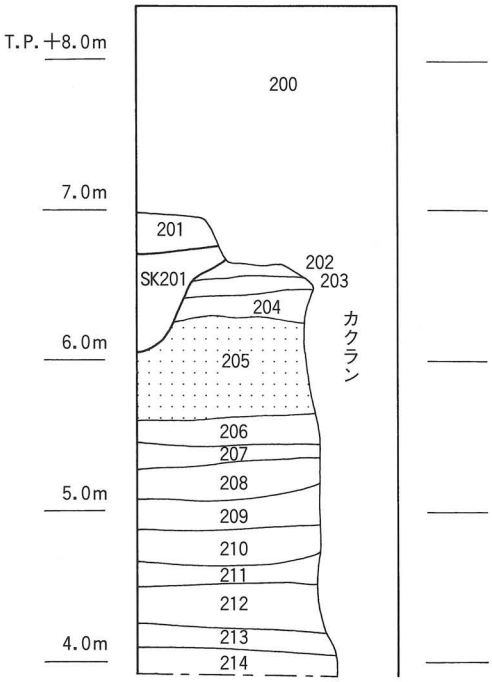
202　5G4/1暗緑灰色細粒砂～極粗粒砂。

203　10GY2/1緑黒色極細粒砂混シルト質粘土。

204　5G3/1暗緑灰色シルト～極細粒砂混シルト質粘土。

205　10GY4/1暗緑灰色シルト～極粗粒砂。下部ほど粗粒砂。

206　10Y3/1オリーブ黒色粘土。下部にシルトの薄層含む。



２区
200　盛土
201　2.5Y2/1黒色粘土質シルト
202　5G4/1暗緑灰色細粒砂～極粗粒砂
203　10GY2/1緑黒色極細粒砂混シルト質粘土
204　5G3/1暗緑灰色シルト～極細粒砂混シルト質粘土
205　10GY4/1暗緑灰色シルト～極粗粒砂。下部ほど粗粒砂
206　10Y3/1オリーブ黒色粘土　下部にシルトの薄層含む
207　10GY3/1暗緑灰色極細粒砂混粘土
208　7.5GY2/1緑黒色極細粒砂～細粒砂混粘土
209　10GY3/1暗緑灰色極細粒砂混粘土　下部にシルトの薄層含む
210　10GY2/1緑黒色粘土　上部にシルトを含む
下部に10GY4/1暗緑灰色粘土ブロック含む
211　10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土
上部に10GY2/1緑黒色粘土ブロックを含む
212　10GY3/1暗緑灰色粘土　10GY4/1暗緑灰色粘土ブロックを含む
213　5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト
214　2.5GY2/1黒色粘土

第４図　２区北壁断面図（Ｓ＝1/50）

207　10GY3/1暗緑灰色極細粒砂混粘土。
208　7.5GY2/1緑黒色極細粒砂～細粒砂混粘土。
209　10GY3/1暗緑灰色極細粒砂混粘土。下部にシルトの薄層含む。
210　10GY2/1緑黒色粘土。上部にシルトを含む。下部に10GY4/1暗緑灰色粘土ブロック含む。
211　10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土。上部に10GY2/1緑黒色粘土ブロックを含む。
212　10GY3/1暗緑灰色粘土。10GY4/1暗緑灰色粘土ブロックを含む。
213　5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト。東ほどシルト優勢。
214　2.5GY2/1黒色粘土。

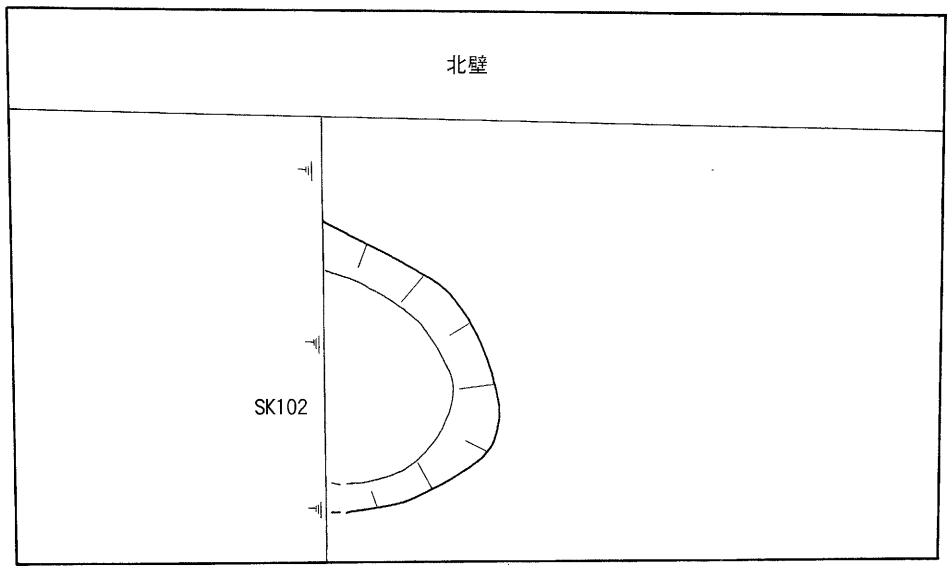
調査区東側約1/3の撹乱は、久宝寺第５次調査で調査が行われた部分である。その際のものか、上部も撹乱を受けていたため、201層下面で西に向かって落ち込む遺構（ＳＫ201）を確認したが、構築面は明確にできなかった。そして、205層はラミナが観察できる流水堆積層で、１区の106層に相当する。以下、１区と同様、黒色粘土層に相当すると思われる208・210・212・214層を確認した。そして、214層以下はT.P.＋3.6m付近まで粘土層が続くことを確認した。また、出土遺物については、ＳＫ201出土の土師器の他は機械掘削中に陶磁器類が少量出土したのみである。

３）検出遺構と出土遺物

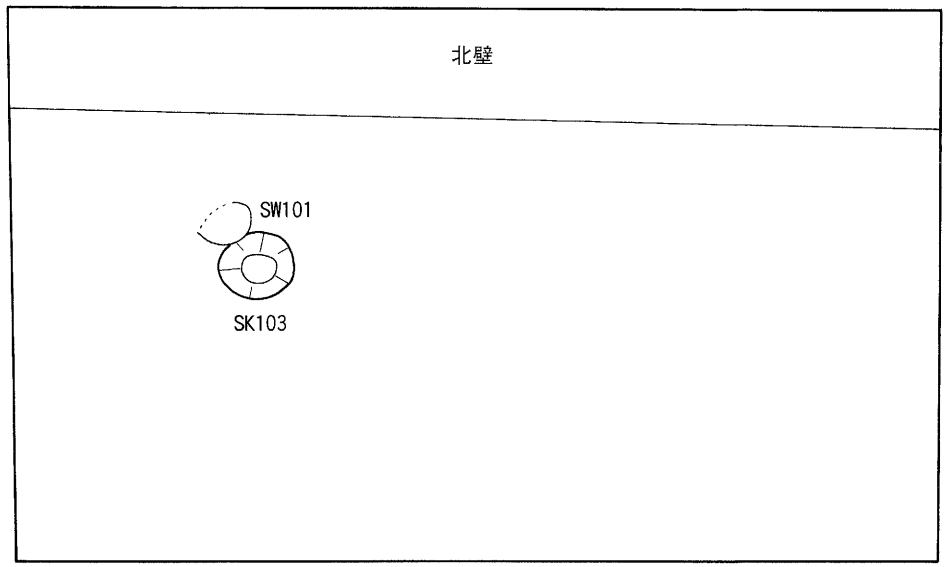
１区

１区では土坑（ＳＫ101～103）と土器集積（ＳＷ101）を検出した。

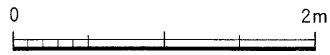
土坑（ＳＫ）



105層上面検出遺構



106層上面検出遺構



第５図　１区検出遺構平面図（Ｓ＝1/50）

ＳＫ101

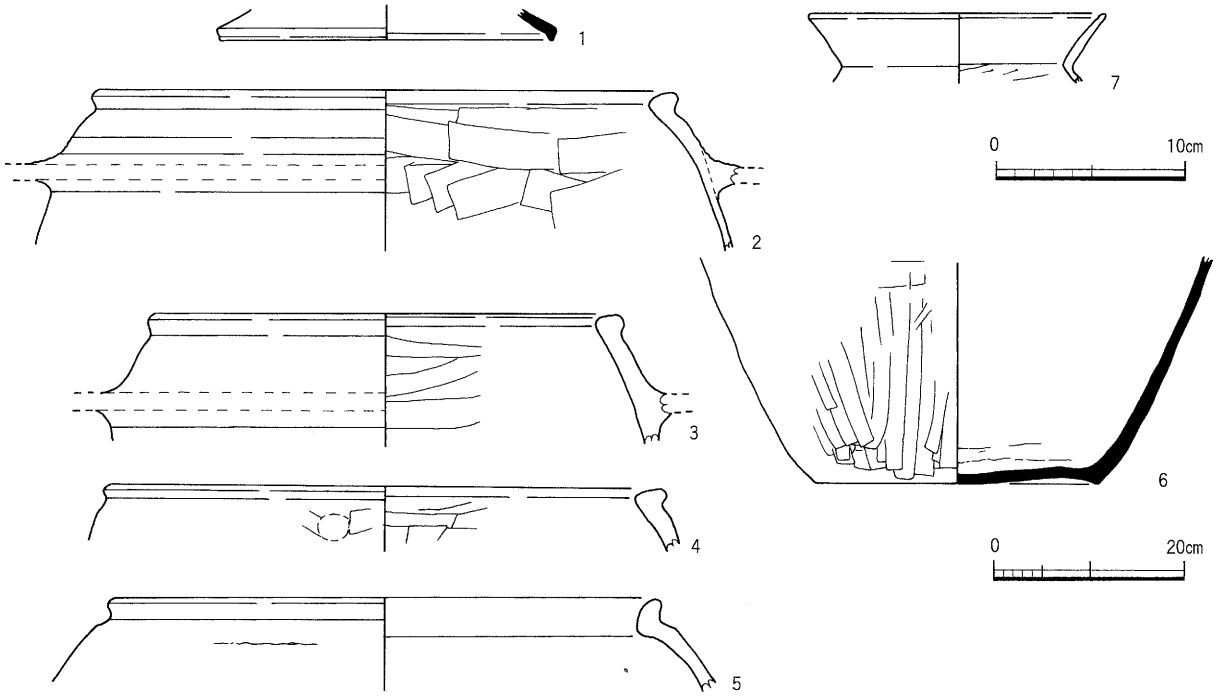
前述した通り、北壁断面で確認できたのみで、平面的には検出できなかった。105層上層から切りこむ遺構で、東西幅約2.0m、深さ約0.6mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土（5GY4/1暗オリーブ灰色粘土と7.5GY2/1緑黒色粘土のブロックを含む）の単一層で、植物遺体を多く含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ102

T.P.＋6.4m前後、調査区の中央部で検出した。調査の際、調査区の西側約1/3をT.P.＋6.1m前後まで掘削してから、東側を掘削した。当遺構は、先に掘削した西側では遺構を確認できなかったので東側だけの検出となった。検出できた遺構の南北幅は約1.9m、深さは0.34mを測る。埋土は、10GY4/1暗緑灰色極細粒砂混シルト質粘土（10GY2/1緑黒色シルト質粘土ブロックを含む）の単一層である。どの層から切りこむ遺構であるかは確認できなかった。遺物は須恵器・土師器・瓦器・羽釜・瓦等が出土している。なかでも遺構の中央付近では羽釜の破片がややまとまって出土した。出土した遺物のうち２点（１・２）を図化した。１は須恵器の杯蓋の口縁部である。時期は８世紀初頭に比定できる。他の遺物とは時期が離れており、混入品の可能性が高い。２は口径30.2cm（残存率1/6）を測る羽釜の口縁部である。出土した羽釜の内、図化できたのは１点だけであるが、その他の破片を観察すると、同一個体ではないものが含まれており、数個体分が存在する様である。

ＳＫ103

最初に掘削した調査区の西側部分、T.P.＋6.1m前後の106層上面で検出した。平面形状は径約0.5mを測る円形で、深さは約0.1mを測る。埋土は7.5Y2/1黒色粘土質シルト（下部にシルトを層状に含む・植物遺体を含む）の単一層である。遺物は出土していない。



第６図　１区出土遺物実測図（Ｓ＝1/4　６のみＳ＝1/8）

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ101

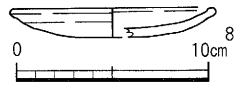
ＳＫ103と同様、調査区の西側部分、T.P.＋6.1m前後の106層上面で検出した。ＳＫ103のすぐ北側に位置する。掘形は確認できなかったが、106層に正位で埋まった状態の羽釜の体部を検出した。また、周辺から羽釜の破片が多く出土したため土器集積とした。出土した羽釜の口縁部の形態をみると、数個体分が出土している。その内の３点（３～５）を図化した。３～５は羽釜の口縁部である。３・４は玉縁状の口縁部を持つ。５は頸部からほぼ直に立ちあがる口縁部をもつ。いずれも残存状況が不良で、鍔部まで復元できる物はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

前述したとおり、101・102層内からは中世～近世に比定できる遺物が、106層内からは古墳時代初頭に比定できる遺物が出土している。その内の２点（６・７）を図化した。６は102層内から出土した底径29.3cmを測る備前焼甕の底部である。色調は赤褐色を呈する。外面には板ナデの痕跡がみられる。７は106層内から出土した庄内式期の甕の口縁部である。口縁端部は若干丸みを帯びる。内面のヘラケズリは頸部まで施されているが、ややシャープさには欠ける。色調は暗褐色を呈し、角閃石を含む生駒西麓産の胎土を持つ。

２区

検出できた遺構は、北壁で確認した201層下面から西に向かって落ち込む土坑（ＳＫ201）のみである。



第７図　ＳＫ201出土遺物実測図(S=1/4)

土坑（ＳＫ）

ＳＫ201

上面は撹乱を受けており、遺構の構築面は不明である。東西幅は0.55m以上、深さは約0.65mを測る。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色シルト混シルト質粘土（7.5GY2/1緑黒色粘土ブロックを含む）の単一層である。遺物は図化した１点（８）出土のみである。８は口径10.5cm、残存高1.5cmを測る土師器小皿である。口縁端部は丸くおさまる。調整は内外面とも横ナデを施す。

＜久宝寺遺跡第40次調査（その２）＞

１）調査の方法と経過

その２の調査対象となったのは人孔部分７箇所（３～９区）である。調査では現地表（T.P.＋8.1～8.6m）下0.5～1.8mまでを機械掘削し、以下の約1.5mを人力・機械掘削を併用して調査を実施した。

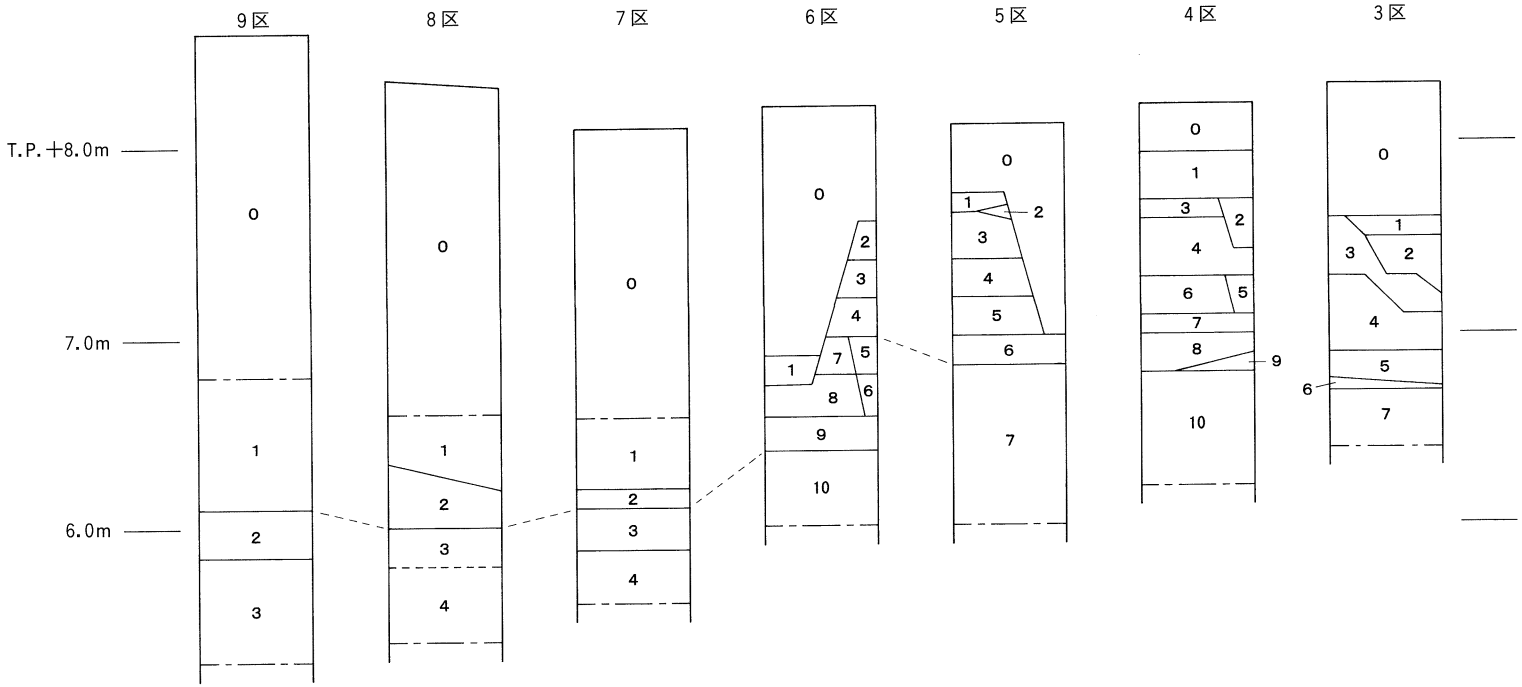
２）検出遺構と出土遺物

３区

１層は旧耕土。２・３層は含水量が多く、２～６層に非常に多く斑鉄が認められることからも、作土層と考えられる。４層以下は水成層である。遺物は３層から土師器皿が１点出土している。

４区

１層は炭や焼土を多く含む不均質な層相である。整地層と思われるが、レベル的にも高く、削平されているのか他の調査区では見られない。時期等は不明であるが、近世の真観寺焼失(1615・1671年)に伴う整地層かもしれない。３層の砂層は一時的な冠水によるものと推察され、



〈7区〉
0．盛土・撹乱
1．2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混シルト質粘土　植物遺体多量
2．7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂～シルト　植物遺体
3．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　植物遺体多量
4．5Y4/1灰色シルト質粘土　植物遺体多量
〈8区〉
0．盛土・撹乱
1．7.5Y5/1灰色粘土～中礫砂互層　上部鉄分
2．N6/0灰色細粒砂～粗粒砂互層　植物遺体少量（ラミナ状）
3．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～粘土互層　植物遺体多量（ラミナ状）
4．N3/0暗灰色粘土
〈9区〉
0．盛土・撹乱
1．N6/0灰色～N7/0灰白色細粒砂～粗粒砂互層
2．5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土　植物遺体多量（ラミナ状）　炭酸鉄
3．10GY4/1暗緑灰色粘土　植物遺体　炭酸鉄

〈5区〉
0．盛土・撹乱
1．N4/0灰色細粒砂混粘土質シルト　旧耕土
2．10GY7/1明緑灰色シルト混細粒砂～中粒砂
3．5GY5/1オリーブ灰色中粒砂混シルト質粘土　斑鉄
4．5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　汚れる
5．2.5GY6/1オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　鉄分
6．5Y6/2灰オリーブ色細粒砂混粘土　鉄分多量
7．10Y5/1灰色～5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～粘土互層　植物遺体多量　炭酸鉄
〈6区〉
0．盛土・撹乱
1．10YR5/1褐灰色粘土～シルト互層　植物遺体多量（ラミナ状）
2．5Y6/1灰色シルト混細粒砂～中粒砂　グライ化
3．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　鉄分少量
4．5Y5/2灰オリーブ色中粒砂～粗粒砂混粘土　鉄分
5．10YR6/1褐灰色中粒砂混粘土質シルト　鉄分
6．10G6/1緑灰色～2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト
7．2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト～粗粒砂の複雑な層　鉄分多量
8．5Y6/1灰色細粒砂
9．7.5GY6/1緑灰色粘土～シルト互層
10．N6/0灰色シルト～細粒砂互層　上部植物遺体

〈3区〉
0．盛土・撹乱
1．7.5GY6/1緑灰色細礫少混粘土質シルト　グライ化
2．7.5Y6/1灰色極細粒砂混シルト質粘土　斑鉄多量
3．2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト　斑鉄多量
4．2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土　斑鉄極多量
5．5Y6/1灰色シルト少混粘土　斑鉄多量
6．10Y6/1灰色シルト～粗粒砂　鉄分
7．7.5GY4/1暗緑灰色シルト～粘土互層　植物遺体少量
〈4区〉
0．盛土・撹乱
1．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～細礫混シルト質粘土　焼土・炭含む
2．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　斑鉄
3．5Y6/1灰色シルト混細粒砂～粗粒砂
4．2.5Y5/1黄灰色細粒砂混シルト質粘土　炭含む　斑鉄
5．2.5Y6/2灰黄色細粒砂混シルト
6．10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　斑鉄　マンガン斑
7．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混シルト質粘土　斑鉄　マンガン斑
8．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂混粘土　斑鉄多量　マンガン斑
9．2.5Y6/2灰黄色粘土　斑鉄
10．7.5GY5/1緑灰色シルト～粘土互層　水平ラミナ

第8図　〈その2〉基本層序（S＝1/40）

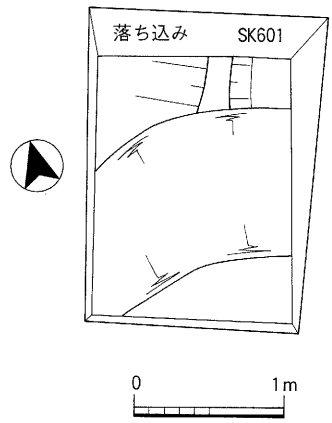
５・６区でもみられた。２・５層は平面的には捉えていないが遺構の可能性がある。１・３・４層から12世紀後半～13世紀前半に比定される土師器・瓦器・須恵器・陶器が出土している。１層出土の東播系須恵器鉢（13）を図化した。13は復元口径26.5cmを測るが、小片のため不確実である。時期は12世紀後半に比定される。

５区

１層は旧耕土、２層は４区３層に当たる。４層は撹拌され汚れた層相で作土と思われる。３～６層も斑鉄を多く含み作土の可能性がある。遺物は５層から13世紀前半の土師器皿・瓦器椀、６層から12世紀後半～13世紀前半の土師器皿・瓦器椀が出土した。６層出土の瓦器椀（12）を図化した。12は復元高台径5.1cm・高台高0.5cmを測るもので、見込みに平行線状暗文を施す。12世紀後半～末葉に比定される。

６区

１層の粘土～シルト互層（植物遺体含む）は南北方向の肩を有する２層上面からの落ち込みの埋土である。層相からみて南北方向の水路が考えられる。真観寺絵図にみえる小堀溝に相当する可能性がある。２層は５区２層に当たる。７層は粘土質シルト～粗粒砂が撹拌されたような層相で、水成層上部の土壌化部分と考えられる。３・４層が包含層で、12世紀後半～13世紀前半に比定される土師器皿・土師器羽釜・瓦器椀・瓦器甕・同安窯系青磁碗が出土した。このうち４層出土の土師器皿（10）・瓦器椀（11）を図化した。10は復元口径7.6cmを測る。11は和泉型瓦器椀で、約4/5が残存しており、土圧によって割れた状況で破片がまとまって出土した。法量は口径14.9cm・器高5.1cm・高台径6.0cm・高台高0.8cmを測る。暗文は内面が圏線状暗文＋見込み格子状暗文、外面は口縁部に粗に圏線状暗文を施す。体部外面には指頭圧痕が残る。時期は12世紀後半に比定される。

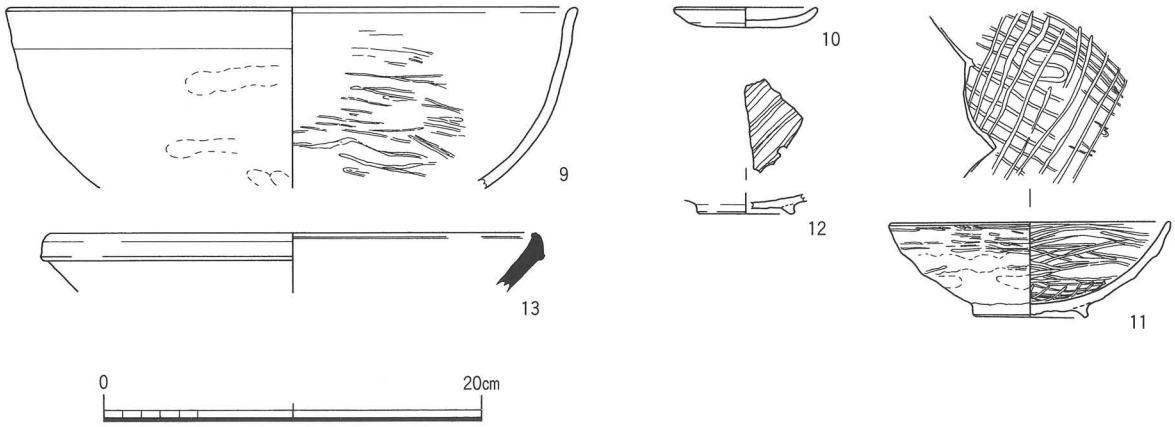


第９図　６区平面図（Ｓ＝1/50）

調査区北東角の７層上面（T.P.＋7.0m）で土坑１基（ＳＫ601）を検出した。西肩を検出したのみで、平面形は不明である。規模は東西40cm以上・南北35cm以上・深さ約40cmを測る。埋土は５・６層である。遺物は12世紀後半に比定される土師器皿１点・土師器羽釜２点・瓦器鉢１点が出土しており、瓦器鉢（９）を図化した。９は復元口径30.0cmを測るもので、あまり類例のない形態である。内面に圏線状暗文を粗に施し、外面は指頭圧痕が残る。

７～９区

中央環状線敷設に伴う工事や配管工事によりT.P.＋約6.6mまでは削平されており。１～６区で見られた中世頃の包含層やベース相当層はまったく見られない。確認できたのはそれ以下の水成層で、全体的に粘土～砂の互層状を呈し、植物遺体を多量に含んでいる。T.P.＋6.0m前後に見られる２層は植物遺体を重層的に多量に含む層で、西側の亀井北（その３）調査地の成果によると、当層以下が古墳時代の自然河川ＮＲ4401・4101、以上が奈良時代の自然河川ＮＲ6201・6101の影響による水成層であろう。T.P.＋5.8～5.9mの３層上面は、周辺の調査地で確認されている古墳時代後期の水田面に相当すると[注1]考えられるが、畦畔等は検出されなかった。７～９区では遺物は出土していない。



第10図　〈その２〉出土遺物（Ｓ＝1/4）

３．まとめ

（その１）

今回の調査では１区で土坑を３基、土器集積を１ヶ所、２区では土坑を１基検出することができた。１区で検出したＳＫ101の性格としては、数個体文の羽釜の破片が出土していることと最下部が湧水層である106層まで達しているということから、羽釜を井戸側に転用した井戸となる可能性が考えられる。また、土器集積としたＳＷ101も数個体の羽釜の破片が出土しており、最下部が106層に達している。以上のことから、掘形は確認できなかったが、ＳＫ101と同じく井戸になる可能性が考えられる。これらの遺構は、出土遺物から12～13世紀に時期を比定できる。

当調査地の北には畠山満家の発願によって応永15年（1408）～同21年（1414）の間に創建されたとされる真観寺が位置している。真観寺に関係する遺構の検出を期待したが、今回検出した遺構は、出土[註2]した遺物から真観寺よりも古い時代の遺構であった。しかし、出土遺物としては、102層から中世～近世にかけての瓦が出土している。同寺で使用されていた瓦が廃棄されたのもであろうか。また、底部のみで時期は明確にはできないが、102層からは備前焼の甕が出土している。

そして、層厚約1.2mを測る106層からは、庄内式土器が出土しており、古墳時代初頭以前は流水域に相当していたことが判明した。また、T.P.＋5.0m以下では、１区で３層（111・113・115層）、２区で４層（208・210・212・214層）の黒色粘土層を確認することができた。黒色粘土層は（財）大阪文化財センターが行った近畿自動車道建設に伴う調査で広く確認された層で、周辺調査でも確認されている。これらは縄文時代晩期～弥生時代後期に形成された層で、各層の時期を判断する場合の鍵となる層である。上記の調査に照らし合わせると、111・208層は第１黒色粘土層、113・210層は第２黒色粘土層、115・212層は第３黒色粘土層、214層は第４黒色粘土層に相当すると思われる。

（その２）

３～６区は真観寺の周囲にあたる。真観寺は応永年間創建と考えられているが、当該期の遺構・遺物は認められなかった。近世段階では４区の整地層や６区の水路が真観寺に関連する可能性がある。

註

註１　赤木克視・竹原伸次・大楽康宏　1986『亀井北(その３)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

註２　小谷利明　2001『真観寺文書の研究』八尾市立歴史民俗資料館

参考文献

・赤木克視・大楽康宏・竹原伸次　1986『亀井北（その３)』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

・赤木克視・村上年生編　1987『河内平野遺跡群の動態Ｉ－プロローグ編－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

・高萩千秋　1991「１．久宝寺遺跡（ＫＨ90－5)」『(財）八尾市文化財調査研究会報告32』(財）八尾市文化財調査研究会

・成海佳子　2001「Ｖ　亀井遺跡第９次調査(KM99-9)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』(財）八尾市文化財調査研究会

図版　一（その1）

1区　ＳＫ102検出状況（北から）

1区　北壁断面（T.P.＋6.0～7.3m）

1区　ＳＫ103・ＳＷ101（西から）

1区　北壁断面（T.P.＋3.8～4.8m）

2区　掘削状況（北東から）

2区　北壁断面（T.P.＋6.0～7.0m）

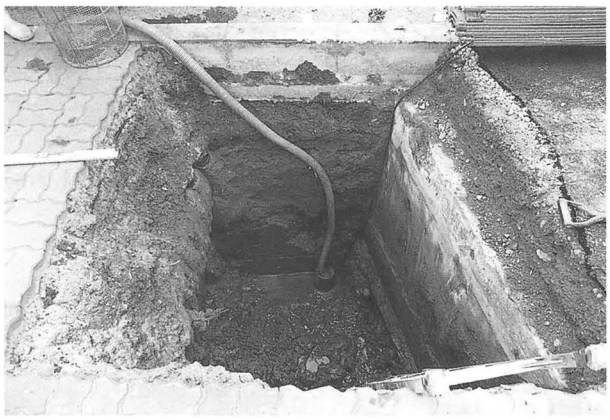
図版　二（その2）

3区　北から

4区　北壁

5区　東から

6区　南から



7区　東から

8区　東から

9区　北から

7区　調査状況

XIV　久宝寺遺跡第41次調査（ＫＨ2002－41）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市北亀井町２丁目地内で実施した公共下水道工事（13－136工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第41次調査（ＫＨ2002－41）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書（八教生文第77号　平成14年５月22日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年７月29日～８月19日（実働３日）にかけて、西村公助・樋口　薫を担当者として実施した。調査面積は約12㎡を測る。

1．内業調査は現地調査終了後随時行い、平成14年12月24日に終了した。

1．本書に関わる業務は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……121

2．調査概要 ……122

　1）調査の方法と経過 ……122

　2）検出遺構と出土遺物 ……122

3．まとめ ……123

XIV　久宝寺遺跡第41次調査（ＫＨ2002－41）

１．はじめに

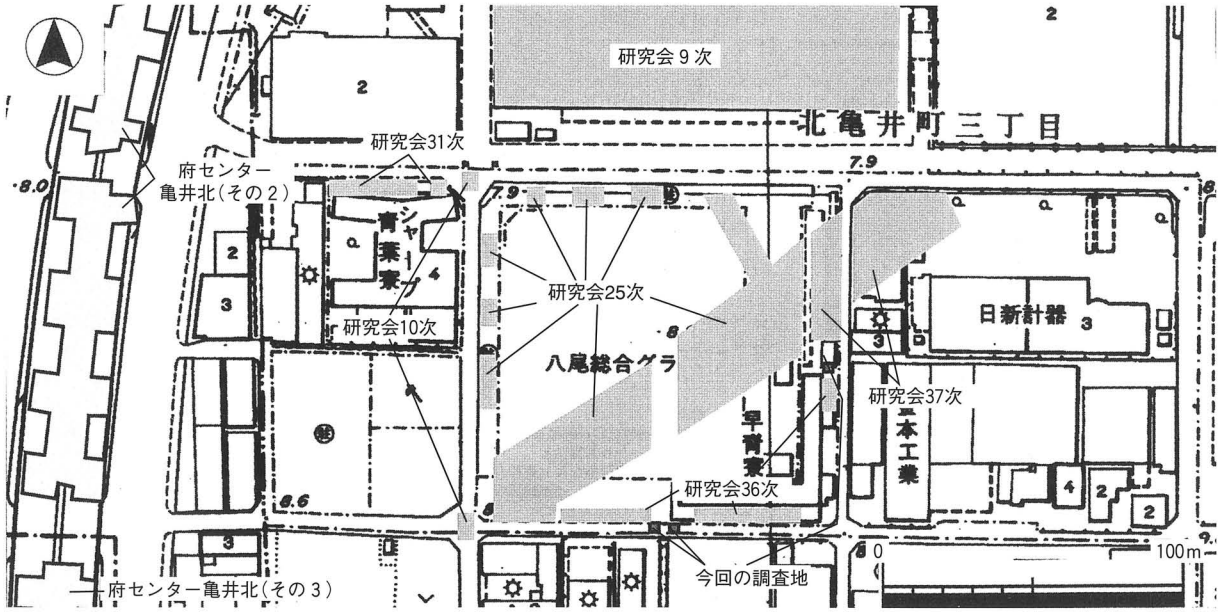
久宝寺遺跡は、八尾市の北西に位置し、現在の行政区画では南久宝寺１～３丁目、久宝寺１～６丁目、北久宝寺１～３丁目、西久宝寺、神武町、亀井、北亀井町１～３丁目、渋川、渋川町１～７丁目一帯がその範囲である。なお、当遺跡の北側は東大阪市にまたがっている。地形的に見ると、当遺跡は、河内平野の中を南東から北西方向に流れる長瀬川左岸と平野川右岸の沖積地上に広がっている。

当遺跡内では大阪府教育委員会、財団法人大阪府文化財センター（以下府センター）、八尾市教育委員会（以下市教委）、財団法人八尾市文化財調査研究会（以下研究会）の各機関が発掘調査を実施しており、縄文時代～近世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地は当遺跡の南西部にあたり、近年多くの調査が行われている。西側約200ｍ地点では、府センターが近畿自動車道建設に伴う発掘調査を実施しており、縄文時代から中世に至る遺構の検出があり集落の存在が確認されている（奥他1986）（赤木他1986）。

また、今回の調査地の北側に近接している場所では、研究会第９次調査、同第10次調査、同第25次調査、同第31次調査、同第36次調査が行われている。特に第９次調査では、古墳時代前期の竪穴住居や前方後方墳が検出され、集落の存在が明らかになっている。さらに、近隣している第25次調査や、第36次調査では、古墳時代前期～後期の土坑・溝・水田などが検出されており、同時代の集落が存在していたことが明らかになっている。

当遺跡の特に今回の調査地の周辺には、南側に亀井遺跡があり、西側には大阪市の亀井北（加美南）遺跡、北西側には同市加美遺跡が所在している。

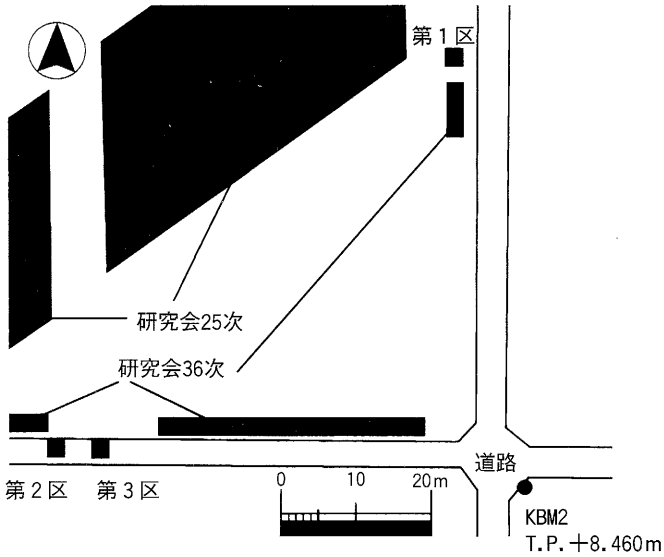


第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道（平成13年度第136工区）に伴う調査で、研究会が久宝寺遺跡内で行った第41次調査にあたる。調査は人孔部分（規模2.0×2.0m　面積4.0m²）3箇所について実施した。調査は、同市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現表下約2.25～2.7mまでを機械と人力で掘削し実施した。なお調査区はNo.4人孔を第1区、No.1人孔を第2区、No.3人孔を第3区と呼称する。今回の調査での標高は、八尾市下水道部作成の地図に記載されている標高値（KBM2＝T.P.＋8.460m）を使用した。



第2図　調査区設定図（S＝1/1000）

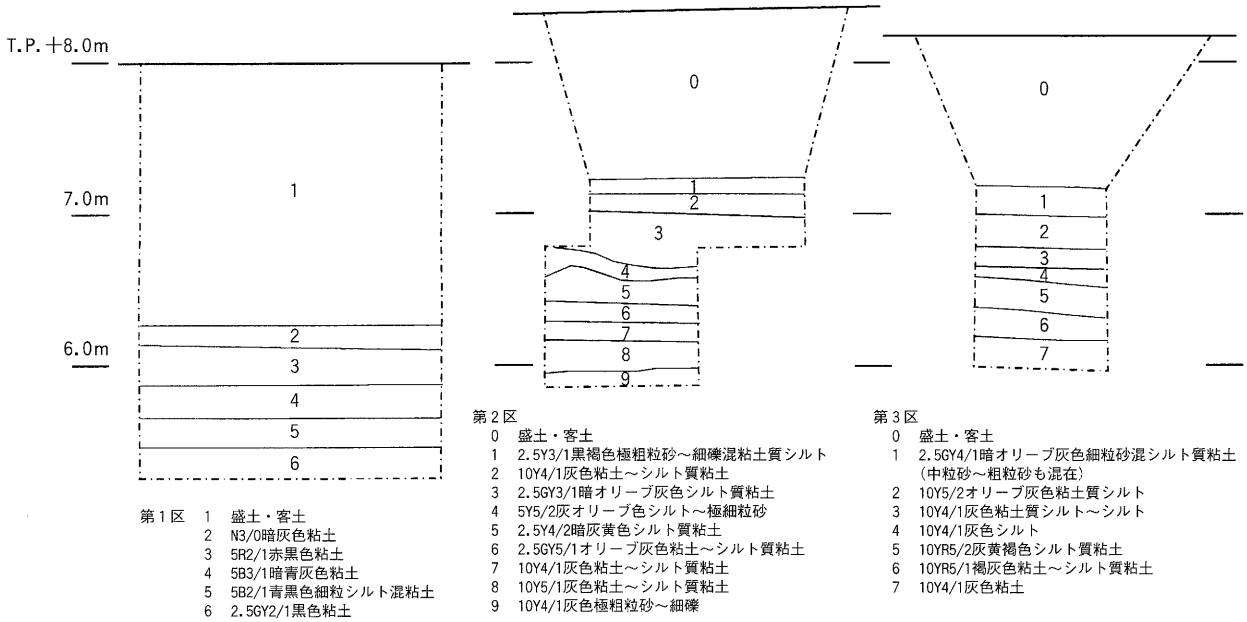
2）検出遺構と出土遺物

第1区

現地表面はT.P.＋8.0m前後で、以下6層の地層を確認した。1層は盛土で現代の産業廃棄物が多く混じっている。2層は暗灰色粘土で旧耕作土に相当する。3層は赤黒色粘土で植物遺体を多く含む。4層は暗青灰色粘土で鉄分を多く含み、上面は攪拌をうける。5層は青黒色細粒シルト混粘土。6層は黒色粘土である。

第2区

現地表面はT.P.＋8.35～8.4m前後で、以下10層の地層を確認した。0層は盛土･客土である。1層は黒褐色極粗粒砂～細礫混粘土質シルトで、旧耕土に相当する。2層は灰色粘土～シルト質



第3図　第1～3区断面図（S＝1/50）

粘土。３層は暗オリーブ灰色シルト質粘土。４層は灰オリーブ色シルト～極細粒砂。５層は暗灰黄色シルト質粘土で、雲状に酸化マンガンを含んでいる。断面観察の結果ではあるが、この層の上面には凹凸が認められた。６層はオリーブ灰色粘土～シルト質粘土。７層は灰色粘土～シルト質粘土で植物遺体をラミナ状に含んでいる。８層は灰色粘土～シルト質粘土。９層は灰色極粗粒砂～細礫で、流水堆積層であり河川内埋土と思われる。

第３区

現地表面はT.P.＋8.2m前後で、以下８層の地層を確認した。０層は盛土･客土である。１層は暗オリーブ色細粒砂混シルト質粘土で、中粒砂や細粒砂が混在している。２層はオリーブ灰色粘土質シルト。管状の酸化マンガンを含む。３層は灰色粘土質シルト～シルト。雲状の酸化マンガンを含む。４層は灰色シルト。雲状の酸化マンガンを含む。５層は黄褐色シルト質粘土。雲状の酸化マンガンを極めて多く含む。６層は褐灰色粘土～シルト質粘土で、雲状の酸化マンガンを含む。７層は灰色粘土。植物遺体や炭化物を含む。

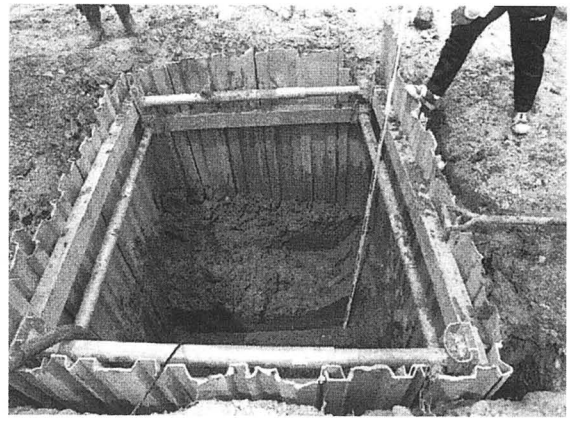
３．まとめ

今回の調査区では遺構の検出および遺物の出土はなかったため、確認した地層の時期は明確にできなかった。しかし、第１区の４層は、研究会第36次調査で確認している古墳時代後期の畦畔を検出した地層に相当すると考えられる。このことから、第１区の４層は古墳時代後期頃に堆積した地層であると推定される。また、第２区･第３区で確認した植物遺体を含む７層は同36次調査でも確認していることから、古墳時代後期以後に比定できる。

参考文献
・奥　和之他　1986『亀井北（その２）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・赤木克視他　1986『亀井北（その３）』（財）大阪文化財センター
・成海佳子　1992「13．久宝寺遺跡第９次調査（KH91-９）」『平成３年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則他　2000「８．久宝寺遺跡第25次調査（KH98-25）」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助　2000「14．久宝寺遺跡第31次調査（KH99-31）」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　2001「７．久宝寺遺跡第36次調査（KH2000-36）」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・渚　斎・金親満夫　2003「11．久宝寺遺跡第37次調査（KH2001-37）」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

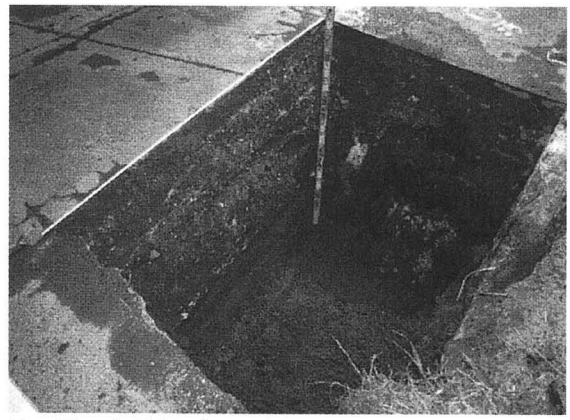
図版一

第１区　周辺(南から)

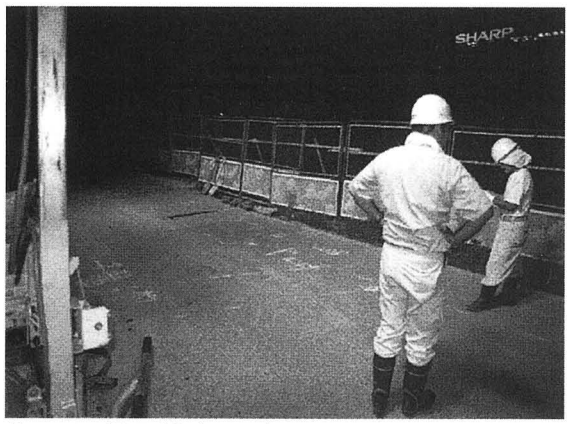


第１区　全景(北から)

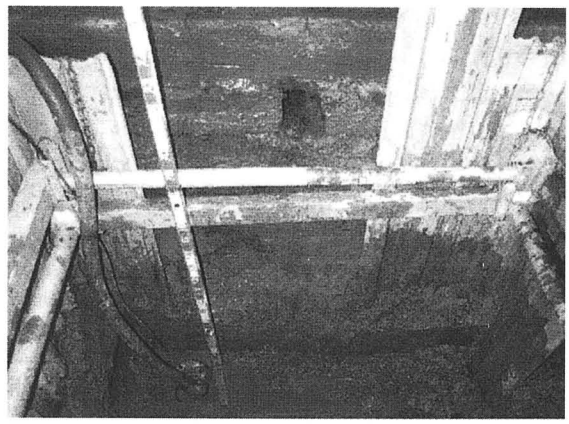
第２区　掘削状況(南から)



第２区　全景(北東から)



第３区　周辺(南東から)



第３区　北壁(南から)

XV　小阪合遺跡第37次調査（ＫＳ2002－37）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市青山町４丁目、中田１・３丁目で行った、公共下水道工事（平成13年度－第102工区）に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第37次（ＫＳ2002－37）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第29号　平成14年４月23日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年９月10日～平成15年１月17日（実働６日間）に以下の担当者が実施した。

　１区　高萩千秋　　平成15年１月16日・17日
　２区　西村公助・樋口　薫　平成14年９月10日・12日
　３区　成海佳子　　平成14年９月24日・25日

1．調査面積は、約36㎡を測る。

1．現地調査に参加した補助員は、荒川和哉・飯塚直世・國津れいこ・實樹婦美子である。

1．内業整理・報告作成に参加した補助員は、上記のほか市森千恵子である。

1．本書の執筆・構成は成海がおこなった。

本　文　目　次

1．はじめに ……125
2．調査概要 ……125
　1）調査の方法と経過 ……125
　2）検出遺構と出土遺物 ……126
3．まとめ ……127

XV　小阪合遺跡第37次調査（ＫＳ2002－37）

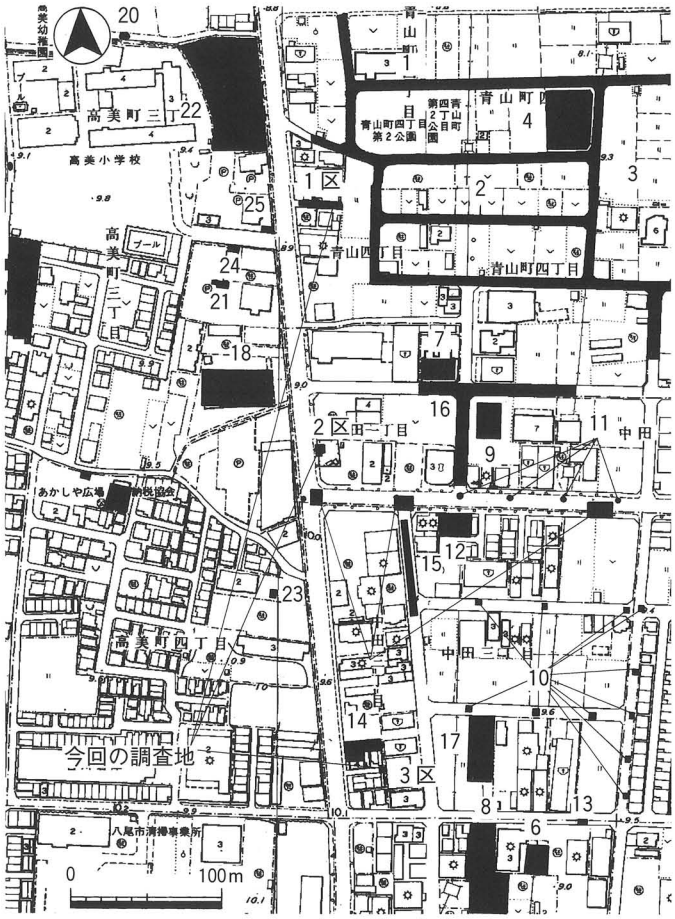
１．はじめに

今回の調査地は、小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡の接点に位置するが、便宜上小阪合遺跡として扱った。これらの遺跡は大阪府八尾市のほぼ中央部にあり、現在の行政区画では次のようになる。小阪合遺跡－若草町、小阪合町１・２丁目、南小阪合町２・４丁目、青山町１～５丁目、山本町南７・８丁目。中田遺跡－中田１～５丁目、八尾木北１～６丁目、刑部１～４丁目、矢作遺跡－明美町２丁目、松山町２丁目、高美町３～６丁目、安中町６～８丁目。地形的には、旧大和川の主流である玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地にあたり、いずれも弥生時代前期以降の複合遺跡である。この沖積地には多くの遺跡が存在しており、中田遺跡の南には東弓削遺跡、矢作遺跡の北には成法寺遺跡があり、さらに北西へ東郷遺跡・萱振遺跡などが連なって位置している。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事（平成13年度－第102工区）に伴うもので、小阪合遺跡第37次調査（略号ＫＳ2002－37）にあたる。調査対象となったのは、北から管路・マンホール部分（１区）、発進立坑１か所（２区）、マンホール１か所（３区）である。



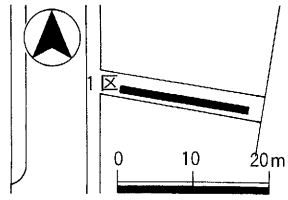
第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）

第１表　周辺の調査地一覧

番号	遺跡名	略　号	所在地	調査期間	報告番号
1	小阪合	KS1983-02	青山町1･3	19830622～19830714	財11
2		KS1983-03	青山町4･5	19831020～19840315	財11
3		KS1983-04	青山町･南小阪合町	19840615～19841115	財15
4		1997-175	青山町4	19970609	市38
5	中田	NT1989-02	中田3･4	19891013～19891127	財28
6		NT1990-05	八尾木北1	19901126～19901204	財49
7		NT1991-09	中田1	19911205～19911218	財34
8		NT1993-16	八尾木北1	19930517～19930527	財43
9		NT1994-26	中田1	19940704～19940715	財61
10		NT1995-29	中田3	19950817～19950831	財53
11		NT1997-39	中田1	19971118～19971121	財62
12		63-020	中田3	19880604	市20
13		01-221	中田3･八尾木北1	19891031	市21
14		90-69	中田3	19900731	市22
15		91-293	中田3	19911014～19911029	市26
16		93-355	中田1･3	19931112～19931216	市30
17		96-718	中田3	19970305	市38
18	矢作	YH1986-01	高美町3	19861220～19870320	財22
19		YH1987-02	高美町4	19871023～19871118	財22
20		YH1998-05	高美町3	19980514～19980529	財65
21		87-262	高美町3	19870925～19870929	市17
22		63-253	高美町2	19880830	市19
23		63-078	高美町4	19881022～19881025	市19
24		89-039	高美町3	19890929	市20-1
25		91-189	高美町3	19910820～19910822	市25

2）検出遺構と出土遺物

1区は、当初2か所のマンホール部分を調査する予定であったが、連絡を受けた際にはすでに西側のマンホール部分の工事掘削が終了していたため、急遽管路部分と東側のマンホール部分を調査することとなったものである。

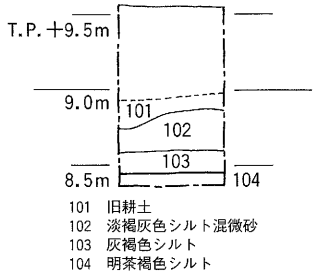


第2図　1区設定図（S＝1/1000）

1区

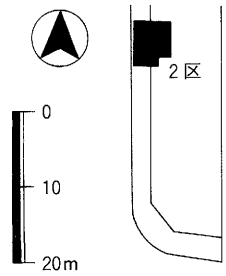
最も北に位置する調査区である。東西17m・南北0.7mを測る。掘削深度は1.2mである。北から東50mには、小阪合遺跡第2次・第3次調査地（KS1983－2・KS1983－3）が位置している（高萩1987）。

現地表面の高さはT.P.＋9.5～9.6mで、東が高い。盛土は西部で0.7～0.8m、東部で1mあり、101層旧耕土上面の高さは西がT.P.＋8.8m、東がT.P.＋8.6mで、西が高い。ここでは、旧耕土以下102～104層を検出した。102層淡褐灰色シルト混微砂・103層灰褐色シルトには土師器の小破片が含まれるもので、整地層かと考えられるものである。104層明茶褐色シルトが古墳時代から平安時代の遺構面を構成する地層であろうと考えられる。この104層は、調査区の中央部で一段下がるもので、東半分では検出できていない。これまでの周辺の調査結果からは、東部は水田になる可能性がある。



第3図　1区断面図（S＝1/50）

104層上面では、柱穴1個を検出した。柱穴は一辺0.5mの隅丸方形を呈し、中央部に柱痕跡（暗褐灰色シルト）が見られた。工事深度より下に位置していたことから、遺構内部は掘削していない。



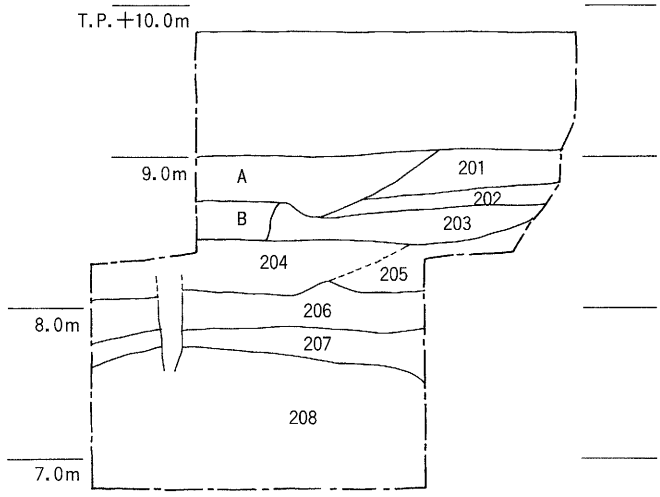
第4図　2区設定図（S＝1/1000）

2区

中央部に位置する調査区で、1区から南160m地点に位置する。

南30mには中田遺跡第2次調査地（NT89－2）が位置している（青木1990）。規模は南北6m・東西4.8mのL字形を呈する調査区で、掘削深度は3.0mである。周囲は鋼矢板で囲まれ、府道萱振曙川線の歩道の下にあたる東半分は覆工板で覆われている。この調査区は夜間調査となった。

現地表面の高さはT.P.＋9.8m、盛土の厚さは0.8mを測る。以下に作土や床土の可能性のある201～203層がみられ、それを切ってA・B層が堆積する。その下の204・205層が遺構面を構成する可能性のある地層である。204・205層上面の

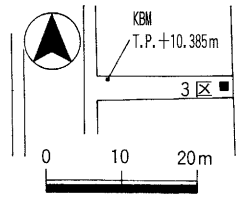


201　10Y5/1灰色中～極粗粒砂混粘土質シルト
202　7.5Y5/1灰色中～極粗粒砂混粘土～粘土質シルト
203　10YR5/2灰黄褐色細～中粒砂混シルト質粘土
（雲状の酸化マンガンを極めて多く含む）
204　10YR5/1褐灰色細～中粒砂混粘土質シルト
（雲状の酸化マンガンを極めて多く含む、土壌化層？）
205　10Y6/2オリーブ灰色細～極粗粒砂（グライ化）
206　5Y4/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質粘土～シルト（土壌化層？）
207　5Y4/1灰色粘土質シルト～粗粒砂
208　2.5Y6/3にぶい黄色極粗粒砂～細礫
A　10Y4/1灰色細礫～中礫混シルト質粘土～粘土質シルト（ブロック）
B　10Y4/1灰色粘土質シルト（雲状の酸化マンガンを含む、ブロック）

第5図　2区断面図（S＝1/50）

高さはT.P.＋8.5m前後である。

以下206層は攪拌をうけた層、207層は沼沢地～河川堆積、最下の208層は河川堆積の地層と考えられる。204層から土師器小皿１点が出土したほか、Ａ層・206層・207層の各層から土師器・須恵器の小破片が極少量出土している。



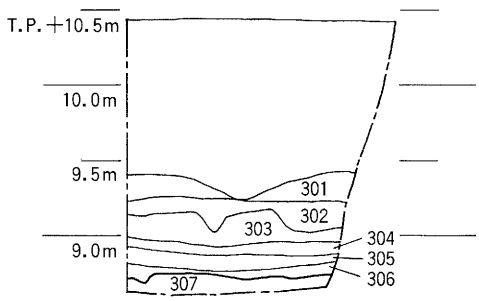
第６図　３区設定図
（Ｓ＝1/1000）

３区

最も南に位置する調査区で、２区から南220mに位置する。北隣には、市教委90－69調査区が位置している（渚1991）。規模は２m四方で、掘削深度は約2.0mである。

盛土の厚さは1.0～1.2mあり、301層は旧耕土で、上面には南北方向の畝跡が顕著に残っている。302層・303層は攪拌を受けた地層で、土器の極小破片を極少量含んでいる。304層からは瓦・瓦器椀、305層からは須恵器、306層からは土師器皿・黒色土器椀のほか、古式土師器（庄内甕・布留甕）が出土しているが、いずれも小破片である。

その下に堆積する307層が遺構面を構成する地層であると考えられる。309層上面の高さはT.P.＋8.7m前後である。



301　5BG2/1青黒色中礫混砂質シルト（旧耕土）
302　5BG4/1暗青灰中礫混砂質シルト（床）
303　2.5Y4/4オリーブ褐色中礫混砂質シルト混粘土（ブロック）
304　2.5Y4/3オリーブ褐色微粒砂混粘土質シルト
（雲状マンガンを含む）
305　2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト（鉄分を含む）
306　10YR3/3暗褐色微粒砂～中礫混粘土質シルト
307　2.5Y4/2暗灰黄色微粒砂混シルト質粘土
2.5Y6/2黄灰色粘土をブロックで含む
（雲状マンガンを含む）

第７図　３区断面図（Ｓ＝1/50）

３．まとめ

今回の調査では、各調査区でこれまでの周辺の調査結果を裏付ける結果が得られた。遺構面相当層はT.P.＋8.4～8.7mに存在する104・204・205・307層上面で、３区では直上に堆積する306層から黒色土器（Ａ類）を下限とする土器片、305層から瓦器椀片が出土していることから、この遺構面は平安時代以降のものであると推定できる。

参考文献
・高萩千秋　1987『小阪合遺跡-八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査-<昭和58年度第２次調査・第３次調査報告書>』　（財）八尾市文化財調査研究会報告11　（財）八尾市文化財調査研究会
・青木勘時　1990「15.中田遺跡（NT89-02）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告28　（財）八尾市文化財調査研究会
・渚　斎　1991「11.中田遺跡（90-69）の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会報告22

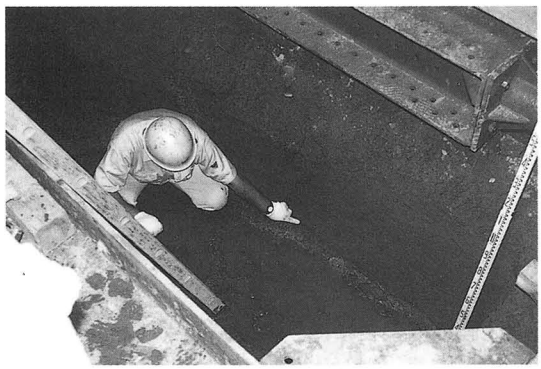
1区　中央部東壁

1区　東壁

1区　全景(東から)

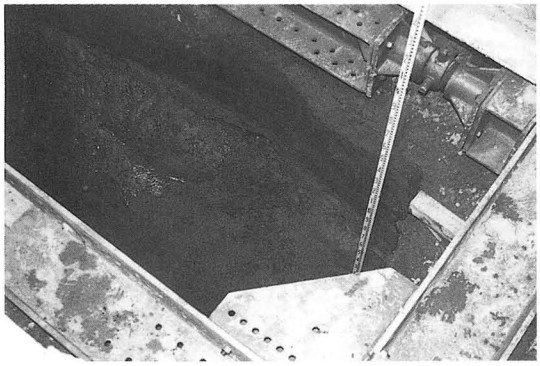
2区　西壁(上層)

3区　人力掘削状況(南から)



2区　西壁(中層)

3区　北壁



2区　西壁(下層)

XVI　東郷遺跡第57次調査（ＴＧ2002－57）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市光町１・２丁目、東本町１～４丁目地内で実施した公共下水道工事（13－44工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第57次調査（ＴＧ2002－57）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書（八教生文第24号　平成14年４月18日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成14年６月14日～７月15日（実働５日）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約55.2㎡を測る。

1．現地調査に参加した補助員は荒川和哉・實樹婦美子・横山妙子である。

1．内業調査は現地調査終了後随時行い、平成14年10月31日に終了した。

1．本書に関わる業務は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……129

2．調査概要 ……130

　1）調査の方法と経過 ……130

　2）検出遺構と出土遺物 ……130

3．まとめ ……131

XVI　東郷遺跡第57次調査（ＴＧ2002－57）

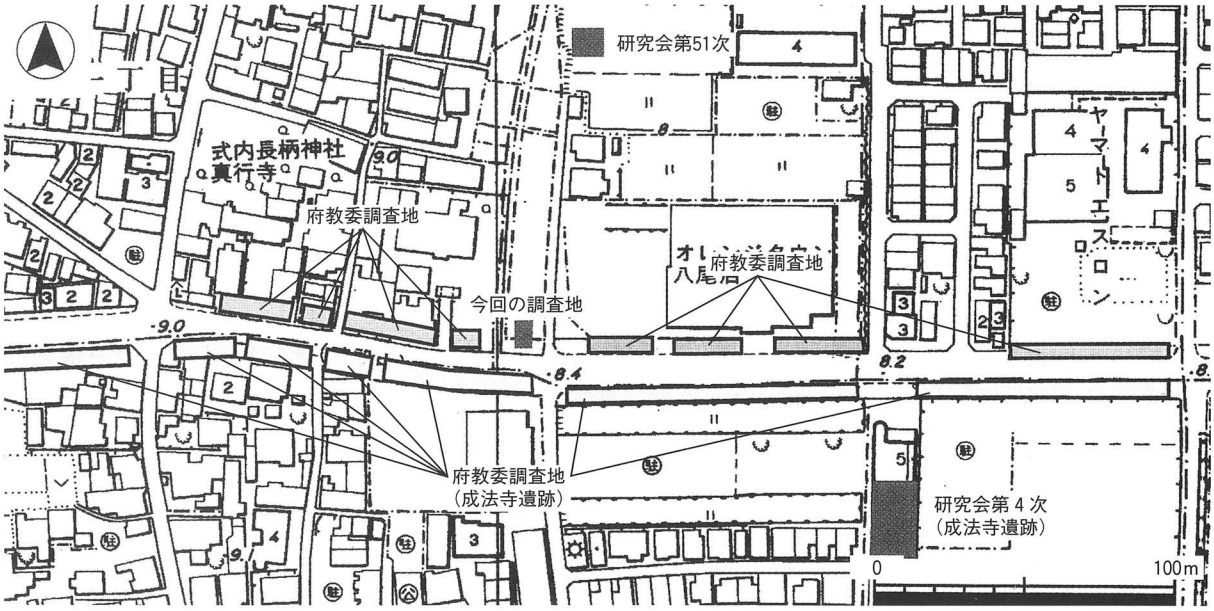
１．はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央から北よりに位置し、現在の行政区画では本町１・７丁目、東本町１～５丁目、北本町２丁目、荘内町１～２丁目、桜ヶ丘１～４丁目、光町１～２丁目、旭ヶ丘１丁目の一部がその範囲になっている。地形的には長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置する。

当遺跡では、大阪府教育委員会（以下府教委）および八尾市教育委員会（以下市教委）ならびに財団法人八尾市文化財調査研究会（以下研究会）が発掘調査を実施しており、弥生時代から近代に至る遺構の検出および遺物の出土が確認されている。

今回の調査地周辺では、府教委が都市計画道路平野中高安線の拡幅工事に先立って発掘調査（岩瀬1995）（地村1997）を行っており、研究会では東本町１～４丁目で道路築造工事に伴う第46次調査（西村1995）および東本町４丁目で貸事務所新築工事に伴う第51次調査（高萩1996）を行っている。

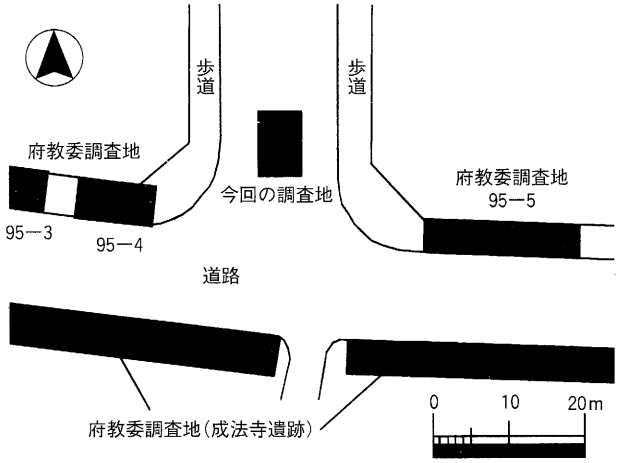
特に今回の調査地の西側約10ｍと近接している府教委95－４調査区（地村1997）では弥生時代後期・中世中頃・近世・近世後期～近代の遺構の検出および遺物の出土があり、また、東側約15ｍの府教委95－５調査区（地村1997）では弥生時代中期以前・弥生時代後期・古墳時代前期・中世～近世・近世～近代の遺構の検出および遺物の出土が確認されている。さらに、今回の調査地から西側へ約80ｍ地点では、府教委が平成５年度に調査を行っている。この調査地点の北側（Ｂ地区・東郷遺跡）（岩瀬1995）では、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代頃の遺構を検出し、遺物が出土している。同調査では、平安時代後期以前の自然河川の堆積を確認した。その堆積層の上層からは、３箇所に人面が描かれた人面墨書土器や、螺旋形ないしは円形紋様を簡略化した墨書が４箇所にみられる土器の出土があった。また、鎌倉時代の掘立柱建物や鎌倉時代から室町時代の井戸、および江戸時代の掘立柱建物を検出していることから、各時代の集落が存在し



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

ていたことが明らかになっている。

研究会第46次調査では弥生時代中期・古墳時代前期・中世・中世末～近世の遺構や遺物が検出されている。特に今回の調査地に近いＡ地区では、古墳時代前期（布留式期）の遺物を伴う遺構を検出している。また、研究会第51次調査では古墳時代初頭(庄内式期新相)の遺物を伴う遺構を検出していることから、今回の調査地の北側には同時期の集落が存在している可能性が高いと考えられる。



第２図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)

なお、今回の調査地は東郷遺跡の南端に位置し、東西に伸びる道路を境界とし南側には成法寺遺跡が存在している。この遺跡内でも府教委・市教委・研究会が発掘調査を行っており、特に今回の調査地の近辺では府教委が都市計画道路平野中高安線建設工事に伴って発掘調査（宮野・西川1992）を行っている。その結果、古墳時代後期・中世～近世・近世～近代の遺構や遺物を検出している。また、研究会では成法寺遺跡第４次調査（高萩1991）を行っており、古墳時代初頭（庄内式期）の遺構を検出している。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道（平成13年度第44工区）に伴う調査で、研究会が東郷遺跡内で行った第57次調査にあたる。調査は立坑部分について実施した。調査にあたっては、現地表下約7.3mまでを機械と人力で掘削し行なった。今回の調査では、八尾市下水道部作成の地図に記載している値（調査地の南東側交差点の歩道のコンクリートブロック上〔ＫＢＭ．６＝T.P.＋8.343m〕）を使用した。

なお、今回の調査地は、交差点の北側中央分離帯に位置している。

２）検出遺構と出土遺物

現地表面はT.P.＋8.1m前後で、以下23層の地層を確認した。１層は盛土で、厚さ約0.8mを測る。現在の道路を建設する際の埋め土である。２層は青黒色粗粒シルト混粘土で、旧耕作土に相当すると思われる。３層は暗青灰色粗粒シルト混粘土で、中世～近世の遺物をまばらに含む層である。４層は青黒色細粒砂混粘土で、上面は攪拌を受けていた。この層の上面で調査を行った(第１面)が、遺構の検出はなかった。

５層は黄褐色粗粒砂～細粒砂で、上部に粗粒砂があり、下部に行くに従い細砂に変わる流水堆積である。土師器の破片を極少量含む。６層は暗青灰色粘土で、上面に厚さ1.0cm程度の植物遺体が水平に堆積していた。この層の上面で調査(第２面)を行ったが遺構の検出はなかった。

７層は青黒色粗粒シルト混粘土、８層は暗青灰色細粒砂混粘土、９層は青灰色粗粒シルト、10層は暗緑灰色粗粒シルト質粘土、11層は暗青灰色細粒砂混粘土である。7～11層は沼地の堆積と思われる。12層は灰色粗粒砂～細粒砂で、流水堆積である。13層は黒色粘土で植物遺体を多く含んでいる。14層は暗青灰色細粒シルト質粘土である。

15層は灰色細粒シルト～細粒砂のラミナである。16層は灰黄色細粒砂～粗粒砂のラミナである。15層と16層は流水堆積で、厚み約1.7mを測る。おそらく河川の堆積である可能性が高いと考える。

17層は黒色粘土で、粘性が強い。18層は灰色細粒砂～微粒砂のラミナで、流水堆積である。19～21層は粘土、細粒シルト、細粒シルト混粘土で、流水堆積である。22層は細粒砂で、流水堆積である。23層は粘土で、上部に植物遺体を含む。

3．まとめ

今回の調査では、遺構の検出はなく、遺物の出土もほとんどなかったため、調査した面の時期は判らなかった。しかし、西側の府教委95－４調査区（地村1995）の地層と比較し検討すると、おそらく今回の調査地の第１面は近世、第２面は弥生時代後期頃に相当すると思われる。

また、府教委95－５調査区ではT.P.＋6.1mで弥生時代中期以前に相当する遺構を検出している。今回の調査地の８層上面がこの時期に相当すると思われるが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

参考文献

・岩瀬　透　1995『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅷ』大阪府教育委員会

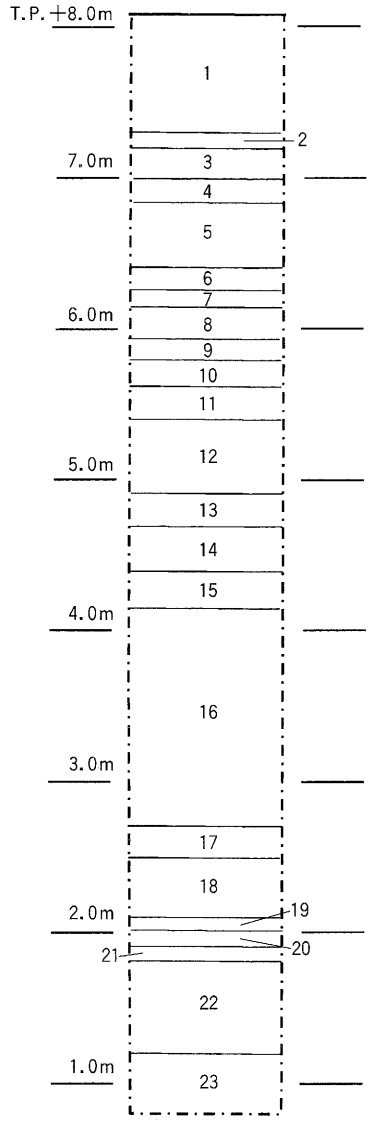
・地村邦夫　1997『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要Ⅸ』大阪府教育委員　会

・西村公助　1995「Ⅳ　東郷遺跡第46次調査」『東郷遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告48財団法人八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1996「東郷遺跡第51次調査」『東郷遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告54財団法人八尾市文化財調査研究会

・宮野淳一・西川寿勝　1991『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ―八尾市南本町１丁目所在―』大阪府教育委員会

・高萩千秋　1991「第５章　第４次調査（ＳＨ88-４）発掘調査報告」『成法寺遺跡＜第１次調査～第４次調査・第６次調査報告書＞』財団法人八尾市文化財調査研究会報告33財団法人八尾市文化財調査研究会

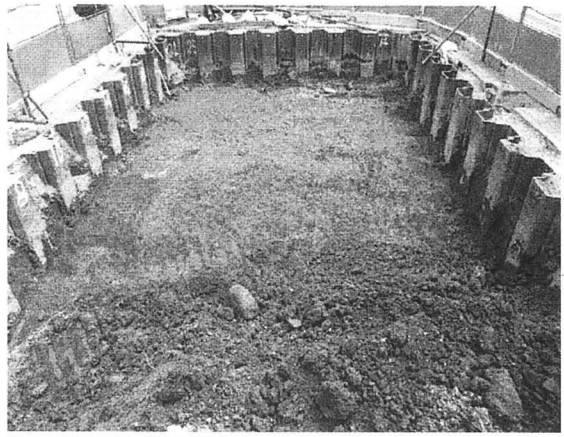


1　盛土
2　5B2/1青黒色粗粒シルト混粘土
3　5B3/1暗青灰色粗粒シルト混粘土
4　5B2/1青黒色細粒砂混粘土
5　10YR5/6黄褐色粗粒砂～細粒砂
6　5B4/1暗青灰色粘土
7　5PB2/1青黒色粗粒砂シルト混粘土
8　5B3/1暗青灰色細粒砂混粘土
9　10BG6/1青灰色粗粒シルト
10　5G4/1暗緑灰色粗粒シルト質粘土
11　5PB3/1暗青灰色細粒砂混粘土
12　7.5Y4/1灰色粗粒砂～細粒砂
13　10YR2/1黒色粘土
14　5B4/1暗青灰色細粒シルト質粘土
15　N4/0灰色細粒シルト～細粒砂
16　2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂
17　5Y2/1黒色粘土
18　10Y5/1灰色細粒砂～微粒砂
19　10YR4/1褐灰色粘土
20　10BG5/1青灰色粗粒シルト
21　10Y5/1灰色粗粒シルト混粘土
22　5Y7/1灰白色細粒砂～微粒砂
23　5B4/1暗青灰色粘土

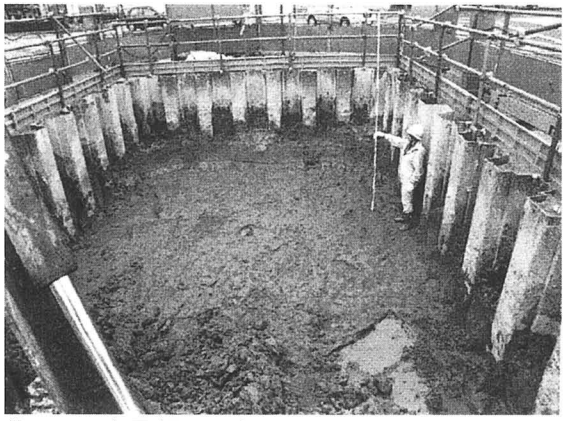
第３図　断面図（Ｓ＝1/50）

図版一

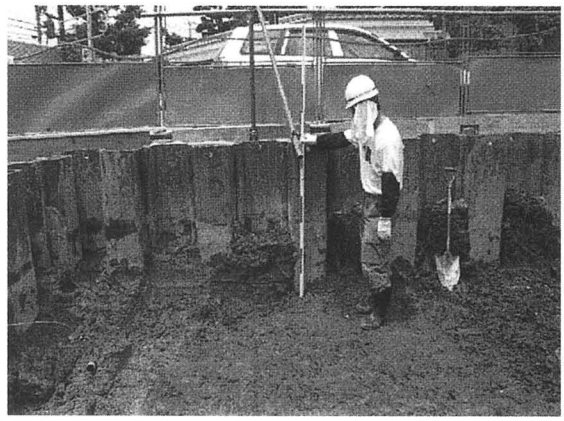
調査地周辺(北から)



第1面　全景(北から)



第2面　全景(北から)



西壁(東から)

XVII　美園遺跡第５次調査（ＭＳ2001－５）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市美園町１丁目・宮町４丁目地内で実施した公共下水道工事(13－10工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する遺跡第次調査（ＭＳ2001－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第埋第340号　平成13年12月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成14年３月12日～４月８日（実働５日ですべて夜間）にかけて、高萩千秋・岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約71.47㎡である。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成14年６月21日に終了した。

1．本書の執筆・編集は、高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……133
2．調査概要 ……133
　1）調査の方法と経過 ……133
　2）検出遺構と出土遺物 ……134
　　第１区 ……134
　　第２区 ……134
3．まとめ ……135

XVII　美園遺跡第５次調査（ＭＳ2001－５）

１．はじめに

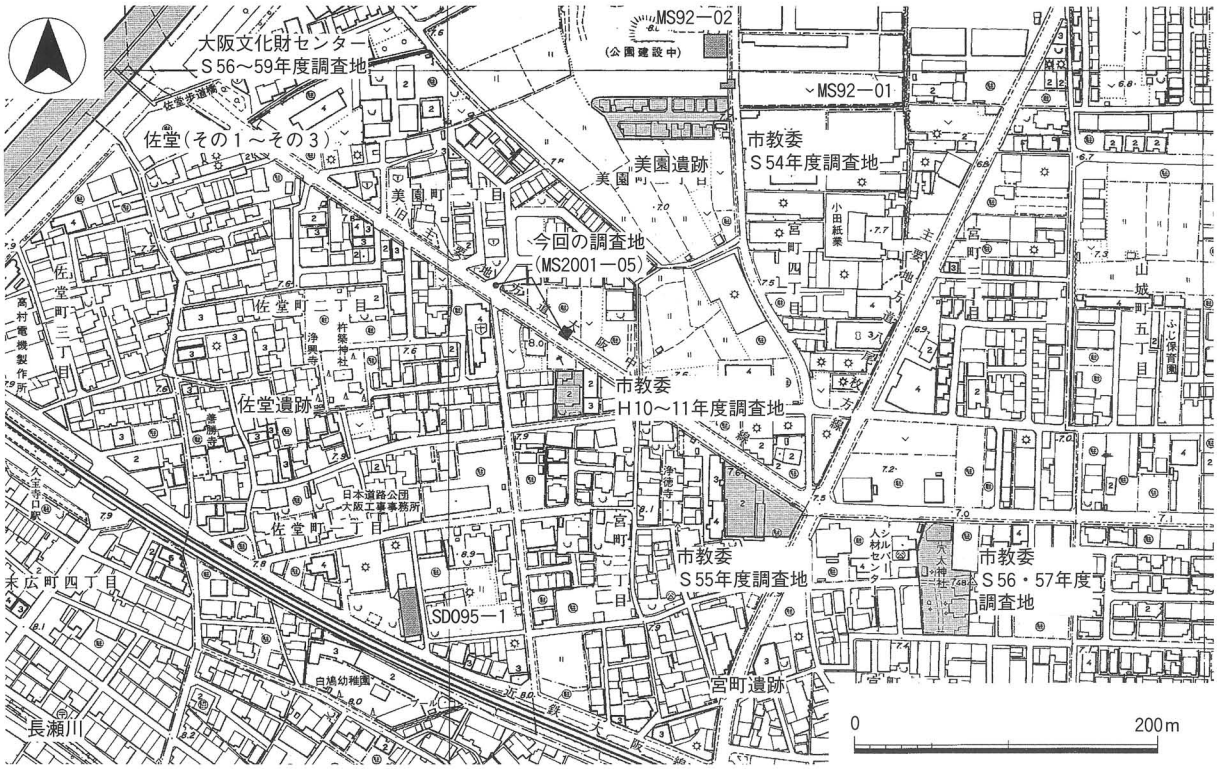
美園遺跡は八尾市北西部にあたり、行政区画では美園町１～４丁目がその範囲としている。地理的には旧大和川の主流であった玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地に位置する。

当遺跡内では（財）大阪府文化財センター（旧大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会による調査が数十件行われている。これらの成果から、古くは縄文時代晩期から確認されているが、明確な遺構の痕跡が見られるのは弥生時代中期以降である。その後広く展開するのは弥生時代後期～古墳時代前期にかけての時期であることが現在までに確認されている。

当遺跡内での調査成果で特筆できるものとしては、（財）大阪府文化財センターが近畿自動車建設に伴う調査で古墳時代前期の方墳を検出した。その方墳にはベット付の家形埴輪や壺形埴輪がほぼ完形に近い状態で出土している。家形埴輪は当時の住居の様相を知る貴重な資料として重要文化財指定されている。

１）調査概要

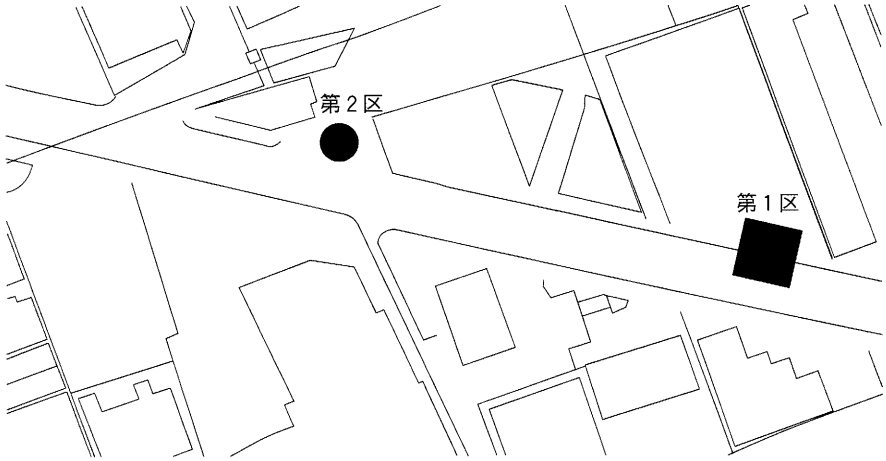
今回の調査は公共下水道工事（13－10工区）に伴う発掘調査である。八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、当調査研究会が事業者と協議を重ね、調査を行った。当調査は当遺跡第５次調査（ＭＳ2001－５）にあたる。調査区は立坑とライナーの２ヶ所で、総調査面積は約



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）

71.47㎡を測る。調査期間は、平成14年３月12日～４月８日(実働５日すべて夜間)までであった。

調査の方法は、周辺の調査データの結果を参考に作成された指示書に基づいて、現地表(約T.P.＋8.0m)下約1.8～3.8mまでを重機および人力による掘削を実施し、遺構・遺物の検出および記録保存の作成に努めた。



第２図　調査区位置図(Ｓ＝1/400)

２）検出遺構と出土遺物

基本層序

調査地の現地表面の標高はT.P.＋8.0m前後を測る。当調査地は道路敷きと借地部分で、道路部分は埋設工事などによって部分的に削平されている。以下、調査区で得られた地層を精査し、下記を摘出して基本層序とした。

第１区

第１層　盛土・攪乱(層厚1.1～2.6m)。盛り土および道路側溝、埋設物などにより部分的に現地表下２mまで撹乱・削平している。

第２層　褐色シルト(層厚0.2m前後)。

第３層　灰褐色シルト(層厚0.2～0.3m)。

第４層　明褐色シルト(層厚0.1～0.2m)。

第５層　明黄橙色砂質シルト(層厚0.15～0.25m)。

第６層　黄褐色砂礫混じりシルト(層厚0.2～0.3m)。

第７層　橙色～明黄褐色細粒砂～極粗粒砂(層厚1.8m以上)。東上方向に走るラミナがみられる。

第２区

第１層　盛土(層厚0.9～1.3m前後)。

第２層　淡灰褐色礫混じり砂質シルト(層厚0.1～0.5m)。既設の埋設物で大半が撹乱している。

第３層　灰褐色極細粒砂混じりシルト(層厚0.15～0.2m)。

第４層　灰褐色細粒砂混じり微砂（層厚0.4m前後）。

第５層　淡茶灰色細粒砂（層厚1.1m以上）。下部へ行くに従い砂粒が粗く、湧き水がある。

検出遺構と出土遺物

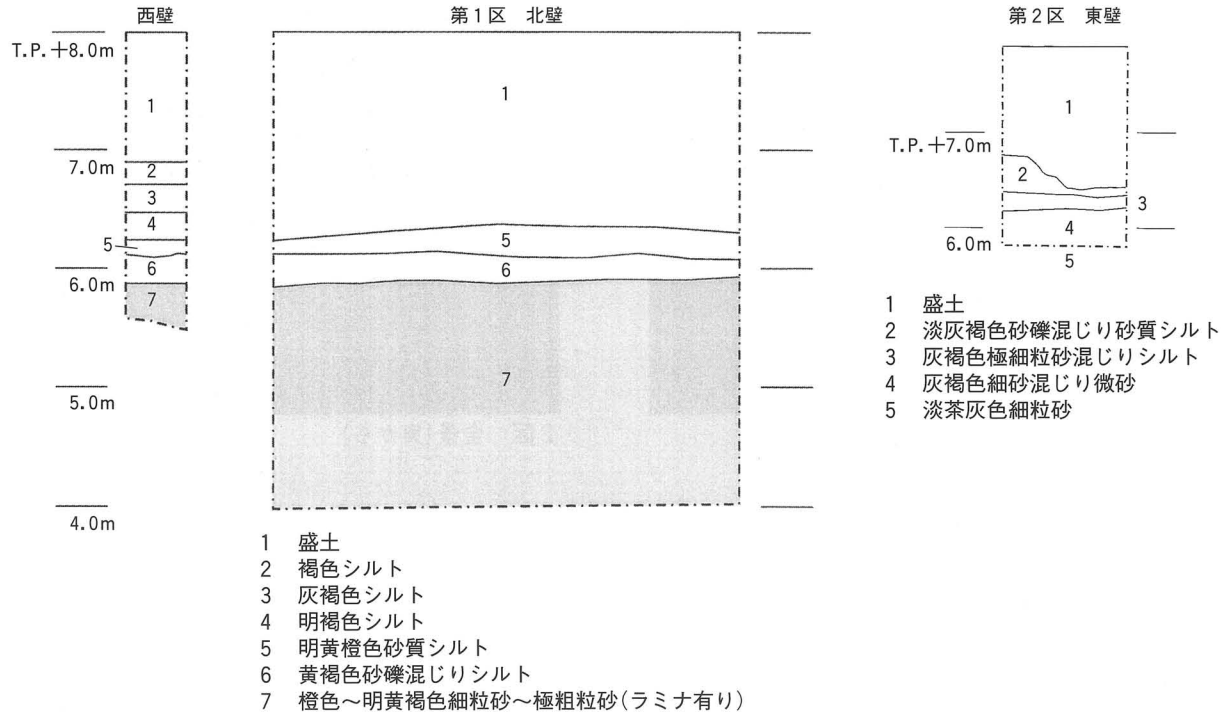
調査の結果、現地表下約1.8m（T.P.＋6.2m）以下の層で古墳時代以前の砂層を検出した。この砂層は調査区２ヶ所でほぼ同じ堆積状況を確認した。出土遺物については、各調査区ともに出土しなかった。

３．まとめ

今回の調査は立坑とライナー部分の調査区で、すべて夜間作業である。調査の結果、周辺で検出されている古墳時代～中世の遺物包含層および遺構は確認することができなかった。下層で厚く堆積する砂層を２ヶ所の調査区で確認しており、古墳時代以前に埋没した大きな河川を存在が想定できる。

参考文献

・岡田清一　1993「XI　美園遺跡（ＭＳ92－２）第２次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』　八尾市文化財調査研究会報告39　（財）八尾市文化財調査研究会

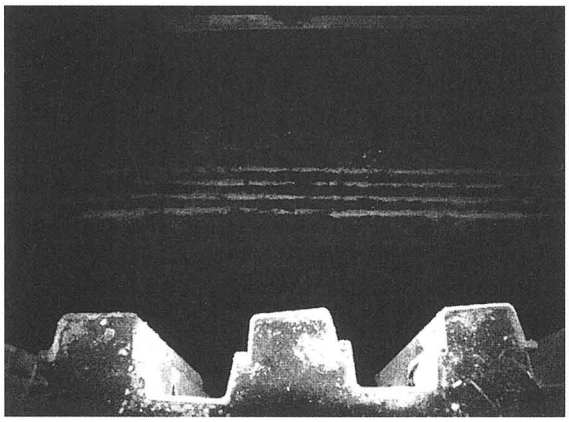


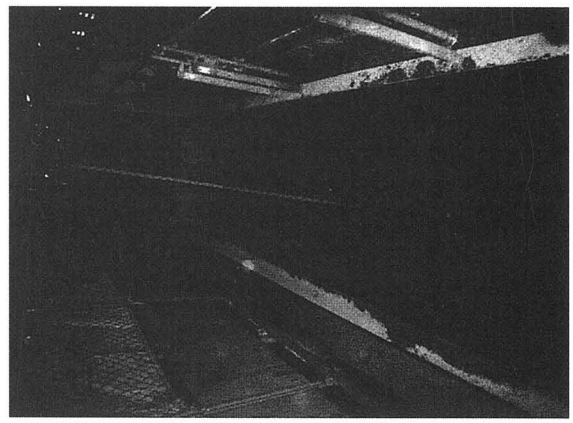
第３図　調査区断面図（Ｓ＝1/80）

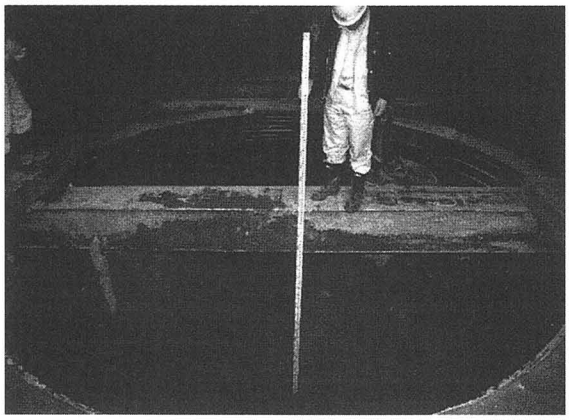
図版一

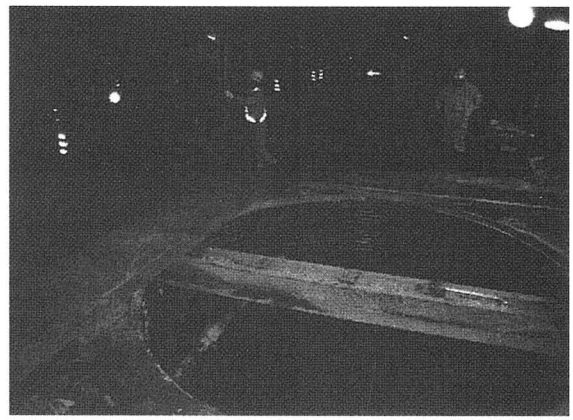
掘削状況(東から)

北壁断面T.P.＋5.5～6.5m(東から)


北壁断面T.P.＋5.5～6.5m(南から)


掘削状況T.P.＋4.0m前後(東から)


2区T.P.＋6.0～8.0m(西から)


2区　全景(東から)

XVIII　弓削遺跡第４次調査（ＹＧＥ2002－４）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市志紀町南３丁目地内で実施した公共下水道工事（13－35工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する弓削遺跡第４次調査（ＹＧＥ2002－４）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書（八教生文第123号　平成14年７月４日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成14年７月22日～11月26日（実働４日）にかけて、西村公助・樋口　薫を担当者として実施した。調査面積は約38㎡を測る。

1．内業調査は現地調査終了後随時行い、平成14年12月24日に終了した。

1．本書に関わる業務は以下の通りである。

【遺物実測】　飯塚直世

【トレース】　市森千恵子

【執筆・編集】西村

本　文　目　次

1．はじめに ……137

2．調査概要 ……137

　1）調査の方法と経過 ……137

　2）検出遺構と出土遺物 ……138

3．まとめ ……141

XⅧ　弓削遺跡第４次調査（ＹＧＥ2002－４）

１．はじめに

弓削遺跡は、八尾市の中央やや北西に位置し、現在の行政区画では志紀町南２～４丁目、弓削町３丁目・弓削町南３丁目の各一部がその範囲となっており、地形的には長瀬川左岸からに西側一帯が当遺跡の範囲である。

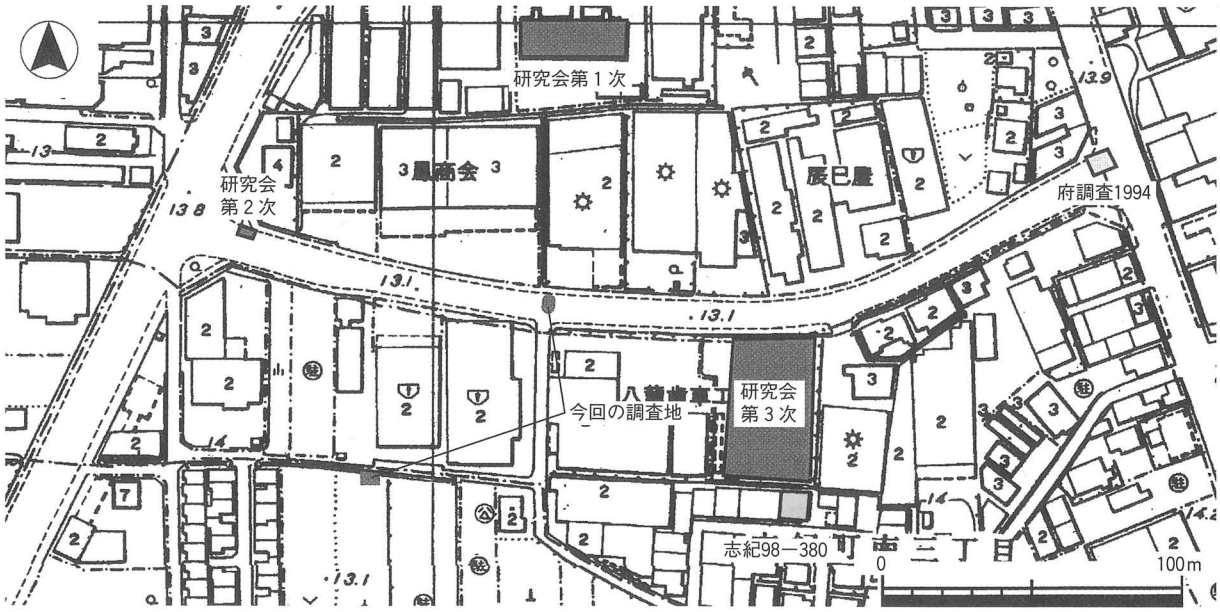
当遺跡内の特に今回の調査地周辺では、これまでに大阪府教育委員会（以下府教委）、八尾市教育委員会（以下市教委）、財団法人八尾市文化財調査研究会（以下研究会）が発掘調査を行っており、弥生時代から近世に至る遺構や遺物を検出している。特に今回の調査地の周辺では、北側約100ｍ地点で研究会が第１次調査（西村1985）を実施しており、弥生時代後期の土器が出土した溝や、奈良時代の井戸を検出している。また、西側約100ｍの研究会第２次調査地（森本2001）では弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構面や埴輪を含んでいる地層を検出している。さらに東側約100ｍ地点の研究会第３次調査地（高萩2002）では、弥生時代時後期の落ち込みや古墳時代後期の埴輪が出土した溝を検出している。

当遺跡の南側には、縄文時代中期～中世に至る集落の存在が明らかになっている柏原市の本郷遺跡（北野1999）が隣接している。

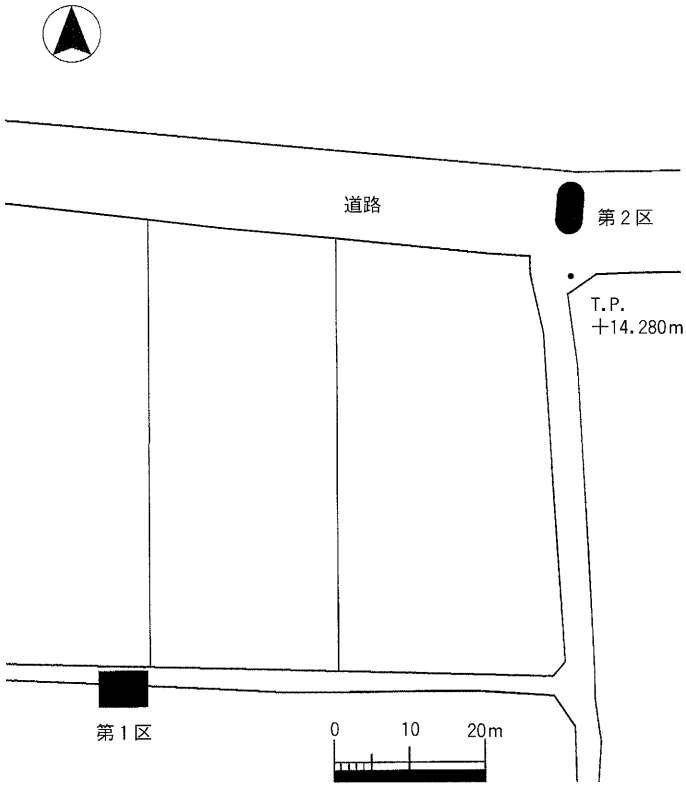
２．調査概要

１）調査の方法と経過

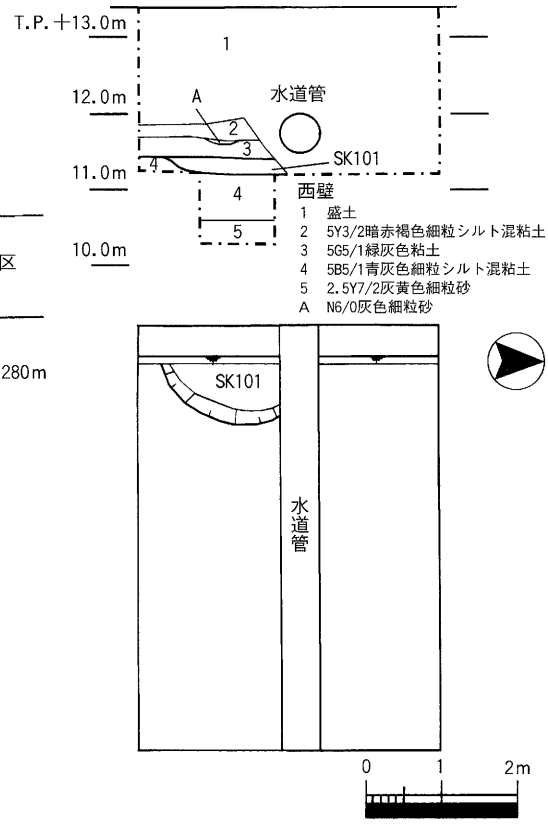
今回の発掘調査は公共下水道（平成13年度第35工区）に伴う調査で、研究会が弓削遺跡内で行った第４次調査にあたる。調査は立坑部分を対象に行った。調査では№２発進立坑を第１区、№０発進立坑を第２区と呼称した。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）



第２図　調査区設定図（Ｓ＝1/1000）



第３図　第１区平断面図（Ｓ＝1/100）

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、第１区は現地表下約3.1mまで、第２区は現地表下約3.75mまでを機械と人力で掘削し、遺構の検出に努めた。

なお今回の調査では、八尾市下水道部作成の地図に記載している標高値（調査地第１区西側の道路上T.P.＋13.352m・第２区南側の道路上T.P.＋14.280m）を使用した。

２）検出遺構と出土遺物

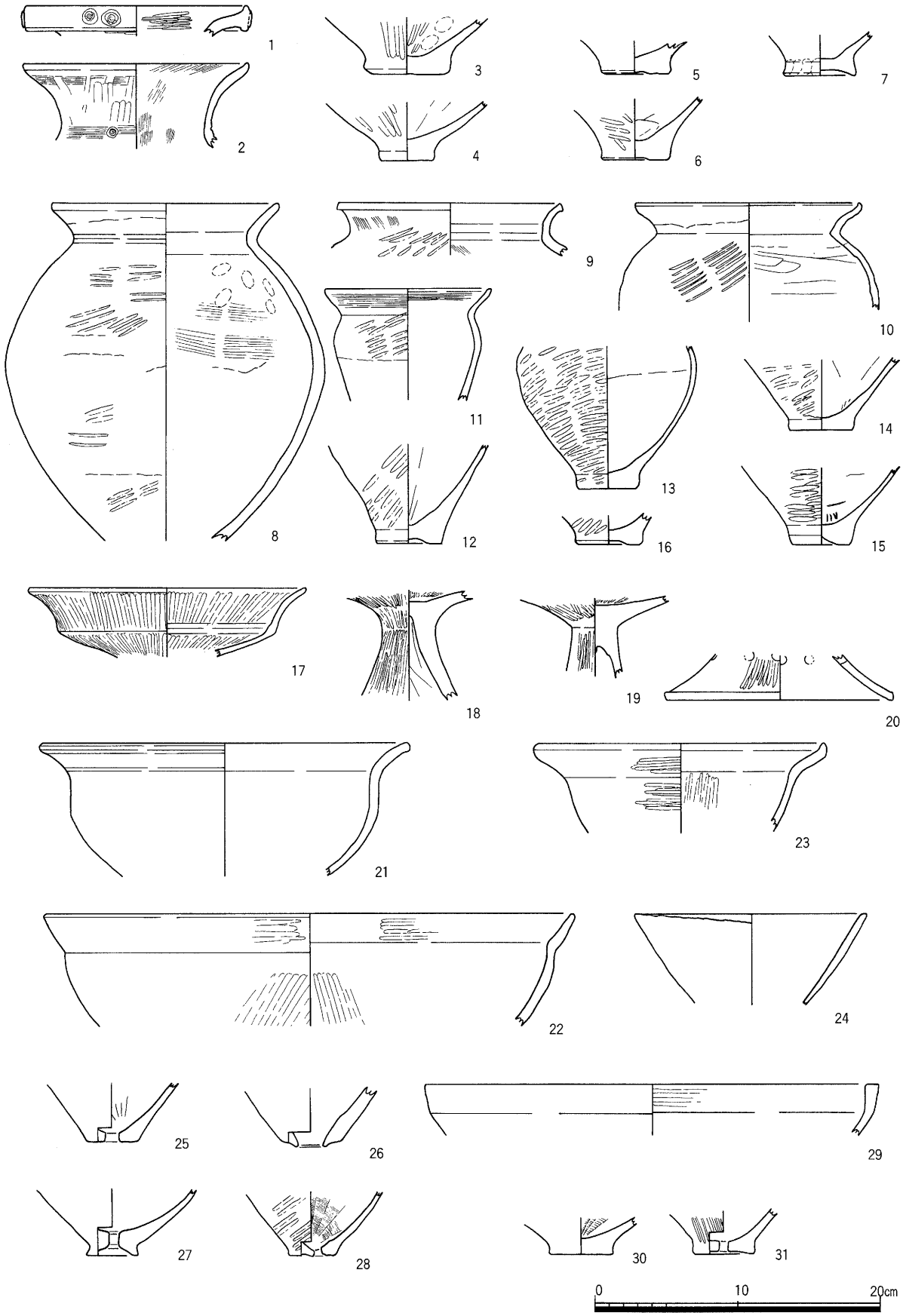
第１区

現地表面はT.P.＋13.4m前後で、以下５層の地層を確認した。１層は盛土で、南側は現在の水路があり、現地表下約1.55mまで掘削されていた。また、北側は水道管が埋設されており、現地表下2.2mまでは既に掘削されていた。２層は暗赤褐色細粒シルト混粘土。３層は緑灰色粘土で、上面から切り込む遺構を西壁で確認したが、遺物の出土がなかったため時期は不明である。４層は青灰色細粒シルト混粘土で、上面（T.P.＋11.4m前後）で土坑１基（ＳＫ101）を検出した。５層は灰黄色細粒砂で流水堆積層である。

ＳＫ101

調査区の西側で検出した。北側は水道管工事の掘削で切られ、西側は調査区外に至るため遺構の全容は不明である。検出した南北幅は1.6m、東西は幅0.8mを測り、深さは0.2mを測る。埋土は暗灰色粘土で、弥生時代後期の土器や石が出土した。このうち図化し掲載したものは29点（１～29）である。

１～７は壷である。１は外反する口縁部で、端部は上下に拡張した面をもつ。端面には円形浮



第４図　出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）［１～29：第１区ＳＫ101　30・31：第２区５層］

文を２個貼り付けている。浮文には円形竹管文が施されている。２は直立気味の頸部から外反する口縁部である。頸部には円形竹管文を施している。頸部には横方向のハケ後、縦方向のミガキを施す。３・４は突出する平底である。３は外面に縦方向のミガキを、内面にはミガキ後ナデを施す。４は外面に縦方向のミガキを施す。５・６は突出する平底であるが底面中央がやや窪む。６の外面には左上がりのミガキを施している。７は上げ底の底部である。外面には、指ナデを行った痕跡がある。

８～16は甕である。８はくの字に外反する口縁部である。端部は尖り気味に丸く終わる。体部最大径は中位にある。調整は、体部外面下位が右上がりのタタキ、中位から上位は右上がりから横方向のタタキを施す。体部外面下位と中位に粘土接合の痕跡が認められる。体部内面は横方向のハケ後ナデを行う。９は直立気味の頸部から外反する口縁部で、端部は面をもつ。体部外面は右上がりのタタキを施し、内面はハケを施す。口縁部外面は左上がりのハケ後ヨコナデをしている。10は丸みのある体部から屈曲し外反する口縁部である。端部はやや上方へつまみあげる。外面に右上がりのタタキを施し、内面にはナデを施す。11は直線的に外へひらく体部で、口縁部は外反し端部は内湾気味に上方へ伸び、丸く終わる。体部外面上位には右上がりのタタキを施し、下位にはタタキを施した後ナデを行い、タタキを消している。口縁部内外面はハケ後ヨコナデである。12は直線的に外へひらく体部で、底部は上げ底である。体部外面に右上がりのタタキを施し、内面は工具の痕跡が筋状に残っている。13は丸みのある体部で、底部は突出する。体部外面に右上がりのタタキを施す。内面は粘土接合の痕跡が体部上位に見られる。14は直線的に外へひらく体部である。底部は突出する。体部外面に右上がりのタタキを施す。内面は工具の痕跡が筋状に残っている。15はやや内湾気味に外へひらく体部である。底部は上げ底である。体部外面に横方向あるいは右上がりのタタキを施す。底部内面には工具痕が残っている。16は上げ底である。体部外面に右上がりのタタキを施す。

17～20は高杯である。17はやや深めの杯体部から屈曲し外反する口縁部である。端部は丸く終わる。杯体部および口縁部は内外面ともに縦方向のミガキを丁寧に施している。18は中空の脚部である。脚部の外面は縦方向のミガキを施している。内面にはしぼり目が確認できる。杯部内外面はミガキを施している。19は中空の脚部である。脚部の外面は縦方向のミガキを施し内面はナデを行う。杯部内外面はミガキを施している。20はハの字に広がる裾部で、端部は面をもつ。円形のスカシ孔があり、孔の数は５個である。裾部内面はナデ。外面は縦方向のミガキを行う。

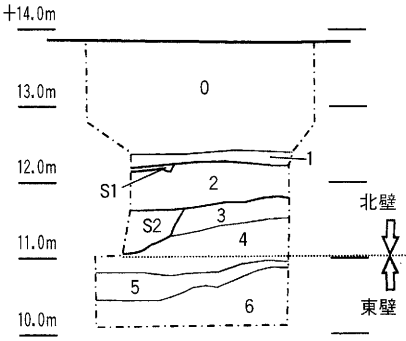
21～24は鉢である。21は内湾する体部からゆるやかに折れ曲がり、外反する口縁部へ至る。端部はやや丸みのある面をもつ。体部内外面とも表部が磨耗しているため調整は不明瞭である。口縁部内外面はヨコナデである。22はやや内湾気味にひらく体部から屈曲しやや内湾気味ではあるが直線的にひらく口縁部である。端部は丸く終わる。体部外面は右上がりのミガキ、内面は左上がりのミガキを施す。口縁部内外面は横方向のミガキを施す。23は直線的にひらく体部からゆるやかに折れ曲がり、外反する口縁部へ至る。端部はつまみ上げ丸く終わる。体部内面は縦方向のミガキ、外面は横方向のミガキを施す。口縁部内面は横ナデ、外面は横方向のミガキを施す。24は直線にひらき口縁部へ至る。端部は凸凹が多く見られ、歪んでいる。

25～28は底部有孔土器である。25は平底で、孔はほぼ中央にある。内外面はナデており、内面には工具痕が縦方向に筋状に残っている。26は平底であるが孔の部分がやや下方へ突出している。

孔はほぼ中央にある。内外面はナデ。27は上げ底で、孔はほぼ中央にある。内外面はナデを行う。28は突出する平底で、孔は中心から少しずれた場所にある。内面はくもの巣状にハケナデを施し、外面は右上がりのタタキを施している。

29は高杯または鉢と思われる。直線的にひらく体部から屈曲し直立する口縁部で、端部は面をもつ。口縁部および体部内面は横方向のミガキを施す。口縁部および体部外面は表部が磨耗しているため調整は不明瞭である。

ＳＫ101から出土した遺物のうち29は形態的特徴からやや古い様相があり後期でも前半のものである可能性が高いと思われる。それ以外の土器については、おおよそ弥生時代後期後半頃に比定できると思われる。



0　細粒砂～中礫混粗粒砂　盛土
1　暗灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
2　暗灰色シルト質粘土～粘土質シルト
3　暗灰色～オリーブ灰色細粒砂混シルト質粘土
4　オリーブ灰色粘土質シルト～シルト
5　オリーブ灰色～灰色シルト～粗粒砂のラミナ
6　褐灰色粗粒砂～細礫
Ｓ１　暗灰色～オリーブ灰色細礫混粘土質シルト
Ｓ２　茶褐色シルト質粘土

第５図　第２区壁面図（Ｓ＝1/100）

第２区

現地表面はT.P.＋13.85m前後で、以下７層の地層を確認した。０層は道路工事の際の盛土で、厚み約1.45m測る。１層は暗灰色細粒砂～粘土質シルト。２層は暗灰色シルト質粘土～粘土質シルトで弥生時代後期の土器の破片が出土した。３層は暗灰色細粒砂混シルト質粘土で、上面から西側へ落ちる遺構の確認した。西側へ下がる遺構の平面形状および規模は、調査区外に到るため不明である。深さ0.6mを測る。埋土は茶褐色シルト質粘土で、遺構内からは弥生土器の破片が数点出土した。４層はオリーブ灰色粘土質シルト～シルト。５層はオリーブ灰色～灰色シルト～粗粒砂のラミナで、５層内からは弥生土器の破片が少量出土した。６層は褐灰色粗粒砂～細礫で、流水堆積層である。

５層から出土した遺物のうち図化し掲載したのは30・31である。30は壷の底部である。内面はくもの巣状にハケナデを施し、外面はナデを行う。31は底部有孔土器である。底部は上げ底である。内面はナデ、外面は縦方向にミガキを施している。

なお、今回の調査で出土した土器のうち１・５・８・11・12・21・25・31は、色調が褐色を呈し、また肉眼観察の結果、角閃石などの鉱物が混在することを確認した。このような特徴を有する土器については、生駒山地の西側の山麓から扇状地付近で採取することができる角閃石を粘土に混和し作った土器と考えられている。したがって、上記した土器は生駒西麓産のものである可能性が高いと思われる。

３．まとめ

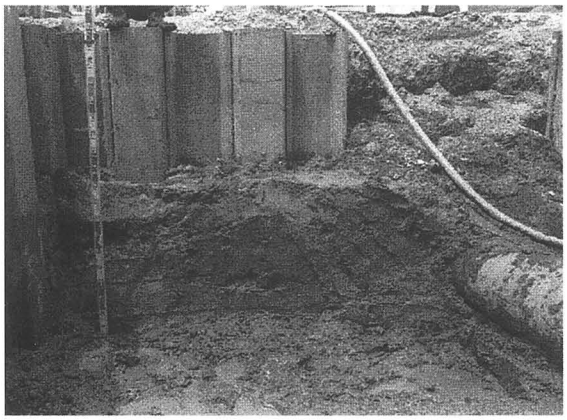
第１区では弥生時代後期に比定できる遺物が出土した土坑を検出した。この土坑から出土した土器は、完形になるものはなく、ほとんどが破片のままの出土であることから、不要になった土器を廃棄した遺構である可能性が高いと考えられる。また、第２区では西側に下がる遺構を検出していることや、同区の２層および３層内からは弥生時代後期に比定できる土器が出土している。以上のことから今回の調査地には、弥生時代後期の集落が存在していた可能性が高いと考えられる。

参考文献

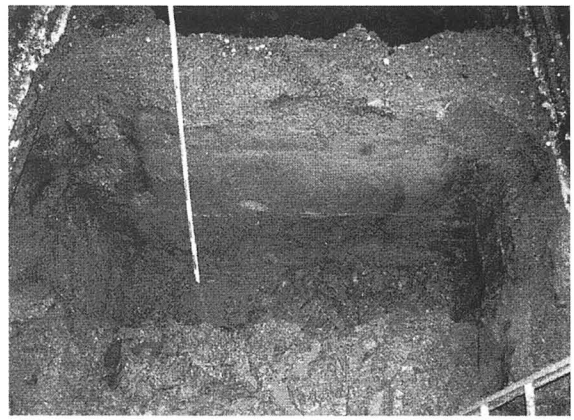
・西村公助　1985「弓削遺跡第１次調査」『昭和59年度事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・渕　斎　1999.3「５.弓削遺跡（97-444）」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告41・平成10年度公共事業　八尾市教育委員会
・渕　斎　2000『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10　八尾市教育委員会
・森本めぐみ　2001「XIII　弓削遺跡（第２次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　2002「Ⅱ弓削遺跡第３次調査（YGE2002-3）」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告３』八尾市教育委員会　財団法人八尾市文化財調査研究会
・北野　重1993『本郷遺跡　1991・1992年度』　柏原市文化財概報1992―Ⅲ　柏原市教育委員会
・北野　重1999『本郷遺跡―公共下水道管埋設に伴う―』　柏原市文化財概報1998―Ⅳ　柏原市教育委員会

第１区　周辺（東から）

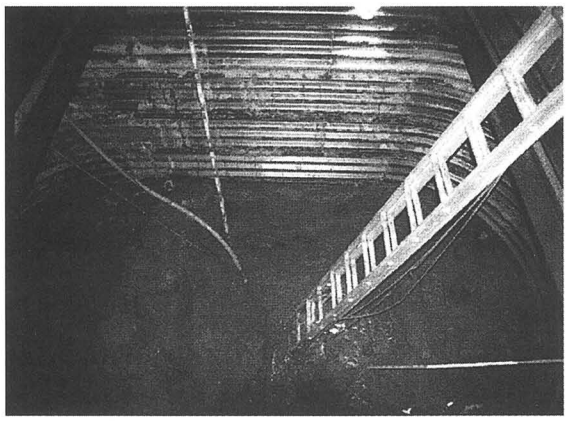
第１区　全景（東から）



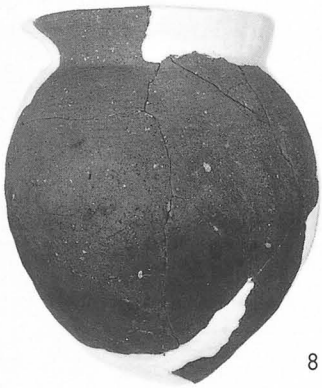
第１区　西壁１～４層（東から）



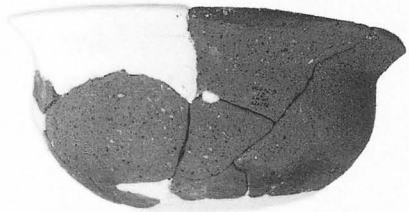
第２区　北壁０～４層（南から）



第２区　東壁５～６層（西から）



8



21

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく75
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告75
副書名	Ⅰ　跡部遺跡(第33次調査)　Ⅱ　跡部遺跡(第34次調査)　Ⅲ　跡部遺跡(第35次調査)　Ⅳ　老原遺跡(第10次調査)　Ⅴ　太田遺跡(第５次調査)　Ⅵ　恩智遺跡(第11次調査)　Ⅶ　恩智遺跡(第12次調査)　Ⅷ　恩智遺跡(第13次調査)　Ⅸ　亀井遺跡(第13次調査)　Ⅹ　萱振遺跡(第23次調査)　Ⅺ　木の本遺跡(第８次調査)　Ⅻ　久宝寺遺跡(第38次調査)　XIII　久宝寺遺跡(第40次調査)　XIV　久宝寺遺跡(第41次調査)　XV　小阪合遺跡(第37次調査)　XVI　東郷遺跡(第57次調査)　XVII　美園遺跡(第５次調査)　XVIII　弓削遺跡(第４次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	75
編集者名	Ⅰ荒川和哉、Ⅰ・XV成海佳子、Ⅱ・XIII坪田真一、Ⅲ金親満夫、Ⅳ・Ⅹ・XIV・XVI・XVIII西村公助、Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ樋口　薫、Ⅵ・XIII森本めぐみ、Ⅷ・Ⅹ岡田清一、Ⅺ・Ⅻ・XVII高萩千秋
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821　大阪府八尾市幸町4丁目58-2　TEL・FAX　0729－94－4700
発行年月日	西暦2003年３月31日

※座標は旧座標数値。

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
あとべいせき 跡部遺跡 (第33次調査)	おおさかふやおしあとべきたのまち1・2ちょうめ、かすがちょう1ちょうめちない 大阪府八尾市跡部北の町１・２丁目、春日町１丁目地内	27212	64	34度36分 59秒	135度35分 32秒	20020516 ～ 20020909	142	公共 下水道
あとべいせき 跡部遺跡 (第34次調査)	おおさかふやおしあとべきたのまち3ちょうめちない 大阪府八尾市跡部北の町３丁目地内	27212	64	34度37分 05秒	135度35分 08秒	20020902 ～ 20020911	23	公共 下水道
あとべいせき 跡部遺跡 (第35次調査)	おおさかふやおしあとべきたのまち3ちょうめちない 大阪府八尾市跡部北の町３丁目地内	27212	64	34度37分 05秒	135度35分 08秒	20021209 ～ 20030114	24	公共 下水道
おいはらいせき 老原遺跡 (第10次調査)	おおさかふやおしおいはら2・3ちょうめちない 大阪府八尾市老原２・３丁目地内	27212	38	34度36分 20秒	135度36分 21秒	20020924 ～ 20021007	58	公共 下水道
おおたいせき 太田遺跡 (第５次調査)	おおさかふやおしおおた3ちょうめちない 大阪府八尾市太田３丁目地内	27212	68	34度35分 23秒	135度35分 31秒	20020807 ～ 20020809	36	公共 下水道
おんぢいせき 恩智遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしおんぢなかまち2・3ちょうめちない 大阪府八尾市恩智中町２・３丁目地内	27212	30	34度36分 17秒	135度37分 57秒	20011112 ～ 20011218	243	公共 下水道
おんぢいせき 恩智遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしおんぢきたまち1ちょうめ・おんぢなかまち1ちょうめちない 大阪府八尾市恩智北町１丁目・恩智中町１丁目地内	27212	30	34度36分 36秒	135度37分 46秒	20020214 ～ 20020226	47.04	公共 下水道
おんぢいせき 恩智遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしおんぢなかまち3ちょうめちない 大阪府八尾市恩智中町３丁目地内	27212	30	34度36分 14秒	135度37分 53秒	20020220 ～ 20020311	24	公共 下水道
かめいいせき 亀井遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしみなみかめいちょう1・3ちょうめちない 大阪府八尾市南亀井町１・３丁目地内	27212	26	34度36分 42秒	135度34分 55秒	20020520 ～ 20020706	56.03	公共 下水道
かやふりいせき 萱振遺跡 (第23次調査)	おおさかふやおしかやふりちょう6ちょうめちない 大阪府八尾市萱振町６丁目地内	27212	65	34度36分 15秒	135度36分 28秒	20020603 ～ 20020705	16.2	公共 下水道
きのもといせき 木の本遺跡 (第８次調査)	おおさかふやおしみなみきのもと2ちょうめ・きたきのもと4ちょうめちない 大阪府八尾市南木の本２丁目・北木の本４丁目地内	27212	35	34度36分 09秒	135度35分 37秒	20020201 ～ 20020710	46.37	公共 下水道
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第38次調査)	おおさかふやおしきたかめいちょう2・3ちょうめちない 大阪府八尾市北亀井町２・３丁目地内	27212	23	34度37分 03秒	135度34分 50秒	20020109 ～ 20021010	53	公共 下水道

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第40次調査)	おおさかふやおしきたかめいちょう2ちょうめちない 大阪府八尾市北亀井2丁目地内	27212	23	34度36分 59秒	135度34分 41秒	20020219 ～ 20020729	53.6	公共 下水道
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第41次調査)	おおさかふやおしきたかめいちょう2ちょうめちない 大阪府八尾市北亀井町2丁目地内	27212	23	34度37分 05秒	135度34分 49秒	20020729 ～ 20020819	12	公共 下水道
こさかあいいせき 小阪合遺跡 (第37次調査)	おおさかふやおしあおやまちょう4ちょうめ・なかた1・3ちょうめちない 大阪府八尾市青山町4丁目・中田1・3丁目地内	27212	40	34度36分 57秒	135度36分 47秒	20020910 ～ 20030117	36	公共 下水道
とうごういせき 東郷遺跡 (第57次調査)	おおさかふやおしひかりまち1・2ちょうめ・ひがしほんまち1～4ちょうめちない 大阪府八尾市光町1・2丁目・東本町1～4丁目地内	27212	37	34度37分 21秒	135度36分 27秒	20020614 ～ 20020715	55.2	公共 下水道
みそのいせき 美園遺跡 (第5次調査)	おおさかふやおしみそのちょう1ちょうめ・みやまち4ちょうめちない 大阪府八尾市美園町1丁目・宮町4丁目地内	27212	34	34度37分 55秒	135度35分 49秒	20020312 ～ 20020408	71.47	公共 下水道
ゆげいせき 弓削遺跡 (第4次調査)	おおさかふやおししきちょうみなみ3ちょうめちない 大阪府八尾市志紀町南3丁目地内	27212	71	34度35分 32秒	135度37分 08秒	20020722 ～ 20021126	38	公共 下水道

所収遺跡名	種　別	主　な　時　代	主な遺構・地層	主　な　遺　物	特記事項
跡部遺跡（第33次調査）	集落	弥生時代後期	水田・畦畔		子持勾玉の出土は八尾市域で７例目である。
		古墳時代	溝・河川	古式土師器・須恵器・子持勾玉	
		奈良～平安時代	落ち込み	土師器・須恵器	
跡部遺跡（第34次調査）	集落	飛鳥時代	水田		
跡部遺跡（第35次調査）	集落	古墳時代中期？	水成層（河川）		
		古代？	水田		
老原遺跡（第10次調査）	集落	平安時代後期	地層（水田耕作土）	土師器・瓦器	
太田遺跡（第５次調査）	集落	弥生時代後期後半	地層（土壌化層）		
		古墳時代～平安時代？	水成層		
		中世？	水成層（河川）	土師器	
		中世以降	踏み込み痕・ブロック土		
恩智遺跡（第11次調査）	集落	縄文時代晩期	土坑13	縄文土器・土偶・石器	土偶の出土は、八尾市域で３例目である。
		弥生時代中期	土坑62・土器集積２・落ち込み２	弥生土器・石器	
恩智遺跡（第12次調査）	集落	弥生時代中期以前	水成層（河川）	自然木	
		弥生時代中期以前	水成層		
		弥生時代中期以降	水成層（河川）	弥生土器・土師器・須恵器	
恩智遺跡（第13次調査）	集落	弥生時代中期～後期	地層	弥生土器	
亀井遺跡（第13次調査）	集落	弥生時代中期～後期	地層	弥生土器	
		時期不明	地層		
萱振遺跡（第23次調査）	集落	平安時代～中世	水成層（河川）		
		近世～現代	井戸１	陶磁器	
木の本遺跡（第８次調査）	集落	－	－	－	
久宝寺遺跡（第38次調査）	集落	－	－	－	
久宝寺遺跡（第40次調査）	集落	古墳時代前期	水成層（河川）	古式土師器	
		中世～近世	土坑５・土器集積１	土師器・東播系須恵器・瓦器・陶磁器・瓦	
久宝寺遺跡（第41次調査）	集落	－	－	－	
小阪合遺跡（第37次調査）	集落	－	－	－	
東郷遺跡（第57次調査）	集落	中世～近世	地層	土師器・瓦器	
美園遺跡（第５次調査）	集落	－	－	－	
弓削遺跡（第４次調査）	集落	弥生時代中期	水成層（河川）	弥生土器	
		弥生時代後期末～古墳時代初頭	土坑１	弥生土器・古式土師器	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告75

Ⅰ　跡部遺跡　(第33次調査)
Ⅱ　跡部遺跡　(第34次調査)
Ⅲ　跡部遺跡　(第35次調査)
Ⅳ　老原遺跡　(第10次調査)
Ⅴ　太田遺跡　(第５次調査)
Ⅵ　恩智遺跡　(第11次調査)
Ⅶ　恩智遺跡　(第12次調査)
Ⅷ　恩智遺跡　(第13次調査)
Ⅸ　亀井遺跡　(第13次調査)
Ⅹ　萱振遺跡　(第23次調査)
Ⅺ　木の本遺跡　(第８次調査)
Ⅻ　久宝寺遺跡　(第38次調査)
XIII　久宝寺遺跡　(第40次調査)
XIV　久宝寺遺跡　(第41次調査)
XV　小阪合遺跡　(第37次調査)
XVI　東郷遺跡　(第57次調査)
XVII　美園遺跡　(第５次調査)
XVIII　弓削遺跡　(第４次調査)

発　行　平成15年３月
編　集　財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX (0729) 94－4700

印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　＜260Kg＞
本　文　ニューエイジ　＜ 70Kg＞
図　版　ニューエイジ　＜ 70Kg＞